島崎藤村
鑓田研一著

著者近影

島崎藤村

目次

装幀　小寺健吉

解題

長篇小說『島崎藤村』は、昭和十三年六月號の『新潮』に發表されたものである。これを一卷として刊行するに當り、作者は更に百七十枚の新稿を附け加へた。

處女詩集『若菜集』から發足して大作『夜明け前』を完成するまで、萬里の嶮難を行きつくし、いま心も靜かに出發當時を振り返りつつある島崎藤村氏――氏の存在は、たしかに日本の誇りであり、日本文壇の輝かしい金字塔である。

だが、さういふ氏の偉大な藝術も、決して偶然に生れ出たのではない。そこには凄愴なほど哀苦の色を滲ませた生活的背景があり、精進があつたのだ。

小說『島崎藤村』は、藤村氏の學生時代に筆を起し、先驅者北村透谷の死を經て、詩集『若菜集』を市場へ送り出すまでの、十年間に亙る、多感な青春の苦悶、生活の波瀾、新しい文學へのひたむきな努力を如實に描き出したものである。この期間に於いてこそ、藤村氏は劃期的な躍動を遂げた。その精神的・肉體的過程が、ここに遺憾なく具象化されてゐる。これは同時に『文學界』に據る人々の華やかな浪漫主義運動、高い文學精神の記錄でもある。殊に、この運動のただ中に展開される、主人公の哀切きはまりなき愛戀

の姿は、讀者をしておのづから心を昂ぶらせるものがあるであらう。
傳記小說は、主人公の生活とその出來事、思想の變化などの年代的な平面的な叙述に終るのが常であるが、この『島崎藤村』に於いては、さういふ缺陷が完全に淸算されてゐる。水準の高い藝術作品として、ここには先づ一つの主題（テエマ）がある。春を待つ心は嵐を待つ心である、といふのがそれだ。この主題にふさはしく、構成もがつちりと立體的に仕組まれてゐる。そこへ持つて來て、藤村氏の自傳小說『櫻の實の熟する時』や『春』に見られない新しい資料が無數に取り入れられてゐる。それだけでも、この小說は讀者を瞠目させるに足るであらう。
かういふ高度の傳記文學にあつては、傳せられる人が生存中であらうがなからうが、何等關與するところがないのである。
文壇には、傳記小說をもつて本質的に幾分低俗なものとする既成概念があるらしいが、これも斷然訂正されなければなるまい。一つの新しいジャンルとして、傳記小說は今や文學の領野に確乎とした地步を占むべきである。

編者

著者略歷

明治二十五年八月、山口縣麻里布町に生る。高等小學校を卒業して、廣島の電信學校に入學。在學中、日本文章學院（新潮社）發行の『文章講義錄』によつて文學の道に入り、『新潮』の投書家となる。金子薰園氏の門に入つたのも當時の事である。

大正五年四月、大阪神學校に入學。震災の翌年上京して、本式に文筆生活に入り、現在に至る。

ショオの『非社會的社會主義者』、オケイシイの『銃士の影』、ジョイスの『ダブリンの人々』などの飜譯、『石川啄木』『德富蘆花』などの長篇小說がある。

現住所　東京市世田谷區八幡山町二二

長篇小説

島崎藤村

鑓田研一

白金玉繩臺

明治學院

島崎藤村

一

日比谷の一角に聳えた鹿鳴館の白堊の壁が、夜會や音樂を愛する人々の眸に灼けついてゐた頃である。芝區のすぐ西に續いた白金村字玉縄の高臺に藤田組の人數が入り込んで、雜木林を切り倒し、梅林を移し、そのあとへまたたく間に洋風三階の建物をつくりあげた。基礎工事には肌理のこまかな白い石が用ゐられ、柱は欅、壁や床は檜板で張られてゐた。建築費の總額を負擔したのは、米國の富豪サンダムだつた。彼の徳性を末永く記憶するために、この建物はサンダム館と命名された。明治學院の最初の校舍である。

この校舍の少し東寄り、海軍墓地に面したところには、別の請負師の手で、同じく洋風の大家屋へボン館が建築された。これは寄宿舍で、これには、安政六年十二月に渡來して、俳優田之助の足を切斷治療したり、『和英語林集成』を編纂したり、心から日本のために盡したヘボン博士の提供した金が惜し氣もなく注ぎ込まれた。

寄宿舍には、コンクリイトでかためた廣い地下室があつて、雨天體操場に當てられ、擊劍、柔道の

道場にも用ゐられた。屋上には、四隅に木造の角柱を配置した塔があり、せせこましい町中から通つて來る者はここに登つて高臺らしい爽かな空氣を胸いつぱい吸ふことが出來た。

建物の內部は、東部、中央部、西部の三つに分けられ、各室は自修室と寢室とに區切られてゐた。寢室の壁によせて、疊敷きの寢臺が設けてあつた。

マコオレエだの、ランディスだの、ハリスだのと、背が高く、眼の碧い外人教授が幾人もゐる明治學院――最も尖端的な教養の一つとして英語を授けるといふ、この創立されたばかりの學校は、何から何まで清新でエキゾチックだつた。

坪內逍遙のクライヴの講義が軍談か講釋を聞くやうで面白いといふ英學塾同人社がないではなかつたが、これは實質上ではもう衰運に向つてゐた。一時は「小石川の聖人」とまでたたへられた塾長中村正直の人格が創造性を缺いてゐたからである。神田の共立學校では、スキントンの『萬國史』、アアヴィングの『スケッチ・ブック』、ロビンソンの算術など、いろいろむづかしい本を敎へ、或る敎師の如きは、

「今にこの學校の埃の中から、天下を覆すやうな人物が出るぜ。」

とふきまくつて、紅い爪をした少年たちを嬉しがらせてはゐたが、眞劍に英語を學ばうといふ者の眼から見れば、何か物足りないものがあつた。

しばらく共立學校に籍を置き、そこから明治學院へ移つて來た島崎春樹は、一年生と言はずに、米

國風に自分がフレッシュマンと呼ばれることにまで胸をときめかした。綠がかつた霜ふりの上衣、派手な縞柄の半ズボン、フランスの兵隊がかむつてゐるやうな帽子——制服といふものはなぜかう肌ざはりがいいのであらう。思春期の色立ち燃える過剰な情感にも、それを着るだけですつとまとまりがつくのだ。地下の食堂でみんなと一緒に辨當をつかふ間も彼は胸を張り、鼻翼にすずしい汗の玉を浮べてゐた。

サンダム館の教室は、空の色が反射して明るかつた。フレッシュマン同士が、それぞれ席に就き、旺盛な知識慾できらきらと紫水晶のやうに眸を光らしてゐるところへ、ハリス教授が靜かに扉をあけて入つて來る。この人の受け持ちは英文學だつた。米國の南北戰爭の折、騎手として出動し、夢中に彈の下をくぐつたこともあるといふ人だが、軍人らしいところはなかつた。優しくて品格があり、自分ではさうと意識しないで輪郭の整つた白皙の顏に一種の精神美を湛へてゐるやうな紳士である。

「How Gentlemen——」

ハリス教授のなめらかな捲舌から最初に放たれる言葉はこれだ。十五六歳の乳臭い少年を、あたまから紳士扱ひにするのが彼の癖なのである。うふふと少年たちは紅い頬をふくらまして嬉しがるのだが、教授自身の胸に入つてみれば、これは癖といふよりも日本のために獻身したいといふ高い精神を裏づけた無邪氣な媚態なのだつた。

「Mr. Shimasaki !」

教授は時間中に幾度でも春樹を指名した。今日は指名すまい、と豫めきめてかかつてゐても、他の生徒が詰つたり、ニキビのふき出た顏を柘榴色に染めてへどもどすると、終ひにはきつと春樹のところへ持つて來るのだ。その端麗な顏の線と匂ひに人種的典型を感じ、自分ではさうと意識しない時でさへこの少年を愛情の對象にしてゐるからである。

春樹は、さうやつてあてられるのが得意だつた。教授の聲のひびきが清々しい山彥を起して白木の天井に呑み込まれるか呑み込まれないかに、彼は早や立ち上つてゐる。彼は何でも知つてゐた。それにまた、彼には不敵な野心があつた。貧しいヂスレイが、爵位の高い美しい未亡人に知られて、一躍政治の舞臺に上つたといふ西洋の立志譚が、しきりに彼の空想を刺戟してゐるのである。自分もあのやうな大政治家になりたいと考へ、この考へに彼はすつかり醉つてゐた。

「セエクスピアが、二十一歲のとき、ストラットフォオドで書いた戲曲は、『ヴィナスとアドニス』です。」春樹は高らかな調子で言つた。

「その通りです。」

教授の顏はひとしきり滿足の微笑でかがやいた。「ほかの人も、よく憶えて置きなさい。」ちらと春樹の方を見やつて忌々しさうに舌打ちする生徒も中にはあつた。春樹のずば拔けた聰さが癪にさはるのだ。

政治家志望の者がセエクスピアを知つたつて何になる、といふ疑惑を起すほど智慧の廻る少年は、

この教室にはまだゐなかつた。春樹自身もそこまで考へたことはなく、ただ、知るといふことが限りなく愉しいのだつた。

二

歐化主義の風潮は今が頂上だし、やがて、ドイツの法律に負ふところが多いといふ憲法も發布されようとしてゐる。新しい代議政體の確立を目ざして捲き起された自由民權運動は、その左翼を除けば、ほとんど全く終焉してゐたが、この運動に源を置く、尖端的な人々の政治的情熱は今もなかなか熾烈である。明治學院の教室に、背丈の屆かぬ幻を描いてきりきり舞ひをする少年がゐたとて、不思議はないのだ。

さういふ少年は、學校の機構にもだが、先づ教室の内部に自由を求めた。關節が太く、ねつとりするほど白い指に教科書をひろげ、ときどき「何？　何？」といふ間投詞を入れては講義をつづけるハリス教授の、明るい、打ちさばけた態度は、彼の好みにぴつたり嵌つてゐた。

「アディソンは金持でありましたか、貧乏でありましたか？」

みんなの顔を一々品定めでもするやうに撫で廻してゐた眼をひよいと止めて、一人の生徒に教授は尋ねる。隣の兒に何か惡戲がしてみたく、だがあまり教壇に近いために手も足も出せないでむづむづしてゐたのを、さうと知らずに起立させて。

「金持でありました。」
「たいへん、よろしい。」
質問が容易すぎ〻ろまく答へることが出來ても誇りにはならないのだが、舌縺れのするエキゾチックな日本語でほめられてみると、さすがに少年の顔は耀いた。それへ、他の者もうふふと笑つて調子を合せ、一しきり教室ぢゆうがどよめく。
「ゴオルド・スミスは金持でありましたか、貧乏でありましたか？」
教授は今度は別の生徒に訊く。
「金持でありました。」
「いいえ、少し違ひます。」
名前そのものからの聯想が、一瞬間、記憶を戸惑はせたのだ。はつとそれに氣づいて、
「では、貧乏でありました。」
と訂正すると、
「その通り。」
教授は鷹揚にこくりと頷くのだつた。
時には何か石版刷りの繪の入つた本を持つて來て、どうです、これは、とわざわざ兩手に本をかかげ、挿繪のところをひろげてチョオクの粉の散つた教壇の上から見せてくれる。生徒は一齊に上半身

を乘り出す。見る見る彼等の眸は熱つぽくふくれあがる。纖細な線描を際立たせ、それによつて一層情緒的な色彩の效果を出さうとした外國美人の繪なのだ。

だが、ここでハリス教授をふしだらで頽廢的なエロチシズムの持ち主と卽斷してはいけない。教授は、さうやつてしばらく少年たちの燃え易い官能を擽つて置いてから、おもむろに言ふのである。

「これは、アメリカ婦人の風俗です。皆さんは、ライラックの花を知つてゐますか？　ライラックの花は細くて紫です。葉はハアト型です。さういふ花が、新英州の到る所に咲くのです。その新英州は、淸教徒のふるさとです。この婦人は、」ともう一度兩手に本をかかげて、「淸教徒の一人で、いま神樣にお祈を捧げてゐるところです。」

みんなはほつと息を拔く。

「彼女たちが一番遠ざけてゐるのは、戀です。皆さんも、戀をしてはいけません。」

言葉の芯は、教授が多年魂を打ち込んで來た、現實の彼岸に凛然と聳えた聖性――それは神と呼んでもいい――と結びついてゐるのだが、その表面には相變らずなごやかなものが漂つてゐた。だから誰も手足の筋肉をゆるめて暢氣に聞いてゐることが出來た。うしろの方では太鼓や三味線を鳴らして賣りに來る木村屋の餡パンをかぢつてゐるし、ひどいのになると、「朝顏日記」の宿屋の段なんかを低聲で唸り出す。その男の顏はおどけてゐるが、やがて、眸の奥にちらと白いものがひらめき出る。奔騰する青春の情熱に自分から手綱をつけ、その自虐的な快感を奥齒でそつと切なく嚙みしめてゐるの

だ。教授の巧妙な説法が、こんな途方もないところにまで效果をあはらしてゐるのである。

「まあ春樹もせいぜい勉强しろよ。今に小父さんが洋行さしてやるから。」

日本橋區濱町の、眞竹の垣を張つた古い大きな家には、琥珀のパイプを啞へて香の强い兩切りをふかしながら、こんなふうに言ひ聞かせてくれる人があつた。手廣く商法をやり、明治座つきの芝居茶屋などにも金を廻してゐる吉村忠道である。

「さうともさ。洋行でもして馬車に乘るぐらゐ偉いものにならなけれや、春樹も駄目さ。」

すぐあとを受けて、勵ますやうに、眼に見えない鞭を振り向けるのは、灰色の髮をうしろへ切り下げた、勝ち氣で精悍な氣象のおばあさんだつた。

春樹は九歲のとき信州の山の中から上京して、京橋區鎗屋町にある姉の嫁ぎ先に身を寄せ、姉の一家が故鄕へ引上げると同時に、書生を愛する心のふかい吉村忠道の家に引取られた。吉村家でも彼はほとんど家族の一人のやうにして育てられた。彼は、同鄕で兄や姉と懇意な主人のことを小父さん、主人より十五も年下の小母さんのことを姉さんと呼んだ。小母さんはおばあさんとその亡夫との間に生れた一人娘だつた。小父さんはその養子なのだ。

春樹が中村正直の書いたナポレオン傳を手に入れて踊りあがつたのは、小父さんの家がまだ銀座にある頃だつた。土藏づくりの家のうす暗い玄關の小部屋に閉ぢこもつて、その小册子にしがみついて

ゐると、

「貴樣、泣いてるのか？」

いつの間にか奧から出て來た小父さんに不意を衝かれ、春樹はぎよつとして我に返つた。

「なんだ、ナポレオンか。瞼が眞紅だぜ。」

小父さんは、ふつくら肥つた色艶のいい顏を微笑で耀かした。せきあげる感動の泪で瞼がどちらもうでたやうにふくれあがつてゐたのである――この間、銀座三丁目、大倉組の石造家屋の角に初めてともつた幻惑的なほど白い電燈の光にさらして來たばかりの瞼が。

春樹は毎日せつせと高臺の上の學校へ通つた。舊時代と新時代との交替が市街の建物にまで色立ちあらはれてはゐるものの、乘物といへば、屋蓋の白つぽい鐵道馬車が僅かな區間を走つてゐるだけで、まだ電車といふものはなかつた。濱町の家から學校までは二里からあつたが、彼はそれを往復とも徒歩で通つた。健康な上に年齡よりも太いがつちりした足を惠まれてゐる彼にとつては、そのくらゐの歩行は何でもなかつた。人形町の水天宮前から鎧橋を渡り、石油や胡粉の臭ひがする繁華な町中の道を日影町へと取つて芝公園に出、赤羽橋へかかり、三田の通りを折れまがり、少し息を切らして聖坂を登つて行くと、學校はもうすぐそこだ。

歸りには、丘つづきの地勢を辿つて、古寺や墓地の多い三光町寄りの谷間を迂廻することもあり、高輪臺の道をまつ直ぐに聖坂へと取つて、そこから遠く下町の方にある家を指して下りて行くことも

あつた。

三

緑の草地に圍はれたサンダム館の二階は、講堂になつてゐた。ここでは、毎朝始業前に、豫科、本科の生徒を全部あつめて、禮拜式が行はれた（もちろん、それに出席するのを怠る、ものぐさな男も少なくなかつた。）また、毎週金曜日の晩には文學會が催された。

文學會は、物理化學の受け持ちで、教へ方の巧い、濃い髭のある上唇を曲げてにやツと微笑するところがすてきだと云はれるワイコフ教授が、一日本人教授と頭をひねつて發案したものである。規定にはかうあつた。

「生徒相謀リ英和文學會ヲ設立シ、其規則ヲ定メ、英文朗讀、英語演說、邦語演說、邦語討論ノ諸科ヲ設ケ、毎週一回講堂ニ集會シテ之ヲ行フ。集會ニハ教授一名必ズ臨席シテ、生徒ノ作文、演說、討論等ニ批評ヲ加フ。本科生ハ必ズ入會シテ共ニ勉勵スルヲ要ス。」

春樹はこの文學會でもまつ先に演壇にのぼつて、眼を光らし、拳を振りながらまくしたてた。名前は文學會だが、必ずしも文學的な題目を捉へて來る必要はなかつた。いや、彼はまだ文學といふものに心を向けてさへゐなかつた。小父さんの家がまだ銀座にあつた頃、湖十といふ人の編纂した『芭蕉全集』を夜店で買つて來て、あの玄關の小部屋で讀み耽り、「奥の細道」や「笈の小文」や「幻住庵の

記」などは手垢でよごれて厚い地質の紙がべとつき出したほどだが、机から離れると、ぢきにけろッとした顏に返つた。彼がほとんど先天的に賦與されてゐる藝術家的な稟質を、まだ當分荒々しい政治的情熱が容赦もなく踏みにじらうとしてゐるのである。

或る金曜日の夜、春樹はいつものやうに得意な辯舌を振ひ、そのあとのわきかへるやうな興奮をどうにも始末することが出來ず、外氣にでも觸れたらと、暗がりの緩い螺旋狀の階段を勢ひよく降りて來た。一番下の方は、三段ほど一緒に飛んだ。足がどしんと床を打ち、それを踏みしめて立ち直ると、彼は今度は兩腕で空間にくるりと弧を描いた。心地よく胸がはちきれるときの、無鐵砲な反射運動である。二階では、彼と入れ代りに演壇に立つた少年が何かしやべり、その調子の高い、抑揚の際立つた聲が、わあん、わあんと天井に山彥を起してゐた。

春樹がこの學校に入つてから、もう二度目の秋が來てゐた。草はしとどに露を持ち、空には星が白いほど散り敷いてゐた。彼はそこらをぶらつきながら、ときどき講堂の窓を見上げた。青白い瓦斯燈の光を漉かした硝子が、演說の聲でびりびり顫へてゐた。

「あいつも、やるなあ。」

彼は覺えずにつたりした。——今度顏を合せたら、ひとつ、ぽかッと肩をどやしてやらう。

夜氣に打たれて、熱した頭腦が少し冷めて來ると、彼は再び講堂へ取つて返さうとして玄關の石段を上つた。そして自然に磨き込まれた欄干に手をかけて階段を四五段上つたと思ふと、上から誰か黑

つぽい木綿袴の裾をひるがへしながら降りて來る者がある。右と左と代る代る持ちあげられる、鼻緒の赤いスリッパの裏側が、動物か何かの肋(あばら)みたいだ。つい、こちらも幾分氣色ばんで一つづつ段を上つた。ここで双方がつんと無表情な顏ですれちがつてしまへば、秋の晴夜も結局日記の片隅にささやかな痕跡を殘すくらゐが關の山であつたらう。だが、次の瞬間、二人は言ひ合せたやうに一つ段の上に立ちどまり、はたと顏と顏を合せた。しかも、この機會を逃がしたら永久に他人同士でゐなければならないとでもいふやうな、張りつめた調子で。

「よかつたね。今夜の君の演說は。」

上から降りて來た男は言つた。それはこの秋に入學して(新學年は每年九月に始まる慣例になつてゐた)、のつけから春樹の屬する本科二年級に籍を置くことになつた戸川明三だつた。

ほめられて春樹はさつと紅くなつたが、ほめた方も、はれがましさうにそつと羞んでゐるといふふうだつた。二人は今夜初めて口をきき合つたのである。もし二人がどちらももう二つ三つ年少で、棒振りや「子をとろ子とろ」に夢中になれる頃だつたら、女の兒みたいに手と手を絡ませ合つて、「これから一緒に遊ばうね。」とか、「君の家へ行つてもいい？」「うん、來たまへ。僕も行くからね。」とか時間も忘れて喋りまくつたであらう。今の二人には、しかし、それが出來なかつた。かうして思ひがけず友情が結ばれた夜のあまがらい血潮の高鳴りさへ、互に隱し合はうとしたほどである。

「君もやらない？」春樹は熱い心で歸るやうに言つた。

「演說かね。」

戸川明三はちよつと心外さうな顏をして、「僕は演說はしないことにしてるんだよ。そのかはり、僕は雜誌をつくるのが好きでね。」

「へえ、雜誌を？」今度は春樹の方でおつたまげてしまつた。

「僕はここへ來る前、獨逸協會學校にゐたんだが、何と思つたか、仲間同士で――ほら、あの『團々珍聞』ね――」

「『團々珍聞』なら、僕も一生懸命讀んだものだよ。小父さんの部屋から、そつと盜み出して來てね。あの雜誌が、どうしたの？」

「あの雜誌を眞似て、回覽雜誌をこしらへたものだよ。みんなが半紙に勝手な事を書いて、それを寄せあつめて、こよりで綴ぢてね。」

「――外へ出て話さうよ。」

春樹は先に立つて階段を降りた。星はいよいよ冴え、その光が、暗がりで手を振る度に、滑つこい爪にしみこぼれた。

明三は話しつづける。

「同級生の中に、ヨットといふ綽名の男がゐてね、そいつが銅版で『お茶菓子』といふ、狂歌や都々逸のやうなものをあつめた、小つぽけな雜誌體のものを出してゐたがね、僕はその仲間にも入れても

らつたよ。そして後には、この『お茶菓子』を眞似て、從弟と二人で『目覺のお菓子』といふのをこしらへてみたこともあるよ。そんなものをこしらへるのが、面白くてたまらなかつたんだね。」

二人は腕を組み合せていつまでも夜の校庭をぶらついた。高い講堂の窓からひよいと顏をのぞける者があつても、厚い闇の層に遮られて見透しはきかないし、二人はいくらでも親しみ合ふことが出來たのである。肉體的にも、二人はもう離れがたくなつてゐた。

「君はこれから家へ歸るの？」春樹は訊いた。

「うん、歸る。それがどうしたの？」

「遠いからさ。築地だろ？」

「築地の木挽町だよ。」

「僕のところへ泊らない？」

この頃春樹は寄宿舍生活をしてゐるのだつた。明三は、しかし、家の者が心配するからと、それを振りきつて校門の外に姿をかき消した。

春樹は急に寂しくなつた。

四

外國系の語彙が愛せられて、一年級をフレッシュマンと呼ぶこの學校では、二年級もソフォモアと呼

んでゐた。悧巧な馬鹿といふ意味である。自分の知識を過大に見積つて、大人の世界では旣に平凡化してゐるものにさへ魅惑的な光彩を見て取るこの年頃の學生の氣分を、それは遺憾なく言ひあらはしてゐた。

戸川明三は、こんな呼び名にもあらはれてゐるこの學校の新鮮なエキゾチシズムに、初めから魅せられてゐた。

三年生はジュニア、四年生はシニヤと呼ばれた。そして、後進生を意味するジュニアも先進生を意味するシニヤも、この學校では、絕對に落第の脅威を受けずに濟んだ。

明三より少し後れて、中途から、馬場勝彌が同じく二年級へ入つて來た。

自由民權運動の鬪士で文筆家の馬場辰猪を兄に持つ、この少し年長の男は、初めて敎室に入つて來た日、肩肘の張つた古いモオニングを着込んでゐた。

「へえ、あれや何だい？」

制服もつけず、粗末な和服で滿足してゐる明三は、橫合ひからそつと反抗的な眼ざしを向けて隣の男に囁いた。春樹も、變な奴が飛び込んで來たと思つた。

馬場勝彌は、しかし、ぐいと肩を張り、それによつて四方から射られて來る露骨な視線を見事にはねかへしてゐた。だが、そのうちに敎室內の自由で暢氣な空氣が呑み込め、彼はしまつたと思つた。年齡以上の禮裝をして來た自分の、度を越した几帳面さを悔いたのである。

再び年が明けて、明治二十三年が來た。そしてその年の、みんなが烈しい寒さに鼻水をすすつたり瞼を紅くしたりしてぶるぶる顫へてゐる二月の或る日、勝彌は、ヘボン館の地下室の一方に設けられた食堂の入口で、誰かの口利きで初めて春樹に紹介された。そこはうす暗かつた。春樹は、不意を衝かれた狼狽と羞みから、思はず頰に血をのぼらせた。うぶで氣がきいてる、と勝彌は思ひ、一瞬のうちに相手の頭の先から足の先まで見てしまつた。勝彌の眼には野禽のやうな鋭い光が滲み出してゐた。ここへ來る前、高等中學と高等師範の入學試驗を受けて、數學の不出來から見事に落つこちたことを隱しておくらゐは、彼にとつては造作もない技だつた。

春樹は壓迫されて、容易に言葉が出ず、恰好のつかないちぐはぐな挨拶をしてしまつた。そのあとで、彼は素速く唇についた牛肉の脂を手の甲で拭き取つた。

「今日は肉かね。」勝彌は朗かな調子で言つた。

「うん、と、とてもうまいよ。」春樹はそれだけ言ふにも見苦しく吃つた。

別々になると、ふとあの時の勝彌の氣取つたモオニング姿が思ひ出され、春樹はをかしくなつた。それが、つい先刻心に受けた不愉快な壓迫感を少しづつほぐしてくれ、そのあとから自分でも全く豫期しなかつた感情が湧いて來た。太い幹を見上げるやうな賴もしい氣持で交き合つてゆけるのは、ああいふ男ではなからうか、と考へたのである。彼は嬉しくなり、その氣持を頒つために薄陽のさした校庭へ明三の姿を搜しに出た。

サンダム館の裏手のところに小高い崖があり、崖に臨んで梅や百日紅が葉の落ちた澁い色の枝をひろげてゐた。彼はやつとそこで友人の姿を見つけた。

「さつき馬場君に紹介されたよ。」彼は、今はむしろ誇らしげな調子で言つた。

「へえ、馬場君に？」明三は呆れたといふ顏をして、「あのフロックコオトにかい？」

「フロックコオトぢやない。モオニングだよ。」

「どつちでも大した違ひはないさ。」明三は理窟つぽく眼角を立てて言つた。が、それを裏切るやうに齒列が柔かな深い色に濡れてゐるのである。「あんな大人は、僕は嫌ひだ。」

「勉强してる人だと思ふがね。」

「國文學に圖拔けてるつていふ話は聞いたよ。なんでも、子供の時分から『八犬傳』だの『弓張月』だのを讀んだのだつて。」

「へえ、さういふ人かねえ。」

春樹はますます胸の感動を深めた。明三が豫期したのとはあべこべの結果になつたのである。

虛飾の好きな春樹は、制服に少し改良を加へて自分を良家の子弟のやうに見せかけ、靴下も淺黃と白がだんだらになつた華麗なのを選んだ。髮は長くして普通とは反對に右寄りのところを分け、帽子には特に色の美しいリボンを捲きつけて飾りにした。これはまつたく、孔雀の眞似をした鴉である。

だが、彼はそんな事くらゐ何とも思はなかつた。
彼は、何事にもよく出しやばつた。「鑄掛屋の天秤棒」といふのが彼の綽名だつた。たまたま友人が訪ねて來て、一緒に高輪の街を歩いてゐると、向うから四五人の同級生がやつて來て、
「いよう、天秤棒！」
などと囃したてる。さすがの春樹もこれには閉口した。
向う鉢卷の鑄掛屋が、長い天秤棒に鞴と道具箱を振り分けに擔いで悠長な掛聲とともにゆつくり街を流して行くのも、鎔接法の發達しない當時としては、ちよつと親しめる風景だつたが、春樹はそれを眼の敵にしだした。
學校の門を出、丘つづきの谷を下りて再び傾斜になつた街を上ると、突きあたりのところに、屋根の上に金色の十字架をつけた會堂があつた。明治學院の經營母體と教派を同じくする高輪教會である。日曜日毎に、春樹は誰よりも先にこの教會へ出かけた。そしてここでも遠慮なく振舞ひ、執事が配つて歩く小型の讃美歌帖を横取りしてわざわざ自分の手で配つてみたり、十字架の裝飾を施した正面の教壇の上に足を運んで、牧師以外にはめつたに手を觸れる者もない大きな金縁の『聖書』を押し開いて大袈裟に讀む眞似をしたりした。
だが、ここで一番彼の氣に入つてゐたのは、みんなと一緒に讃美歌を歌ふことだつた。さういふ心から、つい夢中で洗禮も受けてしまつた。

「君も洗禮を受けるといいね。」

戸川明三にも、春樹は心からすすめた。「ひとの幸福は、窄い門の中にあるんだよ。クリスチャンだけがそれを知つてるんだよ。」

「僕は不純な氣持で神樣を拜むのはいやだ。」

「不純な？」春樹はさつと鼻白む思ひで訊きかへした。

「もつと無邪氣になりたいね。明治初期のクリスチャンは、はい耶蘇愛す、はい耶蘇愛す、さやう聖書中す、なんていふ讃美歌を歌つて禮拜をしたといふけれど、僕は一概にあれを笑ふことは出來ないと思ふんだ。」

初戀

一

或る夕、春樹はそつと寄宿舍を拔け出して、冷い風の吹く街を息もせずに歩いて行つた。制服の金釦が向日葵のやうに輝き、眸は熱くふくらみあがつてゐた。この世のすべてのものをゆるがし彩つてもまだ足りないやうな血潮の高鳴りが、そこにあつた。

彼はちよつと立ちどまつた。彼の眼の前には肌理の粗い花崗岩の門がそそり立つてゐた。その兩側はパン屋に文房具屋だつた。

——かまはないかしら、男が訪ねて來ても。

彼は呟き、すると鳩尾(みぞおち)がうづくほど疚しくなつた。

彼はしかし、木村先生だつてああなんだものと思ひ、一氣に門をくぐつた。

高輪教會の牧師をしてゐる木村熊次の自宅は、二本榎にあつた。春樹は寄宿舍に入る前しばらく木村の家に置いてもらつて、そこから學校へ通つたものである。

「いつまでも置いてあげたいんだけれど、ワイフはあの通り體も弱いし、お世話が屆きかねると思ふから——」

荷物をまとめて辭し去る時、木村は氣の毒さうに言つた。

「あたしのする事はちつともあなたのためにならないつて、さう言つて叱られましたのよ。あたしが足りないからです。」

端から夫人も言葉を添へた。

彼女は木村の二度目の妻だつた。最初の妻は『東京經濟雜誌』の主宰者で自由主義經濟學の普及に努めてゐる田口卯吉の姉か何かにあたるひとで、鐙子と云つた。木村はいま麴町下六番町にある明治女學校の最初の礎石を据ゑた人だが、その時分校長として實際に腕を揮つてゐたのは鐙子である。

彼女はしかし、生徒の愛慕を一身にあつめたまま急に病みつき、世を去つた。木村が學校を投げ出したのは、この時である。舊幕の旗本出で、アメリカの土を踏んだこともある精力家の彼がこの擧に出たことからでも、糟糠の妻を喪つた哀しみの深さが察しられる。

亡き妻の一段と淨まつた姿は、天の夕顏であらうか。一筋に神に仕へてゐる者が、月の夜、それに思ひを通はせて熱い泪を絞つたとて不思議はない。だが、實のところ今の彼には心にそんな餘裕がなかつた。彼は十幾つも年下で美貌で化粧の巧みな今度の妻にすべてを打ち込んでゐるのである。聖職に就いてはゐても、彼もまだ男ざかりだ。夕べ每に、彼自身は瀟洒な洋服を着、若い妻には薄色の長いスカアトを引きずらせて街を散步した。——春樹も、そんな眞似がしてみたいのだ。

構內の中央に校舍があり、少し距離を置いてその橫に平屋づくりの寄宿舍があつた。づかづかと、彼はそこの玄關口に近づいた。が、ひつそりして、あたりには誰もゐなかつた。彼は急に氣後れがして來た。下駄箱には色のきつい鼻緒の下駄や草履が行儀よく並び、それが、今は煽情的などころか、性を異にした闖入者へ挑みかからうとする。

すると、そこへたまたま一人の少女が奧の廊下から出て來た。彼は反射的にぐいと肩を起して、訊いたのである。

「山岸先生はゐられますか？」

少女はしばらく大膽に眼一つで男の姿を撫で廻してゐたが、急ににつこりして、

「ええ、ゐらつしやいますわ。」
と言ひ、名前も訊かずにばたばたと再び奥へ引返して行つた。
間もなく、山岸敏子が、四五人の少女に兩方から手を取つていびられながら出て來た。
「いらつしやいませ。」
鼻筋の冴えた面長な顔にちよつと呆けたみたいな表情を浮べて、彼女は言つた。姦しい同伴者への照れかくしなのだ。臙脂色の地に白く蘭の花を抜いた半襟が、少し頸筋からずつてゐた。
「ね、どなたかわかつたら、もういいでせう。あなたたちはお部屋へ歸つて頂戴。」彼女は娘たちの肩をたたいて甘く愛撫するやうに言つた。
「島崎さんは、先生のあれかしら？」
「半ズボンが、ちよつと粋ね。」
「うぶ毛見た？」
少女たちはどぎつい戰慄に胸を波打たせて囁きかはしながら、奥へ消えた。
山岸敏子はここの女學校の教師兼舍監だつた。日曜日には少女たちを連れて高輪教會に出席し、胸の盛りあがつたぴちやぴちやするやうな肉體をひつそりと沈めて禮拜式のオルガンを彈いた。春樹から見れば、四つか五つ年長の、姉のやうなひとである。
「あなた、島崎さんね。」と彼女が會堂の入口の石段の上で初めて口をきいたとき、彼はどんなに胸を

ときめかしたことであらう。彼はしかし、これは戀といふものではなく、金色の十字架に憧れる心の變形だ、エキゾチシズムの一種だと思ひ込まうとした。この嘘にはぷんぷんと甘美な香があつた。

初めて女の手紙といふものをくれて、一晩ぢゆう彼をのたうたせたのも彼女である。彼女は、彼の氣取つたぎごちない身振りの一番奥から、手品師みたいに、空氣が光つて哀しくなるほどの情熱を引き出してくれた。

彼が洗禮を受けたとき、キリストの贖罪の血がほのかに通つて來るやうな讃美歌にあはせてオルガンを彈いてくれたのも彼女だつた。彼がさうやつて洗禮を受けたのは、ひよつとしたら彼女へのそれとない媚態だつたかも知れないのである。

「これ、あなたに差し上げようと思つて――」

やや高めに束ねた髮の中にちよつと編棒を突ツ込んでむづ痒いふけをかき落してから、彼女は三和土の上に立ちつくしてゐる彼の前に近々と寄つて來た。「ね、もらつてくださる？」

それは手袋で、鼠色の毛糸でもう七分がた編んであつた。

「そんな事をしてもらつて、いいんですか？」彼は必死に心の動搖を隱して言つた。

「なあぜ？」

彼女は下から少年の顔をのぞき込んであをく眼の底を燃やした。それをぢいツと大膽に見返したまま彼は答へなかつた。いや、感動が強すぎて答へることが出來なかつたのだ。感動の一番奥では何か

小さい黃金色のものがひらひらと羽ばたいてゐた。

二

寄宿舍に歸ると、彼は寢臺に頭をすりつけるやうにして神に祈を捧げた。自然にながれ出る、淸い、調子の高い言葉が泪をさそひ、その泪の匂ひによけい頭の芯が淸しく冴えて來た。彼はそこに天降つた氣高い神の象（かたち）を見たと思つた。

彼はなほも祈り、最後に神に訊いたのである。——僕がさつき入つた御影石の門は、本當に、窄い門でありましたでせうか？

だが、不思議なことに答へがないのだ。彼は不安になつた。彼は『聖書』を開いて、幾度もくりかへして讀んだあの大事な箇所をもう一度讀んでみた。

「窄（せま）き門より入れ。沈淪（ほろび）に至る路は濶（ひろ）く、その門は大いなり。これより入るもの多し。生命に至る路は窄く、その門は小さし。その路を得るもの稀れなり。」

彼は門が窄いか濶いかは結果から判斷してもよくはないかと思つた。これは危險な觀念遊戲である。だが、新鮮で魅惑的な女の影像に心の眼を眩まされてしまつてゐたので、彼はその危險性を見拔くことが出來なかつた。

四五日すると、敏子から小包が屆いた。彼がその中から出て來る見事に編み上つた手袋に女のにほ

ひを感じて叫び出したいほどわくわくするであらうことは、わかりきつてゐた。だが、同室の鼻たけのある生徒が變な眼つきでこちらを睨(ね)め廻し、たうとう、

「それや何だい？」

と言ひ、下手をするとしつこく絡んで來さうなのだ。彼はにやツと會心の微笑を洩らすことさへ出來なかつた。――彼は素速く手袋を隱した。

教室へ出ると、自分のゐない間に行李をあけられさうな氣がして上(うは)の空になり、學課も何も手につかなかつた。僕の行李はタブウなんだよ、と彼はみんなに言ひ聞かせてやりたかつた。

彼は再び敏子を訪ねた。

「少しそこらを歩きませう。」

彼女はさう言ひ、はれがましさうに彼と離れ離れになつて門を出たが、出てしまふとすぐ彼の眞横にぴたりと體を寄せて來た。彼は見る見る顔がほてり出し、どぎつい恐怖に襲はれたが、ここでまた、木村先生だつてああなんだものと考へ、それを自己辯疏の根據にしたのである。

「手袋はどうなすつて？」彼女は少年の寒さうにだらりと垂らした手を見て言つた。

「藏つてあるんです。」

「そんなにしないで、毎日嵌めなさつたらいいのよ。破れたらまた編んで差し上げますから。」

彼女は、この聰明な、きゆッと締めてやりたいほど胴の纖(ほそ)れた少年がいとしくてならないのだつた。

彼女は彼の稚純な擬態の奥にひそむ熱情的なものをすつかり見て取つてゐた。それと相觸れて火花をちらしたい思ひは、彼女にもあつた。だが、彼女はぎりぎりのところで自分の行動を喰ひとめて、彼のために、天の惑に生きる白い姉にならうとしてゐるのだつた。
「では、さやうなら。」
彼女は夕闇の下りた街角に立ちどまり、哀しさうな眼つきをして言つた。「道草食はないで、まつすぐにお歸りなさいね。」
「ええ。」
「暇があつたら、また來てね。」
「そんなに度々訪ねても、かまはないんですか？」
「ええ、かまひませんとも。」
彼女と別れると、彼は急に哀しくなり、どこをどう歩いて寄宿舍へ歸つたか、一切夢中だつた。彼は辛かつた。二人の間を急にばたりと强引な壁で仕切られた感じなのだ。それは彼自身の臆病な心がふつと描き出した實體のない一時の幻だつたか、それとも彼女の用心深さがそんな形で遠方から投影して來たのか？　彼はよく考へてみなければならないと思つたが、泪が先に立つて、ちつとも思考力が働かなかつた。
或る日の午後、戸川明三が曇つた顔に眼ばかり光らして春樹の姿を搜してゐた。彼は友人が自室の

寝臺の上に深く體を埋めて虚空にうつとりと幻想的な眼ざしを凝らしてゐるところをやうやく捉へた。鼻たけのある男はどこかへ行つてゐた。
「變な噂が立つてるぜ。」相手が汗臭い敷布の上に體を起すのを待ちかねて明三は言つた。
「變な噂？」
春樹は思はずぎくりとしたが、それを顏に出すまいと焦り、するとあべこべに口元がいびつに歪んでしまつた。自分でもそれに氣づいてぎごちないつくり笑ひを浮べながら、「はつきり言つてくれたまへ。どんな噂なんだ？」
「き、君と……」と明三は紅くなつて吃つた。「あのオルガン彈きの女ね……二人の間が怪しいんだつて。そんな事、本當かい？」
春樹はだまり込んだ。不意にぴしやりとお面をやられた感じで血が逆流し、口がきけなかつたのだ。だが、それでは根のない噂を承認することになる。
「何でもないんだよ。」彼はやつとそれだけ言ふことが出來た。
「君とあのひととは、何でもないんだね。」明三は念を押した。
「…………」
「え？　ほんとに何でもないんだね。」
さうなんだ、とはつきり言へないのが春樹は辛かつた。彼はただ、かすかに顎を落してみせた。

自分はクリスチャンらしく端正に行動してゐたのに、と思つた。自分とあのひととの交際は、封建的な枠の中からちよつぴり抜け出した者同士の精神的な散歩だつたのだ。ただ、少し身振りが多すぎたと彼は思ひ、そしてさう信じ込まうとした。それでゐて、急に眼が醒めたやうな、蕭條とした肌寒さがせまり、恥と泪にまみれて泣きたいほどである。

かうして夕方になつた。しかし、彼は寢臺から起きあがらうともしないでひくひくと脾腹を波打たせてゐた。唇は黑くなつてゐた。

「おい、天秤棒。」鼻たけのある男が、ちよつと歸つて來て言つた。「夕飯だぜ。」

「………」

「今日は鰯のてんぷららしいね。」

その臭ひを想像しただけで春樹はもうむかむかし、かすかな眩暈さへ覺えた。で、寢たまま無愛想に言つたのである。「僕は食べない。」

「失戀か？」

男は嘲笑し、その反應を調べたさうにしばらく春樹の樣子を窺つてゐたが、くるりと向き變ると再び戸口を出て行つた。そのあとで春樹はやうやく上半身を起したが、今に鼻血が出さうな氣がし、かちかちと齒が鳴つた。と思ふと、今度はきよとんとした顏になり、ここはどこかと彼は焦點の定まらない眼を周圍に泳がせた。蕭條として、物の噎ゑるやうな酸性の冷い闇が立ちこめてゐる。今まで彼

を支へてゐた小さい黄金色のものはからきし姿を見せないのだ。彼は今千仭の谷底にゐるのである。もう教室へも出られないし、教會へも行けない。つい先刻(さつき)まで身につけてゐた華美な金ぴかの制服は見るのも厭はしく、もうあんなものは二度と着まい、リボンで飾つた帽子なんか、街のピエロのかむるものだと彼は思つた。

竹の杖

一

やがて夏休みが來た。それが終ると、春樹は早や三年生だつた。

或る日、彼は青竹でつくつた少し長めの杖を突いて教室に出た。よれよれになつて縞目も見えない袴の裾からによきツと突き出た脛が、どこか蒼白くむくんでゐた。しかし、何としても竹の杖は袴とうつりが惡く、誰も彼もぷつとふき出したいのを必死に抑へてゐた。

「どうしたんだ？」

毎日几帳面に教室に出てゐる馬場勝彌が、心配さうな顔で近づいて來た。

「少し脚氣でね。」春樹は、暗い翳(かげ)りのある微笑を浮べて言つた。

「それやいけないね。小豆を食つたかね？」
「食ひたいと思ふんだが、食堂ではやつてくれないんでね。」
「そんなら、あれがいい。朝早く起きて、露のある間に素足で草を踏むんだ。とても氣持がいいぜ。失戀の……」
言ひかけて勝彌ははつと自分のぶしつけさに氣づき、口をつぐんだ。失戀の哀しみなんか、朝露に觸れるだけで吹ッ飛んぢやふね、と言ひたかつたのである。
春樹は敏感に相手の顏色の奥のものに氣づいたが、わざと空呆けてゐた。が、血が煮え立つた。ぐいとそれを抑へ、少し前屈みになつて彼は邪魔になる杖を床の上に置いた。それからそろそろと机の前に腰をおろした。胸の中は哀しみでいつぱいだつた。夏休みで濱町の家に歸つてゐたとき、居辛くなつたこの學校から逃げ出さうとして高等中學校の試驗を受けたのだが、見事にはねられたのだ。そんな事が、病氣への感傷をよけい誇大にしてゐるのである。
終業の鐘が鳴り、みんなからずつと後れて教室から出て行く時も、彼は竹の杖を離さなかつた。ねつとり汗ばんだ掌の內側に青竹の肌が食ひつき、淸しく軋んだ。これがなかつたらとても地面に立つてゐられまいと思つた。
明三が、彼と並んでゆつくり步いてゐた。友人の步きぶりにばかり氣を取られてゐる明三の顏には、この友人の犧牲になることをも厭ふまいとするやうな、感度の高い、美しい精神があふれてゐた。春

樹は今もまだ明三にあの毛糸の手袋のことさへ打ち明けてゐない自分の臆病な頑さを恥ぢた。

玄關を出ると、すぐそこの青々とした草地の縁に立つて、だんだん朝の氣を消してゆく赤みがかつた日光を浴びながら、勝彌が待つてゐた。勝彌はすぐ二人の方へ近づいて來た。勝彌は、その時ふと妙な疑惑に捉へられた。春樹の杖は虚構ではないかと考へたのである。――高等中學が受からなかつたくらゐ何だ？　それをやたらに面目ながつて、あんな照れかくしの杖なんか突いて……

疑つてかかると、脚氣もそれほどひどいのではないかと思はれた。

「君、」と春樹はまともに勝彌の顏を見て言つた。「博文館から出る『歌學全集』を、君は取つてるつてね。」

「うん、取つてる。あれは毎月一冊づつ出るよ。」

「君が取るついでに、僕にもあれを取つてもらひたいんだがね。」

ヂスレイの夢が醒めて、春樹は今はさういふものに心をひかれてゐるのだつた。

學校の敷地に沿うて裏手の谷間の方へ下りて行かうとする者は、竹藪の中を通り拔けなければならなかつた。そこは坂道になつてゐた。ときどき藪が切れ、葉のすがれかけた樹木の蔭には草葺の屋根も見える。空の中へ一つづつ嵌め込んだやうに紅く光つてゐるのは柿の果だ。

この邊の地理によく通じてゐる春樹は、晝でもうす暗い道をずんずん下りて行つた。藪の盡きたと

ころで坂も盡きる。彼は腫れの退きはじめた足を虐使して谷のやうな地形になつた野を歩き廻つた。黄色い嘴をした數羽の鶫が不意にけたたましい鳴き聲をあげて道を横切り、低く低く、稲の穗とすれずれに翔つて向うの林の中に飛び込んだ。行方も知らずひたむきに流れ落ちてゆく小川の水はきびしく澄んでゐた。

春樹はしかし、風流人か、都會生活のほのほのと香水のやうな情緒に飽いた金持息子みたいに、野面にきほひ立つ秋色を漁らうとしてゐるのではない。誰も見てゐないこの濶い自由な谷間で、周圍からの壓迫をはねかへし、體の芯に鬱結した重い憂愁を存分に排き出したいのだ。彼は宙に兩手を振り上げて、野獸が吼えるやうな意味のない叫び聲を放つた。

鴉が一羽、西へ傾いた太陽の眞下にあたる方角から舞ひあがつた。彼はそこに小高く盛りあがつた丘を見つけた。近づくと、ぱつと曼珠沙華の花が眼に灼けついて來た。

「畜生！」

唸りながら彼はこの毒々しい紅の花を踏みにじり、きりりとした快味を體の隅々に味ひながら丘の頂に駈けのぼつた。そしてここでまた兩手をひろげ、大聲を出して嗄鳴つてみた。

いつか一度自分の方から敏子に宛てて書き送つた手紙のことが、ふと記憶の中から甦つて來た。その手紙には、銀座にゐる頃少し磨いた腕で勿忘草の花を描き、その横にあまい英詩の一節を書き添へたものである。折り返し彼女のよこした手紙には、線の勁い文字が詰り、その底に、彼女の聰明な性

質を裏づけた、明るい純粋な愛情がひたひたと湛へてゐた。彼は一層彼女が戀しくなつた。
今はしかし、それらすべてを過去に葬らなければならないのだ。萬一彼女と道ですれちがふことがあつても、德の高い哲學者みたいに、つんとそつぽを向かなければならないのである。

二

彼は敎會から遠ざかり、敎室へもめつたに姿を見せなくなつた。たまに敎室へ出て行くと、ハリス敎授が、待ちかまへてゐたやうに、
「Mr. Shimasaki !」
と艷やかな顎を振り向けて、むづかしい問題を滿足のゆくやうに答へさせようとする。だが、彼はちよつとお辭儀をするだけで、一言も答へない。答へるべきものを持つてゐないのだ。
「前にはよく答へたぢやありませんか？　なぜさう默り込んでしまつたのです？」
「…………」
「今から隱者（ハアミット）の眞似をするのは、早いです。少年は、小鳥のやうに歌ひ、日の丸の國旗みたいに輝くべきです。あなたは、さう思ひませんか？」
春樹はそれでも默りこくつてゐた——敎室ぢゆうの眼が嘲笑と憐憫をこめて自分の方へ向けられてゐるのを神經一つでやつと受けとめながら。

生徒の中で春樹の豹變ぶりを一番苦々しく感じたのは、馬場勝彌だつた。擬裝の枠に合せて無理に背丈を伸ばしたやうな變に大人臭いところが出來、それが胸をむかつかせるのだ。隱者なら隱者でいいが、春樹の場合はいかにも不自然なのである。

或る日、彼は春樹を捉へて、ずばりと言つてのけた。

「君は陰險でいけない。」

春樹はむつとした。友人の顏は、しかし、横暴で荒々しいながらも、どこかに笑ひをふくんでゐた。春樹はそれにやつと感情を堰きとめられたが、すると却つて澁い表情になり、

「陰險だとはずゐぶんひどい事を言ふね。どこが陰險だ？」

と食つてかかつた。

「君のすべてがだよ。」

「す、す、すべてがだつて？」

春樹は覺えず吃つた。體ぢゆうがじいんと鳴り、眉間にはきつい縱皺が出來た。否應なしに窮地へ落されてゆく自分自身の慘めな姿をそこに彼は見た。と云つて、今更あとへも退けなかつた。

喧嘩にはならない、と安心に似たものを感じながら、勝彌は今度は少し分析的に自分の思ふところを述べた。春樹はいつの間にか項垂れてゐた。そしてこの敗北的なポオズが友人の無遠慮な言葉をよけい骨にこたへさせた。

この日はこれで濟んだが、勝彌はそれくらゐでは滿足せず、その後も機會のある每に依然としていやな臭みから拔け出さうとしない春樹をぎゆうぎゆういはせた。

すると、或る日の事だつた。二人はハリス館――この年の六月、北米フィアデルフィア州のハリスといふ篤信な信者の寄附金で建て增された寄宿舍――のまだペンキの色も濃い板壁の前でばつたり行き逢ひ、勝彌が何か言ふと、春樹は急にむきになつて、無言のまま相手の腰のあたりへ組みついて行つた。勝彌は見苦しく足をうかせたが、ぢきに立ち直つてまたたく間に春樹を組み敷いた。と思ふと、今度は春樹が上になつた。

さうやつてしばらく二人は體と體を撚り合せ地べたをころげ廻つてゐた。しかし、どちらも兇暴な腕を振り上げて相手を毆らうとはせず、ただ、執拗に組みつき合つたまま、飼ひ馴らされた獸同士みたいに頃合ひを見てはどたんばたんやるだけなのだ。土埃が眼に入り、口に入り、たうとう二人は咽せて來た。このくらゐで置かうぢやないか、と二人ともこだはらない心で言ひ出したいのだが、先に言つた方が負けである。だから、うつかりそんな事も言へず、わいわい寄つて來た人々にやつと二人は引き分けられた。その時、二人は着物や袴についた塵を拂ひながら、顏と顏を見合せないやうにして、誰にともなく、

「畜生！　畜生！」

と口の中で哀しさうな罵聲を放つてゐた。彈力に富んだぬくい皮膚の匂ひを互に鼻をすりつけてぢ

かに嗅ぎ合ひ、今にわつと泣けて來さうな興奮のたつた一つの排かし口でそれはあつたのである。

幻覺

一

明治學院の教授課目の中には事實上漢文はなかつたが、國文學は近藤何とかいふ人が受け持つてゐた。この時間は膨彌の獨擅場だつた。『竹取物語』や『源氏物語』の輪講をやり、『源氏物語』の「帚木」のところへ來て、「いとど斯る好色事共を」とか、「近き御厨子なる、いろ〳〵の紙なる艶書どもを引出でて」とかいふ色情的な文句が出て來ると、ハリス教授ほど大膽になれない近藤教授は、きまり惡がつて教壇の上に立ちつくし、うんともすんとも口をきかなくなる。

「先生、何もをかしい事ではありませんし、さう遠慮なさらずにどんどん講義してください。」

さう言つてうぶな教授を困らせ、自ら描き出す感能的なまぼろしをやり場もなく肚の中でそつとあたためてゐるのは、膨彌だつた。

放課後になると、陽あたりのいい草地に膨彌を中心にして圓座がつくられた。教授が一學期かかつて羞み羞み教へてくれたものを初めからさらへてもらはうといふのである。その中で一番熱心な顏で

膝の上に教科書をひろげてゐるのは春樹だつた。時には戸川明三も仲間入りをした。彼はもうあんな大人は嫌ひだとは言はなかつた。
　プリンストン大學で英國の前總理大臣ボオルドウインと同窓だつたといふランディス教授は、三年級では心理學と哲學を受け持つてゐた。教へ方がきびしく、出來ないとか調べてゐないとか言はせないでどこまでも學生に努力させる恐ろしい先生だつた。この人から試驗を受ける時には、だから、みんなは少し早めに教室に入つた。
　だが、問題が出されてまだ十分も經たないのに、春樹の姿はどこにもからきし見えなくなつてゐる。窓際に立つて、木の葉の散りつくした枝々が銀灰色に光つて搖れてゐるのを心に寒く眺めてゐた教授も、やがてそれに氣づくと、徐々に眼の縁を怒張させて、呟くやうに、
「義務觀念のない學生は仕樣がない。」
　と言つた。答案も出さず、斷りもせず、忽然と教室から消えた春樹に對して、純粹な怒りを感じたのである。
「あの男は、大變よく出來るんだが、非常に怠け者だ。」
　教授はまだ埃のかからない靴を需ひに富んだ黑炭のやうに光らせて、こつ、こつ、と床の上を歩きながら、誰に聞かせるともなく言つた。
　出來のいい生徒の怠惰くらゐ始末におへないものはない。そこには何か計畫的なものがあるが、そ

の計畫的なものをどう始末すれば納得がゆくか、當人にもわからないのである。この不健康な心理狀態が長く續けば、せつかく持つて生れた藝術的な稟質もいつか腐朽してしまふであらう。
やがて年が明けて、新學期が來た。だが、この時分から春樹の姿は學校のどこにもほとんど見られなくなつた。博文館から毎月一冊づつ出る、佐々木信綱校訂の『日本歌學全書』を買つてくれと、金も豫め何ヶ月分かまとめて渡されてゐる勝彌は、本鄕臺の自宅の近所にある取りつけの本屋から配達された本を學校まで持つて來ても、春樹に手渡しする機會がなかつた。春樹のゐた部屋へ行つてみると、机に本箱、柳行李と彼の所有品は一つ殘らず無くなつてゐるのだ。
「島崎君はどこへ行つたんだ？」勝彌は同室の男に訊いた。
寄宿舍では一年に一度部屋替へがあり、そのとき同室者も變るのが常だつた。今度の男は、少し鈍重だつた。
「僕は知らないね。」男はにやッと卑屈な笑ひを浮べて言つた。
「一緒にゐたくせに、知らないのか？」
「知らないね。急に消えたみたいだよ。」
仕方がないので、勝彌は教室の春樹のと決つてゐる席に本を置いておく。すると、授業の始まる間際になつて、どこからともなくすうと春樹が入つて來る。
勝彌はそれとなく相手の動作を注目する。春樹は眼の奥に不氣味な光を湛へて默りこくつてゐる。

教室へ出て來た目的が自分自身にもわからない、といつた顏だ。

――君、そこに本を置いといたよ。

勝彌は自分の席から少しは恩に着せたい思ひで言はうとしたが、妙に寒氣立ち、聲が出なかつた。

春樹は机の上に地味だが新鮮な匂ひのする紙表紙の本を見つけると、それを買つて來てくれた友人の方へちよつと向いて無言の目禮をする。ただそれだけなのだ。かすかに唇が喘ぎ、眸の底にちらと一筋白く水をたらしたやうに閃くものがあつたと思つたのは、おそらく、自分の友情をもてあましてゐた勝彌の欲目だつたであらう。

春樹は朝の一時間席に就いてゐるのがやつとだつた。それが果てると、みんなの氣づかぬ間に、再び學校を去つて行くのだつた。

學校の門を出て、二本榎の通りを左へ曲り、海軍軍醫局のある所（現在の高輪御殿のあたり）を再び左へ曲つてまともに北風を受けながらなほも進んで行くと、やがて道は爪先上りになる。魚籃坂だ。この坂に接して、無住でもないが、どことなく荒廢した古寺があつた。卒塔婆が重なり合つて倒れ、その上にほのかな黃色い光を漂はしてゐるのは連翹の花である。本堂は陰森として暗く、廊下を辿つてその背後に廻ると、壁際に幾つも大きな古い木像が安置してあつた。その中の一つは西行だ。學校からやや離れた所に下宿して誰の眼からも姿を隱してしまつた春樹は、毎日この西行を訪ねて、無表情な冷い顏と話をしてゐるのである。

二

彼は「鑄掛屋の天秤棒」と言はれ、才走ると言はれ、お終ひにはあられもない浮名を立てられてしまつた。感情のある活きた人間を相手にしてゐたから、こんな結果になつたのだ。これは人と一切話をしないに限る。彼はさう決心して、下宿の一室に閉ぢこもり、絶對の沈默を守ることを試みたのだが、それではよけい胸の懊惱が募つて、今に窒息しさうだ。そこで木像と話すことを思ひついたのである。

採光のよくない、だが、その薄暗さが却つて木像の居間らしい空氣をかもし出してゐるこの穴藏のやうな所で、西行は剝げちよろけた顏に煤と埃をつけてぢつと眼を閉ぢてゐた。春樹はその前に突ツ立つて、こころもち肩をそびやかし、口から出まかせに喋りまくつた。

彼は時には、このうんともすんとも言はない西行に香氣の高い英詩の一節を諳誦して聞かせた。西行はそれでも何とも言はなかつた。だが、あの女敎師を前に置いて言ふべき熱情的な言葉がふと唇を衝いて出て來た時には、むしろ彼の方ではつとした。

現實的な悲哀を濾過し、その上澄みをしやくり取つてぶちまくやうな甘美な饒舌である。初めから返事を豫期しない、出たらめで開けつ放しのこんな饒舌の對象としては、必ずしも西行を選ばなくてもいいわけなのだが、ここへやつて來る度に彼はきつと西行の前に立つのだつた。

或る日、彼は自分の冷え凍えた頬を西行の煤けた硬い頬にそつとすりよせた。そして急に少女のやうに羞み、照れかくしに今度は拳固をつくつて相手の鼻先に突きつけ、

「こら、西行、お前さんはなぜ女房を棄てた？」

と罵つた。西行はしかし、金輪際口をきかなかつた。

もうすぐ眞晝だつた。四角な高窓からはほの白い光がさし込んでゐた。學校の食堂では賄ひ方の夫婦が大きな食卓の上に藍模様の食器をならべ出す頃である。だが、不思議と彼は食慾を感じなかつた。彼の體は氣化してゐるかのやうだつた。それでゐて、むしあつく感情が凝り、額が灼けるのだ。聲を出して叫ぶことも出來る。孤獨だが、寂しくない。ぢきに樂になれるといふ氣がし、それが彼に勇氣を與へた。

丁度その時、彼は何かの跫音を聞いたやうに思つた。不氣味に跫音は近づいて來る。彼はどきどきしだした。が、いつかまたそれは遠ざかつて行く。眞晝だのに陰森と暗い穴藏の空氣に咽せ、彼はマツチを擦つて蠟燭を點けようとしたが、もちろんそんなものの持ち合せがある筈はなかつた。

空氣をかき立てて、跫音は再び近づいて來た。彼は待ちかまへた。今度ははつきり顔が見え、手が見え、本陣鼻と呼ばれる大きな隆い鼻が見え、紫の紐で結んでうしろへ垂らした長い漆黒の髪が見えた。

――父上！

彼は覺えず聲に出して叫ばうとした。が、その刹那、ぱつと幻は消えたのである。

彼は幼い時、信州の山の中、古い街道筋にあたる馬籠の、本陣と呼ばれて往復の大名を宿泊させたこともある大きな家の書院で、赤い毛氈をかけた机に倚つた父から、『三字文』『勸學篇』『孝經』『論語』などの素讀を受け、九歳で上京してからも、鎗屋町の家から數寄屋橋際の赤煉瓦の小學校に通ふかたはら、姉の夫に『孟子』や『詩經』の素讀をしてもらつた。佛教とキリスト教は、平田鐵胤の門人である父の最も排斥するところのものだつた。

だが、小學校を卒業する頃、彼は他の少年たちと同じやうに英學を修めようと決心した。生れつき臆病なくせに、ひどく自尊心の强い彼は、早や自分の意のままに動き出さうとしたのである。それを知つた時の父の驚愕はどんなであつたらう。だが、子の心はゆるがなかつた。

「あの子は一番學問の好きな奴だで、あの子にだけは俺の事業を繼がせにやならぬ。」

白足袋を穿き、癖でいつも書物をいつぱい捻ぢ込んで懷をふくらまし、嚴肅で沈鬱な顏を据ゑてさう言ひ言ひしてゐた父も、たうとう子に負けた。子が洋學に走るのを許したのである。

春樹が初めて英語の手ほどきをしてもらつた先生は、海軍省に勤めてゐる士族出の何とかいふ人だつた。この人は、當時としてもあまり安くない月謝で、パアレエの『萬國史』あたりまで敎へてくれた。丁度ナショナルの讀本が初めて輸入された頃で、築地のエフ・シュロダアといふ人の家や、後には

銀座の十字屋などにその大きな看板が出る。勸工場や、窓々に紅と藍の市松硝子をはめて客を呼んでゐる松田料理店の前は素通りしても、その看板だけは眼につく年頃だ。少し前から流行つてゐるキルソンやユニオンの讀本にくらべると、あの黄ばんだ表紙、意匠のすぐれた挿繪、光澤のある紙の匂ひまでが少年の心をそそり、みんなは爭つて、それを買つて來るといふふうだつた。春樹ももちろん買つた。

春樹が更に進んでキリスト教主義の學校に入つた時――キリスト教そのものに魅力を感じてではないにしても――父はどんな顏をしたか？　いや、その時分父は既にこの世にゐなかつたのである。

屋敷の一角に、深い竹藪がある。竹藪を背にして古い米倉がある。木小屋がある。この木小屋の一方にしつらへた陰鬱な座敷牢――そこが、あの精神の高い廉直な愛國の學者、島崎正樹の生涯を終へた所だつた。

「慨世憂國の士をもつて發狂の人となす。豈悲しからずや。」と紙に書きつけて、それをこの世に遺す最後の言葉とした彼、平田派の國學運動に深く心を傾け、「眞毘の靈」を理想として生きた彼、「蟹の穴ふせぎとめずば」の歌を詠じて、洋學が國を傷つけることを諷し、キリスト教ばかりでなく、佛教をも外來の異端思想として極力排斥した彼の最期はあまりに悲慘だつた。

春樹はその時十五歳だつた。そんな年頃では、あの偉丈夫な父がどんな死に方をしたか、それさへ知らしてもらへなかつた。ほんの一目冷たい死顏を見たいと思つても、質實な生活を愛する母が先手

を打ち歸國を許してくれなかつた。彼はいつものやうに、表情のくづれない、やや眼の縁を赤くしただけの顏で、英語の本にしがみついてゐなければならなかつた。

三

或る夜、春樹は机に倚りすがつて『歌學全書』を讀んでゐた。下宿の一間である。据ゑランプの灯が明るく、その芯のところはじいんと紫色に燃えてゐた。障子の外には青暗い闇が厚い層になつてたたみかけてゐた。

闇の底は、しかし、光と影、色彩的なものとさうでないものとが縱横に交錯した萬華鏡なのだ。彼はそれを隅々まで見定めようとして氣を澄ませた。するとその時、上下に大きな弧線を描いたゆるい羽ばたきの音が聞えて來た。彼ははつとして思はず耳の孔をほじくつた。が、夢見心地は消えず、不思議な事もあるものだと思つてゐるうちに、しづかに羽ばたきを收めてま白な鶴がひよいと庭先に降り立つた。いつたい、どこから飛んで來た鶴であらう。毛を伏せて盛りあがつた胸は奥深くに淸らかな情緒を包み、ほそい赤筋の入つた嘴はかたく閉ぢて開かない。庭に趣きを添へる長大な高山植物の花みたいだ。その美しさと氣高さに打たれ、春樹は思はず立ち上つてがらツと障子をあけた。だが、もちろん、まだ春には間のある霜夜の庭先にそんな異變が起つてゐる筈はなかつた。

荒い足音と、たてつけの惡い障子の軋り音とを聞きとがめて、ここのおかみさんが廊下づたひにや

つて來た。
「どうかなさいましたの？」
「いいえ、どうもしやしないんです。」春樹は少しあわて氣味に言つた。「ただ、鶴が降りて來たやうな氣がしたもんですから――」
「鶴が？　あの鳥は夜分でも飛べますの？」
「飛べるかも知れませんね。靜かで賢い鳥ですから。」
「だけど、東京もかう日に日に開けて來ては、鶴も住めなくなるかも知れませんわね。」
おかみさんは繻子襟の上からちよつと胸を抑へるやうにして息を繼いだ。「鶴で思ひ出しましたが、あそこの玉繩池ね――あれはあなたの學校の窓からなら見えはしません？――あの池に、今年は鴨が多いさうですね。去年は半藏門の下に澤山ゐたのに、今年はゐないんですつて。そして、玉繩池にゐない年には、半藏門の方に澤山ゐるんですつて。何か連絡があるのかも知れませんわね。」
こんな話も、春樹には惱ましい幻覺の續きみたいだつた。

またの日、彼は何の目的もなしに横濱まで歩いて行つた。歸りも汽車に乘らずに歩いた。だが、疲れて足の筋根が凝り、腰が疼き、鶴見を過ぎて川崎へさしかかつた頃はもう眞夜中だつた。牙のある向ひ風に頰も耳朶もちぎれさうになり、おまけに星の影さへかき消した、むごい、意地惡い暗さであ

る。それが極度の沈默と自己苛責とで痛めつけられた肉體のかすかな火花をも呑み込まうとする。
ふと、泥田を挾んで街道と平行した鐵道線路の方を見やると、一臺の機關車が闇の中をあつちへ行つたりこつちへ來たりしてゐる。しかも、その車體といつたら、ピストンから車輪、長方形の煙突に至るまで、眞紅な焰で出來てゐるのだ。
彼はぎよつとして跳び上りさうにしたが、その瞬間、焰の機關車はぱつと不氣味な光芒を放つて、闇の中に姿をかき消した。

夏期學校

一

自分を責めて、責めて、責め拔くむごたらしさ。
彼は現に自分のしてゐる事を省みて、いつの間にか自分が年長の人たちの知らない道を盲目滅法に歩き出してゐることに氣づいた。彼は、言ひあらはしがたい恐怖に捉へられた。
彼は少年のころ幻燈を見たことがある。一流の手品師みたいに、幻燈は厚い不透明な壁を一瞬のうちに超自然的な幻に變へてしまふ。髭の長い侍があらはれ、城も野原も黃色なのだ。

だが、今の彼はこんな原始的なメカニズムによつて心を充たされるほど單純な心の持ち主ではなかつた。と云つて、映畫といふものがかかり、時間と空間の美をくりひろげて見せてくれる時代でもなかつた。そこで彼は飜譯を思ひついた。

明治十九年、二十年は、飜譯文學の全盛期だつた。春樹が一時崇拜したヂスレイの晩年の作『エンディミオン』も、水戸の人で『時事新報』の記者、渡邊某によつて譯出された。その標題は政治小說にふさはしく『三英雙美・政海之情波』とされてゐた。

日本最初の總理大臣伊藤博文が永田町の官邸で大がかりな假裝舞踏會を催したのを最後として、歐化主義への反動が起つてからは、一時の好奇心や流行心理からなされる外國物の飜譯、紹介は見られなくなつた。そのあとから出るものこそ、良心のある優れた作品でなければならぬ。森鷗外が三木竹二との共譯で『讀賣新聞』に連載したホフマンの『玉を懷いて罪あり』(原題 "Fraulein von Scudery")森田思軒が省庵居士の名で『報知新聞』に連載したコリンスの『月珠』などがそれであつた。

春樹は學校の圖書室からモオレエの刊行した評傳叢書 "English Men of Letters" を幾册も借りて來て、まづ讀んだ。それから自分でわざわざ柿色の肉で原稿紙を刷り、その枡の中に原書と睨めつくらをしては一つづつ劃をくづさぬ文字を書き込みはじめた。飜譯の方法としては逐次譯よりも自由な抄譯を選んだ。これはかなり困難な仕事だつた。しかし彼はへこたれないで、全力を打ち込んだ。毎日の學課はほとんどそつちのけだつた。

三學年の終りが近づく頃までには、糸でかたく綴ぢた原稿が三冊溜つた。その中にはポオプの傳記もあつた。

三年級から四年級へ移らうとしてゐる人々の間では、サンダム館の前から敷地つづきの庭へかけて三棟並んだ西洋館へ招かれて、碧い眼の教授夫妻から、桃やカステイラを盆に高く積み上げて欵待された夜の愉しさが繰返し語られてゐた。間近に迫つてゐるジュニア・コンテストのこともしきりと噂にのぼつた。

ジュニア・コンテストといふのは英語でする演說競技のことで、この學校が採用してゐる一つの奬學法である。規定にはかうあつた。

「毎年五月本科第三年生ニ英語演說文ヲ作ラシメ、評點八十點以上ヲ得タル者ヲシテ、卒業證書授與式前ノ月曜日ニ於テ演說セシメ、主意及ビ演說方ニ優等ナル者二名ヲ選ビ、高點者ニ褒賞金十圓ヲ與へ、次點者ニ五圓ヲ與フ。」

みんなは、この華やかな競爭演說に出て名譽の賞金を獲得しようと張りきつてゐた。物の裏を考へず、天にさへ一踏みでのぼれさうなスリルに驅られて破目を外した功名心である。それは妙に春樹を反撥させ、彼等の小鼻に滲み出た脂つぽい汗の粒さへむかつくやうな嫌惡を感じさせた。賞金などが餌にされてゐるのでは、彼の精神は活潑に動き出して來ないのである。みんなが眠つてゐるとき――そして丁度人生といふものが、厚い不透明な壁を超自然的な幻に變へてしまふ幻燈のからくりのやう

にしか意識されてゐないときに、彼の知性は既に目ざめて現實の哀苦と戰つてゐる。そこには妙に大人びた假裝があつたが、彼は氣づかない。自分の態度を一段高尙なものと感じることによつて別の英雄的な氣持を滿足させつつある彼は、それに氣づかないのである。

彼はポンチ繪を描いて、ジュニア・コンテストに夢中になつてゐる人々を冷嘲した。

演說會は、例年になく盛んだつた。一等の賞金は誰が取つたか記錄に殘されてゐないが、二等は馬場勝彌だつた。

夏の雨がざんざん音を立てて寄宿舍の窓を襲ひ、隙目といふ隙目から小さな水玉をはねかへらせてゐた。思ひ思ひに荷物をかたづけて、或る者は永久に、或る者は七月、八月とつづく夏休みの間だけ學校を去らうとしてゐた時だつたので、この雨はうらめしかつた。だが、それもやがて霽つた。

春樹は濱町の家へ歸つた。

「兄さん！」

廣い勝手口から春樹を見つけて、尻の上に結んだ水淺黃色の帶の端を踊らせながら駈け込んで來たのは、小父さん夫婦の大事な一粒種、今年五歲の樹だつた。年は違ひすぎるが春樹にとつては實の弟のやうな少年である。

「このまあ暑いのに帽子もかむらないで、どこへ遊びに行つてたんだえ？」

八年間病みつづけて最近床拂ひをしたばかりの小母さん、春樹のいはゆる姉さんが、やさしくたし

なめた。だが、樹は輕く聞きながして、色の淺黒い、聰明な目鼻立ちの顔をやたらに振り廻して、久しぶりに逢ふ春樹に纏れついた。

そこへ、おばあさんが、

「さあさあ、おやつをあげますよ。」

と茶戸棚から唐饅頭を取り出して來て、二人に分けてくれた。

「樹さん、いらつしやい。」春樹が呼んだ。

春樹はこの遊びざかりの少年を背に乘せて部屋々々を這ひ廻つた。夏らしくどこの唐紙もとりはづされ、ねえ、兄さん、この家二人の運動場みたいだね、と樹は燥いだ。

「明日も馬になつてね。――ひやあ、そんなに走つたら、落つこちる。もつとゆつくり歩いて。」

茶の間は應接室代りになつてゐた。そこへは、仕切場、大札、芝居茶屋の女將を初め、いろいろの客が次々にやつて來て坐つた。

町家で一番親しまれるこの部屋から、彼は濡れ緣を横ぎつて庭へ下りた。ここでは少年を威勢よく肩車に乘せてゐた。からりと碧く晴れあがつた空に、まぼろしの部屋や、旗や、兵隊がちらつく。樹は血をわかせてやたらに體をゆすり、顎の下になつてゐる春樹の髮をひつかいた。

「痛いなあ。」春樹は大袈裟な澁面をつくつてみせた。

頸筋を壓する骨細い少年の肉體には、ぴちぴちと新鮮な彈力がこもつてゐた。それがふと、自分の

過去にある、むつと生あたたかい臭ひのする祕密な苦行と祈禱の世界を思ひ出させた。――考へてみると、彼は山岸敏子にたうとう接吻一つしなかつたのである。視野のはてに小さくしぼんでゐるかと思ふと、時にぱつと大寫しになつて來る眞紅な眞紅な唇。それはしかし、永久に嚴かな固さで閉ぢられてゐるのだ。

するとその時、背の子供がびつくり箱の人形みたいに跳びはね、きやツと悲鳴をあげた。梧桐の葉蔭に、惡漢のやうな複眼の蜂を見つけたのである。

蜂はしかし、子供の顏へひよいと一睨みくれたきり、ゆつくり飛び立つて姿を消した。春樹は池の周圍を一廻りして再び緣側へ戻つた。頸筋にへばりついた蒟蒻のやうな肉體の重みが、今はむしろ腹立たしかつた。

「おや、をかしい。大きななりをして。」

奥座敷から小母さんが言つた。小母さんの背には土藏の白壁が張りついてゐた。――小母さんと、おばあさんと、もう一枚小父さんも加はつて、そこでは午後の手慰みに花ガルタが始まつてゐたのである。

二

勝手から奥座敷と土藏との間を通り拔けると裏木戸があり、その外に屋敷つづきの空地があり、そ

こが花畑になつてゐた。その一部に青々と茂つて、勁い蔓を四方に伸ばしてゐるのは、いつか春樹が高輪の方から持つて來て植ゑて置いた苺である。勞働會といふものに入つて片手間の耕作に愉しい田園の夢を描いてゐる或る同級生が頒けてくれたのだつた。

葉に觸れ、土に觸れ、どこまで伸びてゆくか知れないやうな夢と生長力を持つた蔓をひつぱつたりすると、背筋がぞくぞくする。田舍を喪つた者の鄕愁でそれはあつたのだが、春樹自身は一切無意識だつた。彼はただ苺が稚い生き物のやうに可愛く、早く眞紅な果をつけるんだよ、と手桶で運んで來た冷い井戸水をあたまから浴びせてやつた。

そこへ小父さんも輕く着流した中形浴衣の前をはだけて、脂ぎつた胸板をてらてら光らせながらやつて來た。

「小父さん、御覧なさい。こんなに苺が殖えましたよ。」春樹は言つた。

小父さんはそこらをゆつくり歩き廻つた。時には空地の向うの緣まで歩いて行つて、そこから青空にそそり立つた二階づくりの母家を振り返つて見、再び春樹の方へ戻つて來る。春樹は桔梗や百日草を傷めつける雜草をむしりながら主人の樣子に敏感な神經をあつめてゐた。

「俺はそのうち、この空地へ座敷を建て增さうと思つてる。」

小父さんは或る日の寢ざめに思ひついて今もしきりに胸であたためてゐる新しい計畫を話して聞かせた。勝新の大將と共に遠からず橫濱の方で大きな雜貨店を經營しようとしてゐることも話のついで

に洩らした。彼の指に嵌められた金指環の紅い光の顫へは、胸の興奮を傳へて得意さうに微笑してゐる息づきとも取れた。

危つかしさのない堅實な足取りで絢爛なシャンデリヤの幻を趁ひ、いつかはきつとそれを自家の客室に取り据ゑて見せるのが小父さんである。彼のかうした成功の速度は、この國の新しく興つた資本主義が社會的にぐんぐん翼をひろげてゆく速度でもあつた。

この小父さんの幸福は春樹にとつても心强かつた。

だが、春樹は小父さんの側にゐるといつとなく苦しくなり、彼の眸の動き方一つにも自分の素肌にさし向けられる假借のない鞭がひそんでゐるやうな氣がするのだつた。

――春樹、貴樣はかういふ家屋と庭園に住んで、書生を置き、女中を使ひ、指に金や寶石を光らせてゐる俺の地位を何とも思はないか？　行く行くは小父さんのやうになつてみたい、といふ氣は起らないか？　春樹、春樹、どうして貴樣はさうひねくれて、焰の機關車を見たり、ポンチ繪を書いたりするんだ？　なぜ小父さんの後へ跟いて來ないんだ？

宙にはためく鞭はさう言つてゐるやうに思はれた。

「今の世の中は實業でなけれや駄目だぞ。」

小父さんはちよつと威嚴を見せて話に最後の結論をつけるやうに言つた。そこにも春樹は銳い鞭を感じた。

二日經ち、三日經つた。

書生の仕事として、彼は毎日夕暮が近づくと尻端折りになつて井戸の方から手桶を運んで來、茶の間の小障子のすぐ外にある乙女椿や、表門の內側に繁つた竹に水をやつた。客の出入りする格子戸をあけ放つて庭の三和土をも洗つた。だくだくと汗が流れ、全身の精力をかたむけて勞働に耽る快味はあつたが、彼の心の奧は樂しまなかつた。三和土の上に白い正方形の寒水石が据ゑてある。その上に兩足を預け、緣の端に腰かけて彼は休んだ。彼はいつの間にか深く頸垂れて惱ましさうに考へ込んでゐた。

「貴樣はそんな所で何を考へてる？」

奧座敷から琥珀のパイプを咥へたまま出て來た小父さんが見咎めて言つた。春樹ははつとして肩を起し、おづおづと小父さんの顏を見上げた。

「いえ、何も考へてやしないんです。」

「少し變だぜ、この頃のお前は。」

「………………」

仔猫みたいにさかりでもついたかと肚の底で笑ひ、もう一度小父さんはぢいッと彼の色白な顏を見守つた。彼はぷいとそつぽを向いた。

每日の座敷の掃除も彼の務めであつたが、少年時代の華やかな身振りや、翼の生えた夢や、また時

としてあまい汨の痕をとどめた高價な道具調度にハタキをかけてゐても、思ひ出をゆり起される愉しさはなかつた。玄關の間の壁によせて据ゑた机にもたれてぢつと頬杖を突いてゐると、夏だといふのに、汗ばんだ肩のあたりを目がけて、どこからともなく寒々と冷いものが吹きつけて來る。小父さんの指に嵌められた寶石のいぶきであらうか?

しばらく、彼は寶石の光を亂すまいとして無言のままぢつと凍えてゐた。その光は月よりも緻密で、はつきりと綾のある影をうねらせてゐた。それでゐて、その冷い美しさは、この世のあらゆるもの——書物や、花咲く樹や、女や、時としては氣高い愛情をさへ、小學校の地圖のやうな、無味で平板なものにしてしまふ。そこには商業的平俗があるだけなのだ。それと融け合はないで、遙かかなたに、昂然と白く耀いてゐるものがきつとありさうな氣がした——眞理が、でなければ天に屬する叡知が。

「小父さん、僕お願ひがあります。」

或る日、春樹は小父さんがひとりで庭を歩いてゐるところを捉へて言つた。小父さんは、何かまた春樹めが考へついたといつた顏で鷹揚な微笑を返しながら、

「何だ? 言つてみろ。」

さう開き直られると、春樹は見る見る氣が挫けたが、ぐいと肚に力を入れ、少々吃りながら、近く自分の學校で特に夏の催しがあることを話し、その間ぢゆう自分を寄宿舍の方へやつて欲しいと頼んだ。休暇で歸つて來てからまだ間もないことだし、今まで言ひ出しかねてゐたのである。

「へえ、夏期學校といふのがあるのかね。」
　小父さんは低徊するやうにしばらく深い樹蔭をあちらこちらと飛石づたひに歩いてから、再び春樹のところへ戻つて來た。彼はなるべくこの青年を手許に置きたいのだが、とかく沈みがちな樣子と考へ合せて、夏期學校とやらへやつてみるのもよからうといふ結論に達した。そこで、あつさり承諾を與へたのである。
「しかし、濟んだらすぐ歸つて來いよ。小父さんも忙しいんだからな。」

三

「春樹さん、お洗濯物があればずんずん出しなさい。このお天氣だとすぐに乾いちまふ。」
　勝手口から顏をのぞけてゐたおばあさんが、芥取を手にして湯殿の側の塵溜箱の方へ通らうとしてゐる春樹を捉へて言つた。井戸端では房州の田舍から來た若い女中が大きな盥の前に蹲んでぼちやばちややつてゐた。春樹が子供の時から、江戸は火事速いよ、と言ひ聞かせて來たおばあさんは、氣のつけ方も細かく、夏期學校へ出て着る襦袢のことまで心配してくれるのだつた。
「春樹の寢卷は？」
　おばあさんは柱につかまつたまま少し體を乘り出し、盥の中をのぞくやうにして訊いた。
「御隱居さま、あれはいくら洗ひましてもよく落ちません。」女中はちよつと手を休めて額の汗を拭き

拭き腹立たしさうに言つた。
「ひどい脂だからねえ。」おばあさんも眉をひそめた。
「あたしの兄は百姓で、とても丈夫な人間ですけれど、これほどぢやございませんわ。」
「春樹は特別だよ。」
おばあさんはちらと春樹の方を見やつた。皺の中でおばあさんの眼は青年への愛撫を本當は湛へてゐたのだが、きらツと光つた眸が肝腎の愛撫を裏切るやうな鋭さをおびてゐた。春樹は自分の肉體の祕密が白日の下にさらし出されたやうな狂ほしい羞恥を感じ、女中め、よく憶えて置け、と思ひながらこそこそ逃げ出した。
教會で知つた優美な精神生活、神聖な知性、行爲のモラルが、ニキビやむしむしする體臭と同室してゐた。時には、自然を侮つた放肆な想像に罪の烙印を捺す刹那の戰慄感を樂しむこともあつた。天の啓示が、そこにあるのである。彼は夏期學校にそれ一つを求めに行くほどの淸教徒ではない。彼はただ何となく愉しいのだ。熱い浮動する地帶に水が寄せて來るやうな淸々しい期待で彼の胸はふくれあがつてゐるのである。
夏期學校は、前の年、京都の同志社で催されたのが最初である。米國の基督敎青年會の幹事か何かをしてゐるウィッシャルトといふ人が來朝して、日本でも青年運動を盛んにしてはどうかと慫慂し、その結果まづ夏期學校開催の運びとなつたのである。これは夏期大學と呼んでもいい。今年はその二

回目なのだつた。

會場にあてられた校内の様子は何となく變つて見えた。風呂敷包を提げて、水淺黄の地に白く主家の屋號を拔いた手拭で汗をふきふき門を入ると、寄宿舍の方へ通ずる道の一角で、單衣の上に白縮緬の兵兒帶を締めたのや、短い袴の裾から毛脛を出したのや、いづれも知らぬ顔の青年が連れ立つて歩いて來るのに逢つた。そんな青年は構内のどこにもゐた。塔の上に出て、淡色の靄につつまれた品川の海を見おろしてゐる連中もあつた。それらは大抵遠方からの來集者である。彼等は最初から神聖なコケットのやうな東京の横顔に惹かれてゐる。彼女の長いスカアトの下にそつと闇の花や棟割長屋が隱されてゐることは、問題ではなかつた。それは見ないで置くことさへ出來た。

春樹は舍監から割り當てられた部屋に荷物をおろし、ここでまた汗を拭いた。やつと肌が乾いた頃、今着いたと言つて、戸川明三がやつて來た。いつもなら長い休暇の間ぢゆう學校から離れて別々になつてゐなければならない友人としばらく一緒に暮せることも、春樹にとつては喜びだつた。

「馬場君は來ないだらうか？」春樹はもう一人の友人の事を言ひ出した。

「馬場君は來るつていふ話がなかつた。」

明三は靜かな口調で言つたが、そのあとから幾分感情をこめて附け足した。「來るといいんだがね。逢ふ度にあいつは何か新しいものを讀んでる。國文學の研究も、あそこまで行くと相當なものだね。傳説や民俗の美しさを知つてるのは、ああいふ人だと思ふな。」

講演が始まるのは翌日からだつた。

一夜明けると、春樹は明三と腕を組み合せ、裾短な袴の襞をはためかせながら寄宿舎の出入口の段段を下りて行つた。運動場は碁盤目形のまつ直ぐな道で草地と仕切つてあつて、こちらの一角に第一期卒業生の記念樹があり、あちらの一角に、第二期、第三期の卒業生の記念樹が植ゑられてゐた。幾何學的な意匠の美しさが、そこにあつた。小使が振り鳴らす鈴(ベル)の音を朝の冴えた鼓膜に樂しみながら、二人はサンダム館の玄關(ポォチ)にさしかかつた。すると、あとから大股にハリス教授が追ひついて來た。

「島崎さん!」

教授は薄鼠色のズボンに差し入れてゐた手を拔いて愛想よく呼びかけた。「よく來ましたね。わたし、嬉しいです。」

春樹はにつこり頷いてみせながら、教授の聲にはうきうきしたひびきがあると思つた。今度の運動はその意圖からいへば非常に眞面目なものなのだが、東京では初めての試みだけに、何だかお祭めいた雰圍氣が醸し出され、その雰圍氣の中にこの壯年教授も手ぶらでひつぱり込まれてゐるのだ。

「戸川さんも、よく來ましたね。」

ハリス教授の顏は少年のやうな無邪氣さで耀いてゐた。だが、春樹はふとその手に鍵を見つけた。鍵の細長い胴が放つ銀灰色の光には、皮膚を打つやうな辛(から)さがあつた。それが一つの聯想を呼び起した。生徒の一人々々の頭腦に合ふ銀の鍵を見つけて、そこからすばらしく獨特(ユニック)なものを引き出し、そ

れで彼等の一生を飾つてやらうと根氣よく努力してゐるのがハリス教授だ。教授のかうした仕事は、神の仕事ではあるまいか。

毎日、豫定のプログラムは規則正しく進められた。かういふ場合、時間の進行はそれ自體一種の鞭であり、暑さにだらけがちな、時には色情的にもなりかねない若い肉體にとつては、鞭の快さ、愉しさといふものもあり得るわけである。

ところで、或る日の午後の事だつた。

「戸川君、あそこにゐようぢやないか。」

春樹は友人を誘つて、二階の廊下の壁の側へ行つた。休憩時間だつた。折れ曲つた廊下の突き當りに春樹たちが六月まで授業を受けた三年級の教室があり、その邊まで壁に沿うて立つ人が續いてゐた。あちらでもこちらでも扇をつかつてわづかな凉を求めてゐた。春樹は友人とわざと扇子を換へつこし、それで蒸し暑くべとつく頸筋を煽いでみたりした。多少羞恥の伴つたこんな厭味たらしい行爲も、底を割つてみれば、次の講演を待つ愉しさにほかならなかつた。仙臺から、京都から、神戸から夏期學校へやつて來た人々の心持はそれぞれ違つた陰影(ニユアンス)をおびてゐるであらう。それを控へ目にくらべ合つて、頷いたり、はらはらしたり、大袈裟な驚き方をしてみせたりするのも、かういふ性質の集會に於いてでなければ見られない圖だ。中には、手眞似から聲の上げ下げまで外國の宣教師にかぶれ、それが幾分滑稽な感じのまま身についたお爺さんもゐる。お爺さんの話し相手は孫とも見られさうな

方言のちがふ青年だつた。

春樹たちは少しのぼせて來た。

四

やがて再び階下の玄關（ポォチ）の方から空氣をふるはして鈴の音が傳つて來た。それを合圖に人々は席に就き、校庭に出て樹蔭の凉風に吹かれてゐた聽講者たちもどやどやと階段をのぼつて來た。一しきり續く人の流れの中に征服的なくらゐ圖拔けた、沈着な、いかにも學者らしい人が、流れに食ひ込めないで壁際に立ちつくしてゐる春樹たちの前を通つた。

「あれが元良勇次郎だよ。」

明三が低聲で言つた。明三の緣つづきで、いま東京大學の文科で心理學の講座を擔當してゐるこの俊秀な學者の後姿を、春樹は眼を輝かして見送つた。キリスト教界にはあゝいふ人もあるかと驚いたのである。それでゐて、快く顫へる心に全身の重みを託して倒れかかるやうに依りすがつてゆけないのは、なぜであらうか？

續いて、『舊約聖書』の邦譯にたづさはつた米國長老派の宣教師で、日本語に精通した白髮の神學博士タムソンや、「詩篇」「雅歌」などの邦譯に貢献し、高踏的な評論雜誌『日本評論』を主宰し、一番町教會の牧師をするかたはら明治學院神學部に教鞭を取つてゐる植村正久や、今度の夏期學校の校長

で、見るから激越な氣象を示した、東北學院の總長押川方義が通つた。
更に、一方を舊約時代のイザヤに擬する者があれば一方をエレミヤに擬する者がある、聲望から經歷から相對立した、どちらも關西の組合敎會に屬する宮川經輝と澤山保羅、二年前に完成された『新選讃美歌集』の編纂委員の一人で、長い白髯を垂らした老牧師奥野昌綱、青山學院の總長本田庸一、春樹たちが生れる前後からこの國に渡來して、はげしい迫害を蒙りながらやつとここまで福音の殿堂を築きあげて來た各派の宣敎師たち、三年前から雜誌『國民の友』を刊行し、今年の紀元節の當日『國民新聞』を創刊して、若いインテリゲンチャの人氣を一身にあつめてゐる平民主義者德富蘇峰などの通過もそれぞれ印象的だつた。
だが、この時間の講演を受け持つ文學士大西操山の姿がまだ見られなかつた。文明批評に先鞭をつけ、進步的な立場から批評といふものの意味を一段と高めたこの少壯な學者の講演こそ、春樹たちが心から待ち設けてゐたものである。
「どうしたんだらう?」
心配してゐるところへ、廣い額に艶やかな髮を撫でつけ、胸を反らし、鋭い眼をした大西操山が、流れつづく人をかき分けるやうにしてやつて來た。
「ああ、操山だ。」
春樹は思はずロ走つた。うん、操山だ、と明三も眼を輝かせて言ひ、彈みで友人の手を掴んだ。春

樹はそれをきゆうと握り返し、相手の胸倉にかぢりつきたさうにした。
だが、急に春樹の顔には狼狽の色がたぎつて來た。操山のあとに、だらりと浴衣の袖を垂らした女學生が列をつくつて續いてゐるのを素速く眸の底にすくひ入れたのである。山岸敏子が教へてゐる女學校の連中であることは、白くて欲望的な、一樣に英語と野菜のソップの好きらしい顏の表情ですぐに知れた。
反射的に明三もぎごちなくとり澄ましてしまつた。それが春樹にはわけもなく賴もしく感じられ、無意識にその固い擬態を眞似た。眼の隅には今はほつとしたものが滲み出してゐた。一行の中に敏子はゐなかつたのである。
女學生のあとから二人は講堂に入つた。講堂の左右には、長方形の窓が幾つも並んでゐた。それが思ひきり開け放され、ときどき生暖かい南風が蒸された靑草のいきれを運んで來た。春樹はもう一度汗を拭いた。明三も同じやうに腰の手拭をはづして額に押し當てた。生地を染め拔いた藍の色が滲れてほんのりと匂ひ、横合ひからそれを春樹はつくづく眺めて、いい色だなと思つた。
やがてあちらでもこちらでも愉しく紙をひろげる音がしだした。大西操山の講演にかぎり、その內容の梗概を記した印刷物が聽講者の一人々々に配布されたのである。かういふ講演には感銘の期待が一しほ强かつた。
「ギリシャ道德よりキリスト教道德に入るの變遷——いい題目ぢやないか。」

明三が、兩眼を吸ひつけてゐた印刷物を下に置いて低聲で言つた。春樹はこくりと顎を落して頷いた。だが、そのあとで、それなら自分はもう一度正式のクリスチャンになつてあらゆる行爲を固い範疇の枠に嵌めようとしてゐるのかといふ疑問が起つた。そしてこの疑問が、これから聞かうとしてゐる講演、あれほど期待をかけてゐた講演に對して、却つて批判的な態度をとらせた。

聽講者の盛んな拍手を浴びながら、學士は正面の講壇にあらはれ、自分の得意とする文明史の立場から、絢爛なギリシャ道徳が衰へて、その廢墟にキリスト教道徳が美しく花咲き出た所以を實證的に說きはじめた。彼が適度に胸を反らしてゐるのは、少壯學者らしい矜恃に支へられてゐるからばかりではない。この時代の代表的禮服であるフロックコオトの折り目が、ときどき快く皮膚を刺戟するせゐでもあつた。だが、夏の禮裝の暑苦しさといつたらなく、どうかすると彼は構へを崩して、ズボンのかくしからハンカチを取り出した。彼の肉聲は、なごやかで、清々しく、しかも力があつた。春樹は胸をかき廻されて紅くなつたり蒼くなつたりした。時にはぢつと聽き入るだけで、無造作に、擬裝的な批判の構へを棄てた。

五

夏期學校は三週間續き、最終の日には講師の慰勞を兼ねて一同の懇親會が催された。會場は學校から適度の距離にある御殿山だつた。

る。

「いよいよお別れだね。」

春樹は明三と連れ立つて會場の方へ道をとりながら言つた。二人は淡い哀愁に捉へられ、甘酸つぱく齒をうかせてゐた。三週間は短かつたが、その間に二人の仲は一層かたく結びついて來たのである。

御殿山は當時は市民が塗りのいい重箱を提げて來る日歸りの遊園地だつた。櫻の樹が深々と打ち重なるやうに茂り、その紅い滑かな幹と幹との間を歩いて行くと、更に奥に幽邃な木立があつた。誰に憚るところもなく讃美歌を口吟んで、百合の美しさや嬰兒の聰さを教へたキリストを頌へながら、豹の斑のやうに降る光線の中を靜かに逍遙してゐる人の姿が到る所に見られた。

春樹たちは山を一廻りして、休み茶屋に戻つて來た。懇親會はそこで開かれるのだ。長方形の腰掛には赤い毛氈の褪色したのが敷いてあり、二人はその上に腰をおろして愉しい雜談に耽つた。あたりはもう人で立て込み、ゆり動かされる日蔭の空氣が群青の波を描いてゐた。

そこへ幹事が折詰の海苔卷を配つて來た。春樹は早速ぱくついた。海苔の纖維が上唇の隅にくつついて一筋黑血を垂らしたみたいだつたが、それに氣づかうともしないで、

「戸川君、君は二葉亭の『あひびき』を讀んだかね？」と訊いた。

「ああ、讀んだ。」明三も二つ目か三つ目をつまみながら言つた。

森鷗外等譯の『玉を懷いて罪あり』や森田思軒譯の『月珠』などと相前後して『國民の友』に發表

されたのが、長谷川二葉亭譯の『あひびき』である。これはツルゲエネフの『獵人日記』の一節だつた。

「艶麗の中にどこか寂しい所のあるのが、ツルゲエネフの詩想である。そして其の當然の結果として、彼の小説には全體に其の氣が行き渡つてゐるのだから、これを飜譯するには、其の心持を失はないやうに、常に其の人になつて書いて行かぬと、往々にして文調にそぐはなくなる。此の際に在つては、徒らにコンマやピリオド、又は其の他の形にばかり拘泥してゐてはいけない。先づ根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに飜譯するやうにしなければならぬ。」

二葉亭が明治三十九年十月に雜誌『成功』に發表した感想文「余が飜譯の標準」の一節である。かうした理解と努力の產物であつたとはいへ、日本の言葉でどうしてあゝいふ柔かい細かな言ひ廻しが出來たらうと、二人は驚きと感動を新たにした。どちらも先づ、肉感的な題名に惹かれて讀んだのだが、讀んだあとでは、生の情熱よりも言葉の美に、素材よりも緻密な表現に魅せられてゐた。だが、二人ともまだ文學で身を立てようなどと大それた決心をしてはゐなかつた。鑑賞の目は亂れがちであり、かうして讀後の感想を話し合つてゐる間にも、地面に落ちた樹の葉の影が突然眞紅な唇の形になつて見えたりした。

キリスト教主義の懇親會のこととて、萬事、山の靜けさ、涼しさにふさはしい規律をもつて運ばれた。一同の讃美歌の合唱、幹事の告別の言葉にも一定の線を踏み越えない節度があつた。最後に或る

宣教師の別れの祈禱がある時には、春樹も明三もつつましく物の蔭に跪いた。日光の直射を受けない濕つた土の感觸が快く體熱をしづめてゐた。それが、ここへ來てからもうかなり長い時間が經つてゐることを思はせた。

春樹は山を離れる前にもう一度そこらを歩き廻つた。鬱々と苦しく胸の塞がつた日には、山の端から なだらかな傾斜を下りて、目黒の方まで歩いて行つたものである。吹矢をこしらへてこつそり寄宿舍を拔け出し、ここらの谷から谷へと小鳥を追つて歩いたこともある。幸福から遠い、寂しい日の回想には、刺戟の鈍い、妙に暗鬱な美しさがあつた。

もう空の色が變りかけてゐた。春樹は、山の緣に立つた。と、一瞬前までは豫期してもゐなかつた美しい莊嚴なものが眼の前に展けた。夕日が、眞紅な炎の圓を描きながら悠々と平野のかなたに落ちてゆくのだ。淡い雲が一刷光圓のまん中を横になすつてゐる。それが消えたと見ると、彼は一聲ううんと呻き、あたふたと明三のゐる所へ走つて行つた。

「君、夕日が！　夕日が！」

彼は友人を引き立て、二人でまた山の突端へ戻つた。空の色は一段と深まつてゐた。光圓から少し離れた所に棚引いてゐる濃い雲は、胴體を紫色にぱつと劈かれてゐた。春樹は今はもううんともすんとも言葉を發することが出來なかつた。九歳まで田舍にゐて朝夕親しんだ自然の美は、建物の向う側の壁に搖曳する非現實的な幻のやうな印象しか殘してゐない。東京に住むやうになつてからは、人工

的な市街美に憑かれてしまひ、草雙紙や、繪看板や、青い瓦斯燈や、活字などのほかに心をひくものがあらうとも考へてゐなかつた。今まで知らずにゐた世界を發見した驚きと悦びに、彼はわなわなと顫へだした。それにくらべると、講堂でつめ込まれた堆い言葉は、理智の小細工でやつと支へられた姦しい饒舌に過ぎなかつた。

明三も眸を耀かせ、背後から迫る薄闇を逐ひ斥けるやうにして全身に華やかな射光を浴びてゐた。

假面の悲哀

一

「もう、お前さんも子供ではないから、三度々々お茶受けは出しませんよ。」

濱町の家に歸ると、おばあさんがさう言ひながら水天宮のお供へのお下りを分けてくれた。春樹はお辭儀をして玄關部屋へ引き下つた。

夕日の感傷が薄らいだあとの胸には、やはり、夏期學校で受けた刺戟がむくむくと頭をもたげてゐた。どうかすると、最も感銘の深かつた、高い知性と感情を裏づけた言葉が頭の中で跳ねかへり、講堂を埋めてゐた顏、顏、顏の影像が花のやうに犇めいた。後味の惡くない追想である。

だが、一方では、今まで微塵も豫期してゐなかつた新しい決心が固められ、それが、じいんと體の芯を鳴りひびかしてゐた。過去の衣裳をかなぐり棄てて、自分自身の眞の道を探求しようといふのだ。

彼の本箱の中には、あの三册の飜譯原稿が寄宿舍から持つて歸つて藏つてあつた。そんなものへの頑な執着は、何に喩ふべきであらうか？　ほのぼのとして、花ざかりの並樹道が雲の向うまで續いてゐるのに、それを歩まうともしないで、黴臭い寢室に閉ぢこもつてゐたのが彼なのだ。手習ひの帳面みたいなものをこんなに大事がつて毎日取り出しては眺めてゐる者がどこにある？　葬れ、葬れ――忘れ去りたい陰慘な過去の記憶と共に。

悲壯な感動に驅られて、彼はふらふらと立ちあがり、茶の間へ行つた。そこには熊の皮が敷いてあつた。小父さんの自慢のもので、猛獸の生體からそのままばりばり剝ぎ取つて來たやうな凄い顏と鋭い爪がついてゐた。彼はその上にごろりと仰向きに體を投げ出した。

「まあ春樹さん、そんなところに寢て――」

纖い頸筋の汗を拭きながら偶然入つて來た小母さんが呆れ返つた。春樹は跳ね起きてきまり悪さうに頭を搔き搔き、再び玄關部屋へひつこんだ。彼はそのとき思つたのである。――さうだ、自分もあの熊のやうにすつぽり殼を脫げばいいのだ。

彼は三册の草稿をかかへて裏の空地へ出た。彼は、花畑から少し離れて蹲み込み、草稿の綴糸を惜し氣もなく切り放つた。そして五六枚揉みくちやにしたのを地べたに置いて火を點け、その上にあと

から一枚づつ載せて行つた。めらめらと立ちのぼる眞紅な焔の舌端が、ふと、ペンテコステの日にあの敬虔な使徒たちの上に降つて來たといふ聖靈の火を思ひ出させた。彼は覺えず頭に手をやつた。それから空を見上げた。空はしかし、暑さうなぼんやりした色に晴れあがつて、何の異變もなかつた。
「ええい、一緒に燒いちまへ。」
彼は焦立たしさうにまだ半分以上も殘つてゐる草稿を一まとめにして火にかけた。焔はどつと高まり、宙を亂舞した。焔の芯から迸り出る、勇ましい、聖靈の囁きよりももつと暗示的な聲――耳にでなく、心の層のずつと奥に彼はそれを聞いたのである。だが、あべこべに神經は怯えてしまひ、彼は側に用意してゐた草箒であわてて火をたたき消した。燃えさしの紙片はひらひらと苺の植ゑてある方へまで飛んで行つた。彼の額にはべつとりと血糊のやうな汗がながれてゐた。それを拭き取つてから、彼は四方へ飛び散つた紙片をかき集め、初めからやり直さうと、もう一度マッチを擦つた。
「春樹さん、お前さんはそこで何をしてるんだえ？」
ふと、おばあさんが木戸口から怪訝さうに顏を出して言つた。
「いえ、何でもないんです。少しばかり、書いたものを燒いちまはうと思つて――」
「御覽な。御近所では何だかキナ臭いなんて言つてるぢやありませんか。」
やり込められて辛さうに春樹は默り込んだ。おばあさんはしやんと腰を伸ばし家の中へ引き返したが、と思ふと今度は水を入れた手桶を提げて來た。春樹はばつの惡い思ひでそれを木戸口のところで

受け取つて一氣に火の上にかたむけた。灰も燃え殘りの紙も一緒くたにまつ黑な泥のやうになつた。もうそこにはポオプも何もなかつた。彼は急に侘しくなつた。だが、それは幻滅でもなければ、どす黑い翼をひろげて上からのしかかる虛無感でもなかつた。生れて初めて抱いたすばらしく香の高い希求が、半ば充たされたきりで强引にへしつぶされた哀しみでそれはあつたのである。

黃ばんだ煙はまだ一團となつて高く夏の空にさまよつてゐた。それが狹い町中に起した脅威は、腹立たしいほど常識的だつた。

彼は手桶を提げてすごすごと臺所へ戾つて來た。その足音を聞きつけて、奧座敷の方から姿は見せないでおばあさんが聲をかけた。

「屑屋に賣つたつていいぢやないか。なにもそんなに書いたものを燒かなくたつて。」

唯物的とまではゆかないが、それに近い信念で張りきつてゐるおばあさんの、咽喉の奧からきんきん鳴らすやうな言ひ分である。彼はただ悄然と頭を垂れて、彼女が更に言葉を繼ぐのを待つた。

「お前さんがまた、そんな巧みのある人なら、自家(うち)なぞにゐてもらふことは御免を蒙りませうよ。」

おばあさんは持ち前の精悍な氣象を丸出しにして食ひさがつて來た。間は壁である。ぺろツと舌を出して自己卑下の快感を貪つても見拔かれる氣づかひはないのだが、そんな眞似の出來ないのが春樹の性格だつた。と云つて、內にたぎる感情のまま肩肘を張つて突つかかつてゆくことも彼には出來なかつた。

二

内部から外部へ向つてぐいぐい鎌首をもちあげる若い生命の芽は、現實のきびしさに敵しかねた。抑へつけられた反抗心から、春樹は一種の假面をかむることを憶えた。いや、これは今に始まつたことではない。小父さんの家がまだ銀座にあつた頃、田舍から出て來たばかりの彼は、木登りが戀しくて、玄關部屋からすぐ續いた土藏の二階へ、階段を逆さに辿つてのぼつて行くことを發明した。こんな危險な遊戯が出來たのは、階段が二段構へになつてゐたからでもある。だが、この遊戯には嘘が含まれてゐた。或る日も一心にそれをやつてゐて、ふと氣づくと、上から小父さんが笑ひ笑ひ見物してゐる。手足の太い、脊椎の丈夫な少年は、眞紅になつた。

だが、その後も嘘から拔け出せず、今では苛烈な現實そのものが彼の顏を嘘で固めさせようとしてゐるのだつた。

八月も末になつた或る日、春樹は例のやうにせつせと庭を掃いてゐた。枯葉一つ落ちてゐても氣になる性質は、草箒の使ひ方にもよくあらはれてゐた。しかしふと、自分の庭でもないのにと思ひ、地面も樹々の葉も急にわびしく色褪せて來るのを覺えながら彼は腰を伸ばした。

そこへ、めづらしく戸川明三が汗を拭き拭き訪ねて來た。春樹は救はれたと思つた。

「いま忙しいんぢやないか？」

明三は遠慮するやうに言つた。それを春樹は打ち消して明三を庭に引き入れ、茶の間のすぐ外の濡れ縁に二人並んで腰かけた。話の途切れ間にも春樹の顔ははればれと耀いてゐた。相手が相手で、嘘の假面をつける必要がなかつたからである。

「春樹さん、何だねえ、お友達ならお上げ申すがいいぢやないか。」

おばあさんが奥の間から出て來て言つた。こんな時には、叱られたのが却つて嬉しく、春樹は先に立つて茶の間に上つた。明三は熊の毛皮を見て凄いねと言ひ、ここでまた汗を拭いた。

「戸川君、これはまだ君に見せなかつたつけね。」

春樹はちよつと玄關の間にひつこんで、外國の、青い布表紙の本を持ち出して來た。明三ははつとしながら手に受け取り、まづ表紙を打ち返して眺めた。それはワアヅワスの詩集で、二枚ばかり銅版の挿繪も入れてあつた。明三の眸は燃え、分厚な本の重みを支へた指は一本々々乳色のうぶ毛を立ててかすかに顫へだした。その側から春樹も肩を寄せて眺め入り、幾度くりかへしても飽かぬ感動を新たに呼び醒ましながら言つたのである。

「佳い繪だらう。こんなのは、日本人にはちよつと描けないね。」

「どこにあつたの、かういふ本が？」明三は急き込んで訊いた。

「銀座の十字屋に出てゐたのさ。これは君、僕が初めて買つた西洋の詩集だよ。」

當時、ＳＳＳ（新聲社）と云つて、文學雜誌の發刊を企てて結ばれた結社があつた。この結社に對

して、『國民の友』の主宰者德富蘇峰が原稿が欲しいと申し入れた。喜びに驅られて、同人の森鷗外、井上通泰、落合直文、等々が一つ部屋でまづ夜を徹して『萬葉集』を讀み、その刺戟に乘つて一氣に筆を走らせた。

かうして原稿は出來上り、それが堂々と『國民の友』の夏期附錄として刊行されたのは、前の年の八月のことである。これは、セェクスピア、バイロン、レナウ、ギョエテ、シェッフェル、ハイネ、ゲロック、ケルネル、ホフマン、フエルランド、ヱルマン、ハウフなどの詩を譯したもので、『於母影』と題され、どのペエジにも原詩の香氣が底から滲み出してゐた。第一、形式が新しかつた。時に古風な雅語が眼につかないでもなかつたが、そんな雅語の裏にも淸新な異國情調がにほやかに張りついてゐた。

明治十五年の初夏、東京大學文學部長外山正一、文學士井上哲次郎等譯の『新體詩抄』が、日本橋通り三丁目、丸家善七の手で刊行されて、古拙ながら新しい詩の第一歩が踏み出されてからといふもの、しばらくスランプの狀態が續いてゐた。湯淺半月の『十二の石塚』(明治十八年十月、上州安中驛刊)や、落合直文の「孝女白菊の歌」などがわづかに新しい感情の蠢きを見せてゐたに過ぎなかつた。そこへ光輝ある譯詩薈『於母影』が突然投げ込まれたのである。

燦然として、高い香氣と調べに鳴りひびく近代詩の室房――荒燥蕪雜な靑年の多くが思ひを淨めてそこへ飛び込んで行つた、と云つてしまつては事があまり簡單すぎるであらう。この譯詩集の出現に

よつてさへ、明治になつて起つた新しい詩の運動は社會的にはわづか一步押し進め得たに過ぎず、譯詩を讀むだけで滿足しないで更に原詩の匂ひを少しでも嗅がうとしてゐる者は、まだまだごく少數だつた。春樹は、その少數者の中の一人だつたのである。

戸川明三は小一時間話して歸つて行つた。あとには果てきらぬ饗宴のやうに友人の殘した明るい聲の餘韻が漂ひ、それを鼻でなく頭の芯で趁ひながら再び家の用事に力をそそいでゐるうちに、夕方になつた。春樹は玄關部屋にひつこんだ。彼の心の層の一番奧には、多少幻想的な感じでひつそりと虹の弧が描かれてゐた。少年のとき天に眺めて胸を躍らせ、大人になり、更に老人になつても同じ童心に生きてぞくぞくと感激したいと歌つたあのワアヅワスの虹である。

浪漫的な、と同時に宗教的なワアヅワスの詩に打たれるお前は、それではクリスチャンかと訊かれたら、彼はもちろん二年前高輪教會で洗禮を受けた頃と同じ自分だとは答へられなかつた。日曜日每に會堂へ行つて說教を聞き、讃美歌を歌はなければ、過程を充たすことが出來ないと考へるやうな形式主義からはまつたく身をかはしてゐた。ではお前は神を信じないか、と更に突ッ込んで訊かれたら、自分は幼稚ながらも神を求めてゐる者の一人だと答へたいのである。間違つて洗禮を受けたが、もし本當に信仰生活を營むならこれからだ、と言ひたいのである。

夏期學校で接觸したいろいろの名高い先輩から、彼は新しく宗教的な氣分を引き出されてゐた。彼はどうかすると、この世を果敢んで詩も花花もない陰氣な隱遁の部屋に身を隱さうとするやうな衝動

を感じた。

ふと、讃美歌の文句が唇にのぼつて來た。

ゆふぐれしづかに

いのりせんとて

世のわづらひより

しばしのがる

彼は寂しい祈の氣分に浸らうとして疊の上に跪いた。泪が頰を傳つて流れた。それに洗ひ淨められたやうに、ワアヅワスの虹はいよいよ華やかに輝くのだつた。

三

九月十五日から、新しい學年が始まつた。第四學年の教室へ移された生徒の中には、三年間ずつと一緒にやつて來た者以外に、途中から加はつた者も多い。彼等は、最近流行しだした軸の黃色い鉛筆を舐め舐めして、新しい時間表を寫し取り、買ひたての教科書の刺戟的なにほひを嗅いでぞくぞくした。その中には初步のラテン語教程もあつた。寄宿舍の部屋々々は、一夏ぢゆう溜めた話を持ち寄つてどぎつく興奮した者らの、發散的な、高らかな聲で鳴りわたつた。舍監が見廻りに來るとあわてて寢た振りをする狡い生徒も、その靴の音が廊下に遠く消える頃にはまた起き出して隣の部屋へ押しか

けた。ラテン語の感覺は御殿女中のみだらなくせにひやりと冷い肌を思はせるね、と得意さうに言つてみせるのは、九州あたりから來てゐる男だつた。

才氣は漲つてゐてもエロチックな匂ひの高いこんな洒落を小耳に挾むと、春樹は厭な氣がした。戸川明三と親密な交際をつづけて一枚づつ樺色の磚(かはら)を積み重ねてゆくやうな愉しさを味ふことが出來てゐるのも、一つは明三がエロチシズム以上のものですつきりと鮮かに身をかためてゐるからだつた。二人は女の話をしなかつた。

「白ばくれるない。」

意地惡な生徒の中には、春樹とすれちがひざまさう言つて嘲る者もあつた。だが、嘘の假面をかむることを憶え込んでゐる春樹は、腹も立てずによけい馬鹿げた顔をしてみせた。

「狂人の眞似をする者はやはり狂人だ。馬鹿の眞似をする者はやはり一種の馬鹿だ。」

誰かが浴びせかけた、惡辣だが眞を穿つたこんな言葉が、却つて彼を喜ばせた。彼は痴人の模倣に心をくだいた。顔はいふまでもなく、手足にも胴體にもあくどい原色で迷彩を施し、それでまんまと敵を欺かうとするやうな不自然極まる努力である。

講堂で催される朝々の禮拜式のときも、彼はぽかんと放心狀態になつて、半ば死んだやうに、何とも生彩のない顔をしてゐた。それを一番先に見てとつたのは、ハリス教授である。だが、この善良で親切な教授も春樹に對しては今は忠告することさへ斷念してゐた。だから、日課も放擲するにまかせ

た。ただ時々、教壇の上に伸びあがつて春樹の姿を捜し、今日も出席してゐないと知ると、急にがつかりして、惜しい男だ、せつかく持つて生れた才能を無茶苦茶にする、と呟くのだつた。

教會へは、一頃とくらべると春樹はよく足を運んだ。だが、ここでも苦しい思ひを怺へ怺へ假面をかむつてゐた。例のやり口で正面の教壇に逆さに足から上つて行つたら、といふ考へがふと閃く。この考へももちろん噓から出來てゐる。彼はそれをよく知つてゐながらも、不思議な快感を覺えて身を顫はせた。

「まあ、島崎さんはどうなすつたの？」「ほんとに島崎さんも變りなすつたのね。」などと女學生たちは顔をよせて囁き合つた。それは聞きづらく彼自身の耳にも傳つて來た。しかし彼はぢつと耐へ、ますます呆けてみせた。彼女たちは袖で顔を蔽ひ、くつくつ笑ふ。呆けた男の大きな紅い耳朶にひかれて不用意に洩らす初々しい情慾の匂ひが、そこにあつた。春樹は咽せた。それでも彼は決して本心を取戻さうとはしないのである。

どうしたのか、その頃山岸敏子は一向教會に姿を見せなかつた。春樹はそれをむしろ喜んでゐた。彼は彼女をもつと強く忘れたかつた。

或る日の午後、春樹は前の年から寄宿舍生活をしてゐる馬場勝彌の部屋の前に行つて、こつこつと扉をたたいた。

「入りたまへ。」

勝彌の氣さくな聲につづいて、「カムイン！」と英語で言つてみせる者もあつた。

扉をあけて入ると、これから築地まで歸らうとしてゐる明三のほかに、同級の寄宿生も二人ゐて、あみだの菓子を頰張つてゐる最中だつた。

椅子が足りないので、明三は濃いペンキで木目に似せて塗つた窓枠の內側のところへ腰かけた。

「島崎君、君に見せようと思つて、かういふものを持つて來たよ。」

明三は風呂敷包を解いて、黑ずんだ表紙の分厚な洋書を一冊取り出した。

「買つたね。」

春樹は濃やかな微笑を湛へながら、ちよつと本を手に取つてみた。それはダンテの『神曲』の英譯だつた。

「まだ讀んでみないんだが、ちよつとのぞいたばかりでも、古典らしい匂ひがするね。」と明三は秀れた濃い眉を輝かせて言つた。「多分、君が買つたのと同じだらう。」

「表紙の色が違ふだけだ。」春樹は心から友人の喜びを頒つて言つた。

書物は春樹から今度は勝彌の手に渡された。他の二人もその上に顏をよせた。

彼等にとつては、書物だけに物語があるかのやうだつた。そしてこの物語は、繪の中の小さな美しい町のやうに、遠くに眺めて置くのが一番よかつた。それを現實のただ中に近づけてわが身を燒くやうな眞似は、心をしづめて警戒しなければならなかつた。この警戒線を侵す者は立ちどころに身にあ

まる重い罰を受ける。その一人が自分だつたのではあるまいかと考へて、春樹はひそかに身をふるはせた。おしまひには泪にまみれて泣きじやくりたくなつたが、やつと怺へた。

スコットランドの空

一

馬場勝彌の部屋は何となく魂の滋養分になるやうなあたたかい空氣に充ちてゐた。春樹は彼の部屋を訪ねる度にそれに打たれてしつとりと胸の內が和んで來るのを覺えた。友人の讀む本は彼も讀み、彼の讀む本は友人も讀んだ。向ひ合つて言葉をかはしてゐると、互の黑く澄みとほつた眸が火花をちらして一種の磁氣作用でもするらしく、次から次へと心の奧のものを引き出され、ほろ甘い醉ひ心地になる。おしやべりといふものはどうしてかう愉しいのだらうと訝り、時には、よくあんな事まで言へたとあとで氣づいてびつくりすることさへあつたが、不思議に悔いは感じないのである。

春樹は窓に近く造りつけた書架の前へ行つて、何氣なく勝彌の藏書を覗いた。すると、一方に西鶴の『一代女』があつた。

歐化主義への反動として國粹運動が起り、その波に乘つて、讀書界には、德川時代、殊に元祿期の

文藝作品を飜刻したものがどつと氾濫してゐた。湯島の聖堂裏に武藏屋といふ小さい本屋があり、そこから近松の飜刻が出たのが最初である。續いて西鶴の『五人女』『一代男』が出、更にどこか他の本屋から『一代女』が出た。原本は高價で『一代女』など五册くらゐになつてゐて五圓からし、五圓あれば當時の學生は一ヶ月の下宿料と小遣ひにあてることが出來たので、容易に買へなかつたが、飜刻ならいくらでも手に入れることが出來た。

勝彌の『一代女』ももちろん飜刻だつた。挿繪にあらはれた元祿風俗、殊に平元結をかけた髮の形や、圓みのある袖や、時代の空氣をそのまま象徴したやうな寬濶で優艶な姿態、それに加へて〇（まる）の多い煽情的な文章に惹かれて、春樹もいつか濱町の家の近くにある京常といふ小さな本屋で買つて來て讀んだことがあるのだが、讀んでゐるうちに、急に烈しい嫌惡に襲はれてむかむかした。彼はその場で『一代女』を引き裂いて捨てた。その話を勝彌にすると、勝彌は、惜しい事をしたもんだね、さう一途に固くならないでもいいぢやないかと笑つた。彼はそのとき心でそつと考へたのである。——これやうつかり女の話なぞすると、顏をしかめられさうだぞ。

これほど不愉快な用心をしなければ交き合へない男は、勝彌の身邊には二人となかつた。

いま、春樹はその時の事を回想して、自分の馬鹿げた性質を恥ぢた。彼の肉體は、それ自身の意識を具へた、責任に耐へ得る存在ではなかつた。それは矛盾に充ちてゐた。神聖な『舊約聖書』の中からなるべく猥褻な部分を拾つて讀み耽つた男も、ほかならぬ彼だつた。

春樹があの不思議な長い沈默から醒めたとき、勝彌は氣持のいいほど率直に、
「なぜ君はあんなに默つてゐたんだ？」
と訊いた。誰でも口にしさうな極めて常識的な質問だが、それをこの友人はいきなり高い垣を乘り越えて來てぶつ放してくれたのである。春樹はうれしくなり、
「僕は自分の言ふ事が氣に入らなくなつて來た。それで一時は誰にも口をきくまいと決心したんだが、さうすると獨語（ひとりごと）を言ふやうになつた。往來を步いてゐても何かぶつぶつ言つてるんだ。とても沈默を守るなんてことは出來ないね。」
春樹はきまり惡さうに言ひ、沈默の苦行中身にこたへて味つたあの不氣味な幻覺、暗い暗い闇の中にさつとあらはれたま白な鶴や、音のしない焰の機關車のことまで詳しく話した。詩人だね、君は、と勝彌はほめるやうに言つたが、さすがに背筋に喰ひ込む惡寒のやり場に困つた。
勝彌と春樹の間には體質の上にまで言葉で說明しつくされぬ不思議な相異があつた。一方が樹なら、一方は土だつた。
春樹は機械的にぱらぱらと『一代女』のペエジをめくりながら友人と話しつづけた。しかしふと晝の意識が春樹から遠のき、勝彌の左から分けた濃い髮の毛が白つぽくぼやけて來た。暗い過去の帶域に現在のそれがすぐ續き、そのけじめが暴力的に塗りつぶされた。これやいけないと彼は思ひ、必死に自分を取り返さうとしたが、無駄だつた。時間もなければ物の造型性もない世界が彼を捉へて放さ

ないのだ。太陽も月も空のはてにしぼんで、空一面、水のやうにただ碧いのである。

二

廣い運動場で野球の練習が始まつてゐた。春樹は戸川明三と一緒に廊下の欄干にもたれてゐた。運動場はそのすぐ下である。この年の六月に竣工した新しい圖書館の赤煉瓦の建物がはすかひに見渡された。乾菓子か何かいつぱいつめ込んで白いエプロンのポケットをふくらました女の兒の手を引きながらその側をゆつくり歩いてゐるのは、外國教授の夫人だつた。

ふと、あの女教師の名が不氣味なひびきをおびて春樹の耳に飛び込んで來た。しかも、いつの間にか側に來て立つてゐた一人の同級生の無慈悲な口から。――山岸敏子は、この學校の三年ばかり前の或る卒業生と婚約したといふのである。

「なんでも、杉森先生の奥さんの取持ちださうだ。」

ミッション・スクウルの中から始まつた、自由な男女交際や婚約（エンゲエジ）といふものに、一切反對したい語氣でその同級生は言つた。

杉森先生といふのは、この學校の教授の一人杉森此馬のことで、戸川明三が初めから二年級に入（はい）れるやうに取計つてくれたのもこの人だつたのである。その夫人は梅子といひ、明三の叔母横井玉子が幹事をしてゐる、築地四十二番館にある女子學院の出身だつた。

——しかし君、いいぢやないか、男と女が交際したつて。
と春樹は食つてかからうとしたが、疚しさが先に立つて片言さへ洩らすことが出來なかつた。彼の一番奥の心は、海扇のやうに圍ひを立てた中で苦しく息づいてゐた。
ああ、はかない戀。眞理と美の祕義を奥深く隱した密室のやうに、かたく扉を閉ざしたまま一度も開かずに終つた哀しい戀。その上にばたりと重い幕をおろして、二度と訪れて來ない青春の日を全く葬り去らせようとでもするやうに、斂子は今ここで最後の一瞥を投げ與へたのだ。
一本の棒にすぎないバット、球がさつと空間に描く鋭いが單調な白線、各プレイヤアの型通りの動作——毎日見せられる野球の練習はぢきに廊下の見物人を飽かせた。
春樹は友人を促して一緒に下へ降りた。彼は肉體の靜止に苦痛を感じだしてゐた。みんな動いてゐる。いや、すべてのものが靜止の擬態をつづけ、默禱し、甘い睡眠を貪つてゐるとしても、自分だけは飛び跳ねてゐたい、と彼は考へたのである。彼は急に元氣づいて、
「戸川君！」
と友人の側へ行つた。が、はつと自分の意圖に氣づくと、ちよつと照れて、わざとらしく口笛を吹いてみせた。
「何だい？　いやに人をじろじろ見るぢやないか。」明三はうろんさうに言つた。
「君、ボクシングでもして遊ばうか？」春樹は今度はにやにやして言つた。

「ボクシング？」
「なあに、突きつくらをやるのさ。二人で。」
「よし、やらう。」明三は急にきほひ立つて來た。「君なんかに負けてたまるもんか。」
明三はその場で兩方の肘をぐつとうしろへ引き、かたく拳を握りしめて身構へた。僕だつて負けるものか、胸板のうすい君なんか一突きさと春樹も必死になつた。
「いいか、君、突くぜ。」
明三は顔ぢゆうの筋肉を眞紅にして力んだ。が、力みすぎて眼から火が出、下瞼がぷくりと巴旦杏みたいにふくれあがつた。春樹は急にふき出して、
「笑はせるからいかんよ。」
「君が勝手に笑ふんだ。」
「だつて、ひどい顔をするんだもの。」
春樹は構へなほし、呼吸を測つて不意に突撃して行つた。しかし明三は怯まず、この野郎と泡を吹いて突き返して來た。
さうやつてしばらく二人は格鬪してゐたが、もうやめだ、といふ顔で春樹がひよんな時急に體の力を抜き、だらりと兩腕を垂らしてしまつた。
「まだ勝負がつかないぢやないか。」明三は不服さうに詰つた。

「もう御免だ。こんなに手が紅くなつちやつたもの。」
春樹は友人の前に手をさし出してみせた。指の短い不恰好なその手は、ねつとりと汗ばみ、うぶ毛の蔭に青くうねつた靜脈が激動のあとの苦しげな短い息づかひを刻んでゐた。その前に、明三の方でも無意識な競爭意識から兩手を突き出して、
「僕の手だつて……」
と口走るやうに言つた。これも節々が眞紅に凝つてゐた。二人は何かしら滿足だつた。
だが、明三が築地をさして歸らうと言ひ出した頃には、春樹はもうげつそりと沈んでゐた。
表門の側にある幾株かの櫻の若樹は、黑ずんだ青葉をいつぱいひろげて、ぱつと夕日の射光を浴びてゐた。彼はその下まで友人を見送つて行つた。
……なぜ神はこんな不思議な矛盾に充ちた世界を造つたのだらう？
ひとりになると、深い疑惑が起つて來た。――なぜ或るものを美しくし、或るものを醜くしたのだらう？　雀と鷹、羊と狼、蛙と蛇、鷄と鼬鼠――こんな險しい對立に何の意味があるのだ？　平和であるべき教會では、はげしい暗鬪がくりかへされ、富める長老と貧しい執事が爭つてゐる。それもをかしいではないか？
崖下の板圍ひの中では墓石たちが白い波を立てながら色とりどりの花を捧げてゐた。花の色と匂ひはかすかにこの世の生活の息と繫がつてゐるのだが、物質から成る墓石とその下に埋められた遺骨は

永遠に死を語つてゐるだけだ。それがどうして生と並び立つことが出來よう？

彼は神の力を疑ひ、叡智を疑ひ、更にその存在をさへ疑つた。本當の信仰生活をするならこれからだ、と考へたのはついこの間のことだつたのに、それを妨げようとするかのやうに兇暴なものが肚の底からどくどくと音を立てて湧きあふれて來るのである。

三

『聖書』には、姦淫するなかれ、處女を侵すなかれ、嫂を盜むなかれとあり、一切の不德はヱホバの神が禁ずるところである。その苛烈な鞭の前では、あの風狂兒バイロンの一生の如きはとても嘉納されるものとは思はれなかつた。

だが、春樹はさういふバイロンの詩をも貪り讀んで、その底に渦卷いてゐる不逞な精神と異教的な美にすつかり魅せられてゐた。彼の頭の中には『神曲』と『ドン・フアン』とが同居してゐた。

新しく構內に出來た赤煉瓦の建物は、一階が神學部の教室、二階が圖書館になつてゐた。一階から二階に通じる階段にはまだむつとペンキの臭ひがこもつてゐた。いくつも書架がならべられ、一段と高い所には書司もゐた。時には、歷史科の教授を兼ねたアメリカ人の館長が、見事に禿げあがつた頭を光らせながら見廻りに來る。一般の輿論が強く國粹論に傾きつつあるなかで、このキリスト教主義の學校だけ年毎に榮えてゆくのが、彼は得意なのだ。

「皆さん、今日は！」

閲覧所にちよつと顏を出して聲をかけることも、彼の一日のプログラムの中にきちんと組み込まれてゐた。

閲覧所は書架で圍はれ、その中に秩序よく小さな机がならべてあつた。窓の射光は適度の明るさを持つてゐた。

教室へ出るのを怠ける生徒の姿もここには見出された。天才か、遊びと勉强とをちやんぽんにしたやうな暢氣者か、そのどちらかに屬するこの一團の仲間入りをして、春樹が今度讀み出したのは、スコットランドの國民詩人ロバアト・バアンスの傳記だつた。これも“English Men of Letters”の中の一冊だつた。

明治座の秋の興行が始まつた頃の或る日、めづらしく濱町の小父さんから手紙が來た。急いで開いてみると、總見をするからお前も歸つて來い、とある。

その日、春樹は少し早めに寄宿舍を出た。

太陽が沈まない先から、芝居小屋の内部には薄紫の瓦斯燈が點つた。二階、三階の、開演中は黑布を引く明り障子にはほのかに空の色がなびいてゐた。

「春樹、あの向うが俺の領分だぜ。」

扉をあけて入つて來た小父さんが、柵木(ませぎ)で圍んだ座席(うづら)にみんなと膝を突き合せて坐りながら、正面

の舞臺と向ひ合せになつた高い棧敷を指してみせた。
春樹は、表情のない眼で、小父さんの指が宙に描いた線を辿つて行つたが、急にはつとした。そこらの一區劃には大勢の藝者もゐるのだ。やや幻怪的な感じでぴかぴか光る髮飾りの金絲銀絲。ま白な顏。思ひきり紅をなすつた、あくどい唇。春樹は覺えず視線をそらした。胸の中がむかむかしだしてそれ以上見てゐられなかつたのである。
小父さんは用事ありげにうづらを出て行つたかと思ふと、また歸つて來た。そこへ淺黄の股引を穿いた茶屋の若い者がやつて來た。
「どうぞ澤山御馳走してやつてください。」小父さんは春樹の方を顎でしやくつて言つた。
知らぬ間に黑雲が空を塗りつぶしたと見え、外はざんざん雨になつてゐた。
やがて雨は小降りになつた。酒や食べ物や脂粉のにほひに煙草の煙が加はつてむんむんする、華やかなといふよりもぼうとのぼせさうな雰圍氣の中へ、ときどき歔欷くやうなほそい雨の音が忍び込んで來る。春樹はそれを耳でなく、過敏になつた神經の尖端で捉へた。泪にまみれて顫へたくなるやうな寂しさである。前の人の肩と肩との間から見上げる絢爛な舞臺では、簾の中から起る深刻さうな淨瑠璃の聲に合せて、顏や手を白く塗りたくつた男と女とが、背と背をすり合せたり、婉曲に肩をねぢつて顏を見合せたり、そつと襦袢の袖を濡らしたりしてゐた。
「成駒屋ア！」

突然大向うから感に堪へた掛聲がかかつた。——成駒屋の歌右衛門はもちろん男の方であらう。さすがに藝が巧かつた。

春樹はしかし、びりツとも感情を動かさず、再び眼を膝の上に戻した。そこにはひそかにバアンスの傳記が開かれてゐた。スコットランドの若い百姓が澄みあがつた空に太いリズムを描いて鍬を振り上げ振りおろししてゐる様が、幻になつてちらついた。自然は、土は、それほど魅力に富んでゐる。そしてそこにこそ本當の物語があり、心にせまる美があるのだ。

「春樹、その膝のものは何だ？」

幕間に、端なく祕密を看破つた小父さんが、少し聲を荒らげて言つた。春樹はあわてた。

「ほ、本です。」

「本なら、いつでも讀めるぢやないか。」

春樹は、ぐうの音も出なかつた。

母

一

十月も終りになつた頃、大橋のすぐ近くに下宿して、傾きかけた家運を盛り返さうと、吉村忠道や針問屋の勝新の引立で實業界に乘り出してゐる長兄の民助から、母が上京したからちよつと歸れ、といふハガキが來た。

過去十年の間ほとんど一度も感情をかたむけて甘えてみる機會もなかつたひとの側で眼を醒ました朝の氣持——春樹の胸はしつとりと柔かく濡れてゐた。そこは二階座敷だつた。障子の嵌硝子には夜の間に洗ひ淨められて桔梗色の光をおびた深い空があつた。納豆賣りの呼び聲。本所か深川あたりの工場の汽笛。

「お母さん、もう少しお寢みになつたらどうです？」

一方の寢床の中から、民助が癖でこんこんと重い咳をしてから言つた。

「田舍者は、お前、たまに東京へ出て來ると、よく眠られないでな。」

川波の音も騒がしく枕に響いて來て、彼女は長い秋の夜をもてあましてゐたのである。

起き拔けの體をしやんと伸ばして母は欄干のある廊下へ出た。そして山の中から持つて來た習慣そのままに、輕く柏手を打つて、向ひ岸の屋根の上に昇つた眞紅な光圓を拜んだ。

春樹も續いて起きあがつた。

「太陽は、熱い熱い、赤や青の瓦斯から出來てゐます。それは神樣ではありません。」

眼の碧い一神教主義の教授が吐いた、きびしい、だがどこか童話的なをかしみのある言葉が、ふと

記憶の底から浮びあがつて來た。この國の土に深く根をおろしてゐる古い民俗的な祭祀(カルト)が、教授には氣に入らないのである。

だが、と春樹は考へた。だが、母には母の心の持ち方もあるであらう。多年深い谷間の空氣にさらされた彼女の頬に今も殘つてゐる、子供のとき見たままの艶々した紅みは、日光の色に通つてゐる。左の眼の上にある大きな黑子にも、ほのかな幻想味がある。

ただ、春樹がひそかに氣にしてゐるのは、母の今度の上京は何のためかといふことだつた。

黑の前垂掛をあて、むかし縣會議員を勤めたことがあるとも思はれないほどめつきり商人らしくなつた民助は、母を安心させようとでもするやうに、自分で長火鉢の前に坐り込んで朝茶をすすめながら言ふのだつた。

「お蔭で勝新の大將には信用されるやうになりましたし、濱の問屋へ行けば、いくらでも品物を渡してくれます。吉村とはほとんど兄弟のやうにして行つたり來たりしてゐます。」ここでちよつと例の咳をして、「私としては、ここまで漕ぎつけるだけでも、なかなか容易ぢやなかつたんです。」

「さうだらうともさ。」快活な質(たち)の母もしんみりした聲になつてゐた。

母と兄との間には、春樹などにはよく呑み込めない話も出た。しかしそれは、傾きかかつた家運を盛り返さうとして心をくだいてゐる兄のおびただしい借財のことにちがひなかつた。

東京も冷えるね、と言つて肩にひつかけた黑羅紗のとんびをぐつと頸まで引きよせながら、母は弟

息子の方へ向いた。

「何かお前にも持つて來てやりたいとは思つたが、それを用意する暇がなくてな。ほんとに今度は、どこへも內證の旅で――」

汽車にゆすぶられる間中、母は、肩にのしかかる暗い影の重さ、不氣味さにかすかな呻き聲をあげてゐたのである。

「だがね、春樹、いま織りかけた機があるから、そのうちに屆けるわい。」

あの古い大屋臺が、最後の一はづみで、どつと倒れてぺしやんこになつたら、一家の者はどうなるであらう。――影は、春樹の胸にも食ひ込んで來ようとする。母の言葉裏に張りついた勁い愛情が、わづかにそれを堰いてくれた。

少年期のかがやかしいが根のない夢が破れた日から、彼はほとんど自分一人に生きようとした。キリスト敎の敎會で洗禮を受けた時にも、それを母に告げ知らせようとはせず、母の乳房を啣へた甘やかな晝や夜があつたことさへ忘れ果ててゐた。母は母、自分は自分と決心して踏み出した孤獨の道は、それでは勇ましかつたかと云ふに、事實はあべこべだつた。それはただ寂しく暗かつた。もし春樹に少しでも少年らしい華やかな時期があつたとすれば、あのオルガン彈きの女にひそかな戀をよせた一年ばかりの月日がそれである。だが、この初戀は唇に近づけてさへならない毒杯だつた。彼の道はいよいよ暗くなつた。母の上京は、それに更に輪をかけようとしてゐるのである。

朝食をすませると、民助は、ちよつと勝新の大將のところまで言つて來ると言つて出かけた。兄の前では出來なかつた話を、母は低聲で春樹の耳に入れはじめた。
「なかなか鄕里の方もロうるさいぞい。」と彼女は言ふのである。「あんまり民助の留守が長くなるもんだから、みんなでいろんな事を言ふ。やれ島崎の姉さま（民助の妻）は可哀さうだの、兄さまは東京の方で女を圍つて置かつせるだの、勝手な事を言ひふらす。俺もだまつて聞いてはゐられんぢやないか。」
大きな屋臺が傾いてゆくのを、村の人々は手をたたいて喜んでゐるのである。
午後、母は濱町の家を訪ねた。春樹がそのお供をした。
もし母が學問のことのわかるひとであつたら、何よりもまづ見せたいと思ふ芭蕉の『一葉集』や西行の『山家集』が大事に藏つてある玄關部屋に春樹はすぐ閉ぢこもつたが、
「春樹！」
と奥座敷の方から筒拔けに聞えて來た小父さんの聲にはつとして立ちあがり、びくびくとその方へ出て行つた。床の間に活けた白菊の花が部屋の空氣を淸く沈ませてゐた。樹は、小母さんのほそい肩に倚りかかつて、田舍の女客の冴えない髮の形や皮の厚い唇に、ぢつと好奇心の漲つた眼をそそいでゐた。
「春樹さん、何だねえ。玄關の方なぞにひつこんでゐないで、ちつとはお母さんの側に坐つておゐで

な。」
おばあさんがずばりと言つた。彼女はその時春樹への愛情を十分出してみせたつもりなのだが、結果は客への示威で顔に自分でも氣づかぬ衣を着せてゐた。
「ほんとよ。お母さんの頸ッ玉へかぢりついてやればいいのよ。」
小母さんの方はおばあさんにくらべると氣持の表現も直截だつた。子に倚りかかられて、胸の芯に殊更母性愛の火をともしてゐたことも、彼女の言葉をすつきりと美しくしてゐた。
だが、上京後一度も母の愛情に狎れ染んだことのない春樹にとつては、彼女たちの言葉はあまり强烈で露骨すぎた。彼は、居心地のいい地中から突然明るみへ引きずり出された土龍のやうにあわててしまひ、
「どうです、お母さん、春樹も大きくなつたもんでせう。」
と小父さんがすぐあとを受けて言つたときも、上のそらだつた。
小父さんはあながち恩に着せるつもりはなかつたのだが、聞いてゐる方は、いやでも恩に着なければならない立場だつたし、その上女だけにすぐ氣を廻した。こんなとき誰も見せる卑屈な笑ひを母も口のまはりに太くきざんで、
「ほんとに、これと申すのもみんな吉村さまのお蔭で、ありがたいことだぞや――さう申して、郷里の方でも掌を合せてをりますわい。」

母は有難さうに言つてそつと眼に泪を滲ませた。その濡れた眼を、彼女は今度はわが子の方へぢいツとそそいで、「何から何までお世話さまになつて、この御恩を忘れるやうなことぢや、春樹もだちかんで。」

二

母に別れを告げて、春樹は濱町の家を出た。學校の寄宿舍を指して通ひ慣れた道を歸つて行く彼の心は、母から受けたあらゆる角度の印象でいつぱいだつた。母の體から發散する、ほのかな、新鮮な、土のやうでもあり、森林のやうでもある匂ひ。底に愛情を湛へてしばたたく、哀しさうな眼。

だが、彼の方では最後まで母の心をうつやうな言葉を吐いて甘えることが出來なかつた。母の前でさへ、自分自身を虐げてつくりあげた借物のやうな顏でゐたのである。母は、さすがに飽き足りなかつたのであらう、小父さんたちのゐる奥座敷から臺所の板の間を廻り、玄關の三疊にかけてある古雅な額の下まで跟いて來た。

「月に一度ぐらゐは、お前も手紙をよこしてくれよ。」彼女は哀しく訴へるやうに言つた。

寄宿舍へ歸つたのは、日暮頃だつた。丁度日曜日のことで、食堂へ入つて行く者は數へるほどしかなく、白の頭巾をかむつた亭主が背の低い齒のかけたおかみさんと一緒に默りこくつて食卓の世話をしてゐるのも、何となくわびしい圖だつた。

「鄕里を出るときはもうお前、霜がまつ白。」
かうも言つてかすかに肌を顫はせた母だつた。春樹は今、その時の母の寒々とした顏を宙に描きながら、手速く飯をかき込んで自分の部屋に戻つた。同室の男はちよつとよその部屋へ行つて暢氣に話し込んでゐるらしく、點けつ放しになつた机の上の据ゑランプの灯が赤茶けた疊の目をひつそりと一つ一つ浮きあがらせてゐた。空の色を模した壁も冷く沈んでゐた。かうした部屋には人間の肉體に髣髴とした線や波紋やくぼみがなく、ただ、隅から隅まで冷いのだ。若い學徒が情熱を抑へ、隱忍自重して磨かなければならない知性の冷さでそれはあらうか？　とすれば、部屋のどこかに玲瓏として骨までしみとほる光が立ちこめてゐなければならない筈だのに、ここにはそれさへないのである。
彼は机の上に『新約聖書』を取り出し、額をその堅い表紙の上に押しあてて祈つた。再び故鄕をさして歸つて行く寂しい母のためでなく、自分のために。ただ、本心を喪つてしまつた自分自身のために。
「主よ、この小さな僕をみちびきたまへ。」
魂の底から眞實湧きあがつて來るやうな、敬虔な、淸らかな感動に浸つて彼は祈りつづけた。彼はふと『聖書』の表紙の堅い面に紅く濡れた唇を押しつけた。その瞬間、何か異常な事が體内に起つた。『聖書』の表紙には、埃と或る植物性の色素の臭ひを交へた、淸楚な、どこか幽邃な匂ひがこもり、その奥の方から燦然と超現實的な、心靈的なものがあらはれた。そしてそれが彼の中にとても高貴な氣

分を充たして、人生の不安を忘れさせたのである。

　彼はいつもより早く寢室へ入つて、壁によせて造りつけてある箱のやうな寢臺に體を横たへた。軍人あがりで、體操の教師を兼ねた、秋になると西南戰爭の血腥い光景を思ひ出すくせのある舍監が、手提げの油燈を差しつけ差しつけ、寢てゐる者の頭數をしらべに來た。春樹はしかし、その時分になつてもまだぱつちりと眼を開いてゐた。

　ぽく、ぽくと廊下を踏み鳴らして再び舍監の靴音は遠ざかつて行く。部屋の中は前よりも一層しんと暗くひそまつて來た。そしてその闇の中に寢臺をならべて正體もなく眠つてゐる同室者の鼾聲が、正しい間隔を置いて斷續してゐる。この男は何を目的として生きてゐるのであらうか、と春樹は考へた。何を幸福と感じ、何を不幸と感じて人生の地圖に赤だの黑だのとかつきり色分けを施してゐるのであらうか？

　かういふ稚いが眞劍な疑問が次々に起つて來るのは、人生に何か絕對的なものを求めてゐるからである。絕對的なものを強く摑んで愉しい安住の世界に入るか、又は盲目滅法の苦悶に精根をすり減らして自滅するまで、青春はやみくもに彷徨する。

　だが、春樹はもはやこの彷徨にさほど深入りしないでもいいかのやうだつた。彼の腦は高貴な氣分で柔かになり、豐かになつてゐた。そしてそこに一輪、ふつくらとま白な花が咲き出てゐたのである――あの、ソロモンの華麗にさへ挑んだといふ野の百合の花が。

卒業

一

島崎藤村

四年の學校生活もそろそろ終りに近づいた。氣早な人々の間ではもう卒業論文の製作が話題にのぼつてゐた。長いこと教室に出なかつた春樹も、心を入れ換へてもつと語學を修得したいと考へ出してゐた。

戸川明三は英語のほかにドイツ語にも頭を突ッ込んで、ドイツ人を妻にもつランディス教授から、シルレルの『ウイルヘルム・テル』を讀ませられてゐた。この小説は、明治十三年に『瑞西獨立自由の弦(ゆづる)』と題して一部分譯出され、明治十五年にも『哲爾自由譚』といふのが出てゐる。しかし、明三はそんなものには頼らうともしないで、ひたむきに原書と取ッ組んでゐた。彼の下唇には紫色の齒形が絶えなかつた。たとへそこからぷつと血がふき出して來ても、彼は怖れなかつたであらう。スヰスの湖水ルツェルンの幽邃な風景が眼にうかび、早や冬が近づいた、羊飼ひたちは湖畔を去らなければならない、といふあたりはとてもさびしいね、と春樹に話して聞かせたりした。原書はレクラム版で、かなり丈夫な布の表紙がついてゐた。

「これをあげたら、今度はギョエテの『ヘルマン・ウント・ドロテア』だつてさ。」
明三は得意さうに言つて、ね、君もやらないかと水を向けて來た。しかし春樹は動かされなかつた。彼は英語を專攻し、それ以外の外國語には色氣を出すまいと決心してゐた。
心を留めてみると、この學校の英語は、噂にたがはず、發音から譯解、會話に至るまでとても精確だつた。
或る日曜日、春樹は何だか兄の顏が見たくなつて再び大川端の下宿を訪ねた。そのとき、彼は初めて小父さんが自分を明治學院へ入學させた本當の目的を知ることが出來た。みつしり英語を修得したら、アメリカへ渡つて針の製造法を研究させたい、歸朝の上は針問屋勝新の養子にして、あの、紺の暖簾を垂れ、正面の柱に古風なもぐさの看板をかけた店に坐らせたい、といふのだ。
不意の衝撃に彼はすつかり心をかき亂され、頰を熱くした。知らぬ間に誤謬が堆く積みあげられてゐたのだ。それが今、突然刻薄な白日の下にさらし出されたのである。彼のあたまには、血色のいい、鷹揚な微笑に輝いた小父さんの顏が、浮んで來た。今までそんな遠謀を隱してゐたとも思はれない顏だ。いや、たとへひそかに惡企(わるだく)みをしてゐたとしても、隱險な縱皺を刻んで人を怖れさせるやうな顏をしてみせることの出來ないのが小父さんなのである。
「今日まで一度も俺は吉村と喧嘩したことはない。しかし、その時ばかりは俺も爭つた。お前を勝新の養子にするといふ說には、絕對に反對した。」

萬事に淡白な、そしてそれを日頃の主義としてゐるといふ民助が、少し氣色ばんで言つた。「春樹は春樹でやらせることにしたい。いかに大將の希望でも、それだけはお斷りする。——俺はさう言ひきつて歸つて來た。」

だが、春樹は不思議に小父さんが憎めなかつた。知らずに積みあげた誤謬を柱や鴨居のがつちりした立派な建築に見立てて愉しんでゐたにちがひない小父さんの幻滅を思ひやると、胸が痛んだ。

「それに——」と民助は言葉を繼いだ。

最近吉村忠道へは何百圓かの金を用立てた、多年弟が世話になつた禮としてそれとなくその金を贈つた、これでもう物質的にはさほどの迷惑をかけてゐないことになつた、といふのである。

資本の原始的蓄積が近代的な利潤本位の蓄積へと移行して、金の地肌に新しい光が加はりつつある時代である。民助の言葉に一脈事業家らしい氣魄がこもつてゐたとて不思議はなかつた。

ここの下宿へ來る前、春樹はちよつと小父さんの家に顏を出した。すると、いつもになく家の中がひつそりとしづまりかへつてゐる。小父さんも小母さんも留守なのだ。茶の間へ行くと、あの凄い熊の皮をはがした板敷に座蒲團を敷いて、おばあさんがうまくもなささうに澁茶をすすつてゐた。

「さあ、ひとつ——」

いつもはかう言つて愛想よく形の凝つた青磁の茶呑茶碗を差し出してくれる彼女が、今日はのつけからぎらッと眼角を立ててゐるのである。

「お金をよこしさへすれば、それでいいものと思ふと大きにちがひますよ。」
「おばあさん、それや何の事ですか？」春樹はおづおづと訊いた。
「何の事つて、お前さん――」
おばあさんはいよいよむくれあがつてしまひ、それきりあとの句を繼がうともしなかつた。春樹めが白ばくれてる、と思つたのである。
春樹には今やつと兄のいきり方でおばあさんの言葉の意味が呑み込めた。一生の前半、侍の家庭にのみ見られる美しい主從關係に狎れ染んでゐたおばあさんは、一方で金の光にがつがつ咽びながらも、それ一つですべてをかたづけようとする近代的なやり口に跟いて行けないのである。計算の感情はむしろない方がさばさばして便利だが、感情の計算は絶對にあつてはならぬ。それは、人生を沙漠にする。
やがて、春樹は大川端の下宿を出た。事が、むづかしくなつて來たと思つた。兄の處置は、事業家らしく獨立立志を尊ぶ觀念で一色に塗りつぶされてゐる。それを感謝したい思ひはふつふつと湧き立つてゐたが、同時に、少しやり過ぎたといふ氣がして何かしら惜しかつた。

二

春樹は、自分の肉體と精神にひそむ、途方もない空想性を恥ぢた。空想は自分の行くべき道ではな

い、と思つた。現實の事實が否應なしにそれを敎へたのである。針製造人の運命を背負つてこの學校に學びに來た自分――だしぬけに明るみに持ち出されたこの苦つぽい事實と、學窓に描いてゐた放逸な空想との距離は、とても高輪と濱町との距離どころではなかつた。

第一議會に臨んだ山縣內閣が首相の疲勞から總辭職して松方內閣と入れ替つた頃には、第三學期もう終りに近づいてゐた。表門のところにある櫻の若樹が花から嫩葉へと移つて行くのを遠々しい眼で眺めながら、四年生一同は卒業論文に精魂をつぎ込んでゐた。春樹もそれを英語で書いた。そこには四年間の收穫がふかく織り込まれてゐた。

やつぱりこの學校へ來てよかつた、と思つた。ハリス教授が講義してくれた、イノック・アアデンの『エンシェント・マリアナ』やセエクスピアの『ヴェニスの商人』、むかし橫濱で英學を修めたといふ長身の教授石本三十郎が擔當した、スペンサアの『フィロソフィイ・オヴ・スタイル』やゴオルド・スミスの『デザアテッド・ヴィレエジ』などはそれぞれ面白かつた。後にこの學校の總理になつた井深梶之助はエマアソンやカアライルを講じた。そのほか、ジェボン・ヒルの『論理學』、マコツシの『心理學』――この二つはランディス教授の受け持ちだつた。米國プリンストン大學出身のマクネア教授はド・ラベレエの『理財學』を、明治の初年橫濱の高島英學校の教員をしたこともあるバラ教授は星學を、マコオレエ教授はフィッシャアの『萬國史』とグリンの『英國史』を說いた。

これらの書物の中には文學的なものが目立つてゐる。それに影響され、更に、新しく文壇に登場し

た、『舞姫』の森鷗外や、『風流佛』の幸田露伴や、『伽羅枕』『色懺悔』の尾崎紅葉などが身のまはりにぼかしてゐる光芒に憧れて、馬場勝彌は文學で身を立てようと決心した。それならお前は孤高を守つて文學の高貴な性格に殉ずることが出來るか、と訊かれたら、彼はたじたじとなるかも知れなかつた。だが、彼には心から文學好きな兄があつた。十九歳で死んだが、その兄が、まだ幼い彼を本郷の若竹へ連れて行つたりして、小説を讀む機緣をつくつてくれた。かうして早くから文學に向ふ素地を與へられてゐた勝彌なのである。キリスト敎主義の學校にゐながらも、たうとう彼は未信者で押し通した。氣象のさかんな彼としては、これも一つの見識だつた。

かうした性格の馬場勝彌とくらべると、戸川明三は、何となく哲學者らしい落ちつきのある青年になつてゐた。

ランディス敎授からギョエテの『ヘルマン・ウント・ドロテア』を敎はつた明三は、同じギョエテに近代文學の最高峰ともいへる『フアウスト』のあることを知り、『フアウスト』に感心してからでは事が逆になるが、そのあとで『若きヱルテルの悲しみ』にも接した。これは青春の敎科書である。文學には戀といふものが伴はなければならない。戀則ち文學、といふ觀念をぐつと強く摑んだとき、彼はひどく感動したが、その感動は歡喜といふよりもむしろ本をも閉ぢたくなるやうな羞恥だつた。彼は今も戀の味を知らなかつた。

六月二十七日に、いよいよ卒業式が行はれた。

受持ち受持ちの學課の下に教授や講師が署名し、朱肉で花のやうな校印を捺した卒業證書をもらふと、この年の卒業生二十六名はサンダム館の横手にある草地の一角に集まつた。そしてそこに、みんなで土を掘り起して一本の新しい記念樹を植ゑた。その根元には、

明治二十四年　卒業生

といふ文字を刻んだ小さい長方形の石が建てられた。

彼等が死んだ後までも、この樹と石は殘るであらう。人間の脆さが却つて浪漫的にせまる淸しい感傷にそつと睫毛をふるはせた人々の中には、前商工大臣中島久萬吉や洋畫家和田英作などもゐた。

「さやうなら！」「さやうなら！」と互に男らしく別れを告げると、明三は築地へ、勝彌は本鄕へ、いづれも輝かしい將來を夢見ながら歸つて行つた。春樹も丘の一番高い所にあるヘボン館の塔をもう一度ふり仰いでから、櫻の靑葉に飾られた表門の方へ足を運んだ。荷物や書物は旣に吉村の小父さんの家に送り屆けてあつた。彼がヂスレイの數奇な生涯に空想を刺戟されてゐた頃には、櫻の樹もそれほど伸びてはゐなかつた。その滑かな樹肌には、四年間の、橫しぶきに來る雨や風がしみ込んでゐる。同じ年月の間、彼は何といふ暗鬱な情熱を味ひ、自らを責め苛んだことであらう。よくも狂死しなかつた、と思ふと熱く胸が濡れて來た。

初夏の風が櫻の枝といふ枝をざわざわとゆるがせてゐた。見ると、門の內や外にいくつも靑黑く熟したつぶらな果が落ちてゐる。卒業證書を授けられる時ビリから三番くらゐの順番だつたことなどは

忘れてしまつたかのやうな顔で、
「ほう、こんな所にも落ちてる。」
と獨語し、彼は道路のまん中にころがつてゐたやつを一つ拾ひあげた。鼻に近づけると、ぷんと甘酸つぱい匂ひがする。若き日の、哀しい、肌がうづくやうな幸福のしるしだ。
彼の前には二つの道があつた。一つは豫め定められたもので、他の殘した、形の正しい足跡が一筋に續いてゐる。もう一つの道には、それがない。何から何まで、自分一人の創意と努力で開拓しなければならない。春樹がこれから歩まうとしてゐるのは、この後者である。
冒險と心の闘ひに負けまいとするかのやうに、彼はぐつと胸を張つた。それから、少し大股に校門を離れた。

若い教師

横濱の店

島崎藤村

一

日本橋區の濱町は隅田川の流れに沿ひ、どうかすると、空氣の明るさが眼にこたへた。島崎春樹は瞼をぱちぱちさせては、主家の庭で雜草をむしつてゐた。茶の間のすぐ外にあたる、疾くに花期の過ぎた乙女椿の根元にも、杉菜や三味線草がいやに蔓つてゐた。あれを拔いたら、おばあさんがおやつに呼んでくれる時刻だがと思ひ、春樹は力いつぱい氣ばらうとするのだつたが、腰から下がとても重く、腕の筋肉にも彈みがつかないのだ。小鼻の横には汗がたまり、それが土埃でづづ黑くなつてゐた。彼の血管といふ血管には、それと同じ色の、暗鬱な冷い氣流が渦を卷いてながれてゐた。

今日はそれに切れ目の多い雲がかつと光り、口をあけて彼の鈍重さをあざ笑つてゐるみたいなのである。彼はしかし、それを何とも感じなかつた。彼はいつか草むしりをやめ、魚のゐない池の面に厚い影を落した梧桐の幹に片腕預けて立ちぼけてゐた。

だが、彼はやうやく決心した。

——さうだ、やつぱり濱へ行かう。

彼の顔にはそれまでなかつた生氣が跳ねあがり、一つ一つ眼につく赤い玉になつて、汗が飛び散つた。

彼の小父さんは、ついこの間明治學院を卒業した春樹を、自分が常々ひいきになつてゐる大傳馬町の針問屋勝新の養子に入れる肚だつたが、春樹の兄の反對で沙汰やみになつた。春樹は小父さんの胸の內を考へ、するとその度に、顏にないものにぶつかり、ぎくりとするのだつた。だが、多年の恩義に報いる方法は、他にもあるのだ。

春樹はぼつぼつ横濱行きの仕度を始めた。暇があつたらと、テエヌの『英文學史』をも風呂敷包の中にひそませた。歐化主義への反動として、國粹運動が起り、國文學の復興が叫ばれてゐる時分ではあるが、しかし、あの港町の景色や風俗には、二三年前の銀座にさへ見られないエキゾチシズムの匂ひが今も漲つてゐるにちがひない。春樹はそれを思ひ、外國のものなら、マッチ箱に貼られた女王（クイン）の繪にさへ、眸を熱くするのだつた。

小父さんは、小母さんと一緒に、今度横濱で新しくはじめた店の方へ、もう一週間も前から行つてゐた。

「なんなら、お前もあとから來てくれ。」

家を出るとき、小父さんは言つた。春樹はその言葉を思ひ浮べ、何か滋養分のある食べ物みたいに幾度も奥齒で嚙みしめた。寢ても氣が立つた。俺もいよいよ店屋の小僧になるのかと思ひ、彼は一時

頃まで寢返りばかり打つてゐた。

そこは三疊の玄關部屋だつた。日頃から、この部屋の空氣には一種の厚みがあり、一方の壁によせて据ゑた机や本箱なども、木目が光つて、何となく豐かな表情をしてゐた。書生の身に過ぎた待遇がそんなところにも感じられた。

翌朝、よそ行きに着換へようとしてゐるところへ、おばあさんが入つて來た。年齢に挑んだ感じで腰も曲げず、しやんと伸ばした筋骨のほそい手にきちんと折りたたんだ紅絹裏の着物を抱へてゐる。姉さんのだな、と思ひ、八年病みつづけて纖れた體に、この頃やうやく少しのつて來た脂肪の色が、好ましく心に描き出された。

「これをおよねに渡しておくれ。」おばあさんは齒ぎれのいい口調で言つた。

春樹のいはゆる姉さん、その實小母さんは、おばあさんとその亡夫との間に生れた一人娘だつた。小父さんはその養子なのだ。

明治二十四年の初夏の横濱。海岸の一角にまづオランダ領事館が設けられ、その前に運上所がものものしい構へを張つたのを皮切りに、次第に山際へかけて建て込んで行つたといふ、明るい、海虱の臭ひもほのかにする開港場。

驛を出て一歩街にさしかかると、春樹の心は急に浮き立つて來た。今もなほ背に張りついてゐるやうな、暗鬱な青春の情熱に揉まれて惱み抜いた學生生活の四箇年を、ここで一氣に汚れた羽のやうに

脱ぎ棄てるのだ。
眼の清しい、頬を紅く塗つたらしやめんの幻を描いたりして、幾度も無用に街角を曲り、顳顬や腋の下に快く汗をかいた頃、やつと伊勢崎町に辿り着いた。人通りが繁く、その上にへんぽんとひるがへる赤や黄の旗は商家の媚態だ。白い生地に黒ペンキで大きく「いせざきや」と書いた看板がすぐ鼻の先にあらはれた。彼はまづそれをふり仰いでから、二つある入口のどちらから入つたものかと迷つた。長い廊下を縦にしたやうな店の形である。ごたごたと商品がならべられ、客もかなりつめかけてゐる。彼は突きあたりにある帳場のところへ行き、まづ、頭の禿げあがつた男に挨拶した。すると、そこへ、
「おお、春樹か。」
と小父さんが奥の方から出て來た。脂肪ぶとりのした艶々と赧い顔に、何の構へもない悦びの色を漲らして、「よく來てくれた。」
春樹は嬉しかつた。お前がこの間もらつて來た卒業證書には、俺が血の雫と換へつこにしたやうな金がかけてあるんだぜ、と露骨におつかぶせて來ても、こちらは反撥してゆけない立場なのだが、すべてを胸の底にたたみ込んだ小父さんの恬淡な態度は見上げたものだつた。
「およね、春樹が來たよ。」小父さんは今度は奥の方へ向いて言つた。そんな聲ひとつにも彈みがあると春樹は思つた。

「兄さん！」と嬉しさうに呼んで横から跳びついて來たのは、今年七歳の樹だつた。「黒船には誰が乘つてた？」

春樹は、この年は違ひすぎるが弟みたいな子供を時には四ッん這ひになつて背にも乘せてやらなければならず、こんなわかりすぎて却つて謎々みたいに聞える質問にも、だから、わざと大袈裟な表情をして答へたのである。

「ペ、ル、リ。」

「ちがふ。」

「ちがふ？」

まつたくこれは、不意に足をすくはれた感じだつた。「それなら、誰？」

「敎へてあげようか。ナポレオン。」

「へえ。」春樹は眼を圓くして、「ナポレオンが日本へ來たことがあるの？」

「兄さんは頓馬だなあ。」囃したてながら、樹は奥へ駈け込んだ。

二

「春樹さん、來てごらん。」帳場の後のところから小母さんが呼んだ。

晝食後の事で、春樹は、ここで早く生みつかうとでもするやうに、二階建になつた奥の住居を隅々

までゆつくり見て廻り、陽のさした裏ロの方へも出て見たりしてゐたところだつた。その春樹を、ついでに隣の方へも案内しようといふのだ。

彼はすぐ小母さんのあとに跟いて、そこらから自由に行き來できるやうになつてゐる隣の建物の內部に入つて行つた。そこは土藏づくりでうす暗かつた。案内役らしい步調で時々小母さんの白く浮きあがつたほそい襟足が所を變へる。その度にあとから足を運んで追ひすがる彼の顏には、なごやかな落ちつきがあつた。

「どうだ、なかなか廣からう。」小父さんもそこへ來て言つた。

この建物と住居との間の通路にはとても明るい硝子張りの天井があつた。その下を小父さんはゆつくりとつて返しながら、ここの店が手に入るまでのいきさつを話して聞かせた。——以前の伊勢崎屋はこつちと隣と二軒つづいた店になつてゐた。それが勝新のところへ抵當に入つた。どうだ、吉村、ひとつやつてみないか、としきりに勝新の大將がすすめるものだから、たうとう俺も引き受ける氣になつた、といふのである。

「どうしてお前、新規に店を始めて、これだけの客が呼べるものぢやない。」

老舖といふものはこれほど人を夢中にさせるものかと、世間知らずの春樹は少し奇異な感じに打たれた。歷史の力であらう。しかし、何代もかかつてそれを築きあげる努力と苦心は、要するに功利と商業的平俗の追求に過ぎないではないか。

小父さんは帳場のわきに立ち止つた。店の小僧たちがきりツとした體のこなしで勘定を持つて來る度に、頭の禿げあがつた男が身側に置いた錢箱の蓋をあけて涼しい金屬の音をさせる。それが、士族上りの小父さんの、まだどこか事業家になりきれないうぶな心の隅を、ふと感傷的にかきたてたのであらう。

「なにしろ、一錢、二錢から取りあげるんだからねえ。」

小父さんはさう言ひ、言つたあとで大きくふくらんだ眸をほんのりうるませて笑つた。春樹は小父さんの一面を見たと思つた。しかし、同じ詠嘆でも、心の亂れが微塵も見られなかつたのは、膽力だけはがつちりと出來てゐるからである。

春樹は自分の體の置き所から見つけてかからなければならなかつた。彼は店の方へ眼をやつた。置き並べ、高く積み上げた品物が、時には十分吟味もしないで、小口から持つて行かれる。商業的平俗を意識させないほどの氣持よさだ。しかし、彼の胸には、さつき薄暗い土藏づくりの建物の中で味つたなごやかな落ちつきなどは既にまつたく影をひそめてゐた。こんな場所の空氣は、やつぱり彼の魂の地肌にしつくり合はないのである。

彼はぐいと込みあげて來る悲しさを怺へて、その日から小僧たちの仲間入りをした。裏での亂暴さ、うすぎたなさは匂はしもしないで、彼等は客の前に出ると一樣に社交的であり、技巧的である。旺盛な青春期の、内からはねかへるものを巧みに制御して、肩を圓め、揉み手一つするにもこくを見せる。

自分もその通りにしてみようと、彼はひそかに決心した。
或る日、店先で、春樹さあん、と疳高く呼ぶ聲がした。帳場のところから少しあわて氣味にその方へ出てみると、外國船が入港したのであらう、眼の碧い、氣味わるいほどねつとりと白い皮膚をした男女の二人連れが、土産物でも買ひたさうな顏で小僧たちに圍まれてゐる。時は夕方で、向う側の屋根の上に、ほの白く新月がうきあがつてゐた。
「ひとつ英語であたつてみておくれ。」春樹を呼んだ少し年嵩の小僧がぷんといやな臭ひのする口をよせて言つた。
春樹はたじろぐ心をやつと支へて、外國人の前に立つた。
「What sort of articles do you wish to have?」
これだけ言ふにも、彼は詰つたり發音しかへたりしなければならなかつた。彼のは讀むだけで、會話のやりとりになるとなるべくひつこんでゐたいといふ不思議な英語だつた。
「I am looking for……」とばかりで、外國人に特有な捲き舌の陰影(ニュアンス)の多い發音は半分も聞き取れなかつた。すると、男の方が少し奥まつた棚の上を指さして、小僧の一人に蒔繪のある硯箱を幾つもおろさせ、終ひに春樹に値段を訊いた。春樹は符牒を見て二圓と言ひ、すぐあとから正札ですと附け足した。黄と綠の色を際立たせ、それに紫の線描を配した分にぢつと近づけた男の白皙の顏には、感覺的な美しさがあつた。

「高いわね。」

女はそつと男の顏に囁いてから、春樹の方へ向き直つた。「同じ品物で、もつと安いのはありませんか?」

言葉だけは素直だつたが、切れの長い眼の底に狡さうな光がちらついてゐる。ほんとに買ふ氣はないのだ。

「Oh, we are offering it at the lowest possible price.」

春樹はむきになつて言つた。むきになると、片輪の英語でも、舌の動きが少々流暢になるものらしい。何だか後味がよく、さんざ素見した擧句、二人の外國人がぷいと店先を離れた時も惡い氣持はしなかつた。

「春樹さんはいいなあ。英語がしやべれるから。」ロの臭い小僧が言つた。

三

夜、春樹はそつと店を拔け出して、街を步いた。新月の消え去つたあとへ、靑白い瓦斯燈の光があふれてゐた。終日潮風に吹かれ、今は夜露に濡れてしつとりと垂れさがつてゐる長い布の旗。その蔭に夢のやうに泛んでゐる圓い紅提灯。晚凉に乘じてひつきりなしに流れる人、人、人。

春樹はしかし、どこへ行くといふあてもなかつた。彼の頭のなかは明るく冴え、そこに、まだ自分

の眼で見たこともない外國の風景が描き出されてゐた。四角な窓がいくつも並んだ宏大なビルディング。ビルディングの一方の壁と反對側の壁とを染め分けて、色彩のあるものとさうでないものとをくつきりと截斷してゐるやうな夕日の射光。眼の碧い、泣く時も心の明るさを消さない長身の少女。笛と花花。書物。雨のとほらない濶葉樹。彼の空想には手綱がなかつた。それは眼の前の、形のはつきりした現實の風景よりも遙かに大きな影響を彼の考へに及ぼしたやうに見えたのである。

だが、と彼は自問した。だが、ほんとに外國には春があるであらうか？　心の春が、自分のために、ちやんと仕度を整へて、几帳面な給仕夫のやうに待つてゐてくれるであらうか？

小父さんがわだかまりのない諦めの底に押し込んで氣ぶりにも出さないでゐる年來の意志に從ひさへすれば、今でも小父さんはよろこんで洋行させてくれるであらう。しかし、それはあくまで針製造の研究のためであり、あの針問屋の養子の候補者としてである。

針問屋の一人娘の柔かな手、赤い手柄をかけた髪のかたち、つまみ細工の花かんざしがちらついた。小父さんの用事で彼は何度も彼女の家へ行つたことがある。行く度に、とても廣い奥の方から彼女が出て來て、お歸りになつてから食べてね、ときまり惡さうに紙に包んだ菓子をくれるのだ。

だが、彼はやつぱり商賣人になるのが厭だつた。平田學派の父から讓られた、色白で端麗な彼の顔には、ほとんど先天的に、商業的と云はれるすべてのものへの反撥が隱されてゐた。

それではどうすればいいのだ？

彼の憂鬱はひとつは家系から來てゐた。厚い層になつて彼の若い肉體を包んでゐる憂鬱、あらゆる行爲と想念がそこから來てゐるやうな、名のつけやうのない、原因のない憂鬱――もしそれを底から打ち割つて聞いてもらへる人があるとすれば、それは父の正樹だつた。

馬籠（まごめ）の、度々大名を泊めたこともある大きな家の座敷牢で狂死するまで、父は惱ましい、暗い、まるで逃げ場のない袋小路のやうな生涯を送つた人である。

どこか重苦しい、直情的で道德的な性格の持ち主だつた父は、幾分行動的な氣質をも具へてゐて、時にはそこから胸に鬱結したものを外部に發散させた。平田派の運動に參加し、鳳輦を先驅の附け人と間違へて献扇事件を惹き起したことなどがその一つの例だ。

春樹には、さういふ行動性がない。明治學院に在學中、內部にきざした若いいのちの芽の疼き燃えるままに、自分を責めて責め拔いたむごたらしさや、友人にも教授連中にも一切沈默を守らうと思ひ立つた心の悶えや、西行の木像を相手にして狂氣じみたおしやべりをしたことは、いくらか行動的と云へないこともないが、本當は傷心と焦燥を伴つた激情の亂舞に過ぎなかつたのである。

父の憂悶と焦燥は、洋學を砥石としてすべての日本的なものをもつと美しく磨きあげようとする進步的な方向を辿つてゐた平田鐵胤一派が、庄屋、本陣、問屋、醫師、百姓、町人に支持されるだけで、たうとう攘夷主義の武士階級から閉め出しを食つて政治の舞臺から退き、それと共に自分も馬籠の家に蟄居した晚年の頃から急に強くきざして來たのだつた。

少しでも政治的活動に情熱を注ぎ込むことの出來た父は、まだ幸福な方だと春樹は思つた。性格的に父ほども行動性を具へてゐない春樹は、初めから憂鬱一つを背負つて袋小路をさまよはなければならない運命にあつた。

彼は再び店に戻つて、一方の、板張りの堅い腰掛にかけた。

夏場だけに、夜は特別に客が込んだ。その客の種類もいろいろだ。白の股引に白足袋、きりツと小高く尻端折りをしてしよつちう忙しさうにしてゐる客は、横濱風俗の代表者である。時には、眼の碧い異人の旦那を連れた仇つぽいいらしやめん風の女が頽れた花のやうな脂粉のかをりをさせながらやつて來る。

「いらつしやい。」

春樹は彈かれたやうに立ちあがつて、店の者の、すぐあとに表情たつぷりの饒舌を用意して待つてゐるやうな口吻を眞似てみた。その途端、ちらと、斜向うにある賣りものの鏡が眼についた。昨日藥玉簪の赤い房を垂らした娘が長いこと品定めをしてたうとう買はずに歸つた鏡である。深く澄みとほつたその面に、まざまざと映し出されたのは彼自身の姿だ。みんな角帯を締め、紺の前垂掛をしてお店者らしく客を送り迎へしてゐる中で、彼一人は柄の地味な單衣の着ながしに白の兵兒帯である。腕まくりの一つもして見せなければ恰好のつかないこんな書生風俗は、ここでは見られた態ではなかつた。

四

或る日、春樹は一方の入口に近いところに腰かけて、ほてりつく後頭部をうしろの冷い壁土に押しあて、死んだやうになつてゐた。小僧たちは許しが出て交替に隣の土藏づくりの建物の方へわづかな晝寢の愉しみを貪りに行く。からりと晴れあがつた青空には、きれぎれに雲がぢつと固まり、街路の土にはしいんと暑い陽がしみ入つてゐた。その上をちらちらと赤い大きな蟻が走つてゐた。繁昌する店も、さすがに一時客足が絶え、帳場近くに恰幅のある體を据ゑてゐるだけで店の規律を保つことの出來る小父さんの姿も、奥の方へ消えてゐた。

ふと、どこかでほそく冴えた金屬の音がし、その餘韻が銀笛の音のやうに店いつぱいにひろがつた。しかしそれも一瞬の後あとかたもなく消えてしまつた。春樹はものうげに顏を起して、鐵物の置いてある方へ眼をやつた。そこの一區劃を受け持つてゐる小僧が、所在なさに、紅く磨きをかけた爪の先で藥鑵の蓋か何かをちよつと彈いたのである。

春樹は再び後頭部を壁土によせかけた。そして眼をつぶつて、金屬のひびきつていいものだなと思つた。すると、じんじん燃える頭の底に、もう一度あの銀笛のやうな餘韻が呼び起され、臺のやうな重い髮の毛が一ぺんに拔け落ちるやうな淸しさを覺えた。暑熱の中では、こんな肉體感覺は人を途方もない夢幻境へさそつてゆくものらしい。ふと、彼は低聲で何か口吟みはじめた。彼の眸はうつとり

と云ひ、唇は朱色に燃えた。

How should I your true love know
From another one?
By his cockle hat and staff,
And his sandal shoon.

明治學院在學中暗誦しかけてそれつきりになつてゐた「オフエリヤの歌」の最初の一聯である。この歌の譯は、明治二十二年八月に『國民の友』夏期附錄として刊行された、あの光輝ある譯詩薈『於母影』にかかげられてゐる。譯者はSSS(新聲社)同人の一人森鷗外である。それによると、この一聯の譯は、

いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある。
貝の冠と、つく杖と、
はける靴とぞしるしなる。

となつてゐる。春樹はまだこの一聯しか記憶してゐなかつた。いや、それさへ忘れかけてゐたのである。彼は同じ文句を何度も低聲でくりかへして、喜びに顫へた。

日は少し傾いた。暑さはまだひどかつたが、時々風が起り、ほの白い流れのやうな涼氣が漂つた。

そこへ、晝寢に行つてゐた者が、少し寢過ごしたかと神經的に怯えた顏で歸つて來、その足音に春樹も陶醉から呼び醒まされた。現實の空氣は、新たに見直さなければならないやうな強さである。彼は思ひきり伸びをして體ぢゆうの硬張つた筋肉をゆるめたいのであつたが、はれがましくて、ここではそれさへ許されなかつた。

それればかりではない。彼のしまりのない書生姿は、店のどこにもぴつたりはまる居場所がなかつた。唐物類が置いてある方へ行つてみる。そこにはちやんと一人の小僧ががんばつてゐる。塗物類の方へ行つてみても、やはり決つた係りがゐる。彼等はみんなここが自分の繩張りだと言はないばかりの顏で棚の前を行つたり來たりしてゐる。客への媚態とは打つて變つたその態度は、意地惡さを通り越して、陰險でさへある。彼等の蒼つぽい眸のうるみは、將來の大商人を氣取つてどうかすると夢と現實とのけじめさへ忘れかねない自慰なのだ。だが、それと同じ位置に自分を嵌め込まうとして手も足も出せない彼の戸惑ひ方は、もつとみぢめだつた。さすがの小父さんも、見かねて、

「春樹、お前は帳場に坐れ。」

と言ひ出した。しかし、そのあとに附け加へられる言葉があつたのである。「まあ、當分助手のつもりでやつてみるさ。」

細い道

一

帳場は櫓のやうな恰好に造られてゐた。四本の柱が建てられ、その間に脚の頑丈な机が据ゑてあるのである。春樹はその前に端坐して、小僧たちが勘定を持つて來る度に、慣れない帳づけの筆を動かした。自分の持ち場が決つた嬉しさで彼の顔は芯から耀いてゐた。

これはしかし、何といふ單調な、機械的な仕事であらう。時には、索漠としてやりきれないこともあつた。机の上に桔梗の一輪ざしでも置いたら、と彼は暑さでぼうとなつた頭で考へたりするのであつたが、それは決して若さから來る感傷ばかりではなかつた。彼は、甘美な心の糧に飢ゑてゐたのである。

ところが、偶然にも、一つの機會が來た。丁度小父さんは留守だつた。おばあさんも一人で寂しからうと、養母への孝心から、問屋廻りを兼ねて東京へ歸つて行つたのである。

その日は朝から、祕密な惡戲を企(たく)らんでゐる子供か何ぞのやうに、小父さんの鋭敏な視線が邪魔にならない際だつたので、折り目の正しい絽の羽織を着た小父さんの姿が街の暑いいきれの中に呑

み込まれると同時に、ほつとした。奥の方にゐる小母さんの眼をごまかすくらゐは造作ないのだ。樹(しげる)は店先で玩具の馬と遊んでゐた。

春樹は土藏づくりの建物の方に置いてある自分の風呂敷包を解いてテエヌの『英文學史』を出して來、それを帳場の机の下にひそませた。少々悲壯な感じがした。女はあまいなと思ひ、すると自分の狡智が苦つぽく頭に來た。

「へえ、六錢の箸箱が一つ。」

聲のきれいな小僧が帳場の側へ來て錢を置いて行つた。春樹は筆を取り上げた。筆の動きが今日は馬鹿にすべつこく、字の形まで踊つてゐた。

それが濟むと、彼は机の下の英譯書を取り出した。彼の貪婪な眸は蒼つぽくふくらみあがつてペエジの上に吸ひついた。微小な兵隊のやうに型をそろへて正しく並んだ活字の清々しい匂ひ。活字の匂ひに飢ゑたやるせなさは一種の鄕愁だ。久しぶりにそれを充たしてくれるこの外國の書物の中には、芳烈な知識とても銳利な批評があつた。前にも一度ざつと眼を通して、その時の感動を同窓の戸川明三に話して聞かせたことがあり、それだけ今度は呑み込みも速かつた。

書物そのものはアメリカのロヴエルといふ會社から刊行されてゐる Lovell's Library の一冊で、ぢぢむさい假綴ぢの安本である。それが上下二卷に分冊されてゐる。裏表紙の隅つこに 40 とあるのは、定價四十仙を表示したものであらう。

「へえ、錠前が八錢。」

別の小僧がまた錢を置いて行つた。春樹さん、それや何だい、と詰りたさうな表情がその小僧の顏にあくどく閃いたのにも氣づかずに、春樹はペエジの上にかぢりついてゐた。讀書の面白さが、興奮して少し幻想的にさへなつた彼の頭腦に、あとからあとから新しい刺戟を與へるのだ。批評と解剖の對象となつてゐる一人の詩人の影像から、空色の靜けさが剝ぎ落されたかと思ふと、何か躍動したものが涌きあふれて來る。坪內逍遙が文藝評論の最初の形式と內容を示し、森鷗外が『於母影』の原稿料で創刊した雜誌『しがらみ草紙』に每號筆を執つて文藝批評の調子をぐいぐい高めてはゐるもののまだ卓拔な批評文學のあらはれてゐないこの國の若いインテリゲンチャにとつては、これは聲をあげたいほどの驚異である。英國民の性格を說くために文學を藉りて來たもので、學問としては取るに足らぬ、といふ批難がドイツやイタリイのアカデミックな人々から發せられてはゐるが、春樹の頭が組織的に出來てゐないお蔭で、言葉の一つ一つにたまらない魅力があつた。人と環境に重きを置き、一つの時代を一人の詩人によつて代表させるといつた手法にも感心した。そしてこの手法が最も成功してゐる實例としては、詩人バイロンの條を擧げることが出來るであらう。著者はバイロンにかなりのペエジを割いて、十九世紀の或る時期を彼の奔放な生活によつて巧みに象徵してゐるのである。

春樹はもう時間も場所も忘れ、手放しで荒立つ興奮の波に乘つてゐた。一度讀み出したら、なかなか途中でやめられないのである。バイロンの數奇な生涯の狂ほしい喜びと哀しみが、多彩な筆觸をも

つて次から次へと展開されてゆく。その終りのところに、春樹は會心な文字を見つけた。

「彼は詩を棄てた。詩もまた彼を見棄てた。彼はイタリイへ出かけて行つた。そして死んだ。」

噴火山のやうな無用な危險な威力のゆゑに、世の嘲罵を浴びて、かなしく息を引き取つたのだ。夭折したキイツや、虛無の影に包まれて羽ばたいた美しいシエリイを第一位に置く俗惡な寫實的な空氣の中に、殘酷にもそれ自體が詩のやうな皮膚の白い芳醇なむくろをさらしたのである。無用で危險な情熱の嵐にも、今は靜かな休息があるであらう。

二

そこへ兄の民助がやつて來た。

暑さがゆるんでうすい翳りの出來た空氣をゆるがし、勝手を知つた身のこなしで帳場に近づいて來た彼の姿に氣がつくと、春樹は覺えずぎよつとした。不都合な行爲を見拔かれはしないかと、自分の顏を恐れたのである。

民助はゆつくり帳場の周圍を廻りながら、時々春樹に話しかけた。弟もこれで身が固まるかと、境遇のきびしさも忘れてほつと安心した表情である。それに甘えることが出來たら、どんなに氣持がすつとするであらう。だが、さう狎れ狎れしく出て行けない兄弟仲なのだ。春樹が多年小父さんから受けた恩義を金で清算しようとしたこともある民助であり、それだけ一面彼には近代的な氣質が際立つ

てゐた。春樹はそれを恐れてゐるわけではなかつたが、それでゐて兄に接すると本能的に心の垣を高くしたくなるのだつた。

夜が更け、客足が絶えて海波の音さへ聞えさうな涼氣がせまる頃には、がたがたと表戸を閉めなければならなかつた。屋内には再び蒸し暑い空氣が澱んで來る。しかし、小僧たちはそれにもう慣れてゐて、めいめい算盤を手にして帳場の左右に集まつた。それは一日の一番大事な時間だつた。民助は少しうしろ寄りになつて、加勢役らしく、大きな隆い鼻を燈火の光にさらしてゐた。

小僧たちの中には、今日は間違へないぞ、と凜々しくかまへてみせる者もあつた。でも讀み手がなあ、と別の一人がそつと眼の隅に狡さうな表情を浮べ、首をすつこめた。

讀み手の春樹は、しかし、自分が輕蔑されてゐるとは知らないで、一生懸命に、變化の多い、時には小氣味よく累進する數字を拾ひはじめた。兵兒帶姿の彼も、七を「なな」と發音し、四を「よん」とはねるくらゐのことは疾くに心得てゐた。地震でもありさうな、むんと不安な氣の澱んだ家の中に、相競うて彈かれる珠の音が冴え冴えとひびきわたつた。時々外から辻占賣りの聲が聞え、規則的な間隔を置いて、夜警の拍子木の音も、月のある空に短い餘韻を引いてゐた。

突然、一齊に珠の音が停つた。讀み手の聲が醜く舌もつれして聞きとれなかつたのだ。

「何だ、その讀み方は？」民助が突ッ立つたままぴいんと體を硬張らせて怒鳴つた。「そんな讀み方があるもんか。ふざけるな。」

春樹は思はずぎよつとして、恐る恐る兄の顏を見上げた。形のすぐれた顳顬のあたりが、眞紅に凝つてゐた。人事關係に於いては淡白なことを主義とするといふ兄の、めつたに見せない怒りである。それに打たれて、じいんと頭の中が昏むのを覺えながら、
「僕はふざけてやしません。」
春樹は必死になつて言つた。
「もつと、しつかり讀め。」
民助の聲はふるへてゐた。民助の顏から、胸から、手の甲にむくれあがつた靑い靜脈から春樹一人を目ざして壓倒して來る、何か怖ろしい眼に見えない力は、兄として小僧たちに示したい身振りばかりではなかつた。それは、偶然弟の眞相を看破つたと感じての、血緣の思ひにあふれた怒りでもあつたのである。
春樹はしばらく不機嫌に默り込んでゐたが、思ひ直して、再び初めから讀みはじめた。みんなの前で自分を侮辱した兄に對してといふよりも、每日益のない機械的な仕事をくりかへしてゐる自分自身への忿懣と悲しみで、ずいと眼がしらが熱くならうとする。彈け跳ぶ珠の音が、やつとそれを支へてくれた。
だが、その夜彼はひとりで寢床に入つてからも容易に瞼を合せることが出來なかつた。自分の現在の位置を形づくつてゐる誤謬がまざまざと感じられた。どこにあるとも知れない、孤高な、悲壯な眞

理が、それを發き出してくれたのだ。彼は急に激し、聲を抑へて泣きじやくつた。
そこは土藏づくりの建物の中だつた。晩夏の眞夜中に特有なよくひびく大氣の中で、眞紅な埃が飛び跳ね、高々と鳴りひびいてゐる。彼はひしひしとそれを感じ、現實の自分の汗や言葉はその埃よりも劣つてゐると思つた。
春樹はたうとう決心して、東京の巖本善治に宛て、救ひを求める手紙を書き送つた。
巖本善治は、精神的な、それでゐて感覺の美をも卑しめない少女なら大抵讀んでゐる『女學雜誌』の主筆であり、また麴町區下六番町にある明治女學校の校長だつた。春樹は、この女學校の最初の基礎を据ゑ、今は高輪教會の牧師をしてゐる木村熊次の家で一度巖本に逢つたことがある。絲がかつた霜降りの制服を着て、金釦を光らせながら、木村牧師からキリスト教の洗禮を受けた頃の事だつた。漆黑な長髯の見事さも忘れられないが、霑ひのある大きな眸の、何ものかを深く凝視するやうな光は、今も彼の體の隅から隅までぴちぴちと跳ねかへつてゐた。
日ならずして、返事が來た。朝夕新秋の凉氣の漂ひはじめた帳場の机の上で、春樹はそれを何度となくくりかへして讀んだ。期待ははづれなかつたのである。暗い溜息の臭ひと虛無感とが厚い層になつて澱んだ、まるで牢獄のやうな櫓の中から、辛うじて拔け出して行けさうな、一筋の白い細い道。喜びで彼の胸はふくれあがつた。かうなると、順序としてまづ小父さんにすべてを打ち明け、その諒解を得なければならなかつた。だが、おそろしく自尊心の强い彼が、一方では何とも全く臆病なので

ある。どんなふうに話を切り出したものかと、彼は考へ込んでしまつた。

三

すると、そこへ當の小父さんが奥の間から澁團扇をつかひながら出て來た。春樹や小僧たちの睡眠場所にされてゐるに過ぎない隣の建物には買ひ手がつき、店の評判はいよいよ高まり、たつた今、靜岡からの新荷も着いたところである。時には氣むづかしい顏をしてみせることもないではないこの人が、心から上機嫌になつてゐることは、笑つた拍子に淸冽なさざなみを刻んで耀いた齒列の美しさや、水氣をおびた團扇に搔き廻される空氣のひびきにもあらはれてゐた。この機會を逃がしたら百年目である。

「小父さん、僕はお願ひがあります。」

春樹は帳場の櫓の中から恐る恐る相手の顏を見上げて言つた。他の人たちに偸み聞きされないやうにと、聲は低かつたが、それだけ顏に必死なものが滲み出してゐた。

「何だ？　言つてみろ。」

小父さんは春樹の後斜にぴたりと立ちつくして、今日も客足の目立つ店の方へ顏を据ゑたままだつた。春樹は吃りがちに言葉をつづけた。その間、小父さんの眼と耳を巧みに使ひ分けた不氣味なポオズはくづされなかつた。だが、春樹がやつと言ふべき事を言つて、辛さうに口をつぐむと、小父さん

は一瞬間凄く鳴りをひそめた。小父さんの眼にはきらッと青い火花が散つた。そしてそれがこの人の興奮の頂點だつたのである。

「俺はまた、行く行くはこの店を貴樣にまかせるつもりでゐたのに――」小父さんは崩れて來る感情を繕ふと、今度はまざまざと失望の色を見せて言つた。

「………」

春樹はちらと小父さんの顏を見上げたきり、再びふかく頸垂れてしまつた。彼の下唇には、かすかに紫色の齒形が殘つてゐた。悲壯な感情の花とでもいふべき彼自身の氣づかぬ美しさである。彼の胸は熱く濡れはじめてゐた。小父さんのいつもに變らぬ鷹揚な愛情に觸れ得た刹那の感激が、この店と訣別しようとしてゐる時だけに、一段と强かつたのである。ただ、この實業家のどこにも明徹な叡智の感じられないのが寂しかつた。

「へえ、春樹にも九圓取れるか。」

小父さんは最後に輕い諧謔を弄した。それだけの報酬で『女學雜誌』の飜譯の仕事を手傳つてもらはうといふ、巖本善治の好意に充ちた申し出だつたのである。

翌日、春樹は荷物をまとめて東京に引き上げ、その足で巖本善治の家を訪ねて行つた。主家のある濱町から麴町までは相當の距離だつたが、彼はそれを遠いとも思はずに短い袴の裾をはためかしながら步いた。京橋、日本橋から、芝の一區域、明治學院のあたりへかけては眼をつぶつても步かれるほ

ど街々の様子に通じてゐる彼にも、神田へさしかかるとてんで勝手が違つてゐた。こんなところにも東京があつたかと驚き、忙しく眼を使ふのだつた。

九月下旬の日光は、まだ焰のやうに燃えながらも、しんと深く澄んでゐた。それが行く先々の入組んだ街の景色を奥深くしてみせた。兩側には土藏づくりの薄暗い店がならび、軒先にかかつた紺暖簾の下から、丹念に石油ランプのほやを磨いてゐる小僧の姿が見えたりした。今川小路と九段下との間を流れる堀割の水は蒼白く澱んでゐた。やがて天地に漲らうときほひ立つ秋色を奥齒で吸ひたいほど手近に美しく眺めながら、俎橋を渡り、坂をのぼつた。彼は少し息切れがして來た。一里や二里の道は平氣で步いてのけられる健康體なのだが、さすがに今日は興奮して、心臟が銳敏になつてゐたのである。

富士見町。上六番町。中六番町。それが盡きた所からが下六番町で、そこの六番地、有島邸のすぐ隣に巖本善治の經營する明治女學校があつた。門を入ると、中央に木造の校舍があつた。それを取卷いて、長屋のやうな建物の寄宿舍、獨身教師や校長の住宅が、適當な間隔を置いて並んでゐた。

丁度學校も退けた時刻で、春樹はすぐ應接間に通された。それは閑靜な日本間で、中央に大きなテエブルが据ゑてあつた。和服にくつろいだ巖本は、自分からまづ椅子にかけ、威嚴のあるなかにも濃やかな感情を滲ませた、ふさふさと長髯を垂らした顏を春樹の方へ振り向けて、

「どうぞおかけなさい。」

と言つた。どこか沈痛なひびきのある聲だつた。
三年前木村牧師の家で初めて巖本の體臭に觸れた時の印象が、春樹の頭にいきいきと浮びあがつて來た。それが微塵も遠々しい幻想的な感じをふくんでゐないのは、二度目に見る現實の巖本が以前とちつとも變つてゐない證據だ。クリスチャンとしての勁い信念と、日常の藝術的嗜好とが、冷酷な時間の刻みつける醜い斑痕を見事に克服しつつあるのである。だから、血色もすぐれてゐた。もしこの世に、壯年期の男性美を悉く一身にあつめ、自分ではそれを意識せずに、晝も夜も燦然と耀いてゐる人があるとすれば、それがこの人ではあるまいかと思はれた。
「嘉志さん！」
巖本はちよつとうしろに體をねぢつて、茶の間にゐる妻を呼んだ。その口調は友人に對するやうな親しみを含んでゐた。クリスチャンの家庭に限られた、どこかモダンな感覺のある室內風景を春樹は目のあたり見たと思つた。
やがて茶盆をかかへてテエブルの側へ近づいて來たのは、春樹が初めて接するひとで、小高く束ねた髮に紅い薔薇の蕾を挿してゐた。いま『女學雜誌』にバアネット女史原作の『小公子』を連載して若いひとびとの血をわかしてゐる若松賤子である。嘉志子といふのは彼女の本名だつた。
一つ二つお愛想を言つて、彼女は再び奧へひつこんだ。
「それでは、これを譯してください。」巖本はアディソンの『母のまぼろし』の原書を取り出して來て

言つた。「出來たら、『女學雜誌』に載せませう。」

春樹は本を受け取つて、得がたい品を授かつたやうに、飽かずに打ち眺め、ぱらぱらとペエジをめくつた。

「それが濟んだら、セエクスピアの『ヴィナスとアドニス』をお願ひしませう。セエクスピアのものはずゐぶん飜譯されてゐますが、これはまだどこにも出てゐませんからね。それに內容も若い人に向いてゐるし――」

春樹はぺこりと上半身を屈めて、かしこまりました、といふ意を示した。

巖本の胸は、この青年の端麗な容貌からも來る末たのもしい思ひで愉しくふくれあがつてゐた。飜譯には語學の力と同時に文章の書けることが必要條件だが、その事についても、この青年から今度初めてもらつた手紙の、劃を亂さない文字のかたちと、どこか莊重なひびきのある文句とによつて、安心していいやうな氣がした。

厭世詩人

一

『女學雜誌』は明治十八年七月の創刊で、毎月二回發行、最初の編輯者は近藤賢三といふ人だつた。それが巖本善治の手に移つてからは面目を一新した。第一、白地に赤で標題をあらはした表紙が自由と清純に生きようとする若い女性の感覺とぴつたりしてゐた。編輯者としての狙ひはいふまでもなく廣汎な女學生層に喰ひ込むことであつたが、男の讀者も相當についてゐた。

硯友社の機關雜誌『我樂多文庫』（後に『文庫』と改題）は既にあとかたもなく消え去り、最初山田美妙が編輯の任に當つてゐた『都の花』、森鷗外主宰の『しがらみ草紙』も、文壇的にはともかく、社會的にはさう勢力のある雜誌ではなかつた。

當時、發行部數の上で一番驚異の的となつてゐたのは、何といつても民友社發行の『國民の友』だつた。主宰者德富蘇峰の革命的な思想、平民主義の色彩を橫溢させた、體裁も淸新で潑剌としたこの雜誌は、純文學にも力を入れてゐた。この方面での呼びものは、春夏二期の附錄だつた。

かうした『國民の友』と對抗したい氣持もあつて、巖本善治は『女學雜誌』にも文藝欄を設け、その執筆者にはおもに文壇の新人を選んだ。

文壇は、ほとんど、『讀賣新聞』の文藝欄を擔任してゐる尾崎紅葉の勢力下にあつた。だが、そろそろ機は熟して、新人出でよ、といふ叫び聲が、どこからともなく起つてゐた。巖本善治は、それに耳を貸したのである。

文學の平野のまだ耕されない、希望の焰に漲つた部分——それを目ざして飛び出さうとするやうな

衝動が、ときどき春樹の中に起つた。

若い魂はもやもやと醱酵し、外部に向つていくつも鎌首のやうに紅い芽をもちあげる。性格はまだ決定しない。生の道が不安だ。行く手に暗い壁があり、それがやつととりのけられたかと思ふと、また別の壁があらはれる。そこからむかむかするものと無限の憂苦が涌きあがつて來る。

彼は、一週間くらゐ間を置いては、同じ道を辿つて巖本善治の家へ通つた。いつ來るとも知れないやうな遠い先の方にある春——毎日怠らずに仕事をしだしてからは、ほんとにそれが待たれた。

だが、この遠いものへの期待はさほどその內容を明かにしてゐたわけではない。內部から芽ぐんで來て、伸びよう伸びようとしても、容易に伸びられないものに對しては、つかみどころのない幻か、輪郭のぼやけた影繪が與へられるに過ぎない。だが、旺盛な生長の過程にある、暗鬱な、熱情的な青春にとつては、定かなものはむしろ副次的である。定かならぬものにこそ、若々しい自我は魅力を感ずるのだ。

かうして明治二十五年の二月が來た。濱町の家では、春樹はたとへ僅かでも食費を入れはじめたので、今までのやうに玄關番としてばかり取扱はれず、留守を預かるおばあさんから玄關の次の茶の間をあてがはれ、それに机と本箱を移してゐた。一つだけ格が上つたのである。物質の力はそれほど直截明瞭である。春樹は何だか佗しかつた。

或る日、彼は肩先にせまる、じいんと底冷えのした寒さも忘れて、机にしがみついてゐた。

「お前さん、お茶がたちましたよ。」おばあさんが次の間からちよつと顏をのぞけて呼んだ。「そんなに肩を立てて、何を讀んでるの？　體に毒だよ。」
「ええ、只今。」
彼はしかし、それからもなかなか腰を上げようとしなかつた。
歷史的な瞬間——人間の生涯には、とても感度の高い、といふだけでなく、もつと重大な、體ごと浚はれて行くやうな瞬間が時々あるものである。そしてそれがいま春樹の上に訪れて來てゐるのだつた。彼の黑い眸は、全身の戰慄感を漲らせて、昨日巖本善治の家からもらつて來た『女學雜誌』の「厭世詩家と女性」といふ文章にぴたりと吸ひついてゐた。その筆者は、北村透谷——春樹が初めて目にする名前だつた。

二

「戀愛は人世の祕鑰なり。戀愛ありて後人世あり。戀愛を抽き去りたらむには、人世何の色味かあらむ。」
北村透谷は先づかういふふうに書き起してゐた。白地に赤で標題を拔き出した、この雜誌の表紙にふさはしい甘さと解するにはあまりに大膽な放言である。この雜誌がひそかに持ち込まれるどこの家庭にも、長上の威嚴と利益を保つことさへ出來れば、子供の戀愛を踏みつぶすくらゐは何とも思はな

い、硝子玉のやうに硬化した眼が不氣味に光つてゐる。透谷の文章には、それに挑みかかるやうな痛烈さがあつた。

「思想と戀愛とは仇讐なるか。安んぞ知らむ、戀愛は思想を高潔ならしむる慈母なるを。エマルソン言へることあり、尤も冷淡なる哲學者と雖も戀愛の猛勢に驅られて逍遙徘徊せし少壯なりし時の靈魂が負うたる債を濟す事能はずと。戀愛は各人の胸裡に一墨痕を印し、外には見ゆ可からざるも終生抹する事能はざる者となすの奇跡なり。然れども戀愛は一見して卑陋暗黑なるが如くに、其實性の卑陋暗黑なる者にあらず。戀愛を有せざる者は春來ぬ間の樹立の如く、何となく物寂しき位地に立つ者なり。而して各人各個に人生の奥義の一端に入るを得るは戀愛の時期を通過しての後なるべし。夫れ戀愛は透明にして美の眞を貫ぬく。戀愛あらざる內は社會は一個の他人なるが如くに頓着あらず、戀愛ある後は、物のあはれ、風物の風景、何となく假を去つて實に就き、隣家より我家に移るが如く覺ゆるなれ。」

透谷はかうも書いてゐた。福澤諭吉、森有禮、黑岩淚香、等々のやうな、男性の解放せられた地位と比較して、一般女性の暗黑な奴隷的狀態を改良しようとする啓蒙主義的なフェミニストと違ひ、透谷は思惟の窮極の對象を人生に置き、その人生に最高の色味を與へるものとして戀愛を見てゐるのである。戀愛は、苦しまぎれに毒杯をつかむかのやうな精力が若い肉體に咲かせる一時の花ではないのだ。春樹は常々自分が考へ、感じてゐる事が、そのままここに言ひつくされてゐるかと思つた。彼の

體は顫へた。それを抑へ抑へ、彼は更に次の節に熱い眸をさらした。
「戀愛は剛愎なるバイロンを泣かせしといふ微妙なる音樂の境を越えて擴がれり。戀愛は細微なる美術家と稱へられたるギヨオテが企つる事能はざる純潔なる寶玉なり。彼の雄邁にして輭優を兼ねたるダンテをして昊天高上に絕叫せしめたるも其最大誘因は戀愛なり。彼の痛烈悲酸なる生涯を終りたるスウイフトも戀愛に數度の敗れを取りたればこそ彼の如くにはなりたれ。嗚呼戀愛よ、汝は斯くも權勢あるものながら爾の哺養し爾の切に需めらるる詩家の爲に虐遇するところとなる事多きは如何に慨歎すべき事ならずや。」
透谷はかうも云つてゐた。外國文學に關する教養の點でも自分と一致したものがあるのが感じられて、春樹はうれしかつた。
「合歡綢繆を全うせざるも詩家の常ながら、特に厭世詩家に多きを見て思ふ所なり。抑も人間の生涯の思想なるものの發芽し來るより、善美を希うて醜惡を忌むは自然の理なり。而して世に熟せず、世の奧に貫かぬ心には人世の不調子、不都合を見初むる時に初理想の甚だ齟齬せるを感じ、實世界の風物何となく人をして慘憫たらしむ。知識と經驗とが相敵視し、妄想と實想とが相爭戰する少年の頃に浮世を怪訝し厭嫌するの情起り易きは至當のものなりと云ふ可し。人生れながらにして義務を知るものならず、人生れながらに德義を知るものならず、義務も德義も雙對的のものにして、社會を透視したる後、『己れ』を發見したるの後に始めて知り得可きものにして、義務德義を辨ぜざる純樸なる少年

の思想が始めて複雜解し難き社會の祕奥に接する時に誰れかよく厭世思想を胎生せざるを得んや。誠信は以て厭世思想にかつ事を得べし。然れども誠信なるものは眞に難事にして、ポーロの如き大聖すら、嗚呼われ罪人なるかなと嘆じたる事ある程なれば、厭世の眞相を知りたる人にして、これに勝つほどの誠信あらん人は凡俗ならざるべし。」

讀めば讀むほど、春樹は日頃の落ちつきを失つて、もりもりと高まる興奮の中に體ごと引きずり込まれた。そこには何かしら病的なものがあり、暗い神經があり、平俗を許さない高邁な精神があつた。これほど自分と似通つた經驗と資質をもつて文學の道を邁進しつつある人がほかにあらうかと思ひ、春樹はまだ逢つたこともない人に不思議な親和を感じた。いや、それは親和といふよりも、悲劇的な酷烈な心の戰ひをくりかへしてゐる人への傾倒だつた。かういふ人の深刻な經驗とくらべると、春樹の背負つた運命の暗さはまだ甘かつた。

「婚姻と死とは僅に邦語を談ずるを得るの稚兒より墳墓に近づくまで人間の常に口にするところなりとはエマルソンの至言なり。讀本を懷にして校堂に上るの小兒が他の少女に對して互に面を赧うすることも、假名を頼りに草紙讀む幼な心に旣に戀愛の何物なるかを想像することも、みな是れ人生の順序にして、正當に戀愛するは正當に世を辭し去ると同一の大法なる可けれ。戀愛によりて人は理想の聚合を得、婚姻によりて想界より實界に擒せられ、死によりて實界と物質界を離脫す。抑も戀愛の始めは自らの意匠を愛するものにして、對手なる女性は假物なれば、よしや其愛情益々發達するとも、

遂には狂愛より靜愛に移るの時期ある可し。此靜愛なるものは厭世詩家に取りて一の重荷なるが如くになりて、合歡の情或は中折するに至るは豈惜む可きあまりならずや。」

彼は透谷といふ人の容貌を想像してみた。未知の、それでゐて心から共感の出來さうな人の額や唇を頭に描いて、その匂やかな影像を愛撫するくらゐ愉しい事はない。それは、耳朶の紅い少年が買ひたての石盤に薔薇の花を描いたり消したりして、體をふるはせながら單純で素朴な形象感覺に陶酔してゐるのに似てゐた。

彼の興奮は、退くかと思ふとまた強くうねりあがつた。

だが、彼はふと、自分のつくりあげた影像が極めて暗い蒼白いものであることに氣づいた。その上、薔薇の花などに見られない一種の辛さをそれは持つてゐた。

とはいへ、この影像はまんざら花に緣がないわけでもなかつた。その傍に、一人の氣高い婦人が坐つてゐるのである。彼女は男の單なる補色ではなささうだつた。しかしまた、双方の間に積極性のある深い愛情がひたひたと湛へてゐるかどうかは、とても豫斷を許さなかつた。彼の頭には、結婚生活への悲觀的な見方、「靜愛」といふ文字のうしろに光る悩ましげな眼が、こびりついて離れないのである。その眼が、二元論的に想世界と實世界とを對立させて、その間に板挾みにされてゐるらしいことも氣になつた。

三

北村透谷が初めて巖本善治を訪ねて來た時、透谷は紹介狀の代りに、前の日に書きあげたばかりのまだ墨の色も乾かない論文の原稿を朗々とした聲で讀んで聞かせた。それは「二宮尊德翁」と題したもので、「厭世詩家と女性」より少し前に、やはり『女學雜誌』に掲げられた。

この「二宮尊德翁」は、透谷が公の舞臺に發表した最初の論文だつた。小田原に生れた透谷としては、同鄕の偉人に對する思慕の情もあつたであらう。だが實際は、自由民權運動が終りを告げると同時に澎湃として襲うて來た政治の腐敗、社會生活の卑俗化に對する激昂から、尊德の頌德表を藉りて痛烈な社會批判をやつてのけたのである。

その頃、北村透谷は、芝公園地三十號の、樹木の多い小さな家に住んでゐた。春樹はそこに訪ねて行つて、現實の透谷のいきいきした心臟の脈搏に觸れてみたいと思つた。が、いざとなると、生來の臆病さからどうしてもその方へ足が向かなかつた。透谷を掩ひ包んでゐる陰慘な精神の美がなぜから自分を魅するのかと冷やかに反省することもあつたが、そのあとから忽ち思慕の情が涌きあふれる。彼は、それを抑へ抑へして毎日飜譯の仕事をつづけた。

すると或る日、巖本善治の家でやつとその透谷に逢ふことが出來た。例の應接間の大きなテエブルの前で、二人は相對したのである。その時、透谷は二十五歲、春樹は二十一歲だつた。透谷は薩摩絣

か何かの袷に羽織の着ながしで、骨張つた皮膚にぴたりと喰ひついた白いシャツの襟が少し垢づいてゐた。痩せ型で、髪が濃く、男らしい眉と眉の間には、暗い纖い神經があふれてゐた。過去の複雜な歷史がその底に喪章のやうに深くたたみ込まれてゐるかと思はれた。だが、春樹の心に一番ふかく喰ひ込んだのは、その眼だ。それは敏捷に動いた。眸は鋭く澄み、その底の方は青い焰のやうに燃えてゐた。たつた一度の接觸で忽ち相手の心を捉へて離さない不思議な魅力がそこにあるのである。しかしまた、常識的なおだやかさを愛する者は、ぢきに肉體的な反撥と嫌惡を感じ出すかも知れなかつた。

春樹は感動でかすかに體がふるへて來るのを覺えた。この自分が相手の眼にはどう映るかと反省すると、一方ではまた恥と哀しみを感じた。だが、透谷の態度には思つたよりも書生流儀にくだけたところがあり、それが、いつとなくこちらのぎごちばつた構へを崩させてくれた。

「君、今の時代をどう思ふ？」

初對面の挨拶が濟むと、透谷はいきなりこんな質問を持ち出した。春樹は少しまごついた。相手の鋭い眸が、突然あふれた政治意識でよけいぎらぎらと耀いて、それに射すくめられたのである。しかしそれは恐怖といふよりも、二人の間が急速に結ばれてゆく、快感の伴つたどぎつい戰慄だつたのだ。

何か言はうとして、一瞬間、春樹は口をもぐもぐさせた。すると、透谷はあとからたたみかけて、

「政府の干渉でこの間の選擧は揉めたが、この次の議會も結局居眠り議會だらう。どうも熱が冷めてしまつた、米と大根の人民はあてにならぬ、ああ眠くなつた、といつた調子さね。」

「………」
「まつたく、つまらぬ社會だよ。女は金に惚れ、男は金にくらみ、快樂は金にある。微妙な思想も金ゆゑなんだ。」
「キリスト教の連中も居眠つてゐますか？」横合ひから巖本が少し皮肉な調子で言つた。
「いや、キリスト教の手合ひは別です。」透谷は少し巖本の方へ體をねぢつて、緊張をゆるめないで言つた。「あの人たちは決して居眠りをしません。いづれ將來、ぢやうぶな人間になるでせう。」
「北村君もクリスチャンなのですか？」春樹は訊いた。
「北村さんは、」と巖本が代つて答へた。「三田聖坂の普連土教會の信者なのです。そして普連土女學校で教鞭を執つてゐられます。」
「なに、それも金のためなんですよ。」
透谷の口のまはりには痛烈な自嘲がきざまれた。
自嘲はこの厭世詩人の鬱結した感情の一つの排け口だつた。「なるたけ怠けろ。なるたけふざけろ。なるたけ笑へ。ある金には封をしてしまつて置け。あたまを下げることを學べ、書物を讀むに及ばず。ころんだら足もとを見るべし。長上が望むごとく馬鹿になれ。死んでも生命のあるやうに心掛けよ。居眠りをしてゐるやうに見せて、目をあけてゐろ。日本食を食ふ味を忘れるな。」
透谷がソロモンの箴言をまねて作つた「十誡」といふのがこれである。かうした皮肉と自嘲を樂し

んでゐられる間は、まだ、どんな厭世詩人にも幸福とあまい安息があるであらう。
透谷と春樹との交際はその日から始まつた。春樹にとつては、この交際は一つの世界だつた。彼はぐんぐんとその中へ入つて行つた。
或る日も、二人は例の應接間で長いこと話し合つた。
「ほう、北村君も泰明小學校へ行つたんですか。」春樹は、愉快な發見でもしたやうに言つた。
「僕の母が、京橋の彌左衛門町の角で煙草屋を開いてゐるので、そこから通つたものさ。弟の垣穗と一緒にね。垣穗は多分君と同級くらゐぢやなかつたかしら。」
「僕の級には、北村といふひとはゐなかつたやうですが――」春樹は古い記憶を掘りかへしながら言つた。すると、透谷は初めて氣づいたやうに、
「さうだ、北村ではわからない。僕の弟は都合で北村姓を名乘つてゐないのでね。――打ち明け話をするやうだが、僕はこの弟に家にある少しばかりの財産を横取りされはしないかと心配して、腦病までやつたことがあるんだよ。馬鹿な話さね。」
代々筋を引くといふ腦病――春樹は家系の暗さは透谷にもあると思ひ、暗然とした。
透谷には既に單行本のかたちで刊行した『蓬萊曲』と題する詩劇の作もあつた。春樹は尊敬の念を深めると同時に、苦しいほど美望を感じた。
「バイロンの『マンフレッド』に胚胎したやうな作だがね、今でも幾分自信がある。」透谷は額をほてら

せて言つた。「そのうちに、讀んでみてくれたまへ。」

明治女學校

島崎藤村

一

春樹が『女學雜誌』に書くものには、目の粗い垣の隙間から容赦もなく他人の感化が流れ込んで、個性がなかつた。殊に、『ヴィナスとアドニス』の飜譯の如きは、文章までまつたく近松張りのものになつてしまつた。それを飜譯する前後、彼は、國文學復興の潮流に乘つて新しく飜刻された近松の諸作を貪り讀んで、強い肉體的な感動から拔け出せずにゐたのである。

だが、他からの感化を一皮めくつてしまふと、その底にはやはり靑年らしいうぶな抒情性がふつくらと盛りあがつてゐた。文章は淸新で、柔軟で、かをりがあつた。それが若い女の讀者に喜ばれた。

或る日、巖本善治が春樹に一つの途方もない話を持ちかけた。巖本の態度は先輩らしく朗かに打ちさばけてゐたが、話の切り出し方がまつたく突然なのだ。春樹は驚いてしまひ、わくわくと胸を躍らせた。彼はしかし、急に姿勢を正した。虛を衝かれたやうなきまり惡さを底にふかく掩ひかくさうとしたのである。

「島崎さんには、丁度いいと思ひますわ。」若松賤子も端からつつましく言葉を添へた。「それとも、おいや？」
「…………」
「娘さんたちが怖い？」
「…………」
「みんなは喜んで大騷ぎをしますわよ。」賤子は今度は腺病質らしい白く透きとほつた顏の筋肉をほそぼそと躍らせて言つた。「だつて、島崎さんはおうつくしいんですもの。」
春樹はさつと紅くなつた。有夫の女はなぜかう厚がましいのだらう。彼は腹を立てようと思ひ、その思ひから唇を噛んだ。さうだ、ま白に磨きあげた香のある前歯で、下唇を。だが、ぢきにそれはほどけて來るのだ。
「では、やつてみます。」彼はやつとそれだけ言つた。
家に歸る途中、彼の頰には、抑へても抑へても甘い微笑がのぼつて仕方がなかつた。
「おばあさん、僕四月から明治女學校へ敎へに行くことになりました。」彼はまづおばあさんのゐる奥の間へ行つて報告した。
「おや、さうかえ。」
おばあさんも、皺の襞をのばして喜んでくれた。「濱の小父さんには、もうお知らせしたかえ？」

「いえ、まだです。これからすぐ手紙を書いて出します。小父さんは、反對せられはしないでせうねえ。」彼は不思議と饒舌になつてゐた。
「受け持ちは何だえ？」
「英語と、英文學の初歩です。」
「學校で習つた事が、かう早く役に立たうとはあたいも思はなかつたよ。」
おばあさんの前から引き下ると、彼は机に向つた。しかし落ちつけず、そのうちに日が暮れた。彼はおばあさんと二人で膳に向つた。
「なんだか、冷えて參りましたわね。」
給仕盆を持つて側に控へてゐる女中が、庭に面した方の、冷やかに青白んで來た障子にちよつと眼をやつて言つた。おばあさんは、しかし、それには耳を貸さないで、
「だけど、女の兒を敎へるといふのが、あたいには少し氣に入らない。」
春樹は覺えず箸をとめた。おばあさんの言葉には、ひとりで考へ拔いた末の練れた感情がきつく裏打ちされてゐた。人間が柔弱になる、といふ懸念も彼女にはあつたらう。しかし、もつと彼女が胸の内に鳴りひびかしてゐたのは、勁い道義的觀念なのだ。
同じ道義的觀念は春樹にもあつた。涌き立つ青春の情熱に身を託さうとして託せないのも、そのためなのだ。形のない、漠然とした哀歡のはげしい波立ちは、やがて訪れて來る春の嵐の前奏曲のやう

な氣がしながらも、冷たい道義的觀念がそれを堰かうとする。そこから生れる內部的な自虐。一方では、衣食のための苦しい營み。おばあさんは、しかし、その營みの中にこそ青年の危險を豫感したのである。

「尤も、それもお前さんの心掛けひとつだがね。」彼女は顏の緊張をゆるめずに附け足した。

彼は辛さうにだまつてゐた。おばあさん、霜燒けが痛い、などと甘えた子供の時分から世話のやかせ通しで、夜每に汗と脂でねつとりと寢卷を濡らす若い肉體の祕密まで彼女は知り拔いてゐる。彼は、おばあさんの眼が恐ろしかつた。

そこで彼は女の兒なんか輕蔑してかからうと思つた。それはおばあさんに牽制されてのどこか論理的な匂ひのする決心だつた。しかし、かうした決心は、純粹に非物質的な狀態にある限り、全くの作り事になつてしまつて、彼女を安心させることは出來ないであらう。彼女の危懼は詮じつめると彼が立派な男前の青年であることに源を置いてゐるのである。

彼は每日自分の擧動に氣をつけた。おばあさんはいふまでもなく、氣の置けない女中の前でさへ、浮華な心は見せまいとした。かういふ時には、自分のあらゆる行爲を一定の尺度に合せて剪みそろへるのが一番いいのである。彼はそれを實行した。實行してみると、さうした堅苦しい枠の中での生活も存外愉快だつた。彼は尺度といふものの美しさを知つた。

時々、兄が來たり、横濱の小父さんが問屋廻りを兼ねて樣子を見に歸つて來たりするくらゐのもの

で、廣い家の中は晝でもしんとしてゐた。部屋々々の調度にはものさびた光澤があり、そんなものと親しむときだけ彼は心の構へを忘れることが出來た。

「それでは、着て行くものでも用意してあげませうかね。」

おばあさんはさう言ひ、自分で吳服屋へ出向いて行つた。春樹はそつと眼がしらが熱く濡れて來るのを感じた。頑固できびしくても、彼女の心の層の一番奧には、やはり女らしい愛情が湛へられてゐるのだ。

新調の羽織と袴とがきちんと折り目をつけて彼の前に置かれた頃、一度淡い春の雪が來た。庭はま白になつた。だが半日で溶け、そのあとへ樹々の芽がどつとふきあがつて來た。間もなく花と嫩葉の世界であらう。晝前から降り出した暖かい雨の音を聞きながら、彼は、初めて女學校の教壇に立つ日のことを愉しく想像した。

二

教員室の前から、二階の教室へ通ずる階段の下あたりへかけて、長々と廊下が續いてゐた。朝の七時半。春樹は包を抱へ、胸を張つてそこへさしかかつた。そして教員室はどこかと、見苦しくまごついてゐるところへ、

「島崎先生！」

ふつくらと髮を束ねて、思ひ思ひの服裝をした少女たちが、ぴんと張りのある健康色の顏を一齊にかがやかしながら語尾の長い甘つたれ聲で左右から寄つて來た。彼が日頃から裏の校長の住居に出入りしてゐたのを遠くから眺めてもうちやんと顏を見憶えてゐたのだ。
彼女たちの中には、教師としての彼と同じ年頃の者や一つ二つ年上の者もゐた。それだけでもう壓倒されだして彼はゐたのだが、そこへだしぬけにみんなで金切り聲をあげて包圍して來たので、彼は度膽を拔かれた。リボンと、うぶなニキビ臭い顏、顏、顏に眼がくらみ、一瞬間視野が白くなつた。
「ああら、ふるへてゐらつしやるわ。」
やうやく重い微笑を返すことが出來たと思ふと、今度はうしろの方で生意氣な兒が揶揄したのである。それはしかし、怯えて過敏になつた神經の尖端にふつと起つた妖しい幻想だつたかも知れない。さうだとよけいやりきれないと思ひ、彼はあぶくやうな思ひでみんなの間をすり拔けた。だが、生徒は行く先々に垣をつくつてゐるのだ。足音に彼女たちは道をひらく。ひらくが、今日から教壇に立つ美しい先生だと知ると、きゆうツと締めてやりたいほどの白い頸をのばし、がやがやと再び寄りついて來る。
「あのね、先生、あたしたちの組には、ヴィナスのやうな方がゐらつしやるのよ。」
「ねえ、先生、ハムレットとオフエリヤのお話をしてね。オフエリヤのやうなひとだつて、ゐるのよ。」

「オフェリヤは、どんなリボンをつけてゐたんですか？　あたしが先生に教はりたいのは、それだけなの。」

だが、これも過敏な神經が勝手にぶちまいた一時の幻聽だつたのである。

教員室は中庭に面してゐた。巖本善治の口添へで、春樹は男女の教師仲間に紹介された。

「星野君です。」

最後に、巖本は、少し長めにした艶のいい髪をかまはずかき上げてゐる教師の前に春樹を連れて行つた。北村透谷と並んで、『女學雜誌』に、幾分生硬な、東洋趣味の勝つた文章を書いてゐる星野天知だ。

天知は、巖本と二人で、全國のキリスト教主義の女學校にわたりをつけて、『女學生』といふ雜誌も出してゐた。彼の家は日本橋區本町四丁目にあつた。店員の十五六人もゐる、古風に張見世を出した砂糖問屋だつた。

「あまい御商賣のくせに、こんなのないわ。」

いつも黠が辛いので、生徒たちは剽輕な調子でこぼしてゐた。

だが、天知には良家に生れた人でなければ見られない鷹揚な神經があつた。感情も豐かだつた。透谷よりも幾つか年上で、座禪でも組んだやうな落ちつきがあり、それが彼の場合には却つて若さの補色になつてゐた。この人とならじつくり親しめさうだなと思ひ、春樹は初對面の挨拶を濟ましてから

も何だか心の内が愉快だつた。
かうして、春樹の教師生活は始まつた。
明治女學校の校則には、職員會議に生徒代表が參加できる權利と、生徒會議でこの學校の教育方針や教授内容を批判していい自由とが加へてあつた。こんな民主的な女學校は今までなかつた。文學會や「マリヤの友」(慈善團體)の活動も、彼女たちの視野をぐんぐんひろめつつあつた。
國粹運動の波はすでにこの時代の文化や教育を色濃く染めあげてゐたが、この女學校には、封建主義への無條件の讓歩は見られなかつた。いや、そればかりではない。女性の開放、女性の自由といふ新しい思想が、下駄や草履で踏みかためられた校庭に、燎爛と紫の花を咲かせてゐた。「新しくて堅實な女性」といふのが、彼女たちの合言葉だつた。
學年は普通科と高等科に分れてゐた。春樹は高等科の受け持ちだつた。
濱町の家から通ふのでは少し遠すぎたので、彼は牛込のやや傾斜になつた閑靜な街のほとりに下宿した。そこから學校までの距離は、强健な彼が徒歩で往復するのに適してゐた。崩壞した見付の跡らしい古い石垣に沿うて濠の土手の上に出ると、綠の芝草の中に長く小徑が續いてゐた。松の樹蔭が多く、濠を越してすぐ向うにひらけた市ケ谷一帶の眺望も惡くなかつた。春はもう花から嫩葉へと急ぎつつある時分である。彼の暗澹とした心も、やがて夜明けを迎へ、嫩葉のかをりに包まれるであらう。
衣食のための營みも、この調子だと、さう苦しくない氣がする。その餘暇で自分の藝術を育てあげる

ことこそ、眞の勞苦に價する仕事ではあるまいか。それ一つに精神をこめてゐれば、年上の生徒でも何でも恐れることはない。自分の敎へる相手の生徒はいづれも若い女であるが、それが何だ？

時間が來て敎壇に立つと、彼はまづ敬虔な態度で神に祈をささげた。

「あれ、惡魔祓ひよ。」

うしろの方の席で、今紫のリボンをつけた、眸のあかるい少女が、意地惡な調子でそつと隣の生徒に囁いた。みんな殊勝げに頭を垂れ、敎室ぢゆうしんとひそまりかへつてゐたが、一瞬間そのあたりに「シッ！」と制するやうな氣配が起つた。春樹はちらとその方へ視線を投げた。が、再び卓の上に顏を戻し、ぽつりぽつりと講義を始めた。彼の話しぶりは靜かで、眞面目で、年齡を感じさせない一家の風があつた。

彼は時々變な咳拂ひをした。講義の進行と共にぐいと體內に高まつて來た匂ひのきつい熱情を、それによつて抑へようとしたのである。しかし、時には何としても抑へきれないことがあつた。彼の眸はきらきらと耀き、聲は顫へた。

みんなは鳴りをひそめて傾聽してゐた。例の小意地の惡い少女さへ、今は身じろぎもしないで双の眸をぴたりと分厚な教科書に吸ひつけてゐた。

この少女が頭髮に結ひつけてゐるやうな今紫のリボンは、まだ他にもいくつか見られた。今紫といふ色は、この時分の一番モダンな女たちに愛せられたたつた一つの尖端色だつた。今紫のリボンを用

ゐる以上、當然羽織もそれと同じ色合ひのものを選ばなければならなかつた。それが彼女たちの誇る新裝だつたのだ。だが、ここの高等科二年生の教室で、今紫のリボンをつけてゐる者らは、羽織はそれぞれ別の、あまり目立たない色合ひのものを裝つてゐた。上級生の眼を恐れる彼女たちの哀しいモラルでそれはあつたのである。

酒

一

六月近くなつて、北村透谷は芝公園から高輪東禪寺の境內へ引越した。東禪寺といへば、春樹たちの學んだ明治學院の近所である。

或る日曜日の午後、春樹は愉しい思ひで、まづ、築地の木挽町に住んでゐる戸川明三を訪ねた。東京の咽喉部を占めて殷賑を極めてゐた築地も、二三年前東海道線が全通してからは、際立つて寂れて來た。街々にはいやに白つぽい風が吹いてゐた。

戸川明三の家は、下宿屋だつた。二階づくりで、構へが立派だつた。玄關の格子戸をあけたてする音にも、家庭の空氣を思はせるやうな爽かさがあつた。土地の頽勢もこの家だけは素通りしてゐるの

である。

「君、おばあさんに會つてくれたまへ。」

明三は母の死後自分の養育に專心してくれた老齡の祖母にまづ友人を引き合せた。

他人の家で成人し、體の構へを崩すと、そこからどつと冷い風が吹き込んで來るやうな氣がして仕方のない春樹などから見れば、母は缺けてゐても、明三ほど幸福な者も少ない。彼の身邊には、いつもあたたかい空氣の層があつた。そればかりではない。そこには磁器のやうに洗はれた、心をうつ色彩や香氣が漂つてゐた。この家には大勢の美しい從姉妹が同居してゐるのである。

二人は、茶の間の橫の小廣い部屋で話し込んだ。

「早いものだね。學校を出てからもうそろそろ一年になる。」

明三はさう言つて、卒業間際に撮つた寫眞を取り出した。そこには、明三と春樹のほかに、馬場勝彌ともう一人の學友とが、單衣に兵兒帶といふ姿でくつきりと浮びあがつてゐた。

「この家に朝鮮の名士が下宿してゐるがね、」と明三は言つた。「その人にこの寫眞を見せたら、一番馬場君を褒めたつけ。この人は出世しさうだ、と言つてね。」

その馬場勝彌は、少し股を開いて椅子にかけ、膝の上に無造作に兩手を置いてゐた。みんなより一つか二つ年長であるだけに落ちつきがあり、恰好よく結んだ唇にも精神のゆとりが感じられた。自由黨の鬪士で、文筆家で、四年前米國で客死した馬場辰猪は、勝彌の兄にあたる人だが、朝鮮の名士は

そんな事情にまで通じてゐたとは思はれなかつた。

「これを見ると、僕もずゐぶん面白く撮れてるぢやないか。まるで山賊だ。」と明三は濃い眉を動かして笑つた。ぢか焼けのした餅のやうに、上ッ皮は焦げて柔かいが、芯が固い、といふのが家系を裏づけた彼の性格だが、ここでは、黒い合せ蓋の向うにあるレンズに射すくめられてかたくなつた刹那、不覺にも奥の强情なものが支へを失つて、丸出しに出て來たのだ。

「まさか――」

春樹も笑つて言ひ、言つたあとで自分こそ山賊のやうだと思つた。髮は濃くて、憂鬱で、まるで百日鬘だし、眼は狂氣じみてゐる。彼は見るさへ厭はしかつた。

明三の話には、横井小楠の甥に嫁いで早くから未亡人になつた叔母、横井玉子の噂も出た。賢婦人型のひとで、今はこの同じ築地にある女子學院の舍監をしてゐた。明三の從姉妹の中には、女子學院や横濱のフェリス女學院を既に卒業した者もあり、まだ寄宿舍で思春期の過剩な情感と戰ひながら一心に勉强してゐる者もあつた。かなり大きくなるまで彼女たちと平氣で一緒に寢たといふ明三の、さうと意識しないエロチシズムは、むしろ開きかけた魂のあまい糧だつたのではあるまいか。

春樹が身を置いてゐる濱町の家では、ひどく厭がられてゐる聖書の朗讀や祈禱や食前の感謝も、ここでは家庭の行事であり、規律であり、心を淨めるための精進だつた。學校にゐた時分、春樹と同じく高輪教會で洗禮を受けた明三の信仰生活は、今もごく自然な過程を辿つてゐたが、それもかうした

家庭的背景と考へ合せれば何の不思議もなかつた。

やがて、春樹は先に立つて玄關を出た。愉しい歩行への期待で、足の筋肉がぴちぴち跳ねてゐた。

「明ちやん、お出かけ？」

十六七の、薔薇色の頬をした少女が、ばたばたとあとから追ひすがつて來た。「どこへ？」

「ああ、ちよつと高輪の方へ。」明三は下駄を突つかけながら言つた。

「歩いて？」

「さうさ。俥などに乘られやしない。」

日はまだ高く、底の白けた厭な風は少し衰へてゐた。行く先々の街には、濃い青葉の匂ひがむんとこもつてゐた。それが感情をかき立てた。二人は、初めて連れ立つて訪ねて行く新しい友人への思慕の奔流に乘つた。二人の頭には、あの友人の限りない叡智にかがやく顏がいきいきと描き出されてゐた。春樹の紹介で、戸川明三もう透谷と知り合つてゐたのである。

「北村君のやうな人さへ、宣教師の手傳ひなんかしなけれやゝつてゆけないのかねえ。」春樹は嘆息するやうに言つた。

「普連土教會で出す雜誌の編輯などもやつてるやうだね。」

「あの教會の、最初に日本へ渡つて來た宣教師――ほら、あれは何とか云つたつけ。」とちよつと考へて、「さうだ、コオサンド。そのコオサンドのところへ通つてゐた頃には、まだ珍しくて、飜譯の仕事

をあてがはれても、わりに樂な氣持でやれたと言つてゐたけれど、霞町のイビーとかいふ宣教師の家へ行きだしてからは、速記はやらされる、タイプライタアはたたかされる……」
「でも君、ああいふ人がタイプライタアをたたくところを想像するのは、ちよつと愉快ぢやないか。」
當時、日本人でタイプライタアの打てる者は、ほんの數へるほどしかゐなかつた。
「母親とさへ仲が好ければ、北村君もそんな事はしなくて濟むんだらうがねえ。」
春樹はひどく感傷的になつて來た。「北村君に言はせると、お母さんといふひとは、おそろしく神經質で、男まさりと來てる。弟の垣穗君も、この頃はすつかり商賣人じみて來て、北村君と合はないんだつてね。考へると、氣の毒だな。」

二

名刹東禪寺は、境内が廣く、鬱蒼とした大樹が重なり合つてまるで深山の趣きがあつた。その一角の、うしろに老杉を背負ひ、前に花畑を受けた僧房の一つを、透谷は仕切つて借りてゐるのだつた。
「僕のところでも、子供が生れたよ。」
春樹と明三のほのかに汗ばんだ顏を例の敏捷な眼にすくひ入れると、いきなり透谷は言つたのである。「さあ、上りたまへ。今日は誰か來てくれさうな氣がして、仕方がなかつたんだよ。」
二人はしかし、ばつの悪いところへ來合せたと思つた。

「美那子。」

透谷はそわそわと次の部屋の方へ行つた。そこが產室だつた。赤ん坊と一緒にこもつたきり、起きあがることも出來ないでゐる妻の美那子が、客の氣を惡くしてはと、つつましく氣を揉んでゐるらしい氣配がした。それが納まる頃には、透谷もどうやら落ちついて、客と相對してゐた。

「女の兒ですか？」春樹が訊いた。

「うん、女の兒なんだ。僕も初めて親父になつて、妙な氣がしていけないよ。英（ふさ）といふ名をつけてみたが、どんなものだらう。」

「ふうちやん――いい名ぢやありませんか。僕は好きだな。」明三が言つた。明三の顏には、家庭で女にばかり取卷かれてゐるひとの、あたたかい、纖細な神經があふれてゐた。

透谷は側に置いてあつた刻み煙草の袋を引き寄せ、それを銘豆煙管につめては喫つた。春樹も明三もまだ煙草を喫はず、話のとぎれ間には、前の花畑へ眼をやつた。花花の色や形は、しかし、なぜかう淡白なのであらう。二人は幾度もそつと產室の方を見た。そこの襖に、ほとんど原色のきはどい幻が塗りたくられてゐるのである。墨繪の水禽さへ、黃色い嘴をもちあげて、脂肪の塊を咥へてゐるみたいだ。

だが、それにしても、透谷がここにくりひろげてゐる家庭の現實は何であらう。

處女の純潔こそ、彼にとつては思慕の最高の對象である。彼はそこに自由と永遠の象徵を見た。彼

は物に感ずることが深く、悲しみに沈むことも尋常でないが、また美しいものに意を傾けることも人並み以上である。これは物を通じ形を穿つてその心髓に徹しなければやまない熱意から來てゐる。ここにはバイロンはなく、むしろプラトン的だ。更にレオパルディーやノヴァリスなどのうぶな浪漫主義があつた。

「戸川君はいいな。」ふと透谷が言つた。明三の體をふつくらと包んでゐる靜和なものに、急に醉つて來たやうな口吻で。

「實際、戸川君はいい。」透谷は激情に驅られ易い自分の性質を痛むやうな調子で再び言つた。「僕などは、冷汗の出るやうな事ばかりやつて來たんだからね。」

「まつたく戸川君はいい。」春樹も調子を合せた。二人で相對してゐる時にはそれほど目につかない人好きのする良い性質が、かうして一枚透谷を加へると、よけい際立つて來るのだつた。

「肥後のやうな南の國には、さういふ人が多いのかも知れないな。」と透谷。

戸川明三は、熊本縣玉名郡岩崎村に生れた人なのだが、透谷の生地小田原にしても、肥後と對蹠するほどの北國とはいへなかつた。

「厭だなあ、何だか僕ばかり褒められて。」明三は少女のやうに羞んだ。

「なにしろ、君、僕などは十四でもう政治演說なんかやつたんだからね。」透谷は自嘲で口をゆがめて言つた。「そんなませた少年がどこにあらう。」

この話は春樹には初耳だつたが、十六歳の時ヂスレイを夢見て切なく身もだえした憶えもあるだけに、他人の話を聞くやうな氣はしなかつた。

透谷が十四歳の時といへば、明治十四年である。自由民權運動の波浪はうねり高まり、それが、數寄屋橋際にある泰明小學校の赤煉瓦にも、幻のやうなしぶきを飛ばしてゐた。文章や議論が好きで多くの教師から寵愛せられてゐた透谷は、自負と野心に驅られて、自由黨の脈を引く青年黨に參加してしまつた。そして或る日、たうとう細長い、爪の透きとほつた體を公の壇上に運んだのである。たるみのない、きんきんひびくやうな聲で二十分ばかりまくしたてて壇から引き下つたとき、場內をゆるがすやうにして起つたあの拍手の音――それは今もまだいきいきと彼の耳に殘つてゐる。翌日の『明治日報』は、機敏な報道をかかげて、奇童とまで讃へた。奇童といふ言葉は、胡椒のやうに彼の頭を熱した。彼は、始末の惡い毒を呷らされたのである。

明治十七年から二十年へかけては、彼の暗黑時代だつた。彷徨。政治的野心。グランド・ホテルのボオイ。商法の失敗。ガイド。小間物の行商。だが、この期間にこそ、今日の透谷は、しつかりとつくりあげられたのだ。話は、大阪事件と關聯してゐる。

或る日、彼は東京府下でも最も自由黨の勢力の張られた三多摩の名にあこがれ、川口村の一農家に身をよせてゐる大矢蒼海を訪ねた。蒼海は相模の人で、自由黨の闘士だつた。二人の交際は見る見る熱度を加へた。大井憲太郎が朝鮮で事を擧げようとして大阪でひそかに畫策を始めたとき、蒼海はこ

れに參加するために壯士を狩り集め、透谷にも少し高飛車な調子で言つた。
「もちろん君も行くね。」
「…………」
透谷は、しかし、すぐには返事をすることが出來なかつた。彼の鋭敏な神經は、ぎりぎりのところまで來たとき、急に政治界の醜さに強く反撥し出したのである。
蒼海は透谷と手を分つて、大阪へ乘り込んだ。しかし、間もなく陰謀は發覺し、七十幾人の者が捕縛投獄された。蒼海ももちろんその一人だつた。
自由黨の右翼は、政府と妥協して解散し、それを口惜しがつてゐた左翼も、かうして全く壞滅した。自由民權運動は、永久に地上から消え去つたのである。
透谷は、剃髪して、白雲に包まれた峰から峰へとわたりたい心になつてゐた。そこにこそ眞の自由がなければならぬ。自由を求めての、孤高と寂寞を厭はぬかうした巡禮は、同時に文學への出發だつた。現實の世界にはどんな混亂や動搖があつても、Idea の世界はほのかな黎明の光で輝いてゐる。青い夢、青い花、そして青い詩。

三

この時から、透谷は一筋に超現實的なものの淸さ、美しさを追求しだしたのである。

「まあいいぢやないか。もつと話して行きたまへ。」
透谷はしきりに止めたが、振りきつて二人は外へ出た。こちらが近道と、透谷は先に立つて、境内からすぐ高輪の街に通じてゐる小徑を案内する。その兩側は墓地で、草深い中に累々と墓石が並び、見わたすかぎりあざやかな夕陽の光だつた。
少し行くと、一本の老松があつた。瘤だらけの逞しい枝を四方にひろげ、その下に抱へられた青い空氣の底に水苔をのせて小川の流れが光つてゐた。日中は附近の腕白どもが手網で小魚の類をすくひに來て賑やかだが、今は蛙が濁つた音調で鳴いてゐるばかりである。三人の足音に怯えて、蛙たちはぱたりと鳴き止んだ。
「このあたりを毎晩氣狂ひ女がうろうろするんだよ。」
透谷はそんな話をしだした。——その女の亭主は八百屋なのだが、とても甲斐性がない。貧苦に堪へかねて、彼女はたうとう六歳の男の兒を水に沈めて殺し、自分も發狂してしまつたのである。
或る晩、透谷が家を出て老松の下まで來ると、突然幹の蔭からあらはれてぴたりとかぢりついたものがある。よく見ると、例の狂女なのだ。髮は亂れて肩にからみ、顏はひどく蒼白い。
「どうしたんだ？」透谷は訊いた。狂女は垢臭い襟頸をふるはせて、急におんおん泣き出した。そしていよいよ強くしがみついて來るのである。
「え、どうしたんだ？　離さないか。」

「わたしは今宵、この山のうしろまで行かねばなりません。」
狂女はやつと口を開いた。
「何しに？」
「この間、子供を殺しましたので、今宵はわたしも一緒に死なうと思ふのです。」
透谷は何とも全く氣味惡くなつて逃げようと焦つたが、無理に焦ると、狂女の死力に袖がばりばりと破られさうな氣がする。賺すやうな調子で、
「死ぬのなら、一人で行けばいいぢやないか。」
「一人では、路が寂しうて通へません。」
そこへ巡査の角燈が小刻みに搖れながら近づいて來たので、透谷はやつと救はれた。
「今度の家こそしばらく落ちつけると思つて引越して來たんだが、實際に住んでみると、いろんな事がある。住み憂くない場所といふものは、まつたく少ないものだね。」
透谷は、現實のはげしさに打ちのめされた心の感慨を洩らしながら、街の角まで跟いて來た。
透谷と別れると、二人は肩をならべて、元來た道を逆に、長い品川の通りを札の辻の方へと辿つて、何か物を食はせる家を捜した。
春樹の心は暗く沈んでゐた。狂女の話に影響されたのにしては、沈み方が少しひどすぎた。透谷を知つた悦びは、結局、懊惱と煩悶の闇夜に打ち揚げられて果敢なく散り消えた花火にすぎなかつたの

か？　透谷もクリスチャンだし、嚴肅な宗教生活を送つてゐる人々の風格に向つてそそぐ思慕と憧憬は今もある。それでゐて、内部から昻じて來る狂暴なものをどうすることも出來ないのだ。思ひきつてそれに肉體を託してみたい氣持はないでもないが、いざとなるとそれも出來ない。座敷牢で狂死した父の跫音が、高く、低く、時には陰濕な風の音のやうに聞えて來るのは、こんな時だ。――自分の體には、狂へる人の血が妖しくながれてゐるのではあるまいか？

彼はぞつとした。

酒の香でも嗅いでみたら、と考へ、この考へに彼は二度びつくりした。生れてまだ一度も酒といふものを飲んでみたことがなかつたからである。

二人は、とある蕎麥屋に入つた。そして氣樂な、ぷんと石油の臭ひのする小部屋に座を占めた。

「戸川君、ひとつお酒を誂へてみようと思ふんだが、賛成しないか？」

「僕はまだ、盃なんか手にしたこともないんだが――家が家なもんだからね。」明三は抑へきれない好奇心に眼をかがやかして言つた。「しかし、君が飲むといへば、僕だつて飲むさ。」

「酒には異名が二百もあるんだつてね。」

「さうかなあ。」

「百藥長、玄水、醞物、海老、狂藥、軟飽、狂米、夜黄、聖人、忘憂……」

「お經かい？」明三は冷かした。

そこへ、頸筋をま白に塗つた、島田のよくうつる姐さんが誂へを訊きに來たので、春樹は品物の名をならべ、最後に、

「それからお銚子を一本。」

と言つた。聲が自分のものでないやうな氣がした。そればかりではない。一瞬間、ただそれだけで精神と肉體の純潔を失ひでもしたやうな哀しさが、さつと胸に込みあげて來た。

「君、二人で一本なんて、そんなに飲めるかい？」

明三が、灯影を受けて艶やかに黄ばんだ顔ををかしさうにゆすつて言つた。春樹は、何かしらほつとして、

「ぢや、五勺にしとかう。」

と言ひかへ、顔いつぱいに、泪のない泣き笑ひを浮べた。

面白い書生さんたちね、と言ひたさうな顔で姐さんは引き下つた。帳場に坐つてゐる男もをかしさうに鼻のあたまを光らせてゐた。

春樹はそつと女の動作を眼で趁うた。月の暈みたいに、ほんのりした體溫を身のまはりにぼかして、女は藥味の葱をきざんでゐる。脣は妖怪味があるほど紅い。

「北村君も、君、交際してみるとなかなか面白い人だらう。」

春樹はそんな噂でもせずにはゐられなかつた。

「とにかく、變つてるね。」
「あれを奇人と見るのは可哀さうだな。僕がこの前一人で訪ねたとき、北村君がしきりに氣にしてゐたつけ。僕も奇人とは言はれたくないつてね。なんでも、無遠慮にそんな批評をした人があるらしいんだ。」
そこへ誂へたものが運ばれて來た。二人は猪口を差し合つて、ぷんと高い香のする熱い液體を少しづつ舌の先で舐めずつた。じいんと、腸の底までそれはしみとほつた。
やがて、二人は再び生暖かい夜の外氣の中に出た。
「頰ぺたが、ほのほみたいだね。」
春樹は、一人前の醉つ拂ひみたいに足をふらつかせ、頭を振つた。明三もすつかり參つて、一面に白くなるほど、おびただしい星に蔽はれた空を見上げるのも、ひどくものうげだつた。
二人は腕を組み合せて步いた。端唄の一つも唄つてみたいやうな、あまがらい醉ひ心地は、少しづつ冷めてゆく。そのあとに何が襲うて來るか——春樹は怖くなつて、俄かに腕を解いた。すると今度はその腕のやり場に困り、ねえ君、少し走らうぢやないか、とふるへる聲で言ひ出したのである。

雌　雄

一

「島崎さん、お寄りになりませんか？」

禮拜式が終つて、會堂の前の石段を下りた時、うしろから追ひすがるやうにして呼びとめる者があつた。女學雜誌社に勤めてゐる、二十七八の饒舌な男である。

店屋と店屋との間に挾まれて白く硝子戶を光らせてゐる雜誌社まで步いて行くうちにも、春樹は、巖本善治に傾倒してゐるこの男の口から、巖本を取り卷いてゐるいろいろの人のことを聞き知ることが出來た。星野天知の噂になると、春樹は特に聞き耳を立てて、言葉の裏にある陰影までも見落すまいとした。

天知は今は日本橋の自宅から三日に一度は雜誌社のすぐ近くの借家に來て、寢泊りするほど熱心に巖本の學校に力を入れてゐた。その天知には好い弟があり、妹があり、弟の友人に平田禿木といふ靑年があることなども春樹は今知ることが出來たのである。その平田禿木は、同じ日本橋區の伊勢町に店を張つてゐる繪具問屋の息子で、本鄉向ケ岡の高等中學校へ通つてゐる。

「僕は平田さんにも逢つたことがありますが、ほんとにあなたがたがずんずん伸びてゆきなさるのは、端で見てゐても氣持がいいくらゐですね。」饒舌な男は、少しお世辭も交ぜて言つた。

日曜日のこととて、雜誌社はひつそりしてゐた。麹町の一番繁華な通りからは少し離れてゐて、何となく寂しいが、町としての全體の設計から見れば、かういふ建物も裝飾の一つであらう。いや、功利的な、世間的なものに挑戰しようと企ててゐる者から見れば、それは一番天に近いのである――あの、ヤコブが梯子をかけてのぼらうとした天に。

男は反古のちらかつた室に春樹を案内して、『女學雜誌』の別働隊のやうな雜誌『女學生』を取り出して見せた。その中に春樹は平田禿木の調子の高い文章を見つけて、ここにも藝術のために一途に精進してゐる男があると思ひ、感動で胸をふくらませた。

ここの二階から隣家の二階へかけては、巖本や巖本の學校に關係のあるいろいろの人が住んでゐるらしい。階段を軋ませて上から降りて來る音がしたかと思ふと、やがて扉をあけて、

「かまひませんか？」

と言ひながら、背の低い、氣さくさうな青年が入つて來た。春樹は少し椅子をずらせた。

背の低い青年と饒舌家との間には、天知が女學校で受け持つてゐる武道科の話が出た。天知は駒場農林學校の別科か何かを出た人だが、擊劍のほかに、しばらく薙刀も稽古したことがあり、それが今役に立つてゐるのである。多少腕の練れて來た少女でも、今日は甘やかさないから、と彼が一旦青眼

に構へてかかると、見る見るあぶき出して、皮鞘を拂つた長柄のやつをばたりととり落してしまふ。相手の刃からこぼれる火花に眼がくらむのだ。

ところが、ただ一人、ちよつと底力のある手剛さで、どうかするとさういふ天知をあべこべにたじろがせる娘がある。高等科二年の松井萬子だ。

「僕はこの間、あのひとが繼ぎあてのある着物を着てゐるのを見て、驚いちやつたね。」

饒舌な男が言つた。「この節の貧乏士族の娘としては、そんな事はめづらしくないんだけれど、その針目といふのが、一針一針こまかに運んで、實に美しいんだ。僕は、親の顔まで見えたやうな氣がしたね。」

「たしか、盛岡のひとでしたね。」と青年。

「盛岡の、相當いい役についてゐた侍の娘なんだ。」

「僕が感心したのは、それとは少し違ひます。いつか食堂であのひとの近くに腰かけたことがありますが、手を見て驚きましたね。とても骨太いんです。僕は、腿の骨組みまで想像することが出來ましたね。」

壁一つ隔てた女學校の內部の事は、かうして筒拔けにこちらの部屋まで傳つて來てゐた。その上、この人たちは學校の食堂で賄つてもらつて、食事毎に食ひざかりの少女たちと顏を突き合せるものだから、教師としての春樹が知らない事にまで通じてゐた。

「いつたい、お蔦さんのやうなひとは、どんな男をお婿さんに選ぶでせうね。」
彼等は、結局そこまで突ツ込んでゆかなければ承知しなかつた。春樹はだまつて聞いてゐた。そのうちに、佐藤輔子といふ娘の噂になり、青年が、
「あのひとも、いい性質ださうですね。」とほめた。「僕はまだ口をきき合つたこともないんですが、いつも長襦袢に純白な襟をかけてゐるのが、とてもチャアミングですね。たしかに、あれはいい。」
春樹は覺えず紅くなり、氣づかれたかと心のうちではらはらしたが、青年も饒舌家も噂話(ゴシップ)の愉しさに驅られて、もう一人の聞き手があることなどはほとんど忘れてゐた。
今朝、一番町教會へ出席した時の事だが、二つある扉の入口から男女の信者が詰めかけ、その中に三四人の女學生も交つてゐた。見ると、春樹が毎日教へてゐる生徒である。『聖書』飜譯の大事業に功績のある名高い牧師、植村正久の說教に後れまいとして急いで來た彼女たちは、見知り越しの人々に會釋しながら、腰掛と腰掛との間を通つて婦人席の方へ行かうとする。そのやや禮式的な動作を、春樹は自分の席からそれとなく見守つてゐた。一番先に行くのが松井蔦子、そのあとから、あたかも姉に添ふ妹のやうに、足音も立てず進んで行つたのが佐藤輔子だつたのである。
輔子は蔦子よりは年下であつたが、春樹とは同年くらゐに見えた。肩のあたりがふつくらして、總體に皮膚の白さが目立ち、ぱつちりと霑ひのある眼は、世間の好みとしてはやや大き過ぎたが、抒情的だ。蔦子ほどの烈しい氣象は見られず、どちらかといへば平凡な娘である。學問も、出來るといふ

方ではない。女としての未たのもしさと無器用さとが、彼女にはほとんど同時に具はつてゐるかと思はれた。

二

その年の暑中休暇を、春樹はおもに鎌倉で過ごした。

鎌倉は谷七郷に埋れて歴史的興趣に富み、海に近く、小さいけれど登りにくい山々に抱かれた地相も手傳つてひとしほ高踏的な情感を誘ふのであつたが、今の彼にはそれを恣に味ふだけの餘裕もなかつた。彼の內部には不思議な變化が起つてゐた。未だ曾て經驗したこともないほどの寂しさ——濱町のおばあさんに引きずられて、輕蔑し、遠ざけ、恐れてゐたものが、たうとうやつて來たのである。

彼が借りたのは、とある農家の一間だつた。季節の野菜の花のきつい匂ひをも押し消しさうに、あたりには浄寂の氣が充ち、どつと山を鳴らす潮風は肌に寒いくらゐである。しかし、それが過ぎ去つたあとではよけい惱ましさが募るのだ。

かうした彼に許されるただ一つの慰めは、笹目ケ谷の草堂にこれも夏ぢゆうこもらうとしてゐる星野天知の顔を見に行くことだつた。

草堂は持ち主の好みで暗光庵と呼ばれてゐた。松籟に聞き入り、晝でも蟲が鳴いてゐる石ころの多い細い道をこつこつとのぼつて行くと、南晝風の展望をさへ鬱蒼とした樹木の間に避けて全く外界の

塵を絶つた、本當に山ふところといふやうな位置に、小さな藁葺屋根が見えて來る。それが暗光庵だ。茶室風の設計で、そこへ天知は妹の亮子と二人で來てゐた。

年長者だけに、天知は話し上手だつた。乞はれるままに『女學生』の秋季附錄のために一つの文章を書いたりして、彼と親しんでゐるうちに、春樹は、彼の性格のなかに、世間的な常道に背を向けた任俠的な豪放な氣風と、隱者にでも見るやうな用心深さとが微妙に交錯してゐることを見て取つた。

「お蔦さんもいらつしやればいいのにねえ。」

少し體の弱い、華奢で聰明な質の亮子が、切れの長い二重瞼の眼に狡さうな笑ひを浮べて言つた。しかし、天知はふんと鼻先であしらつたきりとりあはなかつた。春樹はそれとなく天知の顏を見守つた。あたかも顏いろの奥のものを一ぺんに看破らうとでもするやうに。すると天知はぷいとそつぽを向いた。ぶしつけだつたかと春樹は悔いた。そこへ今度は天知の方からぢいツと顏を向けて來た。春樹は額越しに相手の鋭い眼ざしを感じ、辛さに座を立たうと思つたが、不思議と腰が上らないのだ。

「あら、をかしいわ。」

二人の樣子を見てゐた亮子が、急に笑ひ出した。「とても變よ。睨めつくらをしてゐらつしやるの？」

さすがの天知も、少しあわてて、

「なあに、島崎君のお顏があれなもんだから、とつくり拜見させていただいてゐたのさ。」

と言つた。

長い夏が終る頃、春樹は再び牛込の下宿の狭い離れ座敷へ歸つて來た。何の道具調度もない部屋はがらんとして寒氣だつてゐるのに、そこへ眼に見えぬ蟲のかすかな音が聞え、音もなき駈けくらが中庭の露をおびた砂地や草の上に起る。寂しさ、やるせなさは募るばかりだが、それを避けようともしないでぢつと彼は耐へた。

ふと、あの可憐な「オフエリヤの歌」が唇にのぼつて來た。内部に渦巻き荒れるやり場のない情緒は、そんな歌の文句にでも託して發散させずにはゐられなかつた。長いこと最初の一聯しか憶えられなかつたこの歌を、彼はいま原語で全部憶えてしまつた。例の『於母影』に収められてゐる鷗外の譯で引用すると——

いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある。
貝の冠と、つく杖と、
はける靴とぞしるしなる。

かれは死にけり、我(わが)ひめよ、
かれはよみぢへ立ちにけり、
かしらの方(かた)の苔を見よ。

あしの方には石立てり。

柩をおほふきぬの色は
高ねの花と見まがひぬ。
涙やどせる花の環は
ぬれたるまゝに葬りぬ。

窮屈な枠の中から飛び出さうとして飛び出せず、體と心との分裂に悶える新しい女性の中で、この歌を口吟まない者はないであらう。今紫の羽織に今紫のリボンといふ、少し氣障といへば氣障な流行の新裝に、醒めた者の喜びと哀しみを表象させて、緣の柱にもたれ、蒼つぽく燃える眸を遙かかなたの雲の一ところに据ゑ、かたはらに人のゐるのも忘れて低聲（こごゑ）に口吟むのがこの歌なのだ。譯詩によつて初めて眞の意味と言葉の陰影（ニュアンス）を知りながらも、それを棚に上げて、原詩を一字一句たがはず唇にのぼすことが出來るといふのが彼女たちの誇りなのだつた。

若い女性の間に起つたこの流行が、今は春樹たちのやうな青年の間にも及ばうとしてゐるのである。輔子もこの歌を憶えてゐるであらうか、と彼は思ひ、すぐそのあとからこんな自問の無價値を感じた。彼は最初から彼女をそんな種類の女とは見てゐなかつたのである。

或る日、彼は久しぶりに透谷を訪ねた。

「いいところへ來てくれた。今日は女房が子供を連れて實家へ行つたもんだから、お婆さんと二人でお留守番さ。」

透谷は、自分で座蒲團を持ち出した。そこはもう高輪の僧房ではなく、芝公園内の、元の借家から少し離れた、閑靜な小家だつた。以前は僧侶か讀書人かが住んでゐたものらしい。土地も高燥で、森の中といひたいほど、周圍に樹木が多かつた。缺點といへば、すぐ裏手が紅葉館で、古雅な茶亭とは名ばかり、夜になると、三絃や舞踊の音が樹の葉をゆるがして聞えて來る。それが幻住の思ひを妨げるのだ。仔猫を捨てられ、その小さな生き物が夜の明け方机の下で泣いてゐるのを見つけてしばらく傷心をもてあましたこともある。

書齋の一方の壁を一尺ほども引込め、縱も横も五六尺ばかりのところに棚を幾段も作りつけて書架用に供してあつた。二人はその前に坐つて話し込んだ。お婆さんといふのは、透谷の遠縁にあたる人で、耳が遠く、腰が曲つてゐた。よちよちとお茶を運んで來、立ちがけに彼女は低聲で透谷に訊いた。

「あの、お夕飯は？」

「おみをつけか何かでいいでせう。」

透谷は口をよせて呶鳴つた。客への饗應も豫定に入れてゐるのだが、金屬的に冴えた聲のひびきに肚の底まで見透せる、氣持がいいほどの率直さである。春樹はうれしかつた。

お婆さんが引き下ると、

「子供がゐないと、やつぱり寂しいね。」

と言ひ、透谷はそこいらを見廻すやうにした。しかしそれも一ときだつた。

窓のすぐ外に椎や樫の樹が枝を張つたこの書齋は、晝でもうす暗かつた。その上、今日は女が踏み込んで殘してゆく脂粉の匂ひも漂つてゐなかつた。それが却つて春樹の心を落ちつかせた。ここではただ、天に近い凛然とした精神が王座を占めてゐた。あらゆる知識はその美しい侍女なのだ。透谷が新たに經驗しだした父性の嘆きは、王座を汚すどころか、それにますます光を添へた。赤ん坊も早や生れて四ケ月目の筈である。

三

僕はこれで本當に弱い人間だ、小さな蟲一つ殺しても氣になるとか、僕には友達といふものがごく少ない、しかしさう澤山友達があつても困ると思ふとか、心の底を眞實ありのままに開いて見せる透谷の聲は、しんみりしてゐた。春樹は一々同感された。

「今日も考へた事だが、僕は單なる詩人でありたくない。思想家(シンカア)と呼ばれたい。」透谷は、今度は少し沈痛な調子で言つた。

透谷の書くものには、今まで壓縮されてゐたものが蓋石を高く打ち飛ばして一時に奔騰するやうな激しさがあり、それが一定の主張で貫かれてゐた。主張とは單なる意見ではない。それは自己の見解

を提示する激しいポオズ、相手の肺腑を衝かなければやまぬとの意氣に張りきつたポオズである。さういふ主張が透谷にはあるのに、自分にはちつともないと春樹は思つた。この悲しい缺點の原因を春樹は一應自分の未熟に歸した。戀愛觀や藝術觀の上で封建的殘滓とたたかひ、何人にも先んじて必死に近代的な建築を營んでゐるかのやうに見える透谷の態度には、孤高の冴えがあるが、それだけまたペシミズムの影も深い。俗惡な現實のしがらみは彼の牢獄である。だが、それは鬪爭のペシミズムなのだ。彼のあの鋭い眼の光は、內に燃える峻烈な精神が現實の世界に投げつける手袋なのだ。

春樹のペシミズムには、さういふ鬪爭性がなかつた。ペシミズムは彼を無闇やたらに曳きずり廻すばかりだつた。

ここであの父ほどにも積極的になれたら、行動的になれたらと彼は考へてみるのだつたが、性格的にさうなれないものが彼にはあるのである。宿命の苦さを彼は骨にこたへるほど味つた。

「さうさう、君にはまだ見せなかつたつけね。」

透谷はさう言つて腰を上げ、書架から十幾册揃つた洋書の古本を取りおろした。「この春買つたんだよ。」

それはナイトの註釋のある『セエクスピア全集』だつた。春樹はちよつと羨ましく、

「いくらしたの？」

と急き込んで訊いた。

「少し高かつたよ。十二圓。」

一圓で「米九升七合なり」と日記に書き込んで、文字の裏に家計の苦しさをにほはせたこともある透谷が、一方ではこんなすばらしい浪費をするのである。

「僕は去年の六月、わざわざ横濱まで『ハムレット』の試演を見に行つたものだが、よかつたね、あれは。」

透谷は追憶に醉ひ、うすい瞼を紅くふくれあがらせて言つた。そのハムレット劇は、初めて來朝した歐洲正劇の一座が、矢戸坂上居留地の公會堂で演じたのである。「觀客は外國人ばかりだつたが、その中に、三人の日本人が昂然と肩を怒らせてゐたよ。誰々だと思ふ？」

「………」

「僕と、坪内逍遙と、それから、もう一人は――」

「誰かね、それは？」

「うつかり名前を聞き洩らしたが、やつぱり芝居やダンスの好きな男らしかつたよ。」

透谷はその夜初めて逍遙の、おい、坪さん、とでも呼びたい小振りな顔を見たのである。

五六日すると、彼は逍遙をその大久保の自宅に訪ねて行つた。『小說神髓』の中で唱へた寫實主義を自ら實行したい氣持で『書生氣質』『妹と背かがみ』『細君』などを書いてのけた逍遙は、今は劇作に力をそそがうとしてゐた。

ペルシャ更紗の窓掛をかけた應接室で二時間ばかり話し合つた後、辭して歸ると、透谷はいつになく心臟の鼓動を高めてゐた。「文學、文學とさわぎ立て、我こそは日本のヂッケンスだなんとしやれて見た春のやの隱居も、神經質を本尊に立てて、四卷ばかりの同じやうな小說を書いて見たが、どつこい、そんなぬるい手では承知しないと、ばけもの社會の人民が、江戸つ子氣象で邪魔を入れたれば、隱居も今は頭をかしげ、こりや出そこなつた、やつぱり文學士でゐねむりをしてゐた方がよかつた。」と嘲弄したこともあるのだが、そんな事はけろツと忘れたかたちだつた。彼はその場で毛筆にたつぷり墨汁をふくませて日記に書きつけたのである。

「春のや吾れに語るに、古事記時代を以てパラダイス・ローストを書くべきを以てす。吾れ清盛の作を語りしに、彼非常に賛成し、グランドなりグランドなりと言へり。」

「清盛の作」といふのは、彼が腹案中の詩劇で、「平家榮華の仇夢」と題され、三幕以上になる豫定だつた。

筋や人物を思ひ浮べただけでも、纏綿とした情緒がわきたぎつて、一氣に書きあげられさうな氣がしたこの腹案も、しかし、いよいよとなるとてもむづかしく、今もそのまま棄ててあつた。舞臺劇の特徵は、音樂、動作、科白、舞踊などの整合的調和にあるから、これに通曉してから創作したものでなければ上演の見込みはない。だが、これは決して大詩人をつくりあげる道ではなく、むしろ大詩人を窮屈な枠の中に嵌め込んで、體ぢゆうの燈火を消してしまふであらう。たとへレエゼ・ドラマに終

つてもいい、なるべく傑出したものをと透谷は野心に燃えるのだつた。

やがて春樹は友人の家を出た。彼は不思議に元氣づいてゐた。顏の隅々から一ときでもほそい神經を押し流し、背丈までぐいと伸びて見えたあの友人の覇氣に觸れて、自分もとひそかに決心してゐたのである。

だが、幾分人爲的とも云へるかうした興奮は、長くは續かなかつた。下宿の門をくぐる頃には、がつかりして、眼がくぼみ、唇が黑くなつてゐた。それに方角の知覺さへ喪ひ、おかみさんの美しい擬態のある聲が前の方から來るかと思ふと、今度はうしろから來た。

「夕御飯はどうなさいます？」

おかみさんは庭まで來て、障子の中の男にさう訊いてゐたのである。「今日は鮪のおさしみをつけましたのよ。生きのいいのがあつたものですからね。少し召しあがりません？」

くちびるみたいですよ、女の唇は鮪の肉を切り取つてこしらへたのね、白すぎて冷いてらてらする白壁のやうな顏でも、あれ一つで生きて來ますものね、と現實のおかみさんの言葉にすぐ妖艶な幻想のおかみさんの言葉がつづいた。それでゐて、口先の應對にはちやんと恰好がついてゐた。「僕、友人の家で濟まして來たんです。」

おみをつけで、といふ言葉まで出かかつたのを、はつと氣づいてこれは咽喉の奥へ押し込んだ。

「それでは、お茶でもいれませう。」

「お茶も結構です。」
「あら、御愛想がないのね。」
おかみさんは笑ひ、星月夜の庭に漲つた蟲の聲を足音で消し消し、再び母家の方へ去つて行つた。
突然、春樹はうすぎたない疊に額を押しつけるやうにして、神に祈り出した。彼の神は、心靈として遍在する抽象體ではなく、年の頃五十くらゐの、親しい先生でもあれば恐い親父でもある、アブラハムの素朴とモオゼの峻嚴を分け持つた、肉體を具へた神だつた。それは半分人間で、半分神なのだ。こんな神が長いこと彼の心の底に住んだゐたと聞いたら、笑ふ人もあるにちがひない。だが、それでこそ彼の信仰は今日まで保たれて來たといへるのである。
「主よ、主よ、ここに惱める僕がをります。」
彼はたうとう聲に出して叫び、熱い涙に咽んだ。

四

それは、齒痛を悚へ悚へ、溺れたものを二十度も水の中から引き上げようとするやうな努力だつた。しかし、彼の體内には何の不思議な變化も起らなかつた。それどころか、あべこべに、涓の合間合間から、自分自身の熱い體溫と感情のにほひとが鼻を衝いてふきあがつて來た。そして、それに呼應するやうにぱつと宙にあらはれたのは、嚴かなエホバの神ではなくて、自分の教へる生徒の、あの學問

は出來ないが抒情的な美しさにかがやく娘の現實の姿だつたのである。——若々しい血潮がさしてほのかに燃える頰。澄明な眸。白い、處女らしい手。

彼は部屋の中を歩き廻りながら物狂ほしく輔子の名を呼んだ。彼はなぜ教室ではまともにあの娘の顔を見守ることが出來ないのか？ なぜもつと彼は積極的になれないのか？ 心で用意する行動の神經はくつきりと冴えあがつてゐるのに、恐怖が先立ち、部屋には出口がないのだ。たとへ彼女が朱一色の裝ひで眼の前にあらはれて來ても、彼は指一本觸れることが出來なかつたであらう。

不眠の夜がつづいた。しかし、頑な彼は獨りでそれを耐へようと思ひ、さうした思ひで毎日學校へも通つた。高等科の二年級は、上の組と下の組の二つに分けられ、上の組の中で一番熱心で下讀みなどもよく出來るのは、やはり骨太な白い肉體を持つてゐる松井萬子だつた。彼はどうかすると眼の隅から臆病げに彼女の姿を見守つた。それは浮いた心からではなかつた。星が、別の星の圓面を身のまはりにぼかすことがあるやうに、彼女はいつも、自分の親友で下の組に屬する輔子の影をほんのりとぼかしてゐる。わが愛人の姿をまともに見ることの出來ない彼は、せめてそれなりと見たいのだ。

下の組の生徒の中には、語學の時間のあとで、思ひ思ひに試作した文章を教壇のところまで持つて來る者もあつた。

「先生！」

教室を出て二三步足を運んだとき、うしろから呼びとめ、稚い媚態を見せながら近づいて來たのは

輔子だつた。「これを見てくださいまし。」

「何ですか？」彼はしかし、無愛想に言つた。

「あたしも書いてみましたの。」

「あ、さう。」

彼は胸を反らして彼女の拙い試作を受け取り、そのまま階下へ降りて行つた。彼女はまだちつとも彼の心の内を知らなかつた。

秋も深くなつた頃、毎日教員室で顔を合せてゐるので、別に用事もない筈の星野天知から、「親展」とした封書が來た。異様な豫感にふるへながら急いで開いてみると、果して、聲のない哀しみを湛へた君のこの頃の姿に心を惹かれない者があらうかとあつた。少なくとも、さうした君のために泪をそそぐ者が、今この短い手紙を送るとあつた。

春樹はびつくりした。こひすてふわが名はまだき立ちにけり、と嘆いた古人のへまな羞んだ恰好がそのまま彼だつたのである。彼は眼尻で泪を抑へ抑へ幾度もくりかへして手紙を讀み、少し感動がしづまると、わざわざこんな手紙をよこしてくれた天知の心情の一番奥にひそむものを考へてみた。彼ははつと思ひ當つた。亮子に笑はれたあの睨めつくらは、事實上、火花がちるやうな掛引だつたのである。夏ぢゆう笹目ケ谷の草堂にこもつて身を苛め苦しめた天知自身も、ひそかに戀する人であつたとは。彼がこのほど『女學雜誌』に寄せた「文覺上人」といふ文章は、纖美な泪に充ちてゐたが、その

理由も今ははつきりと呑み込めた。

或る日曜日の午後、彼は日本橋區本町の自宅に天知を訪ねるために下宿を出た。

とある街角まで來ると、すぐ眼の前に、屋號を入れた紺の暖簾が匂やかに垂れさがつてゐた。間口は五間の餘もあらう。奥深い店の入口から秋陽に白壁をうかせた土藏の方へ砂糖の荷を運ぶ男たちの肩が張りきつてゐた。店と土藏との間にまた別の木戸があり、その前に立つて彼は呼鈴を押した。

女中に案内されて通つた六疊の茶席、そこから見わたされる庭のつくりに、禪味をなつかしむ天知の心の全景があつた。奥座敷ではしづかに琴の音がしてゐた。彼は耳を傾けた。わが身を天の夕顏と見ながら、なほ生の情熱をもてあましてゐるやうな氣配が、そこにあつた。

「亮子です。」

天知が、曾てないあたたかな表情で言つた。「あれから、よく君のお噂が出ますよ。」

春樹はあらためて手紙の禮をいひ、出來ればもつと何か聞かせてもらひたさうな口吻をにほはせた。この心はぢきに通じた。

「お輔さんつていふひとは、あれでなんですね、ふつくらしてるなかに、きりツと張つたものを持つてる。僕は好きだな。」

年長の天知は、まじまじと春樹の顏を見据ゑて言つた。あたまの芯まで見透されさうなまぶしさに、春樹はあわてててしまひ、

「駄目です、あんな氣の弱いひとは。」と口走つた。
「さうかなあ。僕はさうぢやないと思ふんだが。」
武道の教師といふものは、あゝいふ女からでも、刃の色をつらがらぬ勇ましい心を引き出し、その心で白い肉體を飾つてやることが出來るのであらうか？　それなら自分の見方は半分だけ間違ひだと春樹は思つた。
蔦子の組の中には、教師としての彼の態度や動作を冷靜に見つめてゐる、とても峻敏な少女がゐる。その少女がまづ彼の祕密を看破つた、といふのが天知の控へ目な打ち明け話だつた。春樹は、人を教へるといふ職業のつらさを骨にしみとほるまで味つた。
この話が一段落つくと、今度は、春樹がまだ一度も會つたことのない平田禿木の噂が出た。春樹は熱い火の燃える密房からすつと涼しい廊下へ連れ出された感じで、
「平田君には、ぜひ一度會つてみたいな。」
「なんなら、僕の方から紹介しませう。ついこの近くなんです。」
伊勢町は本町四丁目のすぐ續きだつた。「こいつがまた、なかなか常道を踏まない奴でね。」
天知は無意識に膝を乘り出してゐた。それほど彼は禿木を愛してゐるのである。春樹は、ちらと亮子の清麗な顏のかたちを心に描いて、ははあんと思ひ、うつかり微笑しかけたが、やつと抑へて、
「あんな古い商店街に、面白い人が出たものですね。」と言つた。

その禿木の初戀の話が實に變つてゐた。僕のラヴァアはもう死んで、花の彫刻のあるま白な石の中に入つてゐる、と言ふかと思ふと、いつの間にかそいつが銀座をのしてゐる。
「あの男はしよつちう點け火をして歩く奴だ。どうも物騷でならぬ。」
天知は、禿木と同じくこの下町から高等中學校へ通つてゐる弟の男三郎をつかまへて言つたものだが、同じ事を春樹にも言つて聞かせた。
「そのうちに北村君にも會つてください。」今度は春樹が自分の友人のことを言ひ出した。
「おお、さうさう、」天知は急に眼をかがやかして、「北村君はこの間ここへ訪ねて來てくれましたよ。」

五

それは九月末の、からりと空の晴れあがつた午後のことだつた。薩摩絣の單衣に兵兒帶、白のヘルメット帽といふ裝ひの男が、ステッキを振り振り突然店先にあらはれ、
「天知和尚はゐますか？」
と言つた。店員の一人が泡を食つて奥に駈け込み、事の次第を天知に告げると、
「その方のお名前は？」
天知はまづそれを訊いた。
「北村門太郎といつてゐます。」

「北村門太郎？　はてな――」
脫蟬子とか透谷庵とかいふ署名で發表される、淸新な、底力のある文章に打たれて、一度會つてみたいと考へてゐた天知も、まさか門太郎が透谷の本名だとは知らなかつたのである。あたかも、愼之助と聞いてすぐ天知の顏を思ひ浮べる者は、明治女學校の敎員室にも稀れだつたやうに。
とにかく客間へ、と命じてこの同じ茶席へ通させ、すぐあとから天知は出て行つた。ところが、不思議にもゐる筈の客人がゐない。鼻白む思ひで、きよろきよろしてゐると、
「やあ、今日は。」
と座敷の橫の便所から帽子をかむつたまゝ出て來た男が言つたのである。「透谷です。文覺上人に會ひに來ました。」
あの勁い性格の文覺にも若い女性の畫像にひかれる心があり、そこに人間の限りない美しさを見た天知といふ人の風格を透谷は想像するだけでは足りなくなつて來たのである。
新しく見直させるやうな透谷の人柄をほほゑましく思ひながら、春樹は友人の家を出た。そして下宿に歸ると、眠れないままに、ふと思ひ出して輔子から預かつてゐる文章を机の上に載せた。讀んでみると、やはり稚拙で、面白くもをかしくもない。ただそこには、每日滋養分に富んだ空氣を呼吸してゐる處女の、人事と自然を一つに貫いた或る美しさがあつた。彼はその上にやたらに朱筆を加へた。

この時分から、新しい文學への意慾で繋がらうとする友人同士の交遊範圍が俄かにひろがつて來た。天知は今度は自分の方から透谷を訪ね、それと相前後して、春樹も伊勢町に禿木を訪ねた。繪具を置いた店の横手から細い露地を入つて行くと、母家から勝手口まで見透せ、露地の突き當りの、母家とは別棟になつた裏二階に、禿木の勉强部屋があつた。

そこは街の騷音から遠く、赤間石の硯のくぼみにひつそりと湛へた水にまで、高く秋氣が凝つてゐた。禿木の廣い額は蒼白く染めあげられ、隆い鼻には脂肪のにほひのする艶があつた。それが一種の氣分を誘つた。壁には、黑い釦のついた制服、橘の徽章を光らせた帽子がかけてあつた。それにも春樹は親しみを感じた。

二人の話題はぢきに女の上に移つた。春樹が既に亮子のことを知つてゐたやうに、禿木も天知を通して輔子の話を聞いてゐた。頷いたり、はらはらしたり、時には途方もない笑ひ聲をあげて、二人は、互にそつと相手の心臟を衝くことの出來た興奮をもてあました。

かうした話の最中に、春樹はふと亮子のことを「本町」と呼ぶ方法を見つけた。その方が、「お亮さん」と呼ぶよりはれがましくなかつた。

「本町はよかつた。」と禿木はうれしさうに言ひ、無意識に、紅くふくれあがつた顳顬に五本の指を持つて行つた。亮子こそ、彼の現在の戀人だつたのである。

「星野君はいつたいどうなんですか？」と春樹が訊いた。あの熱い泪の源を天知がまだ自分から開い

てみせてくれないのをもどかしがりながら。
「君が敎へてゐられるといふ組の――ほら、あの薙刀の巧い……」
「さうですか。あのひとですか。」春樹はにつこりと頷いた。「多分そんな事だらうとは思つてゐたんですが。」
「ところがです。」
禿木は覺えず膝を乘り出した。――萬子といふ女は、勁い性格の持ち主である。うつかり寄りつけないので、巖本善治の口から自分の心を傳へてもらつた。その返事がやはりお萬さんだ。――先生としては、心から尊敬します。しかしどうしても自分のラヴァアと考へることは出來ません。
「さうなつて來ると、星野君の方ではよけい感情が激して、敎室へ出ても、實に嚴然とした態度で生徒に臨むんださうです。あの人らしいぢやありませんか。」
以前の天知は、生活上でも淡白な趣味に滿足してゐた。それが最近あゝして底に泪を湛へた纎美な文章を書くやうになつたのは、かうした戀のためであり、その事をこまごまと話して聞かせる禿木の聲の調子には、年齡以上に長けたものがあつた。彼の蒼白く光る額には、子供と大人とが同居してゐた。
やがて春樹はこの新しく知り合つた友人の家を出た。夕暮が街には灰色の潮のやうに迫つてゐた。往き來する人の顏は、うすくぼやけ、その底に眼だけきらきらと光つてゐた。彼は空を見上げ、初め

て空が一面にふかく曇つてゐることを知つた。しかし、それが何であらう。行く手には無數の燈火がある。地面はだんだん明るんで來る。急に背丈の伸びた自分自身の影をうしろに引きながら、彼は肩を立てて歩いた。あたかも、戀ゆゑに起る生活の危機などはこの世にまつたくないかのやうに。

彷徨

旅へ

一

雜誌『女學生』は、無名子（島崎春樹）、脫蟬子（北村透谷）、夕影（星野男三郎）、禿木、暗光（星野天知）等々と執筆者の顏ぶれも揃ひ、急に活氣にあふれて來た。彼等は讀者の水準も考へず、勝手に書きたいものを書いた。かうなると、器の小さいことが目立つて仕方がない。そこで、天知は新たに大人の雜誌を作らうと決心し、間近に迫つた十二月號を出した上、この少女雜誌を廢刊することにした。

一方、『女學雜誌』は、透谷や天知や春樹などの書くものであまり文學的な色彩が濃くなり、女學生相手としては文章も少し硬すぎたので、赤表紙と白表紙の二色に分けて交替に發行し、赤表紙の方は巖本善治、白表紙の方は天知が編輯することになつてゐたが、それでもとかく落ちつかない。困つてゐた矢先だつたので、『女學生』の廢刊と同時に、『女學雜誌』も赤白の區別をやめて元に戻し、この雜誌で滿足できない讀者は新雜誌へ吸收しようといふことになつた。

天知の一番近い相談相手は、弟の男三郎と禿木だつた。これに春樹も出來るだけ力を入れようと約束した。彼はまた戸川明三をひつぱつて來た。しかし、彼の衞星みたいで、秋骨といふ號も彼につけ

てもらつた明三は、天知の眼から見てもまだ頼りにならなかつた。透谷ももちろん參加したが、これは、客員といふかたちだつた。魅力もあるが、同時に一種の不氣味さを感じさせる彼の特異な性格が、暗默のうちにこんな結果を產んだのである。

だが、とにかく、わきたぎる青春の血潮が境遇も性格も違ふ青年たちを一つに結びつけた愉しい共同の仕事である。その外郭には若い女たちがゐる。亮子に萬子、輔子。それからもう一人、同じ明治女學校の卒業生で、天知や亮子が今も懇意にしてゐる神戶の深尾峰子。かうした美しい背景がよけいに勢ひを促し、誰も彼も創刊號のために懸命に筆を執つた。

春樹は當分連載する豫定の長篇詩劇「琵琶法師」の最初の一回分を書きあげた。署名は古藤庵とした。この雅號には無斷で盜んだ佐藤輔子の息がほのかに通はせてあつた。

だが、强烈な作品感情が筆の先から遠のくと、彼の眼には原稿の一つ一つの文字が手垢の塊のやうに見えはじめ、と同時に、見まい見まいとしてゐた苛烈な現實のいぶきが足許から逆撫でに吹きあげて來た。そこには、ちつとやそつと押したくらゐではびくともしない峻嚴な壁がそそり立つてゐた。退步以外に、どうしてそれを避けることが出來よう。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふるものは日々旅にして、旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。」

芭蕉の『奥の細道』の一くだりを、彼はかなしく口吟んだ。本當に、古人も多く旅で死んだのだ。彼

は鳩尾を絞つて泣いた。
内部にあふれる熱烈な戀の情熱が外部から否定されようとするときに起る、意志的な悲哀であり、非現實的なものへの憧れである。

行春や
鳥啼き魚の
目は涙

芭蕉の紀行文や句品にながれた情緒には、枯淡な味ひが目立つてゐるが、その底を打ち割つてみると、芳烈な情感の波立ちがある。——生涯を貫く晴れやかな心の春は、そんなところから訪れて來るのであらうか?
だが、それにしては、春樹の思ひつめた心はあまりに暗すぎた。旅での死に浪漫的精神の悲哀を趁ふことが出來たら、それがすべてなのだ。
恩人の吉村忠道を初め、兄や故鄕の母が彼に切に望んでゐるものは、金や指環の寶石に象徵された、高い、現世的な成功である。薄暗い座敷牢の中で、空想の戰ひを紙の上に描いて、最後まで國風の歌に心を寄せてゐた父でさへ、陰慘な流浪の旅などを期待してはゐなかつた。
だが、それが何であらう。たとへ恩に仇を、愛に憎を報いる結果になるにしても、殉情の精神だけはどこまでも守り續けなければならぬ。

「それや殘念ですね。」

春樹が伏し目がちの忸怩とした態度で學校をやめたいことを申し出ると、巖本善治は感情をこめた聲で言つた。が、心なしか眼がいつもよりも强く、鋭く、皮膚にからまるほど光り、春樹は例の大テエブルの下で膝先が見苦しく顫へだすのを覺えた。

「それで僕の後釜ですが、これは北村君にやらしていただけないでせうか？」春樹は、やつとあとを言ひ繼ぐことが出來た。

透谷は普連士女學校を何か氣に入らない事があつて未練氣もなくやめてしまひ、しかし生活への影響は覿面で、ひどく困窮してゐた。それを春樹はもちろん第一に考へたのだが、そのほかに、自分が去つたあと輔子がこのやうな友人の敎へ子になれば せめてもの心やりだといふ 感傷もあつたのである。

「承知しました。」巖本は大きく頷いて言つた。

春樹にからまる噂は、巖本の耳にも薄々入つてゐた。しかし、かうして春樹が逸早く身を引かうとしてゐるのを見ると、この青年が、苦しまぎれに毒杯をつかむかのやうな精力の氾濫をすぐわきへ向けるだけの精神力を具へてゐることが感じられ、彼はひそかに心の愉悅を覺えるのだつた。

春樹はその足で透谷を訪ねて、この年上の友人から、哀しく旅立たうとしてゐる自分へのはなむけとして、

一輪の花の咲けかしと
願ふ心は君のため。

といふ一聯で始まる詩を贈られた。ほんとに一輪の花だ、それが欲しかつたのだと泪で鼻筋を織らせながら、彼は築地へ廻り、戸川秋骨にも別れを告げた。
「雜誌の原稿はどうする？」置いてきぼりを食ふ寂しさをごくりと唾と一緒に呑みおろして、秋骨は言つた。
「書けたら旅で書くつもりだがね。——さういふ事も、存外面白いかも知れない。」春樹はほんとにさう思つて言つた。
翌日は女學校での最終の授業日だつた。十二月末の日光が硝子窓からながれ込み、それが、きれいに拭いた黑板の面を明るく浮きあがらせてゐた。その上に、彼は古い記憶の中からたぐりよせた、むしろ靜雅なひびきのある英詩の一聯を書きつけた。生徒一同への、別れの言葉として。
「そんなの狡いわ、先生。」
生徒の一人が頓狂に叫んだやうな氣がした。はつとして、恐る恐るそれらしい方角へ振り向くと、灼けつくやうな額に、さつと鋭い視線が集まつて來る。物見高い少女たちが、戀でしくじつた若い敎師にそそぐ嘲笑と憐憫の雨なのだ。彼はたじたじとなつた。が、やつと體を支へ、その上へ石のやうな擬裝の枠をはめた。

彼はしかし、黒板の英詩を譯して聞かせてゐる間に、それでもちらと輔子の方を見やることが出來た。彼女の顏はどこか蒼ざめ、日頃から抒情的な陰影に隈どられた瞼にはかすかに涙が滲んでゐるやうに思はれた。「島崎先生はお輔さんのあれよ。」「すてきぢやない、どちらもお美しくつて？」「だつて、先生に生徒なんだもの。いけないわ。」などと周圍から姦しい蔭口を浴びせかけられて、今はすべてを悟り、今日の別れにもひそかに哀しみを寄せてゐるのであらうか？

若くて貧しい春樹は、半年にわたる無言の愛慕のしるしとして、何一つ輔子に殘してゆくものを持合せてゐなかつた。辛うじて、二十二歲の暮まで守りつづけて來た淸い童貞以外には。

彼は俥に乘つて學校の門を出た。門のすぐ上にあたる、ひつそりと人氣のない敎室の硝子窓に、ただ一つ輔子の顏が張りついてゐた。そのゆるぎのない視線は、永久に學校を去つて行く若い敎師の後姿に、一筋のテエプのやうに追ひすがつてゐた。

二

「何といつても、自分たちの雜誌は可愛い。」

夕影――天知の弟の男三郎が、落ちつきのある口調で言つた。その差向ひには春樹が坐つてゐた。二人は正月の御馳走をつついてゐた。

そこは天知兄弟の自宅の、中央に切爐のある茶の間だつた。この茶の間は今では若い者同士が互に

集まつては戀や文學を語る中心場所のやうになつてゐた。そこはまた新雜誌の編輯室でもあつた。
文學の諸部門の中、小說を最も優位なジャンルとし、その創作方法として寫實を主張し、かくて明治の新しい小說に明確な方法論を與へたのは『小說神髓』の著者坪内逍遙だが、それを自ら實踐して目的の地點に近づかうとしてゐる最も偉大な作家の一人は尾崎紅葉だつた。
だが、當時はまだどこを搜しても新しい小說の表現形式にふさはしい新しい言葉がなかつた。紅葉はそれを創造するために異常な努力と苦心を拂ひ、文字の選び方などに於いても、「朝寢」と「朝寐」とどちらがいいかと、たつたそれだけの事でまる半日考へ込むくらゐはめづらしくなかつた。彼の立場は藝術のための藝術だつた。
明治二十年、二十一年、二十二年の三回に分けて長篇小說『浮雲』を發表した長谷川二葉亭は、逍遙の『小說神髓』から出發したもう一人のすぐれた寫實家だつた。彼の寫實は紅葉のそれよりも一層現實に食ひ込み、文章なども、思ひきつて口語體を採用したためによけい淸新だつた。彼の立場は、人生のための藝術だつた。
彼は新しい言葉の創造のために自分一個の見識を立てて非常に苦心し、三馬の小說によく出て來る「べらぼうめ、南瓜畑に落つこつた凧ぢやあるめえし、乙うひつからんだことを云ひなさんな」といつた調子の深川言葉なども參考にした。
だが、かうした苦心から生れた『浮雲』も、一般にはほとんど何の反響も呼び起さなかつた。それど

ころか、不思議な代物が飛び出したものだね、あれでも小說かい、などとこきおろすのが人々の常識だつたのである。

北村透谷を客員として迎へた若い文學青年の一團は、立場に於いては、二葉亭の流れを汲んでゐた。二葉亭が小說の上に創造した新しい言葉の鋭さや陰影にも、彼等は驚異の眼を瞠つてゐた。

だが、彼等は寫實主義が嫌ひだつた。彼等はむしろ、寫實主義の唯一の地盤である現實に挑戰しようとしてゐた。彼等は揃ひも揃つて理想家であり、詩人であつた。

新しい詩、それも寫實にながれ易い抒事詩でなく、先天的に寫實と相容れない、純正な抒情詩の完成こそ、彼等に課せられた使命である。譯詩集『於母影』や、湯淺半月の『十二の石塚』や、山田美妙の、

いつの日に死ぬるとも
とく心澄ましてむ
澄まして　とく心
月きよく　風白し

といつた新しい五五調の試みなどをも含む『青年唱歌集』等々の先驅的な意義は大きいが、しかし結局、それらはまだ土のなじまぬ開墾地に凛々しく咲いてしぼんだ花だつたのだ。

かうして春樹たちは、二葉亭や紅葉が散文の方でした、新しい言葉の創造といふ困難な仕事を、詩

の上でしだしたのである。

だが、彼等にはこれと思ふ手本がなかつた。いや、手本のないことは却つて彼等の決心を强め、冒險心をそそつた。彼等は自分たちの志す方向しか見なかつた。一口に云へば、他人のする事は、一切合財氣に入らなかつた。

新雜誌の創刊準備は着々と進められ、原稿ももう半分以上集まつてゐた。同人雜誌ではあるが、新しく生れ出るものへの期待は早くも方々から繫がれてゐる。ただ、肝腎の標題がまだ決らなかつた。

町の中とも思はれないほど靜かな晚で、耳を傾けると、障子のすぐ外の葉のない樹々の枝に、かすかに霙の音がしてゐる。その幽寂な感じが、流浪の旅に出る者とあとに殘る者との別れにふさはしかつた。天知と亮子は、鎌倉の方で別れを告げたい、と言つて昨日からあの笹目ケ谷の草堂へ行つてゐた。

やがて、春樹は切爐の近くに夕影と枕をならべて體を橫たへた。今夜だけここに泊めてもらふことにしたのである。

初めて寢るこの茶の間の薄暗い淸々しさは、旅人を迎へる白い遠空にそのまま一筋に繫がつてゐるかと思はれた。

「今夜はぜひ君に訊いて置きたい。それやまあ言はなくたつてわかつてるやうなものだが、まだ君自身の口から意中のひとを名指してもらつてゐないからね。後になつて、人が違つてた、なんてことに

なつて見たまへ、それこそ大變だからね。」
夕影はこんな事を言つて、夜更けの二時頃まで春樹を唸らせた。
翌日、春樹は風呂敷包一つを提げて、新橋驛から汽車に乘つた。笹目ケ谷の草堂に着いたのは、午過ぎだつた。
「お亮さん、あのお預かりしたものを島崎君にあげたらいいだらう。」
兄に言はれて、亮子はそこへ何か縮緬の風呂敷に包んだものを兩手に抱へて來た。
「これは君が敎へてゐられた高等科の生徒一同から御餞別ださうです。」と天知が說明した。「東京の方でお渡しするより、旅にお出かけになる時、自分でお荷物の中に入れて差し上げたい、なんて妹が言つて、わざわざこちらまでお預かりして來たのです。どうぞ受け取つてください。」
明治女學校にしばらく通學したこともあつて、萬子や輔子と懇意にしてゐる亮子の、白い華奢な手で風呂敷の中から出されたのは、仕立おろしの綿入羽織だつた。
「ね、ちよつと着て御覽になりません?」
亮子は娘らしい思ひつきを樂しむやうな眼つきで言つたかと思ふと、もう羽織をひろげて春樹のうしろに立つてゐた。兄の片戀の苦惱を泪のある眼で見てゐる彼女は、春樹のどたん場の苦しみにも無言の同情をよせてゐた。さういふ心根が、いま男の背にへばりつくやうにしてゐる彼女の肉體に、女臭さを隱した線の纖い美しさを漲らしてゐるのである。

春樹は見る見る紅くなり、身を避けようとした。そのくせ異様に肌を騒がせてゐた。あのひとの脂ぎつた白い手垢が針目毎にしみ込んで自分に何か囁いてゐると思つたのである。
さしあたり必要な路用の金を用意してゐてくれたのは天知だつた。神戸へ行つたら、ついでに訪ねるといいな、不自由な事があつたら遠慮なく頼めるし、と言つて深尾峰子宛の紹介狀なども彼はちやんと書いて置いてくれた。
男二人の間には、雜誌の話が出、それに參加してゐる仲間の噂がひつきりなしに續いた。その側に坐りつくして、亮子も熱心に耳をかたむけてゐた。時々膝前がくづれかかり、それをかき合せる間も、彼女の顏の位置は動かされなかつた。
「北村君の結婚の話が面白いぢやないですか。先生はあの美那子さんを先方の家からこつそり擔ぎ出したつていふんだから。」
天知はさう言ひ、顏ぢゆうの筋肉を跳ねあがらせて笑つた。自分のひそかな苦しみをもそれによつてかたづけようとするやうな笑ひ方である。天知と話してゐると、時々さし挾まれるかういふ底拔けの哄笑に胸をかきたてられて、知らず知らずにこちらも時間の枠から食み出すのだつた。
北村美那子の實家は、東京府南多摩郡鶴川村だつた。父の石坂昌孝は、三多摩壯士の大親分で、明治三十一年、自由黨の元老板垣退助が大隈重信と握手して內閣を組織したときには、群馬縣知事に拔擢された。その時分の話だが、一夕、縣知事一同が　陛下の御陪食を仰せつけられた。ところが、石

坂昌孝は皿をかたむけてロうつしにぐうとスウプを飲み干し、平生のやうに隣席の人と雜談をかはしてゐたといふ。それほど豪快な人物で彼はあつたのである。だが、そのわりに若い者の戀愛には理解が乏しく、娘が親の眼をかすめて透谷とあひびきを續けてゐることを嗅ぎ出すと、かつとなつた。あんな蒼白いひよろひよろ野郎に何が出來る、といふのだ。透谷の家でも、神經質の、氣の強い母が、收入もないくせに、結婚などとは筋違ひだと反對した。そこで、二人は自由結婚をやつてのけたのである。

三

女の髮の形を感じ、新鮮な頰の肉を感じ、胴の重みを感じて、息苦しさにはつと春樹は眼をさました。彼の横には天知と後から來た夕影が床をならべて寢てゐた。雨戸の隙間から洩れる靑い光線を認めて、ほつとするやうな時刻なのだ。もうぢきに下働きの婆さんが起き出すであらう。婆さんと並んで寢てゐる筈の亮子が起きあがつて着換へをする氣配も、その頃には、襖の向う側から傳つて來るであらう。

彼は自分の生々しい夢に嫌惡を感じた。それでゐて、夢は暗い闇のまん中を圓く切り拔いて、そこにひつかかつてゐるのだ。そしてそこだけいやにまぶしく光つてゐるのである。

彼は太陽の跫音を聞いたやうに思つた。跫音は近づいて來る。それでも夢の殘像は消えず、胸の苦

しさは高まるばかりである。

文學的情熱の高い波立ちと共に、愛は不可見の狀態から彩りの多い具體化を目ざして進むべきであり、その向うには、あらゆる幸福が約束されてゐる。一徹な理性が、倫理感が、しかしそれを妨げるのだ。

たうとう朝は來た。「千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の泪をそそぐ。」といふ『奥の細道』の一節を奥齒にそつと哀しく噛みしめながら、彼は旅の仕度を始めた。下宿へ歸るやうな恰好で濱町の家を出たときから着てゐる汚れた羽織を脱いで、教へ子たちが餞けしてくれた綿入羽織に着換へた。荷物といへば、肩にかけてでも行かれるほどの風呂敷包が一つである。亮子がいれた澁い朝茶も足に新しい白の脚絆をあてたまますすつた。

一つの環境から別の環境への、少々飛躍的でもある移り變りは、浪漫的ではあるが、不安と哀しみに充ちてゐる。彼は胸がふさがつた。このままで行つたら、いつ氣が狂ふかも知れないと思つた。彼の父の發狂も、最初は、眼に見えない敵に惱まされて、敵が攻めて來ると言ひ言ひし、それを追ひ拂はうとして突然寺院の障子に火を放つたのである。親孝行と言はれてゐた兄の民助も、たうとう觀念した。村の人々とも相談の上、父の前にお辭儀をして、

「子が親を縛るといふことはない筈ですが、御病氣ですから許してください。」

と言ひ、そのまま後手にくくりあげて座敷牢に入れてしまつたのである。

「僕の足は浮はついてゐるやうに見えますか？」春樹は玄關の三和土に下り立ち、まだ足になじまぬ草鞋を踏みしめるやうにして訊いた。

「どうして、そんなふうには少しも見えません。どんな場合でも君は靜かだ。」

天知はこの年下の友人のどこか行者めいた旅姿をまじまじと見守つて言つた。「ごく靜かに君はこの世の中を歩いて行く人です。」

「僕にもさう見えるな。」夕影が調子を合せた。

春樹は世話になつた禮を述べ、別れを告げた。そしてそこまで見送らうといふみんなと一緒に砂まじりの土を踏んで木戸の外へ出た。削ぎ立つた山の上にくつきりと晴れあがつた空は、濃い藍色の深みの中に、これから一切が始まらうとするやうな生氣を含んでゐた。

「お輔さんへは、妹から君の心を通じさせて置きます。」天知がしんみりした調子で言つた。

深い友情から出たこの短い言葉は、春樹にとつて、どんなものを贈られるよりも嬉しかつた。一切を棄てて來て、初めて一番眞實な、一番自分の心臟に近いものを報いられた感じである。

月色のリボンをつけた亮子と制服の夕影とは、並んであとに從ひながら、どこか感傷的にだまつてゐた。狹間を拓いた田圃の枯れ枯れとした水たまりの縁へ出、いよいよそこでお別れとなると、しかし、亮子は急に涙ぐんで、

「なるべく早くお歸りになつてね。」と言つた。

春樹はかすかに頷いた。だが、そんな約束の出來る旅であらうか？　超現實的なものへの憧れは、死の影でなく、事實上の死によつてこそ極まるかも知れないのだ。

中途で振り返つてみると、三人のきやうだいはまだ水たまりのわきに突ツ立つてゐた。彼は輕く會釋して先を急いだ。

彼は、裏道づたひに平坦な街道に出た。そこはもう東海道だつた。旅はこれからである。彼は躍りあがつて、一里ばかりの間はほとんど夢中に歩いた。飄々として、銀色の薄い雲に圍まれたなかを行くみたいだつた。

北風が吹き、地面の柔かいところには霜柱が立つてゐた。それもこんな旅にはふさはしかつた。だが、そのうちに彼の胸には恩人の家の方の事がはげしく往來しだした。自分が無斷で行方を晦ましたとわかつた時の小父さんや小母さんやおばあさんの怒りはどんなであらう。民助のかつと眼をむいた血の臭ひのする顔もありありと想像することが出來た。彼はまつたく怯えてしまひ、足を速めようとして體ごと宙を泳いだ。背筋はささくれだつた。

とはいへ、今更どうならう。ここまで來ればもう一か八かである。彼はただ、どうかしてこの自分の家出が、單なる忘恩行爲でなしに、洛東か洛北あたりの寺を指して道を急ぐ發心者のそれに見られるやうに願つた。

彼は古い街道の松並樹の蔭になつた石の一つに腰かけて休んだ。眼の前には、一筋の道と、早春ら

しい、しいんと澄んだ日光とがあるばかりである。肩にかけた風呂敷包を石の側におろしながら、彼は熱い泪をながした。

彼は再び歩き出した。さしむき興津あたりまでは徒歩で通すつもりだつた。路用の金は豐かな方ではなかつたから、夜の泊りは燈心をふとめることさへ許されない安宿を選んだ。

時には海に近いこともあつた。さうかと思ふと、一面に灰色の野原だ。いつたい何時頃だらう、と思つてゐるところへ、汽車の笛が聞えて來る。森の小鳥のやうに、遠く近く距離を示しながら、その汽笛は、次の宿(しゆく)へ急ぐ旅人に荒涼とした野の廣さを告げるのだつた。

彼はふと路傍の薄い陽あたりの中に、寒さを冒して咲き出た名もない花を見つけて、せめてそんな草花にでも旅人と呼ばれるのを樂しんだ。

黑鞘の懷劍

一

花と遊んだあとでは鐵橋がいい。富士川の鐵橋はさぞ長いことであらう。だが、そこまではまだ遠く、彼はやつと沼津へ着いたばかりだつた。

ここで菅笠を買つた。飄々とした感じが形の上にもいよいよしつくりと整つた。
白雪をいただいた富士は、箱根を越す時分から、くつきりした、深紫の皺の多い山あひに見え隱れしてゐたが、吉原、島田あたりまで來ると、その全姿がほとんど肩の上にあつた。彼は透谷が今度の雜誌のために書いた「富嶽の詩神を思ふ」といふ文章をまざまざと記憶の中に呼び起した。彼はそれをあの日本橋の家の茶の間で原稿のまま讀んだのである。

天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を、天の原振りさけ見れば渡る日の、影も隱ひ、照る月の光も見えず、白雲もい行憚り、時じくぞ雪は降りける、語り繼ぎ云ひ繼ぎ行かん富士の高嶺は。

赤人のかうした讃嘆の聲にそのまま呼應したといふ顏で、透谷は書いてゐたのである。
「富嶽よ、汝こそ不朽不死に邇きものか。汝が山上の浮雲よりも早く消え、汝が山腹の電影よりも速に滅する浮世の英雄何の戲れぞ。勇ましや汝の山麓を西に馳する風、こころよや汝の山嶺を東に飛ぶ風、流轉の力汝に迫らず、無常の權汝を襲はず。自由汝と共にあり、國家汝と與に樹てり。何をか畏れとせむ。」

富士こそ、透谷が自然界に見た自由と永遠との象徵なのである。あたかも、處女の純潔が人生に於けるそれであるやうに。
透谷にとつては、富士の麗容と處女の純潔を兩翼とする Idea が、現實批判の基準だつた。エマアソ

ンも云つたやうに、最も抽象的なものが最も實踐的なものなのである。
「遠く望めば美人の如し。近く眺むれば威嚴ある男子なり。」
口吟みながら、春樹は富士川にさしかかつた。鐵橋はそこから少し川下に當つてゐた。彼はその方へ尻を向けて、欄干に倚つた。奔流が岩に碎けてうねりあがり、川上を埋めた松林には、日光の具合ひで、靑だの、綠だの、豐かなひだが入つてゐた。ぐわうと唸つてゐるのは風だ。富士は今はその上に高々と斜線を引いてゐる。彼は飽かずに眺め入つた。そして、再び橋板を踏み鳴らしはじめたのだが、その時ふと、セエクスピア、ダンテ、ミルトン、ワアヅワスのやうな詩仙も、惜しいことにはこの山を見たことがないと思つた。旅情が招くおろかな風狂である。
三方を大樹に圍はれて淨寂の氣に充ちた小高いところに、古い寺院があつた。そこの石垣に倚れば間近に靑く光る海も一目に見おろされた。興津の淸見寺だ。
彼は本堂の横へ行つてみた。そこには人體をやや小さくしたほどの、靑苔のむした五百羅漢の石像があつた。石像たちはいづれも立つたり坐つたりしてゐて、今にも口をききさうである。誰か知つた者に逢へる、といふ不思議な感情に打たれながら、彼はそのおびただしい彫刻の顏を一つ一つ見て廻つた。
石像といふものは歷史と時間の糸とをそのまはりに環にして持つてゐるものである。それでゐて、彼等の表情はそれぞれ永久に一色である。

彼はふと立ちどまつて、まじまじとその中の一つを見守つた。廣い額、隆(たか)い鼻に、激した神經がうねり、眼と口にかつと嚇怒が逆卷いてゐる。そこに透谷がゐた。見れば見るほど透谷に似てゐるのである。あの凄じい怒りは俗惡な現實への挑戰にちがひない。

頭の骨が高く尖り、口を開いてからからと哄笑してゐるのは天知だ。白眼の禿木、瞑想の秋骨、默想の夕影と、五人の心像を缺けなく見出して、彼は喜びにあふれ、多少繪心もあるままに、風呂敷包の中から紙と鉛筆を取り出して一つ一つ寫生した。それに手紙をつけて東京の本町宛に送らうといふのである。

「この五百羅漢を花埋めにして、花羅漢と命じてはどうだ？」などと誰かが諧謔を弄びさうな氣がし、するとよけい愉快になつた。

彼は更に旅を續けた。ところどころ汽車にも乘つて、熱田に行き、そこから便船で四日市へ渡り、龜山に一泊した。芭蕉が生れた國と聞く伊賀の國を通り、伊賀と近江との國境にある淋しい山路を辿つて琵琶湖の方に出、何日目かにやつと草津に着いた。丁度日暮時分で、寒さがきつく、そこへ雪さへ降つて來た。風の持つて來る牡丹雪は、ぢきに足許をま白にした。肩にかけた荷物も見る見る重くなつた。

「まだ自分は踏み出したばかりだ。」

彼は覺えず口走つた。切々(せつせつ)として、心から顫へたくなるやうな旅情である。ついでに瀨田まで行き

たい氣持だつたが、今夜はここでと、宿屋の掛行燈を捜して歩いた。草鞋から、足袋から、冷い水がしみとほる。まだ若ざかりで、熱い血のたぎつた彼の足は、溶け易い春の雪のために燃えた。
草津から瀨田までは半日もかからぬ里程だつた。唐橋を渡り、そこの橋袂から、
「旦那、出まつせ。」
といふ聲に誘はれて、小舟に移つた。同行者は少ない。どこをどう歩いて來たかも忘れて、彼は湖心から落ちて來る鐵納戶色の水が、ぴしや、ぴしやと舟べりを打つ音を樂しんだ。兩岸にはうすい靄が立ちこめ、靄の下には、何だか人のにほひのしない嚴かな花園でもありさうな氣がした。
三十分後には、彼は再び陸地に上つてゐた。國分山をうしろに負ひ、峨々とした巖石の間にひつそりと聳えた古刹石山寺の門前近くには、古い茶丈もある。幻住にいいなと思ひながら、彼はづかづかと本堂の方へ入つて行つた。本堂から少し右寄りに、別棟になつて、雅かな窓のついた源氏の間があつた。紫式部が『源氏物語』五十四帖を書いたといはれる所だ。
彼は風呂敷包の中から一册の洋書を取り出して、紙に包み、「ハムレツト一册」と書いてほそぼそと香煙の立ちのぼる經机の上に供へた。その向うには一丈六尺の如意輪觀世音像が、陰影の豐かな曲線を描いてそそり立つてゐた。
本堂から出ると、また雪が降りだしてゐた。雪の白と樹の翠とまだらになつた山頂で、斷續的に銳い叫び聲をあげてゐるのは、一羽の鴉だ。秋なら月だがと思ひ、すると月光にひかれてこらを逍遙

したこともあるにちがひない式部の﨟たき姿が、ほのかな影繪になつて、靜かに降りつづく雪のなかにちらついた。

二

大津から京都、大阪へと、さすらひの旅は續いた。だが、ここまで來れば、神戸へはもう一息だ。
深尾峰子といふのはどんなひとであらう。この想像は彼を樂しませた。途々幾度かとりかへた草鞋を踏みしめる足に、燃え立つやうな力がこもつてゐた。つい歩くのがもどかしくなり、汽車でと一旦は思ひ立つたが、初めからこれは戀の遍路ではないのだ。危いと氣づいて、彼は赭く乾いた街道をわざとゆつくりのして行つた。
深尾峰子は神戸の高燥な明るい地區にあるミッション・スクウルの教師だつた。彼女はまた寄宿舍の舍監をも兼ねてゐた。春樹はまづ宿をとつて旅装を解いてからにしようかと思つたが、やはり一時も早く會つてみたかつたので、夕暮近い風が吹きすさぶなかをまつすぐに寄宿舍へと足を運んだ。
少女の案内で、彼は日本風の應接間に通された。白つぽく汚れた窓硝子に、一瞬、いくつも外から唇が透けてゐると思ひ、彼はぎよつとした。しかしよく見ると、暖地らしくもう紅梅が咲いてゐたのである。
「今日は、今日はとお待ちしてゐましたのよ。」

初對面の挨拶が濟むと、峰子は火鉢に手をかざしながら言つた。念のためにと書いてもらつた紹介狀は見せないでも、あとから追ひ越して來た天知と亮子の手紙でもうちやんと仔細を知つてゐたのである。

彼女の顏には、母性的な神經があつた。年も春樹より二つ三つ上だつた。

「こんな女ですから、辻の車夫からは、奧さんなどと呼ばれますのよ。」

彼女は大きな黑眼がちの眼にもつと奥の謎のやうな青い光をちらちらと見せて笑つた。うすく脂粉を刷いた頰には、さすがに血がのぼつてゐた。

しばらく天知兄妹のことが話題の中心になつた。

「亮子つていいお名前ね。あたしの名前なんか、ありふれて――」

彼女はさう言つてまた笑つたが、ふと、春樹の着てゐる綿入羽織が一二箇所ほころびてゐるのを見て取つて、

「あたしが縫つてあげますわ。」

と言ひ、膝前を抑へるやうにして立ちあがつた。そして小きざみに部屋の空氣をゆるがして出て行つたと思ふと、ぢきに針と黑の木綿糸を持つて引きかへして來た。

旅の衣裳は、さまざまな感情の色素でよごれたかのやうに、ぷんと垢くさかつた。それが、初めて會ふ女のふつくら肥つた膝の上にひろげられたのである。

俯向き加減になつて巧みに針を運ぶ彼女のこまかに揃つた睫毛が、ランプのあかりを受けて紫色に霑つてゐた。しかし、彼がこの時はつとして眼を瞠つたのは、彼女の手だ。新しい針目が敏速に一つづつ出來てゆくのを樂しんでゐるやうに見えるその手は、うす紅くて、しなやかで、純潔な感じに充ちてゐる。そればかりではない。恰好から、大きさから、それは佐藤輔子の手とそつくりなのだ。

彼は、その事を口に出して言はうとしたが、急に疚しくなり、舌の先一二寸のところまで出て來た言葉をあわてて抑へた。

だが、彼女はもう亮子たちの手紙で彼がこんな流浪の旅に出なければならなくなつた眞の原因をよく知つてゐる筈である。彼女が明治女學校を卒業したとき下級の方にゐた輔子の、雪國育ちらしい皮膚の白さや眼の特徴なども、はつきり彼女の記憶の中にたたみ込まれてゐるにちがひない。それでゐて、自分から口を割らうとしないところに、彼女の知性があるのだ。

彼はしばらく神戸に滯在すると約束して、彼女と別れ、あくどい感じの裏街に宿をとつた。藤の咲く季節でもないのに、暗い行燈の蔭で茶をすすつてゐると、

ここにまた故人を見たり藤のかげ

と一句まとまつた。故人として葬り去つた筈の女の面影を偶然見出した嬉しさで、出がらしの茶にも鼻にしみとほるやうな香があつた。

或る日、彼は東京から帶封をかけた手應へのある郵便物を受け取つた。開いてみると、今度の雜誌

の創刊號だ。長い胎動のはてに、彼等の初生兒が遂に高々と産聲をあげたのである。標題は白地に黒で横に大きく『文學界』としてあつた。どたん場になつて、天知の發案に禿木がよからうと賛成し、それでやうやく決つたのだ。春樹も氣に入つたが、ただ、頭の上に「女學雜誌」といふ四文字が小さく刷り込まれてゐる。『女學雜誌』の分身といふ意味を含ませた肩書なのだ。目ざはりだなと思ひ、彼は初めて二まはり近く年上の巖本善治に對して何か反撥するものを感じた。

卷頭を飾つてゐるのは、春樹が牛込の下宿で書いた詩劇「琵琶法師」だつた。これは聖と俗、肉と靈の戰ひをテエマとしたもので、全部で六齣、四五回連載の豫定だつた。詩劇としての性質上、對話は詩風に書かなければならなかつたが、新味を出さうと、思ひきつて口語體を採用した。口語體の採用は二葉亭あたりを眞似ただけの事だし、構成の表座敷にはセエクスピアがゐた。

だが、物の影の妖しさ、美しさがあるだけで、この作にもまだ線の太い個性がなかつた。

個性の未決定は、しかし、若さの誇りである。若さゆゑの激しい意慾、鋭敏な觸手は、すべての近代的なものを吸收しようとする。大成はそのあとからでいいのだ。

友人たちは何を書いてゐるかと、春樹は快く顫へる指先で更にペエジをめくつた。

三

締切日を過ぎてやうやく屆けられた禿木の「吉田兼好」は、

世をすつる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそすつるなりけれ

と歌つた圓位に青年の苦惱を寄せて評傳したもので、禿木の心の姿がまざまざと窺はれるやうな氣がした。天知の「阿佛尼」は一夜作りで穴埋めみたいなものであつたが、「濃情悲慘な文學」である「十六夜日記」の作者の心臟をつかみ、それが自己の惱みの訴へにもなつてゐた。その他、巖本善治の「文章の道」、透谷の「富嶽の詩神を想ふ」があり、附錄としては「女歌仙家集」「兼好法師家集」「阿佛乳母の文」が收錄してあつた。

これらの中で一番調子が高く、一つ一つの文字に幽艷な光さへ滲み出してゐるのは、やはり透谷の文章だつた。人麿、赤人から、西行、芭蕉に至るまで、「富嶽の周邊を往返して、形なく像なき記念碑を空中に構成し始めたり。詩神去らず、この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり。」と結んだあたりには、殊に雄勁悲壯なひびきがあつた。それはこの新興の國に生れ合せた青年の自我覺醒にからまる苦悶と憂愁のあひだからやみがたく奔騰した熱情の火だつた。

春樹はこの宿で「琵琶法師」の續篇を書いて、東京へ送つた。そのあとでは再び暇な體になり、ちよいちよい峰子を訪ねた。

「あなたの手は、お輔さんに似てゐますね。」

或る日、彼は思ひきつて言つた。彼女は見る見る顏を赧らめ、火鉢の緣に預けてゐた手をひよいとひつこめた。惡かつたかしら、と思ひ、彼は自分でも少し顏の表情を亂した。が、ぢきにそれをつく

ろひ、もつと圖太くならうと肚に力を入れた。狡智が彼を支へてゐるのである。かういふ性質の狡智は、しかし、ひとを傷つけない。部屋の空氣は一層やはらぎ、彼女は袖の下から再び兩手を取り出して、他人のもののやうに、二三度裏返しにもしてつくづくと眺め入つた。それから、姉さんじみた調子で、

「あたし、お輔さんに手紙を出して見ませうかしら。」と言つた。

「ええ、ひとつ出してみてください。」

「尤も、ときどき文通はしてゐるんですがね。」と斷り、言はうか言ふまいかとしばらく躊躇してから、

「あなたは御存じなの？」

「何をです？」

「あのひとには、許嫁があるらしいんですよ。」

「へえ、許嫁が！」

彼は驚いてしまひ、いくら抑へても肚の中が煮えくりかへるのを覺えた。彼の餘儀ない退歩に悲壯な光彩を與へてゐた一徹な理性が、もろくも崩れかかつて來たのである。

「あたしがもし男なら、あなたと御一緒に、旅でも何でもするのですけれどね。」彼女は、男のまごつき方を見まいと努力して言つた。だが、それが却つて彼女の口調に時ならぬ媚態を添へた。「女の體といふものは、さう思ふやうに行きませんので困りますわ。」

「旅はやはり、二人か三人がいいですね。」彼はやつと心を整へて言つた。が、氣がつくと、女の媚態が不思議に身近なものになつてゐた。

「………」

「一人旅だと、時にはやりきれないことがありますよ。」

「さうでせうね。」

表面はどちらもこの世の秩序と規律を恃んだポオズの際立たない應酬だつた。――二人の間はまだ無事だつた。

或る晩、彼が宿で貸してくれた机に倚つて、

「君は肥えたり。天泉を飲むによるか。我は痩せたり。日々風塵を吐かむことを思ふ。」

などと樂書きしてゐるところへ、紺の前掛をあてた番頭がやつて來て、

「お客さんだす。こつちへお通ししまへうか?」と言つた。

彼はぎくりとして、「どんな人?」

「女のひとだつせ。」

番頭は、頬のこけた、虚僞や法螺に慣れた顏をにやにやさせて、もう一度、別嬪だつせと言つた。

彼は立つて廊下づたひに玄關に出、かまひません?　と白い毛糸のショオルを抱へてもじもじする峰子を狹苦しい部屋へ連れて戻つた。

「驚いたでせう、こんな所で。」彼は燈心を搔き立てて言つた。
「あたし、今夜はあの、ひとつ差し上げたいものがありますの。」
彼女はさう言つて、尻の蔭にかくすやうにしてゐた白の袱紗包を取りあげた。中から出て來たのは黑鞘の懷劍だつた。彼女はそれを男の膝先に置いた。
「へえ、懷劍ですか？」
彼はさつと惡寒を感じた。顏の皮膚は硬張つてぎくしやくした。理性が引いてゐたきびしい線を踏み越えた覺えはないぞと思ひながらも、何ともまつたく怯えてしまつたのである。
すると、女はあでやかな、だが少し感傷的な微笑を浮べて、
「母の形見ですの。今までは、大事に持つてゐましたけれど……」
「…………」
「この機會に、思ひきつて手放しますわ。」
「…………」
今度は心に、この途方もない事をする女がそつと白い體ごとのしかかつて來るやうな重みを感じた。彼はそれをはねかへすことが出來ず、受納のしるしにこくりと頷いた。それから袱紗を解き、懷劍の鞘を拂つてみたのである、燈火の輝きに銳利な刃の緣が火花をちらしてうねつた。
「錆びてはゐないでせう？」

「ときどき磨いてゐたんですか？」
「といふわけでもないんですけれど――」
「………」
侍の血をその肌に傳へてゐるこんな階級の女の、肉體と精神を一つに貫いた嚴肅なモラルが今度は感じられ、彼は再び胸の奥で怯えた。彼は、神經一つが病的なほど冴えた一種の痴呆狀態に陷つた。
急に、女の眼が不思議な光をおびて來た。彼ははつとして、顏を据ゑた。彼女はどぎまぎしたが、やつと冷靜をとりもどして、
「お召物をとりかへなさるやうでしたら、あたしが縫つて差し上げますから、遠慮なくおつしやつて――」と言つた。
彼は好意に甘えてもいいと思ひ、しばらく形骸をあめつちに託して、共にあのパラダイスに歸らうか、などと頭の中で戲れた。だが、その途端彼はぎよつとした。ものを言ふ眼――默りこくつてしまつた彼女の眼が、燃え立つ焰の氣配でしきりにものを言つてゐるのである。
母性的な心づかひが、却つて彼女を苦しめてゐるのである。彼女の孤獨で純潔な生涯は、何となく悲痛な色をおびてゐる。
三四日後、賴んだ着物は出來上つた。彼はそれを受け取ると、薄情なくらゐの冷さで彼女に別れを告げた。尤も、汚れた着物は洗濯してあとから送つてもらふことにして彼女に預けて置いたが。

トルバドオル

一

神戸から須磨へ。

彼は廢寺に芭蕉の碑をさぐつてゐる間も、袂のすずしさが感じられて嬉しかつた。女になびき易い感情の壓力から解かれた刹那の安堵をかうして長く尾に引いて味ひながら、一の谷を見に行き、そこから少し引き返して、とある農家の一室を借りた。

軒に近く水仙の花が咲いてゐた。その淸楚な色と形を樂しみながら、彼は初めて透谷の『蓬萊曲』を讀んだ。

半狂半眞、子爵で修行者である主人公柳田素雄が、一挺の琵琶を抱へ、一人の從者を連れて蓬萊山の麓をさまよひ、仙姫露姫に逢ふ。素雄は露姫を愛慕して、彼女が住み慣れてゐる薄暗い洞穴を訪ねる。彼女は眠つてゐる。その堅く結ばれた唇には時間を越えた甘美な春のいぶきが湛へてゐるかと驚いてゐるところへ、ふと靑鬼があらはれて、戀する者を嘲笑する。素雄は山頂にのぼつて神に祈る。

靈山に上り(のぼ)て、魂は、魂は淨められしかども、

未だ殘る形骸(むくろ)やわが仇の巣なる。
　惡鬼夜叉に攻め立てられて、今迄の生命は長き一夜の寢ねられぬ暗(やみ)の中。
　脫去(ぬぎさ)らしてよ、この形骸(むくろ)、この形骸!

その時鬼王があらはれて、塵にて造られながら形骸を厭ふとは、と嘲り、最後に大魔王がやつて來て問答する。大魔王は、この世には旣に神の權威の存在しないことを告げて、自分に服從しろと迫る。素雄はこれを拒絕して、ひとりで苦しむ。苦惱の目は覺めるが、彼は依然として神でもなく靈でもない。死ぬべき運命にうごめく塵の生命であるのを哀しみ、彼はこの世の外に消え去らうと願ふ。そこへ一人の樵夫が來て、素雄が仙姬洞に殘して置いた琵琶を取つて來て渡す。素雄は、

　わが精神(たま)の、わが意情(こころ)の誠實(まこと)の友なりしわが琵琶よ、早や用なし。

と投げ棄てる。琵琶は風に吹かれてころげ落ちながら、不思議な音をあげる。自分の最期を促すのかと、彼はその音に惹かれて、

　死よ、汝(いまし)を愛すなり。死よ、汝より安きものはあらじ。おさらばよ!

と叫び、その場にどうと仆れる。

透谷の處女作は、明治二十二年四月刊行の、同じく詩劇『楚囚の詩』で、『蓬萊曲』は公刊されたものとしては二度目の作だつた。そこには、內容、表現共に淸新な近代詩を產み出すために心をくだいた、詩人の先達としての烈しい氣魄がこもつてゐた。

だが、この『蓬萊曲』一篇を一色に暗く塗りつぶしてゐるペシミスティックなものは、果して何であらうか？　主人公柳田素雄の傷ましい最期に、作者はどれだけ自分自身の思ひを通はせてゐるのであらうか？

現實否定から來る透谷の烈しい絶望は、ハイネの言葉に飜譯して云へば、一つの石から、芽を、莖を、花を咲かせて天穹に圓い頂を作らうとする汎神論的な希求と交錯してゐた。春樹は强く胸を打たれ、自分にはさういふ思想的な深さ、苦さがないと思つた。透谷より四つ若い彼は、まだ月下香のやうに甘いのである。

透谷をただ一人戰場に出て血しぶきをあげてゐる壯烈な兵士とすれば、自分はその從軍記者でありたい、と春樹は思つた。一方はより多く人生的であり、一方はより多く文學的だつた。

だが、ここで二人の間に相似たものを求めれば、どちらも一種の吟遊詩人（トルバドオル）だつた。馬上に跨つて、

　君が愁ひの吐息、君が愛のまなざし、
　我を追ひ、我を留め、我を喜ばせ、我を責む。
　なさけ知らぬ者は、わが忍從を怪しむも、
　君が唇は、彼等にとあらず、我に與へよ。

と竪琴を搔き鳴らしながら諸國を遍歷し、高樓の美姬たちから、その歌、鶯よりもめでたし、と迎へられたのが中世紀末のトルバドオルだが、時代がちがふから、さすがに二人とも自分で彈いたり歌

つたりはしなかつた。それでゐて、彼等が自分自身の新しい教養やポオズとの釣合ひも考へずに、琵琶のやうな古典的な樂器の詩魂によせた憧れは、非常に强かつたのである。

彼は再び神戸に引き返し、そこから汽船に乘つて波のまにまに南に向ふこと一日で高知に着いた。

明治二十四年の暮から、ここの共立學校(英語專門)で、同窓の馬場勝彌が教鞭を執つてゐた。

「高知は僕の故鄕だが、土地の言葉も忘れるほど離れてゐるんでね、まるで遠い旅へ出て行くやうな感じだよ。」

端唄の一つも唄ふこととの出來る、くだけた性情の持ち主である彼も、別れの挨拶に來た時には、聲にからまる感傷をもてあましてゐた。

彼の家は鏡川のほとりにあつた。曲つた事の嫌ひな質で、それが、庭に面した部屋の道具の置き方一つにもあらはれてゐた。感覺などにも西國人らしい聰さがあつた。慾をいへば、詩人に必要な畸峭の性が缺けてゐた。

春樹は、學校教師なんかやめて懸命に文學をやれとすすめ、默詩人といふ號はどうだと言つた。自分の號古藤庵無聲の意味を通はせて、相牽く友情のしるしにしようとしたのである。

「默詩人か。それも惡くないな。」勝彌はこだはりのない顏で笑つた。

障子の外は深い深い月の國だつた。ただ、ときどき風が海の音と鼻にしみとほるやうな潮の匂ひを運んで來た。

春樹は『文學界』のことを言ひだして、ぜひ君も入るんだね、と熱い心で煽つた。
「もちろん入るよ。」
勝彌はぐいと肩を起して言つた。「僕だつてこんな田舍町で朽ちる氣はない。自由民權運動の搖籃地も、今ぢや火の消えたやうな寂しさだよ。その代り、英語熱だけは盛んだね。」
「無理もないね。外國語をやらなければ、何一つ新しい學問が出來ないつていふ時代だから。」
春樹も調子を合せた。「しかし、いくら衣食のためでも、僕たち自身がさういふ風潮の犧牲になつて、下積み仕事ばかりやらされてはたまらないよ。」
彼等のやうな、鋭烈な知性と屈しない精神の持ち主にとつては、やはり文學以外に自分を生かしてゆく道はないのだつた。

二

それだけまた彼等の前途には多くの困難が横たはつてゐた。萬葉の時代には長歌もあつたのに結局短い詩形が殘り、歌と俳句が著しく生長して來たのは、何かそこに動かしがたい原因、言葉の約束とでもいふべきものがあるのではないか、といふ考へが人々の頭を支配し、日本の言葉で新しい詩が書けるかといふことはまだ疑問とされてゐるのである。書けても多くの人に讀まれるほどのものに生長させることが出來るかどうかと疑はれてゐるのである。

明治になつて興つた新しい小説は社會的にもぐんぐん翼を擴げてゐるが、それにくらべると、詩はまだごく狹い領域に押し込められてゐて、讀者も少ない。あのすぐれた譯詩集『於母影』だつて、果してどれだけの人に迎へられたらう。

「どうかして小説と對等の地位にまで詩を引き上げたい、と僕は考へてるんだ。」春樹は熱烈な口調で言つた。「幸ひ北村君のやうな人が先頭に立つてゐてくれるので、力強い氣はしてるが、どうかすると、周圍を見廻して時代の寂しさに胸を打たれることがあるよ。」

「第一、これまでは詩を書いても、適當な發表舞臺がなかつたからね。」

『都の花』や『早稻田文學』を初め、大抵の雜誌は詩を埋草も同樣に扱つてゐるのである。わづかに『國民の友』が、編輯部に宮崎湖處子のやうな新しい田園詩人がゐたりして、比較的詩を優遇してゐた。しかしこれも春樹たちにとつては、雜誌そのもののイデオロギイともいふべき功利主義が目ざはりだつたし、先方だつて、透谷はとにかく、まだ春樹や勝彌に寄稿を求めて來てはゐなかつた。

そこへ『文學界』が創刊されたのである。

「文學の魅力は、どこか戀の魅力と通ふものがあるね。」

一面寡默な春樹も、感情の波に乘ると、不思議なほど饒舌になつた。「人間が營々と築き上げる地上の記念物は、みんな時の力にかき消されてしまふけれど、戀だけは永久に遺る。戀する女はみんな女王だよ。ほら、西洋の詩にあるぢやないか。愛は死よりも強いつて。」

勝彌は友人の眼に燃えてゐるものがじいんと腹にしみ込んで來るのを覺えた。だが一方で、そんなものは結局實體の伴はない幻想だと思ひ、相手が相手だつたら、も少しでふふんと擽つたい鼻聲を洩らすところだつた。春樹は敏感にそれを見て取つたが、搖れ立つ感情の波から身をはづすことが出來ず、よどみのない口調で自分自身の片戀のいきさつまで話してしまつた。勝彌には、そんな戀の仕方がまた不思議だつた。

年齡と性格と經驗から來た、戀愛のモラルの違ひである。興奮から醒めてみると、しかしそれが、春樹には意地の惡い揶揄のやうに感じられた。饒舌といふものは、どうしてかう後味が惡いのであらう。

二人の間の友情は、しかし、それくらゐの事で破られるほど脆いものではなかつた。その證據に、春樹はこの水邊のがらんとした寒い家に一週間から滯在することが出來た。臺所の仕事は雇ひ婆さんがしてゐたが、彼も時にはそれを手傳つた。

明日はお別れだといふ日の晩、彼は友人をつかまへて、ひとつ君のいい咽喉を聞かして欲しいね、と註文した。

「この頃は義太夫をやつてるんだよ。」勝彌は少し得意になつて言つた。「と云つて、まださう澤山憶えてるわけぢやないがね。さあ、何をやらう。」

「太閤記とゆかうか。」

「よし。」

勝彌は俄かに調子づいて、衣服を改め、ちよつと髮に櫛を入れた。次は見臺だが、これは机を代用した。明治學院に入學する日、肩肘の張つたモオニングを着て來てみんなを驚かしたこともある彼にとつては、かういふ時にも、それらしい型が必要なのだ。聞き手も、襟をかき合せて程好いところに端坐した。

二月の夜の街はひつそりとしづまつてゐたが、ここでだけは、石油くさい燈火が今に叫び出しさうなほど賑かに輝き、家の下の黑土も見る見る幻になつて浮びあがつて來るかと思はれた。――太閤記はいよいよ始まつたのである。

顏ぢゆうの筋肉をうごめかせ、高く低く、咽喉の奥からうねり出して來る勝彌の肉聲は、物語の內容とはかけ離れた一種の哀感（ペェソス）をおびてゐた。それが勝彌の本當の素質なのであらうか？　それとも、兩親のゐる東京を離れて、旣に一年ばかりこんな港町の鹽つぽい埃を吸つて來た心の佗しさを彼は知らずに訴へてゐるのであらうか？

春樹はふとシエリイ一代の秀句を思ひ出した。

「Our sweetest songs are those that tell of the saddest thought.」

勝彌の肉聲の歌がそれなのだ。

翌日は霙だつた。勝彌は屋形のある艀に一緒に乘つて、濃碧に澄んだ水面にぎらぎらと油の斑紋を

描いてぢつと泛んでゐる本船まで送つて來た。

送らるる船にて聞くや冬の雨

春樹は紙を取り出して、かじかんだ手で書きつけ、友人に渡した。そんな事でもしなければ、切なくせぐりあげて來る旅情が支へきれなかつたのである。

神戸——一週間前、ほつと胸を撫でおろして離れたこの繁華な開港場が、今の春樹にとつては越えがたい關門だつた。言ふまでもなく、深尾峰子がゐるからである。波の飛沫でびつしより濡れた低い棧橋に一歩足をかけると同時に、荷の底に深くひそませて友人にも見せなかつた懐劍の重みがぐつと肩に來た。彼は血を湧かせながら、もう一度會つて、それから永久に別れようか、と思つた。しかし、會へばやはり危險である。彼はそのまま近江へ引き返し、草津の宿で切れかかつた草鞋を解いた。

花の季節が近づいた頃、彼は更に西行の舊跡をたづねて吉野へ行き、ここにしばらく滯在した。東京からやつて來た星野天知と久しぶりに愉しく話し合ふことが出來たのも、ここの、冷え冷えと重い花の氣に包まれた宿でだつた。だが、さかんに蛙が鳴き出す頃には、三たび琵琶湖畔に歸り、石山寺の門前近くにある茶丈に、旅やけのした體を横たへた。

三

この茶丈には、桑門の才子密藏院といふものが、石山寺の住職になつたとき、身を置いてゐたこと

もあるのだが、今は大工が本職でそのかたはら寺に納める草花を作つてゐる男が、一人ある息子は大津の下駄屋に奉公に出して、女房と二人で住んでゐた。春樹はそれを一間仕切つて借りたのである。雨の洩れるところを繕ひ、疊の埃をたたき、吉野で買つた檜木笠を壁にかけて鼠の通る孔を塞いだ。芭蕉が幻住庵の壁に木曾の檜木笠をかけて體を休めたといふのも、こんな調子だつたのであらう。

部屋は流れに面してゐたので、寢ころんだまま春霞に彩られた唐橋や比叡山を見わたすことが出來た。時には村の子供が面白半分に梅の果の青いのを投げ込んだ。躑躅の咲きみだれたのを杖ぐるみ持つて來て、これあげるわ、と媚び寄る少女もあつた。

行く春を近江の人と惜しみける

うしろの山に庵を結んで籠つてゐたこともあるといふ芭蕉のこんな句が、ふと唇にのぼつて來た。春樹は、見るもの聞くものに今もこの俳人の深い哀感がそのまま傳つてゐるやうな氣がした。

石山から八町ばかり離れた鳥居川村に、腕の冴えた刀鍛冶がゐると聞き、春樹は或る日の午後子供に案內させて訪ねて行つた。右に唐橋を泛べ、はるかに比良の姿が望まれる朽ちかかつた草葺の家にあがり込んで、初めて顏を合せたその刀鍛冶は、髮のま白な七十幾つの老人だつた。名は堀井來助、いまだ曾て娶つたことのない男で、一世の大器を抱きながら、わづかに百姓の鎌などをうつて暮してゐた。

「今の人は劍を弄ぶばかりで、劍を愛することを知りません。」老人は瘦せ枯れた體の芯をきいんとひ

びかせて嘆いた。「それに、建武以前の古作ばかり慕うて、新刀に故人を凌ぐほどのものがあるのに氣づきません。」

『失樂園』の作者、白髪盲目のミルトンは、滿身詩であつたと云はれるが、この鳥居川の老人と來たら、爪一本にも劍の光を凝らしてゐた。

春の日に孤劍三尺ぬきはなち
　われにいくさを挑むとあらば
　さくらを折つてけふ戰はむ
わが枝の折れてさくらの散りもせば
　君にゆづらむ春のあけぼの
三尺の君が孤劍折れもせば
　何をか君はわれにゆづらむ
草庵にうき世の雨を聽かむとき
　願はくはかの一椀の茶のうちに
　涙を入れてわれにあたへよ

春樹はいつか天知に贈つたこんな習作を思ひ出し、心を熱くした。劍舞なども巧みな天知をこの老人に引き合せたら、どんなに喜ぶことであらう。バイロンの風狂を愛する透谷なども、この老人には

きつと魅力に感ずるにちがひない。

「またお出でください。それまでに何か書いて置きませう。」

老人は辭して歸る春樹を夏草の繁つた門の外まで送つて出て約束した。彼は和歌俳諧にも通じ、書も堪能なのだ。「これで若いころは三味線を彈いたこともありましてな。へへへ。」

日本と淸國との間がだんだん險惡になつてゐる時分だつた。春樹は水のすぐ上に七輪を持ち出して澁團扇でばたばた煽いでゐたが、ふと團扇をとめ、宙に眸を据ゑた。老人の鍛へた刃の色が見え、それが、血腥い幻想を呼んでゐるのだ。

火がおこると、南瓜を煮た。

三四日後、彼はまた鳥居川村を訪ね、約束の書を貰つて來た。國破山河在、城春草木深、とあつた。杜甫の句である。彼はそれを檜木笠のわきに貼りつけた。

柳島といふところに、天狗が住んでゐる、むかし、ここの寺の何とかいふ坊さんが行方を晦ましたことがあるが、どうやらそのなれのはてらしい、と話して聞かせる近所の百姓もあつた。

「ねえ、一ぺん見にお行きやす。」その百姓は眼の奥をあをくしてすすめた。

月がいい代り、蚊が獰猛だつた。それで春樹は紙の蚊帳をこしらへて張り、裾へ古錢を飯粒で貼りつけ、團扇でばたばたあたりを拂つてはその內に入つて寢た。

「そら、また始まつた。」

襖一重向うでは、家の人たちがくすくす笑つた。
『文學界』はもう相當に號を重ねてゐた。第三號からは「女學雜誌」といふ肩書が削られ、胸がすつとした。創刊號が出たとき、禿木が巖本善治の「文章の道」といふ一文を見て、目ざはりだから、あの人との關係を絕つてくれ、と天知に迫り、天知は板挾みになつてひどく困つたが、それでは自分の經營に直して獨立しよう、と決心して女學雜誌社の廂から出ることにしたのである。
春樹は連載中の「琵琶法師」以外に詩や隨筆も書き、第二號には「馬上、人生を憶ふ」といふ一文を寄せた。
「一笠と雖も天地を包むにあまりあり。孤笛と雖も宇宙を嘆くにあまりあり。」
馬上の人生は、天の蕊と一つになつてゐるのである。もし愛情の傳達が必要になれば、ここでは華麗なゴチックの花文字が機敏にその役目を果してくれる。高踏する魂の爽かさを彼はたらふく味つた。

夏の會合

一

「島崎さん！　島崎さん！」

或る夜、蚊帳の外でそつと呼ぶ聲がした。內職に螢籠などを張つてゐるおかみさんだ。亭主は大津の方へ行つて留守だつた。

春樹は眠つた振りをしてぢいツと息苦しくおかみさんの樣子を窺つてゐた。身のまはりだけ闇を切り拔き、その中にいつぱい眞紅な毒氣を湛へた獸の氣配で、おかみさんは、少しづつ膝先でにじり寄り、ひよいと蚊帳の裾に手をかけた。顏が、唇が、必死に喘いでゐる。春樹はがたがたと顫へだした。峰子の誘惑さへ避けて來た自分だ、それに、それに、と激し、彼はうつかり腹の底から突拍子もない叫び聲をあげてしまつた。女はあわてて姿をかき消した。

東京の友人が送つてよこした爲替を受け取ると同時に、彼は旅の仕度もそこそこにして湖畔の宿を發つた。彼の懷には、

「島崎君、七月二十二日に東海道の吉原まで來たまへ。その日を期して東西から富士の下に會することとしよう。」

といふ意味の、爲替に附け添へてあつた手紙も、ふかく押し込んであつた。久留米絣の單衣に角帶を捲きつけ、夏帽子をかむり、脚絆ばきの尻端折りといふ旅裝も、今はしつくりと板についてゐた。肩にかけた風呂敷包が二つ。他に吉野の檜木笠も携へた。

草津から汽車に乘つた。吉原に着いたのはその翌朝だつた。街道筋に當る旅籠屋にやうやく辿り着いてみると、もつと早く東京から着いてゐる筈の透谷、禿木、秋骨の三人は、からきし姿を見せなか

つた。春樹が案内された二階の一室には、洋傘や手拭や書物の類がそれぞれ持ち主の體臭を滲ませてちらかつてゐた。東北に面した窓には、富士の全姿が浮きあがつてゐた。それを見飽きる頃になつても、友人たちは歸つて來なかつた。春樹の咽喉元には急に熱い泪が込みあげて來た。彼は自分の汗臭い風呂敷包に顏を押しあてて泣いた。

それは激昂でもなければ、混亂でもなかつた。半年あまりの流浪のあひだ、體の隅々にたたみ込まれて厚い層になつてゐた感情の垢が、友人たちの、姿は見えないがあたたかい息吹きに觸れて、俄かに崩れ落ちて來たのだ。

さうやつて泣いてゐると、その場で自分自身に厚みがつき、ぬくい血液が殖えて來るやうな氣がした。一人一人思ひ出せる友人たちの顏にもくつきりと現實味があり、それがみな泪に近かつた。

附近の景色を漁りに行つてゐた三人は、それから小一時間もして、やつと宿へ引き返して來た。三人は厚い垣のやうに春樹を取卷いた。

「ずゐぶん苦勞して來たらうに、こんな色艶でゐるんだからねえ。」ほそい體を薄鼠色の夏の制服に包んだ禿木が、からかふやうに言つた。

三人が心に描いてゐる島崎春樹といふ男は、傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じ易いと同時にぐづぐづした性格の持ち主である。考へる、すると早や一歩踏み出してゐる、といふのが春樹なのだ。しかし、そんな現場を見せられると、三人はいつもはらはらするのである。

殊に、透谷のやうな、執拗で意地悪い現實の束縛を強く感じてゐる男の眼から見れば、春樹の行爲は無駄だらけなのである。

「旅費まで送つてもらつて濟まなかつたね。」

春樹は坐り直してみんなの前に兩手を突いた。彼の頬はまだほんのりと紅く泪の痕を描いてゐた。

「あれは北村君が出したんだ。」この頃急に毛深くなり、剃刀をあてた顎のあたりを青々と光らしてゐる秋骨が說明した。

「おそろしく物堅いねえ。」と透谷は笑つた。「それより、旅の話でも聞かしてもらはうぢやないか。」

そこへ飮み食ひするものも運ばれて來た。久しぶりの會合だといふので、みんなは膝を崩して酌みかはした。禿木は東京から用意して來た葡萄酒なども持ち出した。春樹はその芳烈な液體を猪口になみなみと注いでもらつて飮んだ。

「酒つて、なかなかうまいもんだね。」

指先で紅く濡れた唇を拭いてから、今度は洋銀の鉈豆煙管をどこやら不恰好な手つきで啣へた。

「おや、」と禿木がびつくりしたやうに言ふ。「島崎君は煙草を喫ひ出したね。」

「うん、旅でつい憶えちやつたんだ。吉野でね。」

春樹はさう言ひ、ぷうと虛空に煙の輪をこしらへてみせた。

醉ひが廻るに連れ、みんなの間には遠慮がとれた。眼の兩側へ手をあてがつて、鼻息ばかり荒く駈

け出して行く獸の眞似などをしてをかしさうに春樹の方を見い見いするのは禿木だ。透谷がそれを最初に言ひ出したのである。「島崎君はあまり熱し過ぎる。熱するのもいいが、馬車馬ではつまらない。」

春樹は醉つた上を更に煽られて悄氣返つた。透谷はまた、みんなに聞いてもらふと言つて、書きかけの原稿を風呂敷包の中から取り出して讀んだ。と思ふと、今度は二年前横濱の矢戸坂上居留地の公會堂で見て來た西洋俳優のハムレット劇の話を持ち出した。その舞臺面の話から始めて、ハムレットに扮した男の身ぶりまでやつてのけたのである。彼の力のこもつた聲は、あの To be or not to be (「世に在る、世に在らぬ」)の獨白にもぴつたりと嵌つてゐた。

「そのハムレットをやつた男は、元はイギリスの國教會の牧師でね、あとで幕の前に立つて、自分が劇界に身を投ずるに到つた動機から、數奇な經歴まで英語でしやべつたがね、ちよつと身につまされたよ。僕も出來れば、幕間の水菓子賣りになつてでもいいから、ひとつ歌舞伎座あたりへ入つてみるつもりだ。」彼の眼は狂熱に近い光をおびて耀いた。「僕に言はせると、ハムレットは最も悲しい夢を見た人間の一人だ。」

あとの三人は眼を瞠つて聞いてゐた。その中でも一番感動したのは、春樹である。懷疑と懊惱に苛まれ、過激になり、本來の意志を蒼白い思想の覆ひで包んだ狂皇子に春樹は曾てないほど親しみを感じた。

透谷は冷たくなつた盃の酒を一息に呑み干した。そして咽喉の奧の方をこくりと鳴らしたかと思ふ

と、歔欷くやうな笑ひ方をした。そして言つたのである。「今度はオフエリヤだ。」

彼はよろよろと立ち上つた。彼は、花束のかはりに白いハンカチを振つて踊り、紺絣の單衣の裾を飜してどんと瘦せぎすな足で疊を踏んでは、あの可憐な娘の歌を歌つた。

How should I your true love know
　From another one?
By his cockle hat and staff,
　And his sandal shoon.

He is dead and gone, lady,
　He is dead and gone;
At his head a green grass turf,
　And his heals a stone.

White his shroud as the mountain snow,
　Larded with sweet flowers;
Which bewept to the grave did go,

With true love showers.

透谷の聲には、あまがらいひびきとリズムがあつた。それへ、春樹や禿木も眞紅に醉つた顏を左右に振り振り合せた。尤も、秋骨だけは酒も飮めず、靜和な氣分を愛する性質のままに、兩足を投げ出して見物してゐたが。

二

吉原には透谷の叔父にあたる人が住んでゐた。庭石の一つ一つに、人間の肉體に髣髴とした形や皺やくぼみを見せ、金魚を飼ひ、廊下の奧深い所でカナリヤを鳴かせたりしてゐるのは、人を裁くことを職業とするこの人物の、裏から見た性格であらう。

「ひとつ皆さんに御馳走したいんだが――」

夕方、透谷の叔父はわざわざ宿まで訪ねて來て、ものくだけた調子で誘つた。甥の友人たちに、ひとときの義理を立てたいのだ。

「せつかくだから、行かう。」透谷がまつ先に立ち上つた。「なに、遠慮することはないさ。」

醉ひは醒め、腹も空きかけてゐる時だつたので、みんなは透谷の叔父のあとにくつつき、ぞろぞろと夕暮の街に練り出した。

兩側から、日中暖められた壁が快い溫氣を返してゐた。地べたにはびつしより水が打たれてゐた。

彼等はだんだん強く食慾を刺戟されだした。

「さあ、どうぞお先に――」

透谷の叔父は、とある家の、木目の光る格子戸の前に立ちどまり、右手を差し伸ばしてすすめた。格子戸の横には、紅い行燈がかけてあり、それに早や灯が入つてゐる。茶屋だ。それだけならいいが、田舎の茶屋は兼業である。

「困つたな。」透谷がまづ頭を掻いた。

「いけないか?」

透谷の叔父は一瞬間眞顔になつたが、反動で、前よりもくだけた粹な態度になり、「さあ、どうぞ皆さん――」

玄關には、もうちやんと迎への女のなまめかしい裾さばきの音もしてゐる。

「どうする?」

透谷はあとの三人を振り返つた。聲の調子に怯えた神經が露出してゐた。それが、さつきから顔ぢゆうの筋肉を硬張らせ、意氣地もなく顫へだしてゐた三人の心に拍車をかけた。彼等は手をつないでうわあと逃げだしたのである。

明くる日、透谷の叔父は再びたづねて來て、今日は自宅ですから、と念を押し、それでもまだもじもじしてゐる四人の青年を否應なしに連れて歸つた。

三日目の朝、彼等は宿を發つて元箱根へ向つた。沼津から三島までは乘合馬車があつた。紺足袋に草鞋ばきといふいでたちの透谷は、自分で馭者臺に腰をおろして、ぴゆう、ぴゆうと鞭を振つた。蒼白い痩せぎすな男とも思はれない凄じさである。醜い現實への挑戰が、彼を醉はせてしまつたのであらうか。友人たちはあつと氣を呑まれ、手に汗を握つた。禿木の如きは支那の「氣服諸俠徒」といふ言葉を思ひ出したほどである。

午後三時過ぎ、元箱根の宿に着いた。自分の旅はどこで終ることかと再び暗く滅入りかけてゐた春樹も、透谷の今日のやうな凄壯な意氣に觸れたあとでは、不思議と活氣づいてゐた。そこへ山の上の涼しさである。青い樹の葉が一二片泥つた風呂にも、山家らしい趣きがあつた。

宿の名は青木といひ、晝食までつけて一日五十錢だつた。終日蘆の湖の風を受けてゐるせゐであらう、部屋の空氣は何となく濕つてゐた。窓の近くでは、鶯や郭公が鳴いてゐた。

「まあ聞きたまへ。」禿木が、みんなのゐる前で春樹に言つた。「このあひだ星野君が花卷を呼び寄せて、何とかあなたも決心しなけれやなりますまい、實は島崎君は神戸へ行つて、これこれです、と言つて聞かせたつて話だぜ。」

花卷といふのは佐藤輔子のことだつた。彼女は岩手縣花卷の生れで、後に札幌農科大學の總長になつた佐藤昌介の妹である。

——すると、輔子は相手の名前を訊いた。少し惡戲が過ぎるかな、と天知は不意に危懼に襲はれた

が、退くに退けないで、
「日頃あなたが姉さんのやうに思つてるひとです。」
「峰子さん？」
「あのひとからも手紙が來やしませんか？」
「來ましたわ。」
だが、それは女同士の友情を補色とした事務的なものに過ぎなかつたのである。亮子から春樹の意中を聞かされ、自分の方でも今までの不確かな感情を棄てて熱くなりかけてゐた彼女は、實際はそれ以上だつたのかと、急に險しい顏になつた。
「僕は花卷に會つてみるつもりだ。」春樹はわきかへる血をぐいと抑へて言つた。事がそこまで進んで來た以上、もう逃げてばかりはゐられないのである。
「北村君、」と禿木は年上の友人の方へ振り向いて、「どういふことになるでせう、この男が花卷に會つたら？」
「それや君、島崎君でなくちやならないつて言ふにきまつてるさ。」透谷は混ぜ返した。
翌日、透谷は一人で先に東京の方へ向けて發つと言ひ出し、彼の發議で午少し前から酒をとりよせた。あとに殘る者からいへば、送別會のかたちである。皿には赤腹(あかはら)を田樂にしたのもついた。
微醺の、氣の立ち易い顏で、透谷は國粹運動の波に乘つて幾分うかれ氣味もある元祿熱を攻擊しだ

した。——元祿文學の讃美は結局好色と物慾への退歩である。女はとにかく、金には全然詩がない。例へば、西鶴の窮極の思想は、金即女、金即心である。

このやうな物質主義を否定してかかる透谷は、宗教こそ人生の眞の色味だと言つた。同じ元祿期のものでありながら、芭蕉の句品に、西鶴などとは全く別の魅力があるのは、その底に一種の宗教的感情がながれてゐるからである。同じやうに、西行には西行の宗教がある。ホメロスにはギリシャ古神の精が見られ、セエクスピアには英國中古の信仰がある。もちろん、彼等の宗教は具象的なものではなかつたし、儀式や形式からも離れてゐた。しかし、それを直ちに宗教でないと斷ずるのは、教會的宗教に狎れきつて、天と人類に向つて開かれた魂の扉を持たない人のことだ。

透谷のかういふ神祕な哲學には、贊成する者もあり、しない者もあつた。禿木などは、もつと現實的な、科學的な考へ方をしてゐた。例へば、外來のプロテスタンティズムは、ギョエテの口眞似をするわけではないが、宗教ではなくて dry morality に過ぎない。人々がこれに歸依して涙を流すのは、自分の主觀で染めた赤い紙を見てゐるのだとも知らずに、床の間に飾つた摘み花を愛賞するのと同じである。

だが、酒の座ではあり、正面から透谷に食つてかかる手もないので、

「たしかにこれは虛々實々だ。」禿木は相手の膝をたたいて言つた。「昨日は馬車を驅つて凄いところを見せたかと思ふと、今日はまたかうしてしんみりした調子を出す。タイプライタア、ぢやない、船

來の樂器みたいだな。」

透谷は頭をかかへて笑つた。

三

「しかし、」と春樹は少し膝を乘り出して、「北村君もおそろしい奴をぶち込んだものだね。僕はあれを草津で讀んだ。」

透谷が京橋區日吉町の民友社に一つの重要な椅子を占めてゐる山路愛山を相手どつて書きなぐつた論戰文「人生に相渉るとは何の謂ぞ」のことを言ひ出したのである。これは『文學界』の第二號に掲げられた。

「單騎陣頭に立つといふ勢ひさ。」と禿木が横合ひから言つた。その顏は明るくほぐれてゐた。やはり、透谷の先覺者らしい魂の高さを身に近く感じてゐたのである。

「いや、少し激してあんな駁撃をやつてみたがね。」透谷は得意さうに微笑した。

事の起りは、愛山が『國民の友』に發表した頼山陽論にある。文學は事業であるが故に尊い、山陽の文學に意味があるのは、それが事業として扱はれてゐるからである、世を益することもなく、人生に相渉ることもない、空の空な文學は事業とは云へない、と愛山は說いた。かうした功利主義思想は英國系のものだが——自由主義がフランス系の思想であるのと同じに——その現實的地盤は日本の國に

も根を張つてゐた。一讀すると、透谷はその場で駁撃の筆を執つた。

「吾人は記憶す、人間は戰ふ爲に生れたるを。戰ふは戰ふ爲に戰ふにあらずして、戰ふべきものあるが故に戰ふものなるを。戰ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり。筆を以てすると劍を以てすると戰ふに於ては相異なるところなし。然れども敵とするものの種類によつて戰ふものの戰ひを異にするは當然なり。戰ふものの戰ひの異なるによつて勝利の趣きもまた異ならざるを得ず。戰士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ。事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし。然れども高大なる戰士は斯くの如く勝利を携へて歸らざることあり。彼の一生は勝利を目的として戰はず、別に大に企圖するところあり。空を撃ち虛を狃ひ、空の空なる事業をなして、戰爭の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。」

西行、セエクスピア、ワアヅワス、馬琴、等々も大戰士であつた。だが、彼等は直接の敵を目がけて限りのある戰場で戰つたのではない。天地のはてに潜む限りなき神祕を目がけて撃つたのである。空の空の空を撃つて星にまで達しようとしたのである。

「悲しきLimit は人間の四面に鐵壁を設けて、人間をして或る野卑なる生涯を脫すること能はざらしむ。鵬の大を以てしても蜩の小を以てしても、同じくこの限りを破ること能はざるなり。而して蜩の小を以て自らその小を知らず、鵬の大を以て自ら其の大を知らず、同じく限りに縛せらるるを知らず、欣然として自足するは憫れむべき自足なり。この憫れむべき自足を以て現象世界（透谷の別の言葉で

いへば、實世界)に處して快樂と幸福とに欣然たるところなしと自信するものは淺薄なる樂天家なり。彼は狹小なる家屋の中に物質的論客と其の座を同じくして、泰平を歌はんとす。歌へ、汝が泰平の歌を。」

愛山は不意にぶち込まれた此の烈しい駁論を讀んで、一晩ぢゆうよく眠れなかつたといふ。

「しかし、人を非難するときに、一番よく自分の缺點がわかるものだね。」透谷は今更のやうに自省の苦さと快さを一緒に味ひながら言つたが、ふいと氣を變へて、「それはさうと、山路君は感心だね。あの忙しいなかで、しよつちう傳道してるんだつてね。なかなかあの眞似は出來ない。」

愛山の思想は別として、その人柄に深く感じてゐる透谷は、あの駁撃文を發表してから數日後、のこのこ彼の自宅を訪ねて行つた。愛山の方でも、肉づきの豐かな赧ら顔に鷹揚な微笑を湛へて、君ほどの好人物はないね、と言ひ、夕食にとろろ飯を馳走してくれた。二人の交際は、どちらの友人でもある青年牧師櫻井明石(透谷の短篇小說「星夜」の主人公のモデル)の本鄉龍岡町の家に偶然落ち合つたのが因で始められたのである。

「時に、北村君、」と春樹が言ひ出した。「また何か新しいものが出來るさうですね。」

「あれは山路君の方から賴みに來たんだ。なにしろ君、あの喧嘩のあとだらう。喧嘩して置いて賴みに來るなんて面白いぢやないか。」

一方が「高踏派」と罵れば、一方がすぐまた「地平線下」とやり返すほど論爭は熾烈になつて來たの

である。「僕はあの氣象に惚れた。だから早速引き受けたよ。」
「今度も面白いものが出來さうだな。」と秋骨。
「だがね、同じ何なら、あゝいふものでなしに、何か別のものを持つて來て欲しかつた。實をいへば、僕はギヨエテが解剖してみたいんだ。」
ギヨエテのやうな鬼才でも、戀愛の節操を貫くことが出來なかつたために、頭は黄金だが心は鉛だと言はれた。透谷はそこに解剖のメスを揮つてみたいのだが、民友社の註文はエマアソンだ。エマアソンの思想と生涯を手頃な厚さの本になるやうに書いてくれ、『十二文豪叢書』の一篇に入れたいから、といふのである。
春樹は酒は欲しくないと言つて、二三杯交き合つたきり、もう食ひ氣の方へ廻つてゐた。だが、ふと箸をとめて、透谷の白いほど熱した顳顬のあたりにそつと鋭い眼をそそいだ。この友人でもあり先覺者でもある男の內部に烈しく渦巻いてゐる意力に傷ましい內訌はないかと疑つたのである。理想はますます高められつつある。しかし現實はあくまで冷い。それは猛然と理想に反撃する。現實と理想との軋轢から來る自己分裂をあの人はちつとも豫感してはゐないのであらうか？　文學を功利の具に供して平氣でゐる人たちの鼻先へ投げつけた「歌へ、汝が泰平の歌を。」といふ言葉の背後でさへ、極度に高い純粋な精神と、それを壓倒する酷烈な現實とが噛み合つてゐはしないか？
醉ひが發するに連れて透谷の神經は過敏になり、感傷の度を增して來た。食ひしんぼうの春樹が秋

骨の皿の上にあるものまで突つつき、いやだよ、君は、と一方が膳を持つて逃げ出す恰好がをかしいと言つて手を打つて笑ひ興ずる聲にさへ凄慘なひびきがあつた。それは笑つてゐるのか、嘲つてゐるのか、それとも泣いてゐるのかわからなかつた。

四

そんな笑ひ方をする時の透谷の顔は、ぴいんと張りつめ、どこか氣狂ひじみてゐた。

ふいと彼は俯伏せになつた。しかし、再び眼をあげて、ぎらぎらと、しかも怯えたやうに虚空の一點を凝視する。誰とも見定めがたい敵の姿が、からい幻になつてちらつくのだ。敵は俗惡で下劣で氣取つた奴である。そいつめが、非常に廣い空間を占めてゐる。厚い、あまりに厚いその唇は、曼珠沙華のやうに眞紅だ。この傲慢ちきな肥つちよが就眠前にひもとく祕密な醫書のなかにいくつも出て來る圖版がこんなではなかつたか。

何と思つたか、透谷はふと着物の袖を肩の附け根あたりまでまくり、右の二の腕に彫つてある刺青の柘榴を出して見せた。

「へえ、こいつは初めてお目にかかる。」禿木が先づ眼を圓くして覗き込んだ。

「なぜこんなものを彫つたんです?」春樹が不思議さうに訊いた。

「口あいて腸見せるあけびかな——あの古句の意味を柘榴で行つたのさ。」

透谷は双方の頬をゆがめて笑つた。——これこそ、彼の暗い、波瀾の多い過去の生涯の形見なのである。「ロあいて賜見せる柘榴かな——いやだね、こんな刺靑は。」

間近に見渡される湖面は、八方浩濶な夏だといふのに、沈鬱な色に塗りつぶされ、ぢつと動かない山影まで凝固した神祕の氣に包まれてゐた。

少し日が傾いて來た頃、透谷は旅裝を整へて出發した。これから一應東京へ歸り、すぐまた東北地方へ傳道に出かけるといふのである。あとの三人は、そこまで見送らう、と言つて一緒に跟いて出た。

「仙臺へ行けば、神様がゐるからね。」

まだ十分醉ひの醒めない、ほんのり紅く隈どられた瞼を、快い山の微風に吹かせながら、透谷は戲談めかして言つた。東北學院の總長で「東北の神様」と讃へられてゐる押川方義にも會つて來るつもりなのである。

かうしてたうとう底倉まで歩き、ここで透谷と別れた三人が再びあとへ引き返した頃には、山から、森から、雲から、銀色の微妙な響きがわき立つやうな夕暮が迫つてゐた。曾我兄弟の墓のある所は、松明をつけて通つた。

「どう見ても僕たちは高踏派だね、かうして山の上を歩いてゐる様子は。」禿木が笑つて言つた。

翌日はこの禿木も一人で東京を指して發つた。あとは二人きりである。

「馬場君を呼ばうぢやないか？」秋骨が、かたく結びついた三羽鴉が一羽缺けてゐるのを惜しむやう

な口調で言ひ出した。
馬場勝彌は、いよいよ高知を引き上げて上京した矢先だつたが、山の上の凉氣に惹かれ、早速ステツキひとつでやつて來た。
「島崎君が訪ねて來てくれなかつたら、僕はまだあの港町にくすぶつてゐたかも知れない。」
彼は廣い額のあたりに軒昂とした意氣を示して言つた。「そこで雅號だが、これは默詩人をやめて孤蝶としようと思ふ。その方が僕らしいぢやないか。」
夜、彼は懷に入れて持つて來た近松の世話物を持ち出して、例の、底に一種の感傷を湛へた肉聲に巧みな抑揚をつけて讀んで聞かせた。この同じ部屋で透谷が元祿熱を攻擊したとも知らずにである。あとの二人も、腹にしみわたる感激のままに、矛盾も感じないでぢつと耳を澄ましてゐた。
八月の十日過ぎには、この三人も宿を發ち、棒澤の溪谷に沿うた新道を下りて塔の澤に出た。そして、孤蝶の言ふままに、千歲橋のほとりにある溫泉宿環翠樓の二階に上り、白地の宿衣に着換へた。庭の池へ落ちる筧の音が淸しかつた。廊下の欄干に倚ると、風にゆれる青葉を隔てて、岩と岩との間に白く泡立つ急流が見おろされた。小田原の南で海へそそぐ早川だ。
女中にも、可愛いのがゐた。
「あなた、そんなにお暑いんですか？」
千代子といふ娘が、食事中も時々團扇を取りあげる秋骨のうしろへ廻つて凉しい風を送つた。

「君はどこのひと？」今度は孤蝶が飯をよそつてもらひながら訊いた。
「早川ですの。」
千代子は、卑下する氣色もなく、生え揃つた睫毛の下に深く澄んだ眸をまともに向けて言つたが、相手が小氣味のいい手應へを見せてくれないので、「御存じないの？　小田原から熱海へ行く街道の振り出しの村よ。」
「その早川には、美人が多いの？」
「美人が？　なあぜ？」
「だつて、君がとてもきれいだからさ。」
「あら、あたしどうしませう。」
千代子は、兩袖で顔を蔽うて部屋をころがつた。するとよけい襟足の白さがわき立ち、胸がふくれる。まだ豐かな情感で張りきるほど成熟してゐない彼女の體を飾る、淡紅色の地に石竹の花をちらした帶の柄も、筧の音の淸しい座敷ではうつりがよかつた。
やがて、三人は手拭を提げ階段を下りて行つた。庭には百日紅が花ざかりで、それが、拭き込んだ廊下を美しくして見せた。湯槽は石垣の間に設けられ、深い岩底から涌き出る單純性の湯が、槽の縁を越すほどあふれてゐた。
「まつたく、若い者には毒な場所だな。」

秋骨がまづ裸になりながら言つた。その感慨の催し方がをかしいと言つて、あとの二人はくつくつと笑つた。

深い湯の中で彈力を拔いた肢體は、動くと、錯綜した光線の加減で蒼白く透きとほつて來たり、柔かな薔薇色の曲線を描いたりした。白晝濃厚な官能一つで描き出した青春圖會が、そこにあつた。

秋骨の頭には、とても鮮かに千代子の顏が描き出されてゐた。その眸は、夕方湖水の上を飛ぶ螢の、嗅げば不思議にむしあつい火のやうに蒼かつた。ぐいと強くひかれてゆく心に氣づいて、彼は頭を振り、ばちやばちやと手拭を使つた。それから、あのイギリスの湖畔詩人ワアヅワスの「ひとり麥刈る少女」の一節をそつと低聲で口吟んだ。

「いいな、あの娘は。」孤蝶が柔かな湯の感觸を樂しみながら、快活な調子で呟いた。

君もか、と言ひかけて、秋骨はあわてて口をつぐみ、ぷいとそつぽを向いた。

友人の惱みも知らずに、槽の緣にぼんのくぼを押しつけ、あをのけに死んだやうになつてゐるのは春樹だつた。

友人たちはそれぞれ歸るべき家を持つてゐるのに、彼一人はある家も棄てた報いで、今後も流浪の旅を續けるよりほかはなかつた。それなら、いつが旅の終りか、といふことは彼自身にもわからなかつた。

彼は痙攣的な手つきで手拭を顎に押しあて、二三度無精髭の上をこすり廻した。しかしこの運動が

終ると、再び呼吸の低い靜止狀態に返つた。ただ、少し輪郭の穢れた眼だけが調子の狂つた白つぽい光を放つてゐた。間近になつた東京の靑空が、彼を脅してゐるのである。

色法師

一

「色法師、ゐるか？」

馬場孤蝶がステッキを振り振り快活な調子で訪ねて來た。そこは鎌倉の圓覺寺の境內にある小さな禪寺の一室で、四角な爐が切つてあつた。春樹は古びた戶棚に酒徳利と一緒に置きならべてある茶道具を取り出して、香のいいやつを客にすすめようとしたが、朝がたちよつとおこした爐の炭火がきれいに消えてゐた。季節はまだ八月の終りなのである。

「しかし、君も變つたなあ。」

孤蝶は鷹揚な微笑の底に感慨を湛へて言つた。「明治學院時代には、女の話でもしようものなら、ぷいとわきへ向いたくせに、今ぢや平氣で艶福などといふ言葉を遣ふんだからねえ。」

「………」

「ところで、戸川の艶福だが——おつと、これはまだ艶福つていふところまでは行つてゐないが——君もあの話を聞いたかね？」
「へえ、そんな話があるのか？」春樹は少し膝を乘り出した。
「そんな話があるのか、でもないよ。」と笑つて、「ほら、例の環翠樓のお千代さんさ。戸川は今あの娘に首つたけになつてるんだよ。ついこの間、僕んとこへ長い手紙をよこして心中を打ち明けたんだがね、これには、さすがの僕も考へ込んぢやつた。」
金の持ち合せの乏しい春樹が塔の澤を引き上げてからも、孤蝶と秋骨はまだしばらくあとに殘り、しまひには秋骨一人になつて、あの同じ二階で苦惱の夏を送つたのである。
四五日後、今度は透谷が、旅歸りの、まだ過度な激昻と疲勞の痕がとれない顏で訪ねて來た。
「奥州にはもつと長くゐる豫定だつたんだが、一緒に行つた宣教師がおそろしく足の達者な奴でね、閉口さ。僕のやうな弱蟲には、あんなに毎日毎日歩けやしない。それでさつさと一人で引き上げて來たんだ。宣教師をだまくらかすのも、これでなかなか骨が折れるよ。」
透谷はさう言つて、いやに底の白けた笑ひ方をした。現在の透谷にとつては、宣教師の仕事を手傳ひ、宣教師と行動を共にすることは、結局宣教師を瞞着することになるのだ。形式的な禮典そのものを宗教と心得てゐる彼等に對して、透谷は金以外のものを期待することは出來なかつたからである。だが、さういふ彼も時には宣教師をだまくらかすどころか、本氣になつて宗教を說いた。教壇に立

ちなさつたら、キリストの話だけして下さい、と宣教師は言ふのだが、すると彼は機嫌を惡くした。彼はいつも『舊約聖書』の、琴にあはせて伶長(うたのかみ)に歌はせた「詩篇」か、空幻と哀傷の中にこそ叡智があると說いた「傳道の書」の話をした。

「時に、」と彼は調子を改めて、「君もこんな所でごろごろしてゐたんぢや困るだらう。ひとつ東北の方へ行つてみる氣はないかね。八戸に大きな造酒家があつてね、そこの若主人といふのがなかなか話せる男なんだ。僕が紹介狀を書く。酒屋の居候も面白いかも知れないぜ。藏書も澤山あつたつけ。」

春樹の心は動いた。しかし、八戸へ行くなら行くで、その前に、何とかして一度輔子に會ひたいと思つた。幽寂な旅情に生きようとする心が再び慕るとともに、まだ一度もその唇を盜まず、その手に觸れたことのない彼女への思慕が强まつた。

この話が一段落つくと、春樹は今度は秋骨の塔の澤の一件を持ち出した。その後、彼も秋骨から直接に眞情のあふれた告白の手紙を受け取つてひどく感動したのである。

「ほう、あのラスキンが――」透谷は揶揄と親愛の情とをちやんぽんにした口調で言つた。

ラスキンといふのは、透谷が戶川秋骨に與へた、そして自分でもときどき愛用する綽名だつた。透谷に言はせると、同人中で秋骨は一番詩人的素質が少ない。そのかはり、哲學者的なところがある。『文學界』第三號で英國の女流作家ジョオジ・エリオットを論じたときも、小說にして哲理を持たざれば、そはわれ等に何かせん、などと云つた。特別にラスキンを研究してゐるやうには見えないが、さ

ういつた氣分がラスキンそつくりなのだ。

「しかし、何だかあはれだね。」

彼は最後にさう言つて、顏いつぱいに暗いしんみりしたものを漲らせた。人の噂をするときでも、だんだん話を暗い方へ持つてゆき、痙攣的に頭を振るのが彼の癖だつた。

翌日、春樹は住職に禮を言つて寺を去つた。空は何か大きい力が通り過ぎたあとのやうにぢつとしづまり、その底の方に隙間もなくほそい水滴を湛へてゐた。秋が來たのだ。東北地方ではもう連峰の頂から吹きおろして來る風が草を伏せ、樹々の葉をふるひ落してゐるかも知れない。これからその寒い國へ旅立たうとして、彼は袷羽織一枚の持ち合せもなかつた。一つに纏めた風呂敷包の中には、數冊の愛讀書と、深尾峰子から贈られた懷劍と、着換への單衣が二枚あるきりだつた。うかうかしてゐると、東京までの汽車賃にも差支へさうだ。

午後四時過ぎ、彼は築地の秋骨の家に辿り着き、すぐ二階の書齋へ通された。輔子に逢へるやうなら、二三日置いてもらはうといふ肚である。濱町の恩人の家に歸るわけにゆかない彼としては、結局この友人にすがるほかなかつた。

「自家(うち)のおばあさんにだけは、例の一件を話したよ。」秋骨は、どこか沈痛な、感度の高い顏で言つた。

「そしたら?」

「あたまからいけないとは言はないが、よく考へて見ろつて。」

髪の白い、眼のくぼんだ、しかしまだ皮膚に深い艶のある彼の祖母は、日頃の端正な表情こそ亂さなかつたが、そんな溫泉宿の女中風情をといふ口吻だつたのである。だが、女中が何であらう。現に彼は『文學界』九月號によせた「山家漫言」と題した随筆の中にかう書いたくらゐである。
「才能も學藝も事業も人間を形容する一資料たるのみ。眞の人は心宮の深きところに靜座せり。此の心宮の醇の醇たるもの、之を眞の人と云ふ。」

二

その夜、親友同士は並べて敷いた寢床に入つてからも、ぼそぼそ話しつづけた。話があつて、あつて、ひとりでに熱く胸がふくらんで來るのである。
「君、花巻にも逢つたよ。」秋骨は、彈みのある微笑の穗先で、上から落ちて來るランプの光をはねかへして言つた。
彼もこの九月から明治女學校で教鞭を執つてゐるのである。彼の受け持ちは、英語と哲學史だつた。
「なんなら、手紙の使ひくらゐはしてやるぜ。」
同じく戀で惱む者の、敏捷な、あたたかい思ひやりである。春樹は寢床から起き出して、雜誌や原稿紙のちらかつた友人の机に向つた。
だが、彼の鬱屈した重い性質は、底からたぎり立つ感情にも生彩のある表現をとらせなかつた。や

つと出來上つた手紙は、以前の教師然とした堅苦しい調子のもので、八戸へ行く前にぜひ一度會つて話したい、と書いてあるだけだつた。

彼は再び寢床に入つた。ただの一度でも身近に彼女の熱い息づかひの音を聞くことが出來たら、どんなに生き甲斐があらう。青の一色こそ、空や大氣、といふよりももつと手近なところにあるあやめの花が、見る者に與へる官能的な興奮の祕密だが、それに似たものを若い女が持つてゐるのである。心の苦しみと哀しみを紛らさうとして、彼は『文學界』第六號から連載してゐる詩劇「茶のけむり」の續きをどう書かうかと考へだした。この世にただ一つ朽ちないものがある。それが戀だ、といふのがこの作品のテエマだつた。

だが、彼には今もつて個性が具はつてゐなかつた。個性の未決定は、沙漠と隣合せてゐる。それが果して若さの誇りであらうか？　沙漠に色濃い花を咲かせることこそ、靑年に課せられた一番大事な仕事でなければならぬ。

自分は藝術を重んじてゐるやうで、實はあべこべに輕んじてゐるのではあるまいか、と彼は考へてみる。自分は藝術を第二の人生、第二の自然と見てゐるのではあるまいか？

透谷に云はせれば、文學とは「內部の生命を觀察すべきもの」「內部の生命の百般の表顯を觀察すべきもの」である（『文學界』第五號所載「內部生命論」）。その文學の極致は詩にある、と禿木は高らかに叫び、同じ考へは春樹にもあつた。靑春のいのちは彼等の唇にあふれ、感激の泪は頰にいくつも美し

い線を引いてゐる。いや、そればかりではない。彼等は文學のためにほとんど寢食を忘れ、悲哀と煩悶のために狂ひ出さうとさへしてゐるのである。そこから、どうして新しい言葉が生れて來ないのだ新しい――生涯ともいふべき、個性のある新しい言葉が？

翌日の朝、秋骨は羽織袴で出かけた。歸つて來たのは、午後の、まだかなり日の高い、透明な空氣が金屬のやうにひびく頃だつた。

彼は教科書のあひだからうす桃色の封筒を取り出して、待ちあぐんでゐた友人の手に渡した。「君の手紙を渡すのに、ちよつと苦心したぜ。」

「北村君は今日も來てゐた？」春樹は別の事を訊いた。

「うん、來てゐた。今度國府津の方へ引越したんだつてね。」

「學校の方はどうするんだらう？」

「汽車で通ふんだとさ。」

秋骨が氣をきかして階下へ下りて行つた間に、春樹は恐る恐る手紙の封を切つた。この場合、かへつてお目にかからない方がいいかと思ひます、とあつた。ためらひ惱んで練りあげた末の、思慮ぶかいやうで却つて不自然な堅いものが、文字の隙間にはだかつてゐた。

「ねえ君、これから北村君の新居を襲はうぢやないか。」秋骨が再び上つて來て誘つた。

二人は連れ立つて家を出た。だが、彼等がやつと新橋驛の近代的な石造の建物の中へ呑み込まれた

と思はれる頃、この下宿屋の格子づくりの玄關先へ俥の梶棒をおろさせた若い女の客があつた。
「ちよつとだから、待つててね。」
車夫に言ひつけると、女はもう一度門札を見上げてから、格子戸をあけた。紫地の帶の色がぱつと反射して、內側の冷い空氣の層がゆらゆらした。わが心の影かと女はむしろ怯えたが、ぢきに顏色を整へて、內側へ聲をかけた。
「島崎さんですか。」應對に出た、頰の薔薇色に明るんだ少女が歯ぎれのいい口調で言ふ。「あの方は、少し前お出かけになりましたわ、あたしの從兄さんと。」
「まあ、こんなに急いで參りましたのに――」睫毛がわなわなくほど失望の色を示したが、はつと、そのむきな出方に氣づき、「いいえ、何ですの、ちよつとお會ひしたい用事があつたもんですから――」
「それやまあ殘念な事をなさいましたわね。」
夜遲くなつて、春樹と秋骨は國府津から歸つて來た。
春樹は、部屋に入るとそのまま疊の上に立ちつくしてしまつた。今まで頭の上に載せてゐた月が恰好よく硝子窓に嵌つてゐるのを見てずいと鳩尾を絞られたのではない。今日透谷から受けた刺戟も消え、思ひ屈した心でここまで歸り着くと同時に、すべての想念が活動を停止したのだ。
「君、ランプを點けたまへな。」あとから上つて來て秋骨が言つた。
春樹はマッチを搜した。木偶の坊が機械に操られて幽かに動くやうな動作である。今に飛びあがる

な、と思ひながら、秋骨は聲に彈みをつけて、
「時に君、僕たちが出たすぐあとへ、オフエリヤが訪ねて來たさうだぜ。」
彼等の一團の間では、佐藤輔子は時にはオフエリヤとも呼ばれてゐたのである。それは彼女がオフエリヤに似てゐるといふよりも、一種の氣分からだつた。
「………」
信じられない、といふやうに春樹は眼を瞠つた。横から受けたランプのあかりに、唇が紫色の襞を描いて浮きあがつてゐた。それが今にがくがくと喘ぎ出しさうである。
「會はない方がいいかと思ひます、なんて手紙をよこして置きながら、またすぐやつて來るところが、あのひとだね。」
「………」
「ねえ君、かうなれやどうでも一度會つて置きたまへ。僕が機會をつくつてやる。」

三

鬱陶しい雨が降り、それがからりと霽れあがつたと思ふと、少し風が出た。朝夕の清涼にひきかへ、まだ日中は興奮などするとねつとり汗ばむくらゐの陽氣である。
「お茶菓子の仕度は階下へ命じて置いたからね。」秋骨が、そんな事で食客に氣を揉ませまいといふ心

で言つた。「それから僕はちよつと用達しに行つて來るよ。」

一つづつ階段を下りて行く友人の足音が、深い谷底に呑まれたやうに、ふつつりと跡を絶つと、春樹は刻々と迫つてくる幸福な時間の內容を初めてはつきりと意識の上にのぼした。戰きながら、彼はぢつと坐つてゐた。が、ふと衝動的にわが手を掴んだ。さうだ、右の手で左の手を。彼は今度はその手を額に當てた。皮膚が、そこだけに體熱の蕊が凝つてゐるかのやうにむしあつかつた。それから兩方の瞼にさはつてみた。瞼が少しでも紅く腫れあがつてゐたら、恥しいと思つたのである。

だが、もつと恥しいのは服裝だつた。彼は洗ひざらしの白つぽい單衣の上に角帶を捲きつけたきりなのだ。

麴町上二番町の、黑塗りの門のある姉の家に身を置いてゐる輔子は、その日も俥でやつて來た。大勢ゐる秋骨の從妹はみんな學校へ行き、奧の方の部屋部屋に下宿してゐる連中もそれぞれ出て行つてしまつたあとで、窓から射し込んだ日光が明るく疊を染めてゐた。それが、こんな所に初めて相對して坐る二人によけいはれがましい思ひをさせた。

彼女は學校通ひの質素な不斷着を着たままで、髮には花も挿さずにゐた。許されて會ひに來たのではないのだ。玄關の外には今日も車夫が待たしてあつた。

體ぢゆうに傳はる快い戰慄を、春樹は必死に抑へてゐた。燃え立つ春の匂ひが萬遍なく部屋に充ちわたり、それと相觸れて鳴るものが心臟の奧深くにひそんでゐるのだ。しかし、與へられた時間は短

く、言葉の一つ、呼吸の一つも、無駄に費すことが出來ないものになつてゐた。
彼はしかし、こんな場合に必要な何の手管も心得てゐなかつた。それに、彼の姿勢は以前の教師そつくりのぎごちない堅さである。當然輔子の方でも堅い枠の中に押し込められて、身動きも出來ない思ひなのだ。今紫のリボンに今紫の羽織といふモダンな新裝になじめない彼女は、その代り、帶にその色を出してゐた。それが、純白な襦袢の襟と際立つた對照を示してゐた。
「脫がしていただきますわ。」と彼女はやつとそれだけ言つて、暑苦しさうに羽織をとつた。彼女のうしろは壁だつた。
「僕はあなたに濟まないと思つてゐます。」春樹はそんなふうに切りだした。
「濟まないとお思ひなさるんですか？」彼女はにやツとほほ笑んだ。淸らかな皓い齒。自然の色素に富んだ、ぬくい唇。
彼はうつかり構へをくづしかけたが、はつと氣づくと、前よりもよけい堅くなつて、
「峰子さんから、お便りがありますか？」
「ええ、時々。」と頷いて、「神戶でお會ひになつたんですつてね。」
「ええ。」
彼女は苦しさうに眼を伏せた。僕、あのひととは何でもないんですよ、と言つて聞かせる以外に彼女を安心させる途はないのだ。骨にこたへるほど彼はそれを知つた。しかしいざとなると、却つてう

しろめたくてそんな事は言ひ出せないのである。
するど、彼女は不意に顏をあげ、どこか惡びれた調子で、
「あの方、言つてゐらつしやいませんでした?」
「何をです?」彼は呑み込めないで訊き返した。
「あたしに、許嫁があることをですわ。」
彼女は一息に言ひ、下から疊を彩つた光線に射られて、苦しさうに睫毛をぱちぱちさせた。
彼の方では、しかし、そんな事も計算に入れて十分心を練つた上での、今日のあひびきだつたのである。
「良い人ださうですね。僕も一度お目にかかりたい と思つてゐます。」彼は却つて樂な氣持になつて言つた。
「會つて御覽なすつたらいいでせう。」
彼女の言葉は急に居直つた不敵さとも取れ、許嫁などのある身の上を呪つての自暴とも取れた。彼はまごついた。
彼女の許嫁は、鹿内憲二といひ、少壯な農學士だつた。また大氣や颶風の運動、胎葉發生の研究などにも趣味を持つてゐた。そんな人に會つてみたいといふ考へは、しかし、ぎりぎりのところまで押しつめると、むしろ恐怖を起させた。

疊の上にあつた光線は、小きざみに遠のいて、今は跡方もなくなつてゐた。今日は學校の方は遲刻と肚を据ゑてゐた輔子も、急に時間の枠の中に引き戻され落ちつきを失つて來たが、もう一度男の端麗な鼻梁をそつと奥齒で吸ひたさうに打ち眺めて、
「八戸からは、いつ頃お歸りになりますの？」
と訊いた。
「いつかわかりません。」
ぽつんと、小石でも拋るやうな言ひ方だつた。しかし、すぐたたみかけて、「向うの所番地を書いて置きませう。」
何か紙は、と眼で搜しながら彼は立ちあがつた。すると、彼女も體をねぢつて壁際の本箱の方へ手を伸ばさうとする。その上に、卷紙が置いてあるのだ。途端に、上からと下からと二人の手が觸れ合つた。
「あら！」と彼女はうつかり叫び、そのはしたなさに氣づくと、二重な氣持で紅くなつた。

早く遠い所へ行け、といふ聲を春樹は耳の底にはつきり聞いたと思つた。さうだ、八戸へ行かう。許嫁のあるひとなぞに思ひを寄せたつて何になる？
彼は秋骨に世話になつた禮を述べ、こんなもので迷惑だらうが、と斷り、峰子から贈られた懷劍を

白の袱紗のまま預かつてもらつた。それから、日本橋の天知の家を訪ねた。輔子のことで世話になり、その上また峰子の捕虜になりかけて歸つて來たとあつては、面映くて閾を跨ぎかねたが、と云つて他に旅費の心配をしてくれるほど餘裕のある人はなかつたのである。

「八戸といへば、君、まんざら離れた方角でもないね。」夕影が遠廻しに匂はせるやうな言ひ方をした。

一國の者に「男三さん、男三さん」と親しみ呼ばれてゐる夕影は、かういふ剽輕な一面があるほかに、おそろしく綿密な性質で、雜誌の校正や印刷に關した事はほとんど一人で引受けてゐた。文學そのものにも深い關心を持つてゐたが、自分では何一つ書かうとしなかつた。彼はただ、隱れた編輯者で滿足してゐた。

春樹はここに一晩泊り、翌朝、起き拔けの體ですぐ旅仕度を始めた。そこは例の茶の間だつた。

ふと襖が開いて、輕い追ひ風が起つたと思ふと、五十四五歳の、小振りの丸髷に裏葉色の手柄をかけた母親が入つて來た。

「男三さん、これから島崎さんもお寒い方へいらつしやるといふのに、お羽織もおあんなさらないぢや――」

家庭の事から店の經營に至るまでほとんど一人で切り廻してゐるひとだけに、細氣(こまぎ)もついた。相手に卑下又は反撥を感じさせないための心づかひをも見せた眼を今度は春樹の方へ向けて、「あなた、差上げられるやうな品ぢやないんでございますけれど――」

すると亮子がもうそこへ品物を持つて來てゐた。友人のお下りだ。春樹はそれをみんなの見てゐる前で洗ひざらしの單衣の上に着た。紐もかたく結んだ。
「丈は丁度いいわ。」うしろで手傳つてゐた亮子が言つた。男を恥しめまいとする心づかひで緊張してゐた顏を、ほつとゆるめて。

日本の言葉

一

けさ立ちそめし秋風に、
「自然」のいろはかはりけり。
高梢に蟬の聲細く、
茂草に蟲の歌悲し。
　林には、
　鵯のこゑさへうらがれて、
野面には

千草の花もうれひけり。
あはれ、あはれ、蝶一羽、
破れし花に眠れるよ。

早やも來ぬ、早やも來ぬ秋。
萬物秋となりにけれ。
蟻はおどろきて穴索め、
蛇はうなづきて洞に入る。
田つくりは、
あしたの星に稲を刈り、
山樵は、
日に嘯むきて冬に備ふ。
蝶よ、いましのみ、蝶よ、
破れし花に眠るはいかに。

破れし花も宿假れば、

運命のそなへし床なるを。
春のはじめに迷ひ出で、
秋の今日まで醉ひ醉ひて、
あしたには、
　千よろづの花の露に厭き、
ゆふべには、
夢なき夢の數を經ぬ。
只だ此ままに寂として、
　花もろともに滅えばやな。

書きあげたばかりで、まだ墨の色もあざやかな原稿の上にぢつと眼を据ゑて、透谷が、例の淸しい、力のある聲で讀んで聞かせた。その前には、或る用事を持つて來た秋骨と、わづか一週間で八戸を引き上げて、ほんとに宅によく似てゐらつしやるわ、と美那子に笑はれた春樹とが、息を呑んで坐つてゐた。

丁度夕食後の事だつた。不如意ななかから美那子が氣をきかして一本つけた酒に微醉し、それでやつと一瞬の間生活の疲勞を忘れ、敵を忘れ、子供のことさへ忘れてゐた透谷は、讀み終ると、嗚咽とも自嘲とも取れる笑ひ方をしながら膝をくづした。あとの二人もほつと緊張を解いた。

そこは、蜜柑畑の多い豐饒な谷一つ隔てて國府津に接續してゐる、相模灘沿岸の漁村前川村の、小高い丘の上にある長泉寺の一室だつた。古い寺に特有な、物の朽ちるやうな臭ひが漂つてゐるのも、却つて惡くなかつた。それに、芝公園の家を出て、こちらへ引越して來るまでゐた、廂の淺い麻布の家などとくらべると、とても廣々としてゐた。四圍の空氣には、精神の滋養分になるやうな、微妙な靜けさが漲つてゐた。

部屋の隅の方に、まだ片言も言へない、むづかる一方の英子をやつと寢かしつけると、美那子も男たちの仲間入りをした。

「あなた、」と彼女は夫の方へ向いた。氣象の勝つた肌理のこまかい顏が微笑で輝いてゐた。「今の詩の中に『運命のそなへし』といふ文句があつたでせう。あれを少し直したらどうでせうか？」

「どういふふうに？」

「ちよつとの違ひですが、『運命のさだめし』とした方がいいかと思ひますわ。」

透谷は急に笑ひ出した。「僕の細君も、これでなかなか詩人だよ。」

透谷のその笑ひ聲は、しかし、明るくて陽氣な筈だのに、うす青い、脆い感じの餘韻を引いた。彼女は臺所へ逃げ出して行きながら、あの聲、とかすかに鳥肌立つた。友人二人も笑ひくづした顏の表情をゆつくり整へながら、背筋に冷りとしみ込むものを感じた。

透谷が持ち出した原稿の中には、未完成の戲曲もあつた。「五緣」「十夢」とスケエルも大きく構想も

莊麗に腹案だけは例のやうにちやんと出來上つてゐるのだが、夏以來、まだ「十夢」の最初のところの「惡夢」に少し手をつけたきりである。

幕間の水菓子賣りになつてでもいいから、ひとつ歌舞伎座あたりへ入つてみるつもりだ、と吉原の宿でみんなを前にして言つたことは今も實行されずにゐるが、演劇への情熱はますます高まりつつあつた。いつか小石川の後樂園(舊水戸邸)で、明治女學校の、生徒中心の親睦會が催されたとき、武道教師の天知が西利吉といふ薩摩琵琶の大家の吟聲で眞劍をひらめかして劍舞を舞ひ、その演技に見惚れてゐた透谷が、あとで天知に眞顏で一つの相談を持ちかけた。

二

「かねがね仲間中で問題になつてゐるドラマのことだがね。」と透谷は言つたのである。「書きたてることも必要だが、ともかく實演を始めなけれや社會を動かすことが出來ない。それには舊俳優は望みがないし、壯士俳優なども思想の向上を待つてからといふんでは埒があかないし、理想の高い文士がやるのが一番いいと思ふんだ。それも誰彼に期待するより先づ僕たちでやらう。最初はやはり『ハムレット』がいいね。舞臺は校內で十分間に合ふ。主役のハムレットは君にやつてもらふとして、肝腎なのはオフエリヤだ。これがうまくいかないと、すべてが臺なしだからね、さあ、誰にやらせよう。」

「お輔さんは?」

「島崎君がハムレットなら、それでもいいが――」透谷はにやッと笑つた。

教師としては尊敬します、けれどラヴァアと考へることは出來ません、とはねつけられながらも、天知が今なほ悶々の情をよせてゐる松井萬子では、體の線がきつ過ぎた。結局女主人公（ヒロイン）が出來ないでこの計畫はおながれになつたのだが、今も透谷の氣持そのものには變りがなかつた。ただ、實演難に阻まれた情熱を書くことと一つにつぎ込まうとしてゐるのである。

この一年間に、彼はいくつ戯曲の腹案を立てたことであらう。だが、大きく構へてかかる必要のあるものになると、體が弱く、神經が纖いせゐであらう、ぢきに氣折れして息が續かないのだ。その上、自我を深く掘り下げてその心核をつかむことに文學精神の基底を置いてゐる彼は、あらゆる作品は具象的に構成された自我だといふことを忘れてしまつたかのやうに、分析にばかり深入りする。內か外か、眼に見えない所で高らかに奏で出されてゐる琴の音が、ちらと意識のなかに閃いて筆の先に慕ひ寄つて來ても、次の瞬間には鋭利な分析の鉾がそれを切り苛（さいな）んでしまふ。あとには摑まへどころのない幻想の破片しか殘らないのだ。

「例の『エマアソン』の方はどうなつてるの？」春樹が訊いた。

「あれも、こちらへ來てからやつと書き出してはみたが、」透谷は寂しく笑つて、「この頃は一時間も本を讀むとがつかり疲れてしまふし、短い評論一つ書くにも、どうかすると四五日からかかるんだ。そんなわけで、なかなか捗らないよ。」

「…………」

「尤も、こいつだけは何とかして十二月いつぱいには仕上げるつもりだ。『文學界』に書くのと違つて、これは少々金になるからね。」

脱稿し次第版にするから、と民友社の方でも言つてゐた。民友社の總帥德富蘇峰は、山路愛山をつかまへて、北村君は銀の匙、君は鐵瓶だね、と言つてのけたといふこともここまで傳つて來てゐた。透谷は蘇峰に幾分好感をよせてゐた。

太陽がまつたく落ち込んで、丘の上一帶がひとしきり華やかな橙色の雲に包まれた頃、秋骨は一人で先に歸つて行つた。彼の用事といふのは、例の塔の澤の一件に就いてであつた。この問題では馬場孤蝶も後楯になつてゐた。春樹もここへ訪ねて來る前、秋骨にひつぱられて小田原の一つ先の早川村まで娘の實家をさぐりに行つた。それは、普通の農家だつた。正式に媒酌人を立てて話を持ち込めば、萬事すらすらと行くにちがひない。そこで問題はあの娘の教育だが、これはさしあたり透谷の家に置いてもらつて、細君の指導を受けさせたい。その上で家庭を持ちたい。

さういふ風に將來の事まで考へて冷靜に構へてかかるところが、やはり秋骨だつた。透谷夫婦は、この依賴を快く引受けたのである。

その夜、春樹は一晩泊つて行くことにして、子供をまん中に挾んだ夫婦と寢床をならべた。

机の上に据ゑた細い豆ランプの光が、しんとした暗さのなかに內ふくらみの輪を描いてゐた。透谷

との距離は近い。その距離は同時に精神的なものでもあつた。もし彼を、底の白い、赤筋をたてた大爪で波ぎはの岩角をつかみ、喘ぐごとく雲の行方を睨んでゐる老へる鷲とすれば、自分はそのあとを追うて飛び立つ運命を擔はされた若い鷲ではあるまいか。

「しかし、八戸の酒屋は、」透谷が、閉ぢてゐた眼をぱつちりと開いて言つた。「僕も二三日世話になつたんだが、さう居辛い家ぢやなかつたらう。」

「家族はみんな親切だね。若主人なんかは、僕を連れて、酒倉から書庫、眼の眩むやうな繪で飾られた離れ座敷まで見せて歩いてくれたよ。」

「いつたい、これから君はどうするつもりなんだ？」

「あちらにゐる間は、しかし、袷に襦袢を借りて來て、それでもまだ顫へたよ。」

「それに、金もないだらうし――」

それは事實に近かつた。しかしいざとなると、春樹自身にもどうしていいかわからないのである。

彼は寢返りを打つて、透谷の方へ尻を向けた。すると、すぐ眼の先に壁が來た。豆ランプの光の屆きかねた、うす暗い、寂しい古壁の上にあるものは、悶きに悶いてゐる自分自身の影であらうか？　それとも友人の影であらうか？

彼は、腹の底からせぐりあげて來る嗚咽をやつと怺へた。彼はふと、輔子に眞情をぶちまけた手紙を出してみようと思ひ立ち、頭の中でなるべく感動的な言葉を配列したり、ほぐしたりしはじめたが、

そのうちに、甘い眠りの中に引き込まれてしまつた。

もう眞夜中も通り越して、二時に近かつた。

透谷の方は、しかし、そんな時刻になつてもまだ眠られなかつた。いつもと同じやうな暗い意地惡い夜の觸手が、彼の心をつかんでゐるのである。彼は妻子を起さないやうにそつと手を伸ばして豆ランプの灯をかき立て、自分でも變調がきざしたと氣づいてゐる神經一つになつて夜の暗さと戰つた。いつかも失戀の悲哀をテエマとした短篇を書いて、眠られないままに、花瓶にさした山吹の一枝を拔き取り、その花瓣を一つ一つ鋭利な小刀で切りこまだいたことがあるのだが、今夜とくらべると、あの時の感覺はまだまだ甘い方だつた。一方へ向いては艱難と戰はなければならぬ。一方へ向いては妻子を養育しなければならぬ。こんな調子で押して行つたら、末はどうなると思つた。苦しさの餘り、彼はたうとう寢床の上に起き直つた。

海の音が聞える。夜通し激浪が踊つてゐるのだ。「人間何ぞ獨り靜かなるを得ん。」と彼は呟いた。自己の獨立のためには、妻子をも犧牲にしよう。最後は三界乞食の境界に沒入する覺悟さへあれば、それでいい。

彼はふと空間に、笠一つ、杖一つの芭蕉の旅すがたを描き、

あかあかと日はつれなくも秋の風

とやるせない情熱の奔騰にせめられながら自然の奧に枯淡と暗寂を求めて步いたあの俳人の血液

は、自分にもあると思つた。

三

「村の娘を集めて裁縫を教へるたつて、お前、來てくれるかね？」
「いざとなれや、こちらから一人一人ひつぱりに行くわ。」
「十人來るとして、月にいくらになる？」
「三圓か五圓でせう。でも、不平の言へる場合ぢやないわ。」
朝食前の、きはどい、息づまるやうな夫婦の間のやりとりだつた。春樹は顏をそむけた。
「君、海へ顏を洗ひに行かう。」
透谷は友人を促して立ち上つた。女學校の方は、授業時間を約めて通勤日を減らしてもらつてゐる關係から、一週の半分以上家にゐることが出來、今日は午後だけの出勤だつた。
透谷の祖先の墓もあるといふ廣い寺の境内を無遠慮に横斷してゐる鐵道の踏切を越えると石段があつた。それを下り、また少し上る。そこに苔の生えた石の門があつた。丘が盡きたところが丁度この寺の入口なのである。美那子は子供をおんぶしてそこまで跟いて來たが、さわやかな朝の光線をななめに受けて立ちどまると、背の子供が急に虛空に手を泳がせ筋肉のくびれた足をばたばたさせ出した。
「父さん、ふうちやんが行きたがつてゐますから、一緒に連れて行つてくださいな。」

「俺に子供を預けたつて困る。友達がゐるぢやないか。」
透谷は妙なところへ理窟をつけて、友人を引きずるやうにして灰色に戸や柱の木目の浮き出た漁夫の家の角を曲つた。だが、子の泣き慕ふ聲があとから追ひすがつて來て眩暈がしさうだつた。
砂を踏んで松のあるところへ出ると、水分の少ない、からツとした空氣が、まぶしく日光を透きとほらせ、だ、だ、だツと岩に碎けちる波しぶきの一つ一つの粒を白い珠のやうにきらめかしてゐた。
二人は岩端にしやがんで、鹽氣の強い、ぷんと濃い香のする水で顔を洗つた。沖を通り過ぎた鷗の翼の影が、ちらと、濡れた睫毛の先をかすめた。
「おい、少し泳がうぢやないか。」海の青さにひどく氣の立つて來た透谷が言ひ出した。
一方は小田原の海岸で、一方は隅田川で修練を積んで、水に慣れ、その脅威を却つて爽快なものに感じてゐた。水泳の季節はとくに過ぎ去つてはゐたけれども、まだ寒いといふほどではなかつた。
まづ透谷が裸になつて、自分の體を眺めた。腕は痩せ、肩にも隆々と盛りあがつた肉がない。皮膚は白いといふよりもむしろ醜く褪色してゐる。春樹の、同じ痩せてはゐてもがつちりした骨格の、色白な上に深く艶の乘つた裸身とくらべると、恥と泪にまみれさうな氣持である。ただ、右の腕の柘榴の刺青だけがきらきらと光り、煽情的だつた。
彼は荒くれた漁夫たちの皮膚を頭に描き、自分もあのやうに美しく焦けてみたいと思つた。そしてしばらく、沖の方に眞紅な圓を描いてゐる太陽の炎にわが體を捧げてゐた。胸のあたりがぴくぴくと

顫へた。彼はうんと唸つて肩を張り、上下に腕を振つた。かすかな痛みを伴つた快感が裸身を包んだ。この調子なら、大丈夫だぞと急に元氣づき、友人はと見ると、これはもう岩角からざんぶと飛び込んで、しきりに拔き手を切つてゐた。彼もあとに續いた。

朝の海の中こそ、夢想の場所である。水は重たげにどつしりしてゐる。太陽の方へ向いた波の襞は明るく輝き、反對側の襞は碧い。底には色さまざまの藻もゆらめいてゐるであらう。春樹は少し手足の運動をゆるめて、胸の底まで海の香を吸ひ込んだ。

そこへ、底から削ぎ立つたうねり波が鈍い紫色の腹を見せて沖から寄せて來た。二人は咄嗟に體をならべ、競泳のかたちでそれに挑戰した。波はもんどり打つて頭の上を越えた。

最初の自信はくぢけて、春樹はどうかすると底の方にある潮流に淩はれさうになつた。それにくらべると、透谷の方はまだまだしつかりしてゐて、君、大丈夫か、と訊いたりした。二人は手をとりあふやうにして、一緒に浮いたり沈んだりした。

ふと、眼の前に唸りをあげて落ちて來たものがある。見ると、恐ろしい形をした魚鉤だ。それが右にも左にも落ちて來る。二人はびつくりした。泳ぎほうけてゐた間に、獰猛な半裸體の漁夫が岸に大勢集まつて鰹釣りを始めたのである。

二人は尻尾を捲いて岸へ泳ぎ着かうとしたが、碧い波がしき立ちしき立ち寄せて來て、却つてあべこべの方向へ淩はれて行く。すると、そこへまた丘のやうなうねり波が寄せて來て、二人とも渚の方

へ持つて行かれた。紫の裸身をむき出した岩々にどどと打つてかかつた波のしぶきが雨のやうにはねかへつて頭の上に落ちて來た。その時、二人はやうやく白い泡の中に立つことが出來たのである。

午後、二人は一緒に寺を出て、國府津の驛まで歩き、そこから同じ汽車に乘り込んだ。

「今度は仕事が出來さうな氣がするよ。」透谷は元氣に充ちた調子で言つた。海水に摩擦させた筋肉が、今もまださわやかに軋んでゐるのだ。

一時間もすると、大船に着いた。春樹はここで東京の方へ出て行く友人と別れて、鎌倉行きに乘換へた。

行き場のないままに、彼はまたあの圓覺寺境內の禪寺の一室に置いてもらふことにした。食事は門前のうすぎたない飯屋で間に合せた。八戶の酒屋を辭し去るとき、若主人が手づから餞別をくれ、その中から歸りの汽車賃を支拂つたのだが、殘りの金で、まだどうやら一ケ月あまりは支へられさうだつた。

部屋のすぐ外は廊下で、そこから庫裏の方へ通ふやうになつてゐた。全身銀鼠色をしたのや、腹だけ紅いのや、さまざまの小鳥がぱつと彈力のある身振りで枝から枝へ飛び移る羽音や鳴き聲以外には、境內の寂寞を破るものもなかつた。來客といへば、住職くらゐのものだつた。こちらから會ひに行きたいと思ふ人もてんでなかつた。笹目ケ谷の暗光庵には、留守番の婆さんがゐるだけだつた。

四五日の間は、名狀しがたい苦痛が捲き返して來て、體が顫へ、胸騷ぎがし、野菜の汁のやうな涙

がまぶたを濡らした。と思ふと、今度は寂しさを耐へかねて、しやくりあげたいやうな晝と夜が續くのである。八戸で寒さに顫へてゐた時も、體の芯にあつたものはそれなのだ。彼はそれを戀ゆゑと氣づき、たうとう無謀にも友人の手を賴らないでぢかに輔子の家へ宛てて手紙を出した。

四

輔子はもう板挾みになつた自分の苦しみに整理をつけて、やはり許嫁と結婚する決心をしてゐるかも知れない、と不安でならなかつたが、四五日すると、手應へのある封書が屆いた。春樹の手紙は感情があふれ過ぎ、結局何を言はうとしてゐるのか眞意がはつきりしないほどであつたが、それとくらべると、彼女の筆つきは自由で、裏表のない眞情が滲み出してゐた。淸い交際も續けがたいものとか聞いてゐますが、あなたの心を力にして、女らしい道を步みたいと思つてゐます、とあつた。あたしたち二人、何といふ薄い緣でせう、あたしの體は旣に死んだものです、殘るのはただあなたを慕ふ心ばかりです、とあつた。更に、この心情のわからない人は、たとへ狂氣じみてゐると言はうが、何と言はうが、かまひません、聞き入る氣もありません、ともあつたのである。尤も、原文は候文で、第二人稱なども雅かに「君」と呼んであつた。それがこの時分の若い女性の風俗だつた。

寫眞も來た。こちらから先に送つたからである。彼女は少し肥り過ぎて、いやにおでこのところが光り、抒情的と言はれる眼にも重くろしい鋭さがあり、何となく實際とは違つたひとのやうに撮れて

ゐた。唇は觸らうものなら火傷でもしさうな感じである。戀しいといふよりも、むしろ彼は氣味惡く思つた。ただ、そこには鮮かな芝生を見るやうな柔かい皮膚があつた。今が處女のさかりなのだ。ふつくりと高まつた胸は、彼女も感じてゐる清純な童貞の惱みをあつめて、二つの圓い波紋を描いてゐる。强力な支配者の野生がないとしたら、いつたい、この肉體はどうなることであらう。

道が急に展けたやうな、と思ふとまた强引に塞がれてしまつて、進むことも退くこともならないやうな日が續いた。

十一月の初め、透谷が一冊の雜誌を送つてよこした。この年の四月、巖本善治が白表紙『女學雜誌』を廢めたかはりに創刊した『評論』の當月號である。その中に透谷の文章があつた。短いもので、「一夕觀」と題されてゐた。春樹はそれを貪り讀んだ。友人が今漁村の丘の上で何を考へ、感じ、求めてゐるかがよくわかつた。いや、そればかりではない。彼はそれを最後まで讀み通してみて、急に愕然とした。

「ある宵、われ窻(まど)にあたりて横はる。ところは海の鄕(さと)、秋高く天朗かにして、よろづの象(かたち)、よろづの物、凜乎として我れに迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が偏促たるを嘲るに似たり。恰も我が力なく、能なく、辨へなく、氣なきを罵るに似たり。彼は斯くの如く我れに徹透す。而して我れは地上の一微物、彼に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。

「月は晩くして未だ上るに及ばず。仰いで蒼穹を觀れば、無數の星宿紛糾して、我が頭にあり。顧み

て我が五尺を視、更に又内觀して我が內なるものを察するに、彼と我との距離甚だ遠きに驚く。不死不朽、彼と與にあり。衰老病死我と與にあり。鮮美透涼なる彼に對して、撓み易く折れ易き我れ如何に赧然たるべきぞ。爰に於て、我は一種の悲慨に擊たれたるが如き心地す。聖にして熱ある悲慨我が心頭に入れり。罵者の聲耳邊にあるが如し。我が爲すなきと、我が言ふなきと、我が行くなきとを責む。われ起つて茅舍を出で、且つ仰ぎ且つ伏して、罵者に答ふるところあらんと欲す。胸中の苦悶未だ全く解けず。行く行く秋草の深き所に到れば、忽ち聽く、蟲聲縷の如く耳朶を穿つを。之を聽いて我が心は一轉せり。再び之を聽いて、悶心更に明かなり。

「茫々乎たる空際は歷史の醇の醇なるもの、ホーマーありし時、プレトーありし時、彼の北斗は今と同じき光芒を放てり。同じく彼を燭らせり、同じく我れを光らせり。然り、人間の歷史は多くの夢想家を載せたりと雖、天涯の歷史は太初より今日に至るまで大なる現實として殘れり。人間は之を幽奥として畏るると雖、大なる現實は始めより終りまで現實として殘れり。人間は或は現實を唱へ、或は夢想を稱へて、之を調和すべからざる原素の如く諍へる間に、天地の幽奥は依然として大なる現實として殘れり。」

この深邃な瞑想には、主我性が目立ち、それが清澄な悟道に入るのを妨げてゐる。その結果、想と實との距離が極度に擴大されてゐる。健康な頭腦に於いては、想を無限の彼岸に置くことはそれだけ强力に實を批判することである。その戰鬪に倦み疲れた透谷の、げつそりと寂しい姿。糸を絕ち切つ

た天の恋と、糸を絶ち切られた矮小な自我とが、分裂したまま離れ離れになつてゐる蕭條とした枯野の風景。
「島崎さん、お客様。」
或る晩、寺男が黒く煤けた障子の外まで來て告げた。
ほとんど客のない、庭の隅つこの棄石のやうな男を、しかも日が暮れてから訪ねて來たのは、ほかでもない、當の透谷だつた。急に會ひたくなつたんでね、と言ひながら、夜氣に打たれた羽織の裾を少しまくつて行儀惡く坐つたところは、一夜だけでも苦惱と感傷の泥沼から拔け出して、凊しく眼を光らしてゐるといつた感じである。
何の調度もない、どろッと古い空氣の溜つた部屋の中を見廻して、
「いつたい、君はこれからどうする氣なんだ？　こんな所にごろごろしてゐたつて、つまらないぢやないか？」
「また八戸行きのやうな話を持つて來てくれたのかね？」
「いや、あんな話はもうやめだ。」
透谷は鼻先で笑止らしく手を振つてみせた。それはこの頃の透谷にはめづらしい飄々とした風狂兒の圖だつた。春樹はしきりににこにこした。
透谷はしかし、ふと話題を變へて、

「僕の家なんざあ、どんなに儉約したつて、月に三十圓要る。それ以下では暮せない。」

この金額は、米價を基準にして云へば、今の百圓以上に相當した。

「近所の娘たちに、裁縫を教へるつていふ話は?」春樹が訊いた。

「本堂の方を借りて、ぼつぼつ始めてはゐるがね。」透谷はさう言つて苦笑した。

夜になると、すべてのものが生き返る。頂上だけ見せた富士が濃褐色の雲に深く包まれて默りこくつてしまふと、星々がさざめき出し、大地が大きく眼をひらく。丘が背伸びをする。家のまはりには、濃いいきれのやうに大氣が搖れ立つてゐる。その中から突然ぱつとあらはれた、大きな、むしあつい眼。毒草の臭ひのする厚ぼつたい唇。

「おや、誰か來たぞ。」透谷はがたがた顫へだしながら、口走るやうに言つた。

五

それは神經を引き裂いて迸り出たやうな聲だつた。春樹も思はず釣り込まれて、障子の外へ耳を澄ました。日中枝から枝に傳つて、秋氣を滿喫してゐた小鳥の鳴き聲も、今はひそまつて、鳩尾のあたりが痛いやうな寂(しん)かさである。「誰も來はしないよ。」

「いや、たしかに來たやうな氣がしたんだが――」透谷は怯えた眼をやり場もなく空間に泳がせた。

例の肥つちよだ。ぎらぎらと脂ぎつた體に誇大な自信と力を漲らせたあの肥つちよの野郎が、えへ

らへへらと笑ひながら、誘惑の手を伸ばして來たのだ。「ここらでひとつ宗旨がへをしてはどうだね？」
「………」透谷は腕組みをして、苦しさうに考へ込んだ。
「善も美も、利といふ地盤を與へられてこそ花を開くんだぜ。」
「………」
「吉野山の櫻なんか引き抜いて、梅とか林檎とか、果のなる樹と植ゑ換へた方がいいんだ。同志社の總長は、新島襄なんかより、福澤諭吉の方がずつとよかつたんだ。」
「………」
「それとも、いよいよ三界の乞食になるかね？」
透谷は兩手を耳のところにあてがつて、少し首を傾け、險しい眼つきで火鉢の中を見つめてゐた。肩は削ぎ立つてゐた。哀しみが胸をかきむしつてゐるのだ。
哀しみは、しかし、徐々に退いて行つた。そのあとからひたひたと涌きあふれて來たのは、魔術にでもかかつたやうな、不思議な自己陶醉の感情である。彼の眼は燿きだした。と思ふと、彼は突然聲を張りあげて、朗々と自作の詩を誦しはじめたのである。
ひとつの枝に雙つの蝶、
羽を收めてやすらへり。
露の重荷に下垂(うなだ)るる

草は思ひに沈むめり。
秋の無情に身を責むる
花は愁ひに色褪めぬ。

言はぬ語らぬ蝶ふたつ、
齊しく起ちて舞ひ行けり。
うしろを見れば野は寂し、
前に向へば風冷し。
過ぎにし春は夢なれど、
迷ひ行方は何處ぞや。

同じ恨みの蝶ふたつ、
重げに見ゆる四の翼。
雙び飛びてもひえわたる
秋のつるぎの怖ろしや。
雄も雌も共にたゆたひて、

もと來し方へ悄れ行く。

もとの一枝をまたの宿、
暫しと憩ふ蝶ふたつ。
夕告げわたる鐘の音に、
　おどろきて立つ蝶ふたつ。
こたびは別れて西ひがし、
　振りかへりつつ去りにけり。

透谷の眼はふくらみあがつて凄愴な耀きを放ち、ときどき痙攣的に途切れる高い聲は、一部屋置いて接續した暗い本堂の方へもひびきわたつた。
「雙蝶のわかれ」と題したこの哀切な詩は、この前讀んで聞かせてくれた詩と相前後して出來たもので、九月下旬に發行された『國民の友』第二百四號に載つてゐた。
　詩感の率直な流露が、一抹の悲調をふくんで、衒氣もなく自然に完了してゐる。この前の詩もさうだつた。共に稚醇であり、用語の上にも蕪雜なところがないではないが、しかし、明治もまだ二十七年を迎へようとしてゐるばかりである。それまでの詩壇に、このくらゐ傑出した詩が只の一篇でもあつたらうか？

更に見逃してならないのは、これらの詩の、一つ一つ清新な響きと香をつたへて生動する言葉が、純粋な民族性に根ざしてゐることだ。

セエクスピア、バイロン、ギョエテ、エマアソン、シエリイ、ミルトン、カアライル、ワアヅワス、コオルリッヂ、ダンテ、ポオプ、プラトン、チョオサア、シルレル、ゴオルド・スミス、等々と指折り數へるのも煩はしいほど、外國の詩人や小說家の言葉に接觸した彼なのだが、さうした接觸によつて、彼の血管のなかに眠づてゐた民族的なものが少しづつ呼び醒まされ、最後に一番底の悲が一ぺんに奔騰して來たのである。それは時代から時代へと傳つて、神祕なかたちで貯へられてゐる、この國の幾多の詩人の熱情と苦心の和唱である。

明治になつて散文藝術の上に一番早く新しい言葉を創造して高い意氣を見せた人を長谷川二葉亭とすれば、詩の方でそれまでの誰にもまさつて莊重なほど新しい言葉を創造し、しかもそれに純粋な民族的感情を託した人は、透谷でなければならぬ。

人間と社會との關係に於いてはあれほど鬪爭的なポオズをとつた透谷が、なぜ人間と自然との關係に於いてはみぢめにも敗北のポオズをとつたか、といふ疑問は成り立たない。折れたまま咲いて見せた百合の花の凛々しさが、これらの詩なのだ。遠く描いた理想の空しさ、純粋なものが泥にまみれた悲哀に遭遇したとき、初めて彼の詩感がどつと高調して來たのである。

春樹は烈しい感動でかすかに唇を顫はせてゐた。その感動は、しかし、一つの恐怖と背中合せをし

てゐた――今にこの友人と手をつないで狂人にでもなりさうな。
「北村君、」と彼は言つた。「僕などは、さう長く生きる人間ぢやないやうな氣がする。二十六といふ年が來たら、多分死ぬね。」
二十六といふのは、透谷の今の年齢なのだ。
「君はぢきにさう弱つちまふからいけない。」透谷は勵ますやうに言つた。しかし、その透谷自身も眼の奥にはいつぱい泪をためてゐた。

あけぼの

島崎藤村

死の翅

一

平田禿木は、この頃谷中の或る古寺の一室を借り、そこから學校へ通つてゐた。近くの圖書館へも、ときどき彼は出かけた。だが、彼が一番心を向けてゐるのは、やはり規律や形式に縛られない世界だつた。

或る日、彼は口をきかぬ冷い机の前に坐つてなどゐられないほどの肉體的な興奮を覺えだして街へ出た。丁度、東京景物の一つ、團子坂の菊人形に人の出盛る季節で、街の上の空も、一ひらのちぎれ雲もとどめずに碧く晴れあがつてゐた。女の顏には銀色の光澤があつた。

彼は何かしらほつと滿足し、再びぶらぶらと寺へ引き返して來た。すると、部屋の外のぬくい陽だまりに、春樹が來て待つてゐた。頭の上から荒くのしかかつて來るものをやつとほそい膂力一つで支へてゐるやうなその恰好を見て、彼はぎよつとした。しばらく逢ふ機會のなかつたこの友人の、何といふ變り方であらう。顏は土色だし、頬から顎へかけての、いつもなら底のふかい勁さのある線は暗い感じに繊れてゐる。持ち前の秀麗な眉も一本一本の毛に艶をふくんだ張りがないのだ。

「今日はゆつくりしてもいいんだらう。なんなら、泊つて行きたまへ。」
彼は火鉢に火を起して、鐵瓶をかけた。春樹は例の鉈豆煙管で煙草をふかしながら、身の上話を始めた。たうとう行き詰つた、といふのだ。第一、食ふに困る。それで鎌倉の寺を出、寺の門前の飯屋にも暇を告げてここまでやつて來たのだが、さて、さういふ話を聞かされたところで、禿木にも手の下しようがなかつた。彼はただ、この友人を慰めるつもりで、
「本町がね、一度ここへ訪ねて來たことがあるんだよ。」
と言ひ、うふふと小麥色の頬をふくらませた。
「へえ、ここへね。」春樹は眼を瞠つた。
あの日、亮子はこの寺の門の外に俥を待たせて置いて、まづ、
「暗光庵なんかより、却つてここの方が空氣が鮮かね。あたし、氣に入つたわ。」
と纖細で空想的な、ぼうと表情に富んだ顔で言つた。手許は隙だらけである。禿木は、すかさずそこへ切り込むやうに、
「なんなら、お泊りなすつてもようござんす。」
と言つて狡さうな眼つきをして見せた。
「まあ、おつしやること。あたしもまだそこまでは修養を積んでゐませんから――」彼女の方でも見事に報いた。

情人同士の、ひそかに相撃つ情熱の火花を皮膚の下にはねらせたきはどいやりとりである。どんな性質の官能から、ユウモアもあつて明るいこんなポオズの戀が生れるのであらう。

その夜、友人同士は縞銘仙の蒲團をひつぱり合つて寢た。そして、芭蕉がよく「門人に其角、嵐雪あり」と誇つた、あの仲好しの其角と嵐雪みたいだね、と言つては笑ひ、蒲團から足が出たと言つては笑つた。

春樹が今朝まで身を置いてゐた圓覺寺の大顚和尙について禪を學んだこともあるといふ其角は、一方では大酒家だつた。愛する弟子が酒で身をそこなふのを見てとつた芭蕉は、心配のあまり、

朝顏に我は飯くふ男かな

といふ句を贈つて戒めた。

「その酒がだね、もし女だつたら、どういふ事にならう？」

ひととき、それぞれ自らを其角、嵐雪に擬して氣負うた二人は、その場合に師から與へられる句を僞作しようとして、またも笑ひ興ずるのだつた。

「君には熱がある。」

夜の明け方、禿木がふと友人の體を嗅ぐやうにして言つた。寢苦しく體內がほてり、たうとう甘い熟睡を貪ることの出來なかつた春樹は、いやだよ、君、と身をすくめた。だが、次の瞬間には、自分ひとり體ごところげるやうにして、汗臭い寢床の中から拔け出してゐた。

「今の世にノベリストといふもの幾人ありや。こころみに村山翁の社中に求むるも、思軒氏は飜譯家のきはにあるべし。篁村、三昧、浪六なんど、或は世話めきたる、或はローマンスめきたる續きものを作りて婦女を喜ばすのみ。審美學上幾何の價値ある。その以下に至りては推してはかられぬべし。この優待にあづかりて稍なまけるといふ懸念を抱かるるジニアスあらば、この社の露伴と讀賣の紅葉なるべし。まして紅葉の勉强は評判のものなり。露伴はややまめならねど、精練を極むる近來の文字味ひゆかば苦心のなみなみならぬを知るべし。」

禿木が風潭坊といふ別號で『文學界』第七號に書いた六號記事の一節である。

禿木は同人の中でも一番年が若かつたが、天才に特有ないろいろの長所を具へてゐた。殊に、この頃ではいよいよ性格の美しさが目立ち、それがみんなの上にも働きかけてゐた。さういふ禿木には、また、面倒な六號記事の切り盛りにも耐へられる勁さがあり、彼の書く簡潔犀利な時評は雜誌の特色の一つとなりつつあつた。

自分にはあんな眞似は出來ない、と考へながら、春樹は樹の葉の黃ばみかけた上野の山を越えて、池の端に出た。七軒町の、屋敷跡とでも言ひたい、廣い庭に圍まれた家の一室に、この頃戶川秋骨が下宿してゐるのである。

「まあ、ゆつくりここで遊んでくれたまへ。」

秋骨も春樹のことでは今までになく心痛してゐたが、と云つて、からだしぬけに舞ひ込んで來られ

てはどうすることも出來ず、一夜明けると、麹町の女學校へ教へに行つた。春樹はひとりとり殘された。窓によせて机が置いてあり、そこの障子の開いたところから、不忍の池に近い空を見上げてゐると、ふと屋根の上を荒く雁が鳴いて通つた。地上にたゆたふ朝雲を、一氣に鋭い鑿で穿ち起すやうな聲だつた。

友人が歸つて來ないうちにと、彼はあぶくやうな顏でこの家を出、廣小路から鐵道馬車に乘つた。そして銀座で或る時計店にちよつと立ち寄つて、長い間持ちつづけて來た鐵側の時計を三圓の金に換へ、とにかく一杯飮まう、と新橋際の牛肉屋に上つた。肉と脂のぐつぐつ煮える强い香氣が鼻を衝いた。彼は上燗の酒をぐいぐい呷つたが、日頃三四杯で眞紅になる彼が一向醉はないのだ。むしろ素面の方が一段と强い陶醉だつた。おしまひには手足がぶるぶる顫へ出した。

夕暮の空は一色に蒼黑く塗りつぶされてゐた。彼は體ごと荒れ廢れてゆくやうな何の抵抗力もない恰好で道を辿つてゐたが、ふと袂の中をさぐつた。そこには輔子の手紙と寫眞とが入れてあつた。こんな許嫁などのある女、と呟き、經濟的にも結婚能力のない自分の哀れさまでその事に轉嫁したくなり、彼はその二つとも引き裂いて捨てた。

二

顏を打つ風は牙のやうに皮膚の芯に刺さつた。彼はそれに逆つて步いた。道のはては品川だつた。

星のない空にどす黒く屋根の輪郭をうねらせた建物と建物との間に、彼の姿は呑み込まれた。その先にはいくつも紅い軒行燈が並んでゐた。

たうとう、彼は一介の恥づべき人間になりさがつてしまつたのである。その時は夢中でも、醒めてきいんと眼が吊りあがるほど後味の惡いこんな本能を、なぜ人間は授けられてゐるのか？

耐へがたい汚辱感は、春樹に一つの不思議な、そして悲壯な決心をさせた。彼は場末のうすぎたない理髪店へ入つて行つた。まだ朝のことで、他には客もなかつた。

「旦那、お刈りになりますか？」背の低い、づんぐりした亭主が、白い布を持ち出しながら言つた。

「ひとつ、丸坊主にしてもらひませう。」春樹はにこりともしないで言つた。

一瞬間、亭主は眞に受けることが出來ないで、あばたのある顏に、太い眼玉をくりくりさせてゐたが、やつと納得して剃刀を研ぎだした。

やがて準備は整つた。厚い髮の毛はぷすりぷすりと根本から切られ、肩を蔽うた布の上に落ちて來た。丁度、鬘が少しづつ除けられてゆくやうに。

「惜しいですね。こんな立派なおぐしを。」

亭主は幾度も手を休めては利慾を離れた嘆息を洩らしてみせた。しかしもう何物も春樹の心を退轉させることは出來なかつた。

髮の型は、秋骨や孤蝶と同じ西洋型だつたが、ただ、普通なら左寄りに分けるところを、春樹は右

寄りに分けてゐた。それがすつかり剃り落されて、愛らしい、甚だ生臭い青道心が出來あがると、胸いつぱいに漲つた感動は、しかし歡喜ではなくて恐怖だつた。それと戰ひながら、彼は改めて鏡の前に立ち、つくづく自分の顏立ちを美しいと思つた。

「頭が出來た。今度は衣裳だ。」

彼は陽ざしのうすい街路に出て呟いた。恐怖の原因は、鬘をとつたお蔭で、不淨な身が急に天に近くなつたことにあつたやうである。

彼は品川驛から汽車に乘り、圓覺寺境內の、三四日前までその一室を借りてゐた禪寺を訪ねた。青靑とした坊主頭は、まづ、町人出で、中途から僧籍に入つた腰の低い住職を驚かした。「おや、島崎さん、大變さつぱりなさいましたね。」

春樹は持ち金の全部のほかに身につけたものもすつかり置いてゆく決心を示して、法衣の分與を願つた。寺には寺の規則があつて面倒だから、と住職はしばらく躊躇してゐたが、

「これでおよろしければ――」

と現在自分の着てゐるものをすつぽりと脫いだ。ぬくい體溫が、ぷんと鼻を衝いた。

春樹は、はねあがる胸を抑へ抑へ寺を出た。そして眞の流浪はこれからだといふ顏で、今度も東海道を西へ西へと辿つた。正式の法衣より少し丈の短い、黑に染めて紫の紐をつけたやつを身に纏うたところは、もう西洋風のトルバドオルなどではなく、とにかく一人前の僧侶、それも他所（よそ）行きの禪僧

といふ恰好だつた。しかし法衣の下は煩悩の垢でべとつく普通の着物だつた。それに笠の用意もなかつた。

彼はどことといふあてもなく足にまかせて歩いた。松林の多い小山を越えて人家のあるところへ出たのは、夕暮に近い頃で、橙色に染めあげた空に、鴉であらう、小さな黒い影がいくつも吹きちらされてゐた。友人の下宿で朝飯を食つたきり一粒の固形物も入れてゐない腹は、ひきつるやうに痛んだ。

ふと見ると、少し街道から逸れて、樹木の蔭になつたところに小さな寺がある。鴉はその上の方でも飛んでゐる。彼は一泊を乞ふつもりで庫裏の方へ廻つた。物を煮る煙が入口の土間にまで漂ひ、その臭ひを貪婪な鼻孔へ吸ひ込み吸ひ込みしてゐるところへ、色の白い、眼尻の爛れた尼が出て來た。

尼は一目で春樹の出家姿をうさん臭いと見て取つた。しかし物乞ひにしては妙に肩が立つてゐると思ひ、結局彼の願ひを突き放してしまつた。彼はむつとした。煙の臭ひを嗅いだ瞬間から、兩足ともしやちこばつてこれ以上歩けなくなつてゐたのだが、憤怒が、砂ぼこりを上げて地を蹴らせた。彼は寺を出ようとしたのである。すると、冷飯草履を穿いた年老いた寺男がうしろから低聲で呼びとめて、

「これを持つて行きなさい。それ、おむすびだ。」

と、大きな握り飯三つに澤庵を二切れ添へたのを差し出した。春樹は、有難さうにそれを手拭に包んだ。

三

橋の下を低く、音のしない水が規則正しい速度で流れてゐた。細い川で、しろじろと枯れ草の寢た隙間から赭い地肌をのぞけた岸と岸が、兩方から相抱くやうに迫つてゐた。顏が映るかと、春樹は欄干の上からのぞき込んだ。すると急に眩暈がし、兩足をしやきッと空へ立ててころげ落ちさうな氣がした。

ふと、思ひがけない考へが湧きあがつて來た。彼はしばらく橋の上を行つたり來たりした後、村里の方へ半町ばかり歩いて行つたが、再び踵をかへした。そして橋の袂から竹藪の中を通り拔けて、小高い砂山のあるところへ出た。一筋の細い道が黃色い枯れ草の中に續き、その向うには波の音がしてゐた。

昨夜は、無い無いと思ひ込んでゐたのに、左の袂から十錢銀貨が一つ出て來たお蔭で、木賃宿に泊ることが出來たのだが、今日はさういふあてもない。橋の上に立つたときには、もう動けなかつたのだ。

彼はあたりを見廻した。右側は墓地で、まばらに立ち並んだ大小の墓石が、色のくすんだ粗い地肌を夕暮近い陽ざしにさらしてゐる。その中に一つ、まだ戒名の墨の色も生々しい白木の墓標があつて、ちやんと花と水が手向けられてゐる。水の器は子供用の茶碗だ。その內側は、動かない水が冷い空を

映して、青い光らない穴のやうであつたが、彼は、ひりつくやうな咽喉にがむしやらな渇きを覺えてゐた。彼は一息にその水を飲み干した。すると、いよいよ死への近さが感じられ出した。彼は古い石塔の倒れたのを見つけて、その上に腰かけた。そして腕を組み、組んだ腕の中に顔を埋めた。透谷のやうに、上のものと下のものを繫ぐ糸がふつつり絶ち切られて行詰つたのではない。ありあまる熱情が、愛が、地上に花を咲かせようとして堰かれ、どうにも身動きがとれなくなつたのだ。この上はもう死ぬよりほかはないと考へ、この考へに彼は醉つた。

彼は立ち上つて、そこから海岸までの距離を一氣に歩いた。渚に濡れて露出した岩々を時々かぶせるうねり波の音は、今は鼓膜を樂しませる音樂ではなかつた。蒼茫として海鳥の姿も見えない沖の方は、中高にふくれあがつてゐた。それは血の氣の切れた軀(むくろ)を包む柩衣である。彼のまはりには、決心を妨げる人家の灯もなければ、人の氣配もしない。彼は思ひのままに死ぬことが出來るのだ。

そこへ海の底から不思議な呼び聲が聞えて來た。父だ。しかしそれはもはや傷ましい狂死者の聲ではなく、時と場所を越えて遍在する者の、澄みとほつた、ぢいッと魅入るやうな聲だつた。彼の頬には泪が溢れて來た。死と生との境は紙一重である。戀や文學が何であらう。旅に骸を橫たへてこそ、安泰があり、枯寂があるのだ。

彼は慘とした氣持でぢいッと強く眸を据ゑてゐた。暗い波はどつと寄せて來ては岩に碎け、その水沫ははねかへつて法衣の裾を濡らしさうにした。五彩の襞を描いて退いてゆく波の形には人を引きず

り込むやうな魅惑があつた。彼は、肩を張り、ぐいとうしろへ臂を引かうとしたが、小高い岩の端を踏みしめた草鞋ばきの足がどうしても浮きあがらないのだ。腰から上の動作は、海魔への擬態だつたのである。

　そこへ一しきり初冬の華やかな夕陽がさして來た。自分自身の不氣味な恰好を露骨に見せつけられて、彼は顫へあがつた。

「この世には自分の知らない事が澤山ある。今ここで死んでもつまらない。」

　彼は口走るやうに自分へ言つた。彼は歡喜にあふれ、早くも自分自身の魂に新しい厚みがついて來るやうな豫感を覺えた。

　偶然にも、そこは前川村にすぐ續いた羽根尾村の海岸だつた。もう一度人家のある方へ引き返して、土地の漁夫の口からその事を知つたとき、彼は嬉しさに踊りあがつた。してみると、彼が入水しようとしたところは、二ケ月前透谷と泳いだ場所から十町と離れてゐなかつたのである。

　前川と羽根尾はどちらも小字で、兩方を併せて前羽村と呼ばれてゐた。東海道がその胴體を貫いてゐた。春樹は長泉寺のある丘を指して急いだ。文學者として、彼はまだ一片の自信も持つてゐなかつた。それなら、人間として十分に自己を知つてゐたか？　いや、彼はやつと生れたばかりである——大地とぴつたり顏を合せて生きるために。若き浪漫主義者は現實に力強く吸着(きふちやく)しなければならぬ。透谷のやうに現實を悲しきLimitと見ることは、明断な、あまりに明断な自己限定である。浪漫主義者

は、平俗なものと妥協することなしに、現實そのものの中にひそむ純粹と美を歌はなければならない。そして、歌ふ前にまづ知るのだ。

透谷は近所へ話しに行つて留守だつた。だが、美那子がすぐ呼びに行つた。

「うん、君かあ。」

少し息を切らして歸つて來ると、透谷は、まだ草鞋も解かないでゐる異様な僧形の友人をまづ見上げ見おろした。「西行さんが見えました、なんて言ふもんだから、誰かと思つた。」

この頃、枯寂の隙目に芳烈な熱情を湛へた芭蕉よりも、もつと純粹に枯れていのち一つに生きた西行を思慕し、

願はくば花の下にて春死なんそのきさらぎの望月の頃

と口吟んだりしてゐる夫を相手に、美那子はつい自分でもあとでほほ笑まれて仕方のない惡戯をやつてのけたのである。

寺男が、風呂が立つたと知らせて來たので、透谷は友人を連れて庫裏の裏手へ廻つた。その間に美那子は背に括りつけた子供を肩で拍子をとつてあやしながら夕飯の仕度をした。今朝海から上つたばかりの鰯を豆腐と煮つけて皿によそほひ、あのお坊さんはお精進かしら、と思ふとまたふき出したくなつた。つるつるした青坊主の匂ひが、どうしても頭から離れないのである。

「ねえ、美那子、」揃つて膳に向つたとき、透谷がちよつと箸を休めて、これも半ば揶揄するやうに言

つた。「同じ坊さんでも、島崎君のは違ふね。どこかかう、高僧といつた形ぢやないか。」

春樹は何と冷かされても一言も返すことが出來ないでただうふふと笑ひ、そのあとでそつと眼の隅に熱いものを宿した。絶望と死への陶醉が全く醒めて、やつと實感的に、生きることの感動が湧いて來たのである。

四

「あなたのは、何ですか？」美那子が部屋の隅つこに泣き泣き寝入つた子供の方へ、ちらと氣がかりな一瞥を投げてから、すかさず言つた。

「俺か。」と透谷は笑つたが、妻の言葉の裏に張りついたものに、ぴしやりとお面をやられた感じだつた。この間、東京から歸るといきなり彼女をつかまへて、一緒に坊主にならうと迫つたのである。彼女はぎよつとしたが、急に眼の奥を白くゆらめかせたかと思ふと、

「ええ、なりませう。」

と膝をすすめた。が、妻にさう出られると、透谷の決心は却つて挫けた。あとはただ、自分の行方を見定めかねた、荒く内攻する恐怖と哀しみばかりだつた。

「然し、」と透谷は友人の方へ向き直つて、「君は體が丈夫だからいいさ。僕のやうだつて見たまへ、いくら思ひ立つてもそんな眞似は出來ない。」

「………」

「君は幸福な人間だよ。つくづく僕はさう思ふね。」

「しかし、土左衛門になりそこなつたなんて、さうほめられた恰好ぢやない。」

　春樹はさすがに照れた。

「かまはないさ。何でも、一度破つて出たところをまた破つて出るんだね。どこまでも破り破りして進んで行く――それが一番肝腎な事だよ。」透谷は迷ひの多い年下の友人を勵ましたい氣持にあふれて言つた。神經系統の狂ひから、毎日頭痛がし、頸窩(ぼんのくぼ)のところが疼き、耳が鳴り、好きな仕事も出來ず、『エマアソン』のやうな評傳的なものさへまだ半分しか書けてゐない不幸な自分の苦しみなどはしばらくどこかへ押しやつたといふ顔である。

　さういふ時の透谷には人の心にせまる一種の美しさがあつた。同情の仕方が、彈みを食つて殉情的になり、いつの間にか自分でも涙ぐんでゐるのである。春樹は感動で胸のあたりがふくれあがるのを覺えた。しかしその時、彼はこの夏吉原の宿で透谷がふと洩らしたと傳へ聞いてゐる一續きの言葉を思ひ出した。「島崎君のやうに、破り出ようとしたつて、つまりどうなる？　そこが悲しいところさね。束縛といふ執念ぶかい魔は、どこまでも人間に跟いて廻るよ。」これと今透谷の口を衝いて出た言葉とはまるで正反對の方向を指してゐる。ひどい矛盾だ。しかし、透谷の場合に限りどちらも眞實を告げたものとしか思へなかつた。殊に、一方は幸福な煩悶者に手向けたものとしての體裁をとつてはゐる

が、その實、眼の前にそそり立つた險しい壁を突き破らうとして跪いてゐる透谷自身のはかない努力を二重燒きにして表現したものだつたのである。

「おい、蜜柑を買つて來い。」透谷が言ひ出した。

美那子はいそいそと肌寒い宵闇の丘を下りて行き、間もなく重さうに笊を抱へて歸つて來た。「さあ、島崎さん、召上つてください。この前戸川さんと御一緒にいらつした時分には、まだまつ青でしたのに、もうこんなにうれて――」

起伏の多いこころの土地ば、おそろしく豐饒で、丘の斜面といはず、谷底といはず、蜜柑の樹で埋まつてゐた。明けわたる夜を待ちかねて、萬顆の黄玉が一時に輝き出す國は、紀州ばかりでなく、ここにもあつた。

春樹は、甘熟にはまだ少し間のある、香のきつい果物の皮をむきながら、よく友人夫婦の心の顏を見ることが出來たと思つた。と同時に、こんなに不幸な友人も、この眺望のいい丘の上で、一生のあひだにさう度々經驗することの出來ない、美しい、蕭散な日を送つてゐるのではないかと思つた。指にしみ、眼にしみ、心にまでしみとほつていつまでも思ひ出を殘しさうな果物の香氣に打たれて、彼自身も少し感傷的になつてゐたのである。

明くる日の午後、男二人は海に舟を浮べて遊んだ。尤も、この時は二人きりではなく、透谷の知己で、學問はありながら太い筋張つた腕を胸の上に空しく組み合せてぶらぶらしてゐる男も一緒だつた。

この男は國府津の町はづれに住んでゐた。

季節に叛いて、ずつと晴朗な天氣が續いてゐるせゐであらう、海の上は鮮かな碧の色に凪いで暖かだつた。閑人（ひまじん）の奢りで舟方が一人雇はれ、屋形のない舟の底にはすり剝げた縞模様の莚も敷いてあつた。透谷はその上に寢ころんでゐた。過度の傷心と激昂でよほど神經の衰へた嵩のない彼の肉體は、あらゆる運動をやめて、骸のやうにひつそりしてゐた。それでゐて、眼だけは空を見つめてきらきらとふくれあがつてゐた。唇にも一筋の紅みがさしてゐた。寛大な、華やかな海と一つになつた空に近くゐて、心から陶然としてゐるのだ。

沖の方は、斜にさす日光の反射で、灰綠色にけぶつてゐた。そして時折その間から、歸りを急ぐ漁船が幻のやうについついとあらはれてゐた。

透谷はゆつくりと身を起した。と思ふと、突然舷につかまつて、手の甲に額を押しつけた。

「どうしたの？」春樹が驚いて寄り添つた。

「なに、ちよつと眩暈がしたんだよ。」

透谷はさう言つて正しい姿勢に返つたが、まだ眉間にきゆうとひきつつた皺が二筋くつきりと浮きあがつてゐた。やがてそれも消えると、彼は閑人の方へ向いて、前からの續きのやうに、

「安珍淸姫——あれを逆にしたやうな男なんです。」

「誰が？」と相手は訊いた。

「もちろん、島崎君がですよ。」

透谷はぽんと春樹の背をどやして、「ねえ君、さうぢやないか。」

この悪意のない、はれがましい戯談には春樹も閉口して、何度も頭をかいた。

「しかし、正直に言ふと、少し暴進のかたちだつたね。」

「…………」

「清姫はなびかぬ坊主を呪うて蛇になつたが、君は女から逃げようとして坊主になる。」

もう澤山だと春樹は手を振つた。そしてふと、自分はありあまる情熱の使ひ道を知らないと思つた。一旦死の翅に觸られた後は、それまで重要らしく見えてゐたものも、もうさうではなくなるものである。これから世の中へ歸つて行かうとしてゐる自分は、性格の強さにも弱さにも慣れて、本當に重要なものを探求しなければならないと彼は思つた。ひとときは熱くあふれて現實をゆるがし彩るやうな血潮の高鳴りが、そこにあつた。

狸

一

「おお、春樹か。」
夜に入つてやうやく歸つて來た民助は、桐の長火鉢の側に坐り込んでゐる僧形の弟を見つけると、まづ驚きの聲をあげた。それから、癖で續けざまに咳をして、「まあ、その服裝(なり)は何だ？」
春樹はぢつと首を垂れて身じろぎもしなかつた。十三も年上で、大きな隆い鼻に遠い祖先の矜恃と欲望を恣にあらはしてゐる兄への畏怖で口がきけなかつたのである。だが、靑い坊主頭と墨染めの法衣とは、彼の失踪中の行動を千百の辯舌にもまさつて語つてゐた。
民助は黑の前垂掛のまま長火鉢の前に弟と差向ひに坐つて、まづ熱い茶をいれた。しかし心の内では、春樹も年頃だ、そろそろ親父が出て來たのぢやないかと考へ、ぎよつとしたいほどの不氣味さを巧みに隱した眼つきでそれとなく弟の樣子を注目した。彼等の父は二十歳のとき初めて病氣が起つたのである。その時には、治ることは治つたが、中年になつて再發し、結局それに生命をとられたのである。
民助は今は橫濱の居留地の或る商館に關係し、方々へ機械の賣込みをやつてゐた。紡績、生絲、織物等の製造工場に蒸氣力が採用され、さうした新式の工場が、明治二十一年には全國に二百五十しかなかつたのが、今年はもうその二倍以上に增加してゐる。今後、この數字は飛躍的に太まるであらう。そしてその波に乘つてうまく泳いで行きさへすれば、民助のやうな俄か商人でも立派に成功することが出來るのである。
あけぼの

商用で彼は毎日出かけ、歸りは大抵夜遲くなつた。だが、さうした忙しさの中でも少ない時間を割いては珍奇な骨董の類をあつめた。部屋の調度なども下宿住ひとは思へないほど凝つてゐた。それに清潔好きで、物の秩序を重んずる方だつたので、どことなく部屋の空氣がきびしかつた。

兄の意中を推し測らうとするかのやうに、春樹は恐る恐る顏をあげた。今に大馬鹿めと怒鳴られさうな豫感のために、膝がしらが、抑へても抑へても顫へた。しかし意外にも、正直な告白は民助の胸に感動の波を起させた。戀ゆゑの出奔といふことが、よけい彼を打つたのである。その感動を眼の縁にまで滲み出させて、「へえ、貴樣のやうな木念仁にも、そんな洒落氣があるのかい。」

民助の、今に猛然と奔出しようとしてゐた激情は、いつの間にか哀憐の情に變つてゐたのである。

「しかし、許嫁のあるひとぢや仕方がない。これや諦めるんだ。」

焔のやうな烈しさで弟をひきずり廻して來たこの世のモラルも、兄にとつてはわかりきつた常識だつた。

二三日後の午後、春樹は兄に連れられて十一ヶ月ぶりに濱町の家の高い閾を跨いだ。彼の失踪中、小母さんはまた病みついて、一時は危篤狀態に陷つたこともあつたが、不思議な粘り强さで持ち直し、今日は氣分もすぐれてゐるせゐであらう、奥座敷の壁へ寄せて敷いた寢床の上に起き直つてゐた。その側にはおばあさんがついてゐた。春樹は兄の膽煎りで着物は普通のものにとりかへてゐたが、剃つた髮がまだ一分も伸びてゐない坊主頭は、隱さうにも隱せなかつた。彼女たちはそれを見てをかしみ

よりもむしろ冷りとしたものを感じた。彼女たちも、親父が出たかと思つたのである。だが、それも詫びのためだらうと解釋すると、少しづつ好感が持てて來た。

「民助さんが、妙なものを連れて來ますつておつしやるもんだから、あたしは何かと思つてゐた――そしたら、ふふふ、お前さんのことだつたのさ。」小母さんは、疊の上にぢかに坐つて堅くなつてゐる春樹の姿を角のない眼で撫で廻すやうにして言つた。

民助はそこから少し離れた所に膝をそろへて坐つてゐた。その前には、この頃また少し肥つて來た小父さんが控へてゐた。四方が閉めきられて、部屋の空氣は少し濕度が上つてゐた。民助は、時々顔をそらしては例の咳拂ひをした。それは生理的な必要からといふよりも、弟の不始末をわがものと感じようとする本能のまぶしさを紛らすためなのだ。こんな心遣ひが必要なのも、しかし、しばらくの間だつた。といふのは、快活で、大量で、家庭内の調和を何よりも愛する小父さんの姿が、だんだん大きく見え出し、それが部屋の中に支配的な地位を占めて來たからである。

おばあさんはお茶でもいれようと病人の側を離れた。小母さんは着物の襟をかき合せて、痩せた胸を包みながら、春樹に訊いた。

「あの間、何をしてゐたの？」

だが、今ここでそれを洗ひざらひ告白させようといふほどの强引な迫り方ではなかつた。春樹は肩を顫はせ出した。小母さんはそれを見て取ると、急に調子を變へて、「そんな暇があれや、洋行でもし

て來ればいいのに――」
「ほんとだよ。」おばあさんがみんなにお茶を配りながら引き取つた。「お坊さんになつて旅なぞする暇に、洋行でもして御覽。それこそ、お前さんも見上げたものだよ。」
洋行費は自家でもつ、といふ語氣が言葉の隙間に響き、それが、さういふかたちで表現される彼女の愛情を昂然としたものにさせてゐた。恰好な代辯者を見つけたやうに、小父さんは一しきりにやにやした。
おばあさんは、長煙管で一服やつて、
「お前さんも、もう少しは偉い人になるかと思つたよ。」
と笑ひ、ここでまたうまくもなささうに一服喫つた。それから、さつき娘が中途で收めた鉾を今度は自分で取りあげて、澁い調子で訊いた。「いつたい、どういふ了見で、そんなに長い間遠方へ行つてゐたんだえ?」
だが、春樹はぢつとだまつてゐた。兄がちらとこちらへ向いて、何も彼も言つちやへ、と眼で促したが、それを見て取ると、よけい口がきけなくなつた。
「浮世を捨てたんだらうさ。」
小父さんがふと口を挾んで、肚の練れた諧謔を弄した。そしてそれが、少しむきになり過ぎてゐた女たちの態度を急にやはらげさせた。一緒に彼女たちも朗かな笑ひ顔になつたのである。

そこへ、今年はもう九歳になる樹が學校が退けて歸つて來た。弟の詫びも適つたといふ顏で、民助はそれをきつかけに座を立つた。

「兄さん！」

長いこと顏を見なかつた春樹を目がけて、樹は一氣に跳びついて來た。「ねえ、兄さん、今までどこへ行つてたの？　僕さびしかつたよ。もうどこへも行かないでね。お坊さんみたいだなあ、この頭。あつちへ行つて、一緒に遊ばうよ。ね、ね、兄さん！」

「何をして？」春樹はやさしく言つた。

「鬼ごつこ。僕が鬼で、兄さんが逃げるの。」

春樹は元氣づいて、要領よく、廣い家の中を逃げ廻つた。しかしたうとう茶の間でつかまり、見る見るそこの柱に縛りつけられてしまつた。

「樹、兄さんをたたいておやり。尻尾があるかも知れない。」

襖一重向うから、小母さんの戯談とも眞面目ともつかぬ聲が聞えて來た。樹は物尺を捜して來て、こら狸、尻尾出せ、と何度も打つ眞似をした。女中が側で見てゐて笑ひころげた。縛られた方の春樹も聲をあげて笑つた。しかし、その聲は涙のきしむ音できいんと尖つてゐた。

二

その日から、春樹は再び吉村家の書生に返つた。
彼の本箱は、特別の客でもある時に通すだけで、平生はあまり使はない二階に上げてあつた。彼はちよつとそれを見に上つた。ワアヅワスやバアンスの詩集、横濱の店の帳場でこつそり讀み耽つたテエヌの『英文學史』等々がぎつしり詰め込んであつたが、その一冊々々が埃にまみれてわびしく興ざめた感じである。さうだ、こんなものはもう手にすまい、と彼は考へた。二度と同じ道を通るまい。自分の前には廣漠とした現實がある。それに鶴嘴を打ち込むのが一番必要な事なのだ。
かう考へただけで、彼はもう現實の上ッ皮から吹きあげて來るきつい匂ひに醉ふのだつた。
昔からの習慣で、彼は朝起きると先づ跣足に尻端折りといふ恰好で、落葉の散り敷いた庭を隅から隅まで掃いた。こんな事にも、今までとはまつたく違つた興奮を感じた。
十一月末の或る日、病人のために藥湯をたてることになり、春樹も井戸端へ出て水汲みの手傳ひをした。するとそこへ思ひがけず透谷が訪ねて來た。春樹はこの年上の友人を自分の部屋のやうにしてゐる茶の間に通した。
「ここにゐさへすれや、食ふだけは安心だね。」
たうとう生活に窮して、國府津の田舎を引き拂ひ、家族ともども彌左衛門町の實家にころがり込んで來たばかりの透谷は、まつたく氣力の衰へた、不氣味なほど蒼白い顔にいびつな微笑を浮べて言つた。「今日は少し氣分がいいので、かうやつて出て來たんだがね、毎晩不眠で困つてるんだよ。」

「女學校の方はどうしてるの？」春樹は心配さうに訊いた。
「學校の方は、缺勤屆を出して休んでる。」
「…………」
「人間の力には限りがあるね。僕は世を破るつもりでゐて、却つて自分の心を破つてしまつた。」
透谷はそつと涙ぐんだ。春樹は胸を衝かれ、自分でもじわじわと眼尻が濡れて來るのを覺えた。
「いつたい、悟るといふことが僕には氣に食はない。迷ふならあくまで迷ふがいいぢやないか。尊氏にしろ、光秀にしろ、なぜああ一生の終りになつて悟りといふ奴に瞞されたんだらう。なぜ清盛や將門のやうに迷ひ拔かなかつたんだらう。」
さうすると、西行的になりたいといふのは一場の夢に過ぎなかつたのか？　陰慘な嵐のただ中をあてどもなく彷徨してゐる今の透谷にとつては、しかし、矛盾も矛盾でなかつたのである。
原稿の方も、彼は一行も書けなくなつてゐた。『エマアソン』は三分の二だけ出來上つてゐたが、それきり筆が進まないのである。
「でもね、筆を執らなくなつたら、少し氣分がよくなつたよ。かうして君の顏を見に出て來られたのも、そのためなんだ。この調子だと、來春までには幾分肥るかも知れない。男がこんなでは」と、ちよつと瘦せ細つた腕を出して見せて「仕方がないからね。」
「ほんとに丈夫になつて欲しいな。」春樹は心から言つた。「君がこれきり原稿を書いてくれないと、

雜誌の方が寂しくなつて……僕などは、それだけでもやりきれない氣がするんだからね。」
「書けといふなら、いくらでも書くさ。ただ、いくら書いたつて同じ事ぢやないか。」
透谷は急に興奮して來た。その眸には何か兇暴な光があつた。春樹は壓倒されて、ぐうの音も出なかつた。
透谷は、しかし、ふと氣を變へて、「これから、一緒に戸川君のところへ出かけてみようぢやないか。ラスキンにもしばらく逢はないからね。」
あひにく、春樹は小父さんに言ひつけられた用事があつて、家を出ることが出來なかつた。それで透谷一人で出かけて行つた。

民助は長い下宿生活を切り上げていよいよ家を持つことになり、主人筋にあたる勝新の持ち家が三輪の方にあるといふのを借り受けて引越した。そこへ故鄕の母や妻子を迎へようといふのである。
木曾山中の、檜や椹（さはら）を產する深い谿谷に沿うた街道は次第に廢れて、舊士族、驛路を支配してゐた家々が次から次へと沒落してゆく。島崎家の沒落も、その一つの實例なのだ。だが、島崎家の場合は、全責任を負つた當主の民助が少し早めに身をかはした。多年住み慣れた、幽暗な森林の中の家を棄てるかはりに、都會で返り咲く、といふ方寸に出たのである。
ほとんど一生涯、土と森林の中に住んで來た母の體臭を、春樹は久しぶりに思ひ出した。夜寝ても、

るのが辛かつた。

鼻孔が、くんくんと音を立ててそれを夢見るのである。ただ、異様な坊主頭で母や嫂を新橋驛に迎へ

その日、停車場はひどく雜沓してゐた。それに宵ではあり、迎へられる方も迎へる方も少しあがつて、言葉を交すことさへ出來なかつた。春樹は二人乘りの俥に母と一緒に乘せられた。母は黑羅紗のとんびに身を包んでゐた。それが、寒い山國から出て來たといふ感じで鬱陶しかつた。

三臺つづいた俥は、塗りの剝げた鐵道馬車にまたたく間に追ひ越されてしまつた。柳の蔭にかがやく瓦斯燈。ジンタ樂隊の姦しい勸工場。建物の內も外も赤塗りにし、宣傳第一と、店先にも赤い着物を着た男を立たせて群衆に媚びてゐる煙草店。

「お母さん、ここが銀座ですよ。」

春樹は母の方へちよつと顏を振り向けて言つた。すると、彼女はびつくりしたやうにぐいと左の眼の上の黑子を上げて、

「おや、お前だつたか。」

と言つた。この言葉に今度は春樹が驚いた。

「俺はまた、どこの若い人かと思うてな。春樹のやうでもあり、さうでないやうでもあり――三年前上京した時には、お前は髮を長くしてゐたらう。それに今日は坊主だし――そんな事ばかり考へて、賑かな街の景色も俺は眼に入らんのさ。」

長く逢はずにゐて、母はわが子を見違へたのである。

三輪の家は、或る御用商人が某に建てて贈つたといふ來歷のあるもので、それが貸金の抵當として勝新の手に入つた。だが、空家にして置いては荒れるばかりだし、廣い庭の手入れも屆かないしするので、買ひ手がつくまで民助が借りて住むことになつたのである。忙しい體の民助がこんな邊鄙な場所を選んだのは、旦那への義理があるからでもあつたが、一つは家賃を出さないで濟むからだつた。

やがて一行はこの御殿のやうな家に着いた。長いこと別れてゐた親子はかうして一緒になつた。しかし、今後も濱町の家にゐなければならない春樹は、ただ顏を合せたといふだけで、言ひたい事も言はずに再び別れてしまつた。

カタストロフ

一

かうして年は暮れて、明治二十七年が來た。單なる同人雜誌ではあるが、毎月二千部から刷つてゐる『文學界』も、第二期を迎へたのである。

春樹は新春二月號のために、石山滯在中の見聞に材を取つた隨筆「野末ものがたり」を書き、それ

に初めて藤村と署名した。何度雅號を變へても、藤の一字だけは殘して置きたい氣持だつた。
だが、あの不氣味な死の翅に觸られてからといふもの、彼が自分自身の戀を見る角度はすつかり變つてゐた。昂然として彼は青春を否定し、その否定に醉つてゐた。今の彼に與へられる、生の肯定のたつた一つの途でそれはあつた。そしてこれこそ一番高い幸福だと彼は信じ込んだ。
或る日、藤村は一人で外出した。彼の足は赭色に長く見える街路を幾度も左へ曲つた。目ざす先は上野だつた。
だが、ときどき彼の胸は痛んだ。それは彼がこの頃心底から味つてゐるえがらつぽい陶醉をあたまから阻むかのやうだつた。年も押し詰つたぎりぎりの日に、透谷がたうとう自殺を謀つたのである。元數寄屋町の通りから南鍋町の方へ曲らうとする角にある小さな煙草店の二階で、透谷は寢たり起きたりしてゐた。不眠のために彼の眼はぢいツと一箇所に据ゑられ、狂激な光を放つてゐた。美那子は萬一を慮り、夫の手に屆く所にある刄物の類、剃刀だの小刀だのを一切隱してしまつた。だが、透谷はぢきにそれを嗅ぎつけて、
「馬鹿、お前たちは寄つてたかつて俺を狂人にしようとする。」
と叱つた。聲の調子は普通であり、叱つたあとでは明るい微笑さへ浮べた。それがみんなを油斷させたのである。
夜の十一時頃、臺所の屋根の上にあたる物干臺の方に異樣な悲鳴が起つた。美那子がまつ先にそれ

を聞きつけ駈け上つて行つた。見ると、透谷が右手に短刀を握つたまま俯伏しに倒れてゐるのだ。手が狂つたため、咽喉の傷口は急所を外れてゐた。すぐ醫者が呼ばれ、翌日の午後、口もきかない、ぎくしやくと手足を突ッ張つた生ける屍は、弟の垣穗に支へられ、相乘りの俥で病院へ運ばれた。

今、透谷は、芝公園地二十號の、紅葉館の裏手にあたる借家に身を横たへてゐる。藤村が見舞ひに行つた時には、惡夢から醒めたやうにきよとんと天井を見守つてゐた。咽喉に厚く捲きつけた繃帶の白さがひどく感傷的だつた。興奮させてはと藤村は匆々に辭し去つたのであつたが、今年は風がひどいね、などと季節の話をしてゐる間も、どうかすると急に反抗的になつて來さうで、險呑でならなかつたものである。

「生きろと言へばいくらでも生きるさ。しかし、いくら生きたつて同じ事ぢやないか。」

あの時、透谷が一番言ひたがつてゐたのはこれではあるまいか？　彼が手に構へた短刀は、敵を倒さうとして、その實自らの皮膚を抉つたのだ。

池の端に近く黑い板塀が續き、その上にのぞいた竹や讓葉が底に暖かみのある陽ざしを浴びざわついてゐた。藤村はその板塀の一ところにある門の中に入つて行つた。

「あのひとはまだかね？」

「オフエリヤか――ふふ、もうぢき來るさ。まあ上つて待つてゐたまへ。」

玄關の格子戸の中で、冷い空氣の層を動かし、そんな狎れ合ひの科白がとりかはされてから間もな

く、同じ門の外へ、佐藤輔子が俥で乘りつけた。新しい白足袋にさつと空氣を切らせて蹴込みから降り立つ間も、彼女はわくわくする胸を抑へかねてゐた。

かうして今日また愛人同士を逢はせるやうに取計つたのは、言ふまでもなく戸川秋骨である。しかし、その秋骨自身は、あの山の上の少女を急に思ひ諦めなければならないことになり、耐へがたい傷心にのたうつてゐた。先方の兩親も動き出して、いよいよ最後のどたん場まで漕ぎつけたとき、彼の叔母の横井玉子が不同意を唱へて出たのである。

「明三のは浮いた心からではないやうですが、とにかく結婚なんて以てのほかです。第一、まだそんな年頃ぢやありません。」

友人思ひの馬場孤蝶がわざわざ訪ねて行つて說き伏せにかかつたとき、彼女は唇を顫はせてさう言ひ放つた。

この破戀を境にして、秋骨の思想には激變が來た。今まで哲學者のやうに沈着で、體ぢゆう靜和なものに包まれてゐた彼が、狂亂を生命の常相と見、春の山ののどかさよりも秋の水の烈しさ、きびしさを愛するやうになつて來たのである。彼はこの事を『文學界』の新年號によせた「變調論」といふ文章の中で率直に述べた。

愛人同士が、明るく陽の當つた障子の內側に、遠慮しいしい火鉢を挾んで坐ると、秋骨は氣をきかして姿を消した。

「平田さんも、ここへ來てゐらつしやるんですつてね。」輔子が、伏せてゐた眼をあげて言つた。
「ええ、あの人も谷中の寺に飽きたと言つて、ここへ机を持つて來てゐるんです。」藤村は平生通りの口調で言つた。それでゐて、肩を立てて端坐した堅苦しい姿勢は、びりツとも崩されなかつた。
見ると、なるほど壁によせて二つの机が並べてあり、そのどちらも木目が光つて、お喋りでもしたさうに豊かな表情をしてゐる。二人が『文學界』に寄せる原稿は、毎月ここで相競ふやうにして書かれるのである。
愛人同士は、しかし、ぢきに机から視線を離した。その途端、二人は初めてまともに顏を合せた。いや、合せることが出來た。それはもう嬉しいとか悲しいとかいふ心ではなかつた。そんな稚さを通り越した、聲のない感動の涯だつた。かうして再びめぐりあふといふことさへ、二人にとつては不思議な事だつたのである。
だが、今日の邂逅は、二人が顏と顏をぢかに合せる最後の機會となるかも知れないのである。その事が、不吉な豫感となつてどちらの胸にも強引に忍び込んでゐた。

二

「明日のことはわかりません。まあ、じつくり腰を据ゑて話さうぢやありませんか。」藤村は少し大人びた口調で言つた。そのくせ、心ではそれを裏切るやうな得體の知れない激情に驅られてゐた。

「さうあなたのやうにおつしやつても――」と輔子は應對に困り、うすく紅をさした口のまはりに、造り花のやうな微笑を刻んだ。

彼女は今なほ二つの道に迷ひ、その息づまるやうな苦しさと戰ひながら今日もここまでやつて來たのである。この迷ひに見事な解決をつけてくれるものは、男の出方よりほかにはない。だが、或る人に言はせると、藤村といふ男は自我の塊である。彼の戀はひとと一緒に死なうといふ戀で、ひとと一緒に生きようといふ戀ではない。彼は、ひとを深く愛してゐるやうに見えて、その實少しも愛してゐない。

果してさうだらうか、と彼女は判斷に苦しんだ。しかし、今日の男の、打ち開いたやうでその實底に何か堅いものを包んだ態度を見ると、他人の批評が當つてゐるやうな氣もするのである。

藤村の態度が堅いのは、しかし、今度新しくつかんだ、青春の否定といふ過激な信念を貫かうとしてゐるからだつた。そのためにときどき彼はのぼせてしまひ、必要でもない時にぎらぎらと狂熱に近い光を眼の奥に湛へた。その光は彼女が護身用の武器のやうに身のまはりに置いてゐる感度の高い純粹な空氣の圏にしみ込み、不氣味な火花をちらした。彼女はまごつき、するといよいよ男の心がわからなくなるのだつた。

こんな暗默なわたりあひに時間をとられてしまつて、二人は早や別れなければならなかつた。

別れ際に、彼は自分の持つてゐたハンカチを取り出して輔子に與へ、輔子が持つてゐたハンカチを

自分の方へ貰つた。彼女を乘せた俥の轍の音が、だんだん低く、板塀の外から傳つて來る。それを耳に捉へるのも忘れて、彼は洟汁をかんだり涙を拭いたりした緣どりのある女持ちのハンカチを顏に押し當てた。あたしのはこんなに汚れて、と一旦は尻込みした女の媚態が、よけいそのきたない布切れに魅力を添へてゐたのである。

だが、彼はふと自分の行爲を反省し、いつたい、これでいいのかと思つた。あつさりと、自分は女と手を切つた筈ではないか。それは若さとの訣別である筈ではないか。

彼は恐る恐る心臟のところに手をあててみた。皮膚のすぐ下が狂ほしく高鳴つてゐる。これが自分の心臟だつたかと驚き、彼はいよいよ必死に否定の道を慕ふのだつた。

そこへ、今日の會見の模樣を聞かうとして、秋骨と禿木とががらッと障子をあけて入つて來た。「何も話すことが出來なかつた。」藤村はきまり惡さうに言ひ、そして笑つた。

秋骨一人の時もさうであつたが、禿木が谷中から越して來て一緒に机を並べてからといふもの、この池の端の下宿は『文學界』の連中の公式の會合場所のやうになつてゐた。

市昔少年日　　早充觀國賓
讀書破萬卷　　下筆如有神

と力のある情感に富んだ聲で朗吟して聞かせるのは馬場孤蝶だつた。前の年の十一月に初めて『文

學界』に自分の作品――「酒匂川」と題した流麗な長詩――を發表した彼が、三月號から連載しはじめた「流水日記」といふ小說體の文章は、異彩を放つた。殊にその中の、友人の戀のために橫井玉子と會見した顚末を敍したあたりは、みんなが一緖に額をあつめて讀んだものである。「君は、甥君の偶然彼女を見て、瞬間に感ぜしを賤しみ給へど、人間の靈火は瞬時に發し、瞬時にして滅するものなり。かの天來の活火は、かすかなる心緖の導火線をたどりて、瞬間に眞天地の光明をば人の內部に傳ふ。時を要するは此の導火線の準備にこそあらめ。活火激發の機は必ず瞬時ならざるべからず。いないな、その瞬時ならむことこそ、かへりて貴(たふと)からめ。」

『文學界』の執筆者には同人以外に普通の寄稿家もあつた。寄稿家の中では、戶川殘花、樋口一葉などが際立つてゐた。一葉が、『文學界』が創刊される少し前、雜誌『都の花』に書いた「うもれ木」といふ小說の、まだ幾分古い殼を背負つた文章の隙間々々から迸つてゐる一脈の細いが切々とした情感の流れを見て取つて、あの女は逸材だよ、とまつ先に褒めだしたのは禿木である。それに天知が動かされて、早速原稿を貰ふことにしたのである。「雪の日」「琴の音」と一作每に冴えて來、靜觀的な、寫實的な描寫の底に女性心理の哀感(ペエツス)を漂はせた彼女の作風は、まだ小說を書く者のゐない詩歌中心の『文學界』をどれだけ華やかなものにしてくれたか知れない。

上野の花のさかりの頃には、音樂會の歸りにここへ立ち寄つて、演奏の評判をする人もあつた。上田柳村(本名敏)がその一人だ。柳村は藤村より二つ年下で二十一歲、遠く武田勝賴の血をひくといふ

家柄を背負つて稚純だが氣位があり、禿木と同じく高等中學校へ通つてゐた。藝術的なものに對する感受性が銳敏で、禿木などとよく話が合つた。ルナンの『イエスの生涯』を持ち出し、あの本は宗敎を說きながらとても藝術的だね、第一、今までみんなが神と崇めて來たキリストに生々しい人間性を持たせてゐるところが面白いね、と話して聞かせるのも彼だ。その彼が初めて『文學界』に寄せた「夏山遊」といふ文章は、一篇の結構がギリシャ思慕に終始してゐた。『ルネサンス』の著者ウオルタア・ペイタアが、彼の眼をあけてくれたのである。

外國的敎養のふかいかうした柳村が一枚加はることによつて、『文學界』のエキゾチシズムは一層高められたかと思はれた。だが、それは同時に一方でいよいよ強く日本的なものの生長を促した――たとへその完全な結實は、透谷が成就したものをも計算に入れて、まだまだ先の事であるにしても。

「西洋料理と日本料理とを一緒に食つてへゝどを吐いたやうなものだ。」

牛込横寺町の家でときどき『文學界』を手に取つてみる尾崎紅葉が、さういふ評言を下したことがあり、それを何かの雜誌に見つけて一番口惜しがつたのは、禿木だつた。

四月の音樂會には、墺人敎師ディトリッヒの名殘りの獨奏もあつた。禿木と一緒に聞きに行つた柳村は、歸りにまたそこへ立ち寄り、會の光景をこまかに話して聞かせた。明治十二年に創立され、日本でたつた一つ男女共學を實行してゐるこの學校の、洋式に設計された奏樂堂には、その日も重い花の氣がカアテンを上げた窓々から流れ込んでゐた。ディトリッヒは一挺のヴァイオリンを携へて、ステ

エジの白壁の前に立つた。東洋から去らうとしてゐる間際の演奏だけに、聽く者は初めから熱く胸をふくらましてゐる。小指一本のピッチ・カットで八音を上下した手際の鮮かさ。殊に、半音階を迅速に上つて見せたときの神技は話を聞くだけでも耳が熱した。

「なにしろ、日本へ初めてベエトオヴェンを紹介したのは、あの人なんだからね。」柳村は胸の興奮を抑へようともしないで言つた。

ディトリッヒのあとの椅子は新歸朝のピアニスト幸田延子が襲ふ、といふ穿つた事情にまで柳村は通じてゐた。幸田延子といふのは、理想主義作家幸田露伴の妹である。

三

長居したと藤村が腰を上げたとき、君、ちよつと、と秋骨が物蔭へ呼んで、そつと何か手渡した。指を顫はしながら、濱町の家の茶の間で開いてみると、それは輔子がこの一月頃から書き溜めた日記體の手紙だつた。彼はまづ大體に眼を通し、更に初めから立ちさわぐ心を抑へ抑へ愼重に讀みなほした。焦つたり騷いだりして一途に思ひつめるばかりが男女の情とは言はれまい。物のあはれはまだ他にもある。なぜさうのぼせてしまふのであらう。なぜさう無闇な事を考へるのだらう。少しは自分の心情も知つてもらひたい、と相手を眼の前に置いて訴へるやうに書いてある。

もし彼に、氣高い英雄的な氣持か、勇敢な感激のなかに跳び込み得る生一本な性情か、又は少なく

とも女のために德を積まうとする心掛けがあつたら、これほど輔子を惱ませずに濟んだかも知れない。彼の戀は主我的である。彼が最初强い道義觀念に强ひられて女から拔け出さうとしたときにさへ、一身の安全を謀るための執拗な主我心があつただけなのだ。

だが、悲哀は彼の性格を變へた。彼は幾分他人の心情を汲むことも出來るやうになつた。彼は自分といふものを離れて女の身の上を考へはじめた。これは酷烈な現實の心核への一歩の接近だつた。彼はそこにちらと新しい言葉の影を見つけたと思つた――新しい生涯、新しい詩の二つとない蕊となるべき新しい言葉の影を。

四月の末、明治女學校から卒業式の案內狀が來た。彼は古びた袴を穿いて出かけた。敎員室と應接室との間にある廊下で、今もこの學校の武道敎師をつとめてゐる星野天知に逢つた。

「やあ、島崎君ですか。よく來てくれました。」天知は額を光らして言ひ、生徒の指揮があるからとすぐ式場の方へ姿を消した。

庭へ向いた敎員室の窓のところへ、仲間が揃つた。

「北村君はどうしたらう？」秋骨に誘はれて跟いて來た制服の禿木が、一つ缺けた顏を搜すやうな眼つきをして言つた。

「さあ、今日は來ないだらうね。」藤村が重い口調で言つた。

「僕もしばらく逢はないな。」かう言つたのは、りうとした羽織袴でやつて來た夕影だつた。

仲間が揃つてゐるこの場所を公の華やかなステエジに喩へれば、透谷はその背景である。背景は陰暗であり、それが絶えずステエジに不氣味な靑白い影を搖曳させるのである。
いま、透谷はまつたく孤獨である。そこへときどき訪ねて行くのが藤村に秋骨だ。
「お友達が訪ねて來てくださるとおとなしくしてゐるんですが、ひとりになるとどうしてああ暴れ廻るんでせう。ほんとに不思議なんですよ。」介抱に窶れた美那子の口から出た傷ましい言葉を、秋骨がみんなに取次いで聞かせた。
「最近、巖本さんの紹介でいろんな宗教家に會つてみたんだつてね。」今度は藤村が言つた。「今までの思想はすつかりかなぐり棄てて、童心に返つたやうな心でごく單純な信仰生活がしてみたいらしんだ。ところが、どうしても或る一つのものが信じられないと言つて涙ぐんだりしてね。やつぱり性質が純粹なんだね。それが、教會的な宗教と合はないんだね。」
「この間君と二人で行つた時は、暗い部屋に入つてゐたつけね。」と秋骨。
「さうさう、」と藤村も思ひ出したやうに言ふ。「あの家は樹が多くてどの部屋も暗いが、書齋と來たら殊にひどいからね。その暗いなかに胡坐をかいて、どうもこいつがあるからつて、しきりに咽喉の傷を氣にしてゐたつけ。」
「あの傷痕はちよつと凄いね。」
禿木と夕影は、さうやつて二人が代る代る話すのをだまつて聞いてゐたが、この時きゆうと眉をよ

せて不快さうな顏をした。

そこへ開會を知らせる鐘の音が聞えて來た。四人は一緒に式場に入つた。そこは日本式の大廣間だつた。彼等はうしろの壁に近く席を取つた。尤も、秋骨だけは教員席の方へやつて行つたが。「ほう、殘花も來てるね。」禿木が、そこらにぎつしり詰つた來賓の中に、若白毛の多い面長な人を見つけて言つた。

戶川殘花は、身が牧師であつたから、おもにキリスト教關係の雜誌、『女學雜誌』や『日本評論』(明治二十三年三月創刊、主宰植村正久)に執筆してゐたが、時には『國民の友』などにも書いた。『文學界』では明智光秀や靜御前や深草元政を情感に富んだ角度から論じた。しかし、彼の本領は詩であつた。『文學界』第六號に寄せた「弔歌桂川」の如きは、

ここは處も桂川

といふ起句も、

造花の筆はいまもなほ
悲慘の景色うつしいで
我はた冥府の人なりき

といふ末句も悉く時と所を得て千鈞の重みがある、と透谷などは褒めたくらゐである。知己のなさけから出た過褒とばかりは見られない。

式は滯りなく進んだ。柔和なうちにも威嚴のある、ふさふさと美髯を垂らした校長の巖本善治の手からぢかに卒業證書を受け取つた者の中には、輔子もゐた。婦人の解放、婦人の自由を叫ぶ理想主義の旗は今も高くこの女學校に揭げられてゐるのだが、外部から打ち寄せる國粹運動の波はますます荒い。戀と純粹に生きようとする意志が强かつただけ、理想と現實との矛盾を感ずることも深く、オフエリヤのやうな悲しみを抱いて身を滅ぼすべき運命にあるのが彼女なのだ。やや興奮した校長の口から送別の辭を受けながら、彼女は顏も上げ得なかつた。

接待係の少女たちが來賓の間に茶菓を配りはじめ、それが終ると正面の急拵への舞臺で餘興が始まつた。餘興には古い卒業生も參加した。

。役者は今も天知に思はれつづけてゐる松井萬子だつた。

「立派ですね、　。」誰かが囁いた。それほど彼女の身振りは男性的な勁い味を出してゐた。

續いて、

輔子が　、なるべく來賓の方へは顏を見せないやうにしてゐた。

藤村は人々の肩越しに彼女を眺めた。彼は彼女の稚拙な演技の端々を趁はうとしないで、白く塗りたてた顏のなかに深く開いてゐる鼻孔に眼をとめた。その奥に、自分の見逃してならない悲劇的な要素が朱肉のやうにかたまつてゐはしないかと思つたのである。だが、彼女の白すぎるほど白い顏は、

すべての個人的なものを漉過した感じで明るく耀いてゐるばかりなのだ。

突然、　　愉しさうな笑ひ聲が起つた。

「　　　　　　　　　　　　。」

覺えず身を乘り出した。　　　　　。輔子と萬子の演技は頂點に達したのである。

「　　　輔子の顏はいよいよ耀き、二つの圓い波紋を描いて盛りあがつた胸はとどろと鳴つてゐた。

最後に、　一緒になつて、この世の光華をたたへる唱歌を歌つた。

四

節句の前の日、藤村は伊勢町の家の方に禿木を訪ねた。禿木は時々池の端から歸り、街の騷音に遠

い静かな裏二階にこもつて原稿を書くことがあるのである。その日もひとりで横になり、午後の光線の漲つた屋根の上ではためいてゐる五月幟の音に耳を樂しませながら、何か想を練つてゐた。

「あのくらゐ不思議な女はないね。」彼は少し皮肉な調子で亮子のことを言ひ出した。「或る時は頰の色なども紅みをおびて、ほれぼれするやうな表情をしてゐるかと思ふと、今度會ふとすつかり蒼ざめて、血の色などないんだからね。」

「へえ、亮子さんといふひとは、そんなかなあ。」

「一日でもラヴァがなければ生きてゐられない、といふんだからやりきれないよ。」

「………」

「それにくらべると、君のはいいな。この間の 見たまへ。ああいふひとでなけれや、あれはやれない。」

「花巻かね。あんな女は仕方がない。」

友人同士は互に自分の女をくさし合つた。それが、燃え疼く若い肉體をもてあましてどうにもポオズのとり方のないこんな季節の、ただ一つの享樂だつたのである。

「僕、紅葉から手紙をもらつたよ。」

禿木はさう言ひ、机の抽斗から一通の封筒を取り出して見せた。それは柿色の太い線で縁を取つた大きな封筒――たしかに半紙より少し長いくらゐの縦幅で、横幅もそれに應じ四寸くらゐはあらうと

思はれるものだつた。紅葉は、原稿を横に折つただけで封じることが出來るやうにと、こんな大型の封筒をこしらへたのだといふ。その原稿といふのは、半紙の下へ罫線を引いた紙を入れて書いたもので、罫線のある原稿紙——それも當時は半紙又は唐紙に印刷したものがあるだけだつた——は使はなかつた。

ところで、手紙の內容は『隣の女』を批評してくれといふのだ(ひよつとしたら『三人妻』だつたかも知れない)。『隣の女』は、紅葉が前の年の八月から『讀賣新聞』に連載し、それが今度單行本になつて賣り出されたのである。內容はジョオジ・コックスが英譯したゾラの "For a Night Love" の飜案だが、藝術至上主義の立場から小說の上に新しい言葉を確立しようとする慘憺とした努力は、この一作にも遺憾なくあらはれてゐた。

「日本料理と西洋料理とを一緒に食つてへどを吐いたやうだなんて惡口たたいて置きながら、そのあとですぐこんな手紙をよこすところが、あの人だな。」

禿木は愉快さうに笑つた。彼がほとんど毎月『文學界』に書く六號活字の時評は、今は尾崎紅葉のやうな人にも認められてゐるのである。

「僕たちの時代が來たんだね、島崎藤村、平田禿木といふ時代が。」と言つて彼は笑ひころげた。また始まつた、と思ひながら、藤村も何かむづむづしたものが腹の底から湧きあがつて來るのを覺えた。

「時に、」と禿木は少し改まつて、「花卷は許嫁といふ人の前にすべてを告白したらしいぜ。」

麹町にあつた事がすぐ本町へ傳はり、それがまたこの伊勢町へ傳つて來るのは、珍しくもなかつた。だが、事が事である。藤村は急に鼻白む思ひがし、それを押しかくさうとすると、きゆうと背筋が突ツ張つた。

禿木の話によると、輔子はその時少壯な農學士の顏をぢつと見上げて、

「だけど、あたしはあなたのおつしやる通りになります。」

と言つたといふ。最後の斷罪を待つやうな、悲劇的に澄みとほつた顏で。

「島崎といふ人との關係は、あくまでプラトニックだつたんですね。」

「ええ。」

「唇を許したことさへないんですね。」

「ええ。」

こんなきはどい科白（せりふ）のやりとりもあつたにちがひない。

「それから家の方でも騒ぎ出したんださうだ。許嫁の人が話したんだね。」禿木は自分でもついおろおろ聲になつてしまつた。「多分、三月の選擧で落つこちた親父が、故郷へ連れて歸ることになるだらうつて。カタストロフだな。」

カタストロフだな、といふ友人の言葉を何度も苦しく胸に反芻してみながら、藤村はやつとのことで濱町の家に歸り着いた。

その晩、彼は近所の湯屋に菖蒲湯が立つたので漬りに行つた。だが、べつたり體にくつついた草の根の香くらゐ人の思ひを亂すものはない。歡樂が、彼の身にはあまりに遠いのだ。彼の一番手近なところにあるのはやはり死の光彩である。さういふものの中に幸福を探求しなければならない運命が、彼の運命なのか？　彼は、もつと放逸になれない自分を悲しんだ。

青臭い湯で體を洗ひ流して脱衣場へ出て來た時には、それでも氣持がしやんとし、かき亂された心もほぼ形を整へてゐた。彼は自分の部屋に歸るとすぐ机の上に紙をひろげた。女に宛てて最後の手紙を書かうといふのである。

「おや、お前さんはまだ起きてるのかえ。」

用心深いおばあさんが、鼠の音に眼でも醒まされたのであらう、雪洞（ぼんぼり）を片手に持つて見廻りに來たのである。「何を書いてるのか知らないけれど、明日もあることだから、早くお寢みな。」

「ええ。」

おばあさんが去ると、彼は再び机にかぢりついた。彼は今まで輔子にぶつきら棒な手紙ばかり書いて來たものだが、今夜初めてぢかに自分の心を出した。しかも、その心は棄てたと書き、自分はもうあなたを愛してはゐないと書き、今まで自分はただあなたを欺いてゐたのだと書いた。噓を吐け、と誰かが言ふ。すると彼は躍起になり、すぐ又それを反駁してかかるやうな文句を書き込むのだつた。

二時頃、やうやく手紙は出來上つた。それきり彼は動けなくなつた。涙も流れず、聲も出ない。青

春の否定といふきびしい觀念のまはりに、現實のすべてのものが殺到し、しかもそれが、中心に燃えてゐる白光を微塵も侵すことが出來ないのである。部屋には嵐を孕んだ闇のとばりが折れ重なつてゐる。否定が否定を呼ぶのだ。彼は今、過去二十三年の生涯で一番莊重な瞬間にあつた。

この手紙は秋骨に賴んで、彼の手からぢかに女の許へ屆けてもらふことにした。

友人の家から歸ると、彼は井戸端に金盥を持ち出して、冷い水の中に頭を突き浸した。心が冷めれば冷めるほど、あべこべに體がむづむづと燃えるのだつた。

先驅者の死

一

月がよかつた。彼はどこか幻怪的な夜景の河岸をひとりでさまよひながら、あれほど青春に輝いてゐた自分がこの頃の不自然な老成ぶりはどうしたことかと思ひ、つい不覺な泪を流した。とても今夜は眠れないであらう。人の若さ、脆さを感じさせるやうな月の色と形である。それが青い柔かな波を打たせ、どこまでも彼を引きずつて行きさうなのだ。彼はふと暦を考へた。丁度今日は五月十五日である。否定の道にはなぜかう時間の縞目が際立つてゐるのであらう。

十六日の午後、彼はまた池の端の下宿を訪ねた。禿木はゐないで、秋骨一人だつた。

「君は少し痩せたね。」藤村は今も失戀の哀しみから醒めきれないでゐる友人を哀れに思ひ、さう言つた。

そこへ一枚のハガキが舞ひ込んだ。秋骨が急いで取り上げてみると、北村美那子拜として、

「門太郎こと昨夜死去つかまつり候。とりいそぎおしらせまで申入候。何卒皆樣へお傳へ下されたく候。」とある。十六日朝の日附だ。

たうとう透谷は死んだ。それも自然の秩序を踏んで滅びたのではあるまい。黒枠もつけないハガキの裏側からそれを感じとつて暗然としながら、二人は芝公園を指して出かけた。

藤村が最後に見舞つたのは、丁度『エマルソン』が、原稿の出來上つただけを印刷に附して、『十二文豪叢書』中の一冊として出版され、それが民友社から屆けられた日だつた。瀟洒な紙表紙の、二百ペエジにも足らない薄つぺらな本で、定價十八錢、これでは肝腎の原稿料はいくらにもならないであらう。透谷はちよつと本を手に取つたきりで、ペエジを繰つて見ようともしなかつた。

「まあ、よく來てくださいました。」

銀白なのや、淡綠なのや、鈍紅なのや、さまざまの色の嫩葉に包まれてうす暗い家の戸口まで美那子が出て迎へた。彼女は疲勞と哀しみでげつそりと蒼ざめてゐたが、勝ち氣なだけに、とりみだした跡は窺はれなかつた。二人は內へ入つた。そこだけ一段低くなつた、臺所の方へ寄つた部屋には、も

う人が出たり入つたりしてゐた。彼等の顔はいづれも死の思ひで淨められてゐた。

「よほどあたしも氣をつけてゐたのですけれど、いつの間にか拔け出してしまひまして――」美那子は殘念さうに言つた。

「いい月夜でしたからねえ。」藤村もしんみりした口調になつてゐた。月光のあふれた庭の嫩葉の蔭で、透谷は縊死したのである。

「でもね、」と美那子は氣をとりなほして、「よくああいふ場合には見苦しい眞似をするつて言ひますけれど、そんな事は少しもありませんでしたよ。それや綺麗な最期でしたわ。」

いかにして淸くこの世を辭すべきかと、その方法ばかり考へてゐた透谷だつたのだ。

「父さん、ねんね。」やうやく獨り歩きの出來る年頃になつた英子(ふさこ)が、母の肩に頰をすりつけたまま男たちの方を見て言つた。

透谷の骸は暗い部屋の方に置いてあつた。そこは彼が書齋にしてゐた所である。「處女の純潔を論ず」とか、「かなしきものは秋なれど、また心地好きものも秋なるべし。」といふ一句で始まる「秋窓雜記」とかいふ文章はここで書かれた。二人の友人は、へしやげて嵩のない骸の枕元へ膝先でにじり寄つた。美那子が少し浮き腰になつて夫の顔から白い布を取りのけた。二人はぢいッと見入つた。どうしてか、鼻が少し尖つてゐる。額には感覺がなく、頰は蒼ざめ、堅く突き出した顎のあたりには、刃のこぼれてしまつた劍を杖にして、最後まで怯まずに現實と戰つて來た高い精神がそのまま凝結して

ゐる。手は胸のところに組み合せてあつた。もし手といふものがそれ自身の意識を持つてゐたら、今こそ、筆とチョオクで體を細らした艱難な一生の記憶を一ぺんに呼び起して哀しみに溢れながらも、すべて吾に善し、と叫んだであらう。

そこへ親戚の人たちも入つて來た。

「せめて葬式だけでも立派にしてやりたいと思ひます。」

彌左衛門町の母が、赤く腫れあがつた瞼をしばたたいてかき口說くやうに言つた。息子夫婦が國府津で食ひつめてころげ込んで來たとき、それ見たことかと辛い當り方をした彼女も、あの物干臺の騷ぎ以來すつかり折れてゐたのである。異常性のある神經も自分が傳へたものと、どうにもならない冷酷な生理的事實にも進んで惱ましい責任を感じてゐた。

北村家の宗旨はキリスト教ではなかつたが、美那子の言ひ分を容れて、親戚一同協議の上、この度の葬式だけは死者と緣故の深かつた普連土教會の牧師を呼んで來ることになつた。明十七日の朝、ここで式を行ひ、直ちに芝の瑞祥寺へ葬るといふ段取りだつた。

十七日の都下各新聞は相競ふやうにして挽歌や弔辭をかかげた。中には『やまと新聞』のやうに「ブランコ往生」云々と嘲罵したものもないではなかつたが、巨匠大家の死もこれほど悼まれはすまいと思はれるくらゐだつた。よく苦節を守つた、と謳つた新聞もあつた。僕には友人が少ないが、しかし、こちらから交際範圍をひろげてかかる氣もない、と言ひ言ひしてゐた透谷の、凜然とした孤高を裏切

るやうな現象だつた。

告別式も賑かだつた。星野天知だけは、東北地方に旅行中花巻へ立ち寄り、透谷の友人である一牧師の家で訃を知つたくらゐで、こゝへは來れなかつたが、藤村、夕影、孤蝶、柳村、秋骨、禿木、殘花と『文學界』の連中はみな集まつた。明治女學校からは、校長の巖本善治を初め、敎へ子の代表として、高等科、普通科の各級から一人づつ來た。松井萬子はその頃もう盛岡に歸つてゐたが、輔子はまだ北の故郷に歸りかね、ほんの手傳ひに普通科の生徒に何か敎へたりしてゐたのでやつて來た。星野亮子も來た。

浪風の荒きうき世のなかにも
休らふ所はめぐみの寶座（みざ）なり

と哀切な調べの讃美歌が歌ひ出される頃には、狹い式場に入りきれない會葬者の群が、嫩葉の照り返す庭にまであふれてゐた。そこには赧ら顔のふつくら肥つた山路愛山や、愛山を鐵瓶に、死者を銀の匙に喩へてみんなをやんやと言はせた德富蘇峰などの姿も見られた。

藤村は秋骨や禿木と一緒に臺所の方へ寄つた一段低い部屋に坐つてゐた。祈禱、履歷の朗讀と嚴かに式は進められてゆく。一方の壁によせて据ゑてある棺は、黑い布に包まれ、その上に牡丹の花で飾つた靑い十字架が立ててあつた。若い女の群は、そのすぐ前に陣取つてゐた。薄い小豆色の縮緬の紋付を着た亮子の姿は、飛び拔けて美しかつた。その亮子と肩をすり合せ、身じろぎもしないでこちら

へ横顔だけ見せてゐるのが輔子だ。

二

輔子の顔は、白さが浮きあがつたまま硬張つて、どことなく塑像みたいだつた。薄いお納戸色の小紋の紋付にも禮式的だけでない堅さがあつた。若い農學士の前に無手で身を投げ出したといふ彼女が、いま、噓と思はせぶりでカタストロフを飾らうとする男への強い反撥で唇を噛みしめてゐるのである。

やがて、牧師の說教が始まつた。

「彼は戰ひの人であつた。彼には、私たちが意味するやうな信仰はなかつたかも知れない。しかし、醜惡や不正との戰ひが、最後まであのやうに烈しく、しかも筆一つをもつて續けられたのは、彼がいつも天を足場としてゐたからだと私は思ふのです。」

牧師は信仰のない人を葬る役目を引受けた自分の地位を後味の惡い戲畫(カリカチュア)にすまいとして一生懸命だつた。言葉に力が入り過ぎると、フロックコオトに包んだ體の震動が足許の棺に傳はり、その上の白牡丹の花がかすかに搖れた。

「あとに殘る私たちにも一度は必ず死がやつて來る。私たちはただ、この兄弟のやうに惜しまれて死ぬことを願ふべきです。」

牧師は最後にかう言つて説教を閉ぢた。會葬者の數が遙かに豫想を越えた驚きをも言葉の裏に盛つたつもりだつたのだが、さすがに、ここに姿を見せない無形の會葬者も多かつたことだけは計算に入れることが出來なかつた。いや、この事はいつも孤獨に惱まされてゐた透谷自身も生前豫期してゐなかつたであらう。封建的な鐵の壁をわづかしか破ることが出來なかつたにもかからはず、戰ひの人として、理想が高く、意慾が烈しかつた彼の背後には、物に感じ易い靑年との連帶性がどこまでもひろがつてゐたのである。信州の松本で若さをもてあましながら厭々に辯護士をしてゐた木下尙江の如きは、新聞でその訃を知つた時、自分たちの代表者が犧牲になつて十字架にかかつたと感じ、四五日心の戰慄に惱まされたといふ。

或る日、藤村は友人の死後のことを心配して秋骨と一緒に彌左衞門町の家へ樣子を見に行つた。二人はすぐ二階へ通された。

「國府津はよござんしたよ。」

美那子が、うつとり追憶に耽るやうな若やいだ眼つきをして言つた。そこは透谷があの短刀事件を起すまで惱ましさうに寢たり起きたりしてゐた部屋だつた。葬式後間もなくここへ引上げて來た美那子は、深い疲勞と哀しみの中からいくらか立ち直つたといふだけで、まだ未亡人としての恰好を整へることも出來ないでゐた。

「あの刀騒ぎをする少し前に、幾晩か品川へ通つたことがありますのよ。」彼女は少し頰を染めて、亡夫のきはどい祕密を打ち明けた。「あればかりは、どうしてもあたしにわかりません。」

「へえ、北村君が――」二人の友人は驚いた。

身に覺えのある藤村も、この謎を解くことは出來なかつた。それは自分から身を投げ出して厭はない現實への屈服であつたか？　絕望と暗黑の中から、せめて僅かばかり肉體のスリルでも味つて置かうとする末期の欲望であつたか？　それとも、血まみれになつた戰士の假の憩ひであつたか？

死なれてみると、しかし、誰もそれを咎める氣にはなれなかつた。

「東海道を小間物の行商をして歩いた時、奇妙な印絆纒を着てゐたつていふ話を御存じですか？」

美那子ははれやかな顏をして言つた。「あれはまだ結婚前で、たしか十九か二十歲の時の事でせう。どうして手に入れましたか、その印絆纒は、襟に土岐の二字（これは時の變へ字）、背に運の一字、裾に來といふ字がいくつも模樣のやうに染め出してあつたさうです。その時分からもう少々キ印だつたのかも知れませんわね。」

亡夫の飄逸なところをわざと誇張して見せて彼女は笑つた。それは今後姑と小舅に氣がねばかりして生活しなければならない彼女に許された、ただ一つの氣ばらしだつた――父無し子になつて今も「父さん、ねんね」をくりかへしてゐる英子と遊ぶ時を除けば。

彼女は夫の書き遺した反古を持ち出し、二人の友人に見てもらつた。その分量の多いことが先づ二

人を驚かした。十九歳頃から書き出し、一旦書いたものはどんな斷片の末に至るまで保存してあり、稚さや拙さを掩ひ隱さうとした跡は微塵もないのである。これほど自分の書いたものを大事にした者もあるまい。二十二歳から二十三歳までの反古と思はれるものには、こんなのがあつた。人間村漫遊記。別乾坤搜索日記。初夢。地獄極樂界巡遊日記。薄命兒。篁村翁を評す。無我村。漂流人。夢中の夢（韻文、「嗚呼かく弱き人ごころ」「嗚呼かく强き戀の情」等々の句がある）。たびごろも。平家行。常盤曲。當世文學の潮模樣。義經曲。春の曲。夏の曲。秋の曲。冬の曲。美文學總論。おその（これは戲曲で、幾度か稿を改めたと見え、稿本が三つも四つもある）。荒野の戰ひ。

この最後の「荒野の戰ひ」も戲曲で、あら筋をいふと、非常に豐饒な野がある。曾て蛇を平げた一匹の大きな蜒蚰がそこの長となり、でんでん蟲が箱を擔いで支配權を執行してゐる。その臣下には、虻、蜂、とんぼ、螢、芋蟲、毛蟲、蚯蚓、蜥蜴、まつ蟲、すず蟲、くつわ蟲、蛙、きりぎりす、蟬、螽、蜻蜓、ばつた、ひぐらし、かじか、虱、蚤、守宮、蟻、油蟲、蠅、蚊、げぢげぢ、百足、わらじ蟲、けら、ふくろ蜘蛛、くさひばり、玉蟲、黃金蟲などがある。雙蝶を主人公とし、ここへ蛇が外から入つて來て彼等と戰ひ、そこら一面荒野となる。

『蓬萊曲』を書いた頃の反古には、月の宮、護良親王、蝶の夢、源九郎義經、などがあつた。これらも戲曲だ。詩では「春駒」と題したものがあり、

夢にまでうつりし花の面影を

訪ねて來て見れば跡もなし。
深山路の人家もあらず聲もせぬ
廣野の中にわれひとり、
かこつ泪や水の音
花ある方にそそげかし。

稚醇な詞致を連らねて自分の孤獨を歌つたものではあるが、後の蝶の詩ほど悲凉な氣は滲み出してゐない。この期の作者は闘爭のペシミズムに乘り出したばかりのところだつたからである。

次々に取り出して見てゐるうちに、たうとう部屋ぢゆう反古で埋まつた。二人の友人は雜誌に載せたいからと改めて小口から一篇々々吟味してかかつた。

透谷の理想の建て方はきびしかつただけ、俗惡な現實の隅々がはつきり見透され、新しい期待、新しい計畫が際限もなく產み出されたのである。直感的に、しかも入念に打ち建てた一つの計畫が、半ばまで仕上げを見るか見ないうちに、早くも次の優れた計畫があらはれて、これまでの業績を劣視させてしまふ。小山のやうな反古は、さうやつて出來たのだ。事業界で云へば計畫型、講說上で云へば序論型にも比すべき肌合ひの人が透谷だつたのである。

罰

一

透谷が戰ひに敗れて斃れたことは、何といつても、一團の者にとつてはひどい衝擊だつた。仲間の中から一人の戰死者を出したといふ感じである。

藤村は勇み立ち、友人が斃れたところから新しい步みを踏み出したいと思つた。遺された仕事は未完成であり、斷片的である。それを受け繼いで完成しなければならぬ。透谷自身も先驅者らしい意識をもつて、あとから來る者のために踏み臺とならうと覺悟して斃れた形跡があるのである。

この繼承は、しかし、單なる時間の問題であつてはならぬ。小さな運動を盛り立てて社會全體に翼を伸ばすには、どうしても、遺された仕事の長所を受け繼ぐと同時に、その短所を修正しなければならぬ。本當の完成は、そのあとからやつて來るのだ。もし長い時間が必要なら、それをも厭ふまいと藤村は思つた。彼はどうかすると、自分の擔はされた歷史的使命の重さに呻くのだつた。

五月號の『文學界』は當然故人の追悼號でなければならなかつた。しかし、月末に市場に出されたのを手に取つてみると、禿木が「蟬羽子を弔ふ」といふ一文を、殘花が「北村透谷を悼みて」と題した

詩を寄せてゐるだけで、ひどく寂しく、透谷の追慕者たちはがつかりした。一般には『文學界』の指導者と見られてゐた透谷が、内部へ入つてみると、實はさうでなかつたのだ。大體は浪漫主義でも、仔細に見ると、性格もちがひ、物の考へ方もちがふ青年の寄り集まりだつただけに、中には透谷の性格を好まない人もあり、いいところを認めない人もあつた。馬場孤蝶の如きはあまり透谷が好きでなかつた。そこには人柄の違ひもあつた。透谷は神經質の人だつたから、ぢかに逢ふと、書いたものとは様子が違つてゐたのである。

六月四日、故人の三七日の法要が營まれた頃、藤村は滿十年世話になつた濱町の小父さんの家を出て、三輪の兄の家へ移つた。しかしそこには、全く豫期しなかつた恐ろしい嵐が吹きまくつてゐた。善良な上に、名譽を重んずる心が強く、正しい行爲を誇りとしてゐた民助が、日頃信用してゐた男に欺かれて僞造の公債證書を使用したために、鍛冶橋の未決監へ送られたのだ。

「これはみな嘘だぞい。立派になつたと思つて油斷すると、あてが違ふぞい。」

借物に過ぎない廣々とした家の中を見廻して母はいつも嫂を戒めてゐたものである。ところが、本當の欺瞞者は別の所からやつて來た。

「これは嘘です。嘘ですが、この嘘を本當のものにしようといふのが私の目的なのです。」と氣負うた言ひ方をしてみんなの心を引緊め引緊めしてゐた民助の目論見も、今は完全に打ち挫かれたかと思はれた。

嵐はしかし、この國の上にも見舞つてゐた。いよいよ日清戰爭の火蓋が切られたのである。豐島の沖合ひで、わが吉野、浪速、秋津洲の三艦は、牙山に上陸しようとする陸兵一千名を載せた高陞號の護衛艦から突如發砲して來たのに應戰し、忽ち敵商船を擊沈した。

街にちらばる號外のにほひに血をわかせながら、藤村はその日も鍛冶橋まで差入れに行つた。汗みづくになつて歸つて來ると、庭の蓮池の向うに、跣足でお百度を踏んでゐる母の姿が見わたされた。そこには稻荷が祀つてあり、一枚々々艷やかに葉面の光る泰山木の蔭に朱塗りの鳥居も突き立つてゐた。

九月に入つても民助の豫審は終結しさうになかつた。家の調度道具類には、調べ方のきびしい執達吏が來てべたべたと赤い紙を貼つて歸つた。僞造公債をつかまされた高利貸が差向けたのである。

「あたしはもうどうでもいい。持つて行きたいものは、何でも持つて行くがいいさ。」嫂が長火鉢に倚りくづれたまま、きいんとひびく聲で言つた。

母は毎日鹽絕ちをしてゐた。

幾分でも家計を助けようと、藤村は再び麹町の女學校へ通ひはじめた。三輪から麹町まではかなり歩きでがあつた。神田川に沿うて飯田橋の方へ傾斜を下りて行くと、右側に砲兵本廠があり、靑、黃、白と色の違つた煙が立ちのぼつて見事な縞模樣を空に描いてゐた。

山行けば……

と歌ひ歌ひ子供は街を練り歩き、富士見町の繪草紙屋にはこてこてと色彩の强い戰爭畫が貼り出してあつた。

とにかく、今度の戰爭は東洋の大機と言はれた。九月十三日にはもはや大本營は廣島にあつた。間もなく平壤攻略の報も傳つて來た。新聞記者、文學者などが、先を爭つて從軍した。國民新聞社から遣はされた、當時まだ多感な詩人として少しばかり名を知られてゐたに過ぎない國木田獨歩の「愛弟通信」は、肉親への愛情を交錯させ鋭利な角度から現地の光景を描き出したもので、紙上に一段と光彩を添へた。家さへ困らなければ自分も從軍するのに、と藤村は興奮した。

だが、教壇に立つたときの彼はまるで別人だつた。彼の受け持ちは今度もやはり英語と英文學の初歩だつたが、その講義ぶりと來たらちつとも面白くなかつた。頭腦のいい少女が、前の夜ランプの油が盡きるまで本にしがみついて譯をつけ、鼻梁が紅くなるほど身を入れて質問しても、この若くて老成した先生は、

「それでいいでせう。」

と冷やかに突ッ放し、時間が來ればさつさと出て行くのだ。前のとき、一度講義を始めると忽ち全身にみなぎる淸純な情熱でみなの者を魅了してしまつたのとはひどい變り方である。

「ああもう先生は燃え殼なんだもの。仕方がないわ。」と、先生の戀愛事件に通じてゐる少女は賢く諦

めた。あの先生は文章がお上手だから、きつとそんな事で迷はしたのよ、などと言ひふらす生徒もあつた。

彼女たちの間には好色的なをかしみに一刷の哀感(ペエソス)を交へてリレエ式に一つの歌も流布されてゐた。

いかばかり浮世の風はあらくとも心の柳めでたかるらん

透谷が、自殺する少し前、許嫁の人との結婚が迫つても、まだ北の故郷へ歸りかね惱んでゐた輔子を慰めようとして贈つたと言はれる歌である。低調で拙いし、透谷がこんな拙いものを作つたとは思へないが、次から次へと傳へられるうちに、原型が喪はれてしまつたのである。

二

そのうちに九月も末になつた。遺族の希望を容れ、天知が費用を負擔して透谷の遺稿集を出すことになり、その編纂には藤村が當つた。彼は自分の手許にある雜誌を材料にして糊と鋏で貼りつけ、未亡人のところからも例のおびただしい反古を借り受けて來た。それをどう取捨したものか、配列の順序はどうするか、とその日も頭を惱ましながら、彼は退け時の教員室を出た。「蟹の横這ひ」などと妙な綽名をつけられても一言もないほどのぎごちない固さは、少女たちの眼がないだけに、體のどこからも拔けてゐた。今度の本は『透谷集』と金字で標題をあらはして出來るだけ瀟洒な裝幀にしよう、と天知が言ひ、藤村もそれに贊成した。天知の春の旅行は萬子の實家を襲ふのが目的だつたこと、三

年越しの苦しい片戀もどうやら果を結びさうになつて來たことなども今日初めてほのめかされた。自分の場合との對照が際立ちすぎるのも忘れて、藤村は友人のために喜んだのである。

辯で、彼は俯向き加減になつて足を運んだ。突き當りに圖書室があり、廊下はその前を左右へ延びてゐる。出口は右である。その方へ曲らうと顔を上げた途端、彼はぎよつとして立ちどまつた。盛裝した輔子が、圖書室の戸口のところで、彼が近づくのを待つてゐたのだ。

「先生、いろいろお世話樣になりました。」彼女はつつましいお辭儀をして言つた。體ぜんたいの感じが、靜物畫みたいだつた。ただ、瞼だけ泪の痕で紅くふくれあがり、それがどこか肉感的だつた。するといよいよ故鄕へ引上げるのだな、と思ひ、彼は一瞬間口をもぐもぐさせて何か言はうとした。が、氣が立ち、それを見られまいとする虛勢でよけい固くなつた。彼女の方でもそれきり言葉を喪ひ、ぢつと唇を嚙みしめた。それへ無言のお辭儀を報い、彼は再び步き出した。

——先生！

彼女はあとを追はうとしたが、やつと押し怺へた。教師のみんなに別れを告げて來ようと、泪を拭いて盛裝する間際まで、彼女の懷には男の寫眞がハンカチに包んで忍ばせてあつた。最後のどたん場に、もう一度自分のそんな熱い心を知つてもらひたかつたのである。

北京へ、北京へと街の人々は逸り立つてゐた。血腥い幻が彼等の糧だつた。花火をあげて祝ふのは、

いつの日だ？
或る日、藤村は秋骨と二人で教員室に殘つてゐた。號外賣りの鈴の音はそこへも聞えて來た。
「ひよつとすると、僕も戰地へ行つちやふかも知れないよ。」
秋骨の眼には、體内に吹きまくるものをやつと抑へてゐるやうな凄慘な耀きがあつた。「君にはまだ話さなかつたが、或る新聞社の通信員として行かしてもらへさうなんだ。」
戰地へ行つたきり、もう二度と歸つて來ないつもりではないか、と藤村は胸を衝かれたが、顏には出さないで、
「すると、當分お別れだね。またひとつ飲みに行くか？」
「二人で五勺ね。」
だが、燥げば燥ぐほど秋骨の鼻梁は白くなつた。箱根の少女のために、人目を忍んで誂へたといふ友禪の帶地はどう始末したであらう。その事がふつと思ひ出されて、藤村は哀れを感じた。そして、自分なんかよりこの友人の方が戀の仕方も愼重なくせにどれほど一途か知れないと思つた。
消しがたい哀しみは、しかし藤村にもあつた。輔子は札幌で新家庭を持ち、毎日そこの農學校へ教へに行く夫を送り迎へする若奥樣ぶりは見事なものだ、と人から聞かされた時は、言葉の裏に自分への揶揄があると思ひ、自分でもわざとそれを誇張して關門をくぐり拔けたつもりだつたが、二三日食事に味がなかつた。健啖な彼がである。友情に富んだ馬場孤蝶が諄々と說いて聞かせるやうな長い手

紙をよこして、君は自分を苦しめ過ぎると言ひ、四五日すると今度はわざわざ訪ねて來て、うむ、少し飄逸なところが出て來たとけたけた笑つた。藤村はにこりともしなかつた。友人が笑へば笑ふほど、秋の光線の入り惑うた廂のふかい部屋が深山の感じなのだ。聲のない哀しみで手足の先は腫れぼつたく脹れあがつてゐた。

「まだ君と同じ年頃なのだが、世慣れた話しぶりでね。」

孤蝶は下谷龍泉寺町に店を開いて、紙、湍團扇、蠟燭、石鹼、マッチの類を商つてゐる樋口一葉のことを言ひ出してゐた。藤村はしかし、それにも惹きつけられなかつた。失はないでいいものを失つたといふ感じが今初めてのやうに強く心を捉へてゐた。否定の道の辛さが骨まで徹つた。

「尤も、君も三輪の隱居といつたかたちで、知らぬ者は寄りつきにくいかも知れないがね。」

「何とでも言ひたまへ。」藤村は眼で言つた。

「一葉はしかし、決して悪ずれのした女ぢやないね。あれでなかなか素直なところもある。殿方がお野掛けにお出かけ遊ばすのは、さぞ御愉快でございませうね、などと言つたりする顔は、どこか艶つぽいところもあつて、ちよいとよかつたよ。」

女の力ばかりで支へられ、たとへ男があつても意氣地がないか働きがないかで目立つまいと思はれるのが一葉の家庭だつた。年老いた母に妹を加へた三人暮しなのだ。孤蝶が初めてそこへ訪ねて行つたのは、この年の二月頃の事で、原稿依頼で先づ近づきになつた禿木に連れられてだつた。佗しいな

かに一種の雅味を湛へた家庭の雰圍氣に心をひかれ、それからも時々不意打ちに襲うてゐるのである。

「そのうちに、君も一度行つてみないかね？」

「うむ。」藤村は氣の乘らぬ返事をした。さういふ女の前に出ても、默りこくつてゐる自分だらうと心で思ひながら。

「一葉の師匠の半井桃水ね、あの人のところではみんなが樋口の荒物病と言つてるつてね。自分でその事を言ひ出して、妙な病氣もあつたものぢやございませんか、などと笑つてゐたが、笑ふ顔がまたいいね。」

圖太さうな鴉が一羽、さつと羽ばたきをして、廂の前を通り過ぎた。日暮が近づいたのだ。孤蝶はやつと腰をあげて歸つて行つた。

ひとりになつても藤村はしかし何も手につかず、そこへ齒痛さへ起つた。これでは友人に小突き廻されてゐる方がまだ氣が樂だつた。

十月の中頃、『透谷集』は出來上り、藤村も女學校の教員室で天知の手から一冊渡された。金字であらはした標題は天知の手蹟だつたが、うつりがよく、口繪代りに、

折れたまま咲いて見せたる百合の花

といふ句を故人の自筆のまま版にして入れたのも、何となく煽情的でよかつた。印刷部數は四百で、販賣の方では九段下の玉川堂といふ本屋が骨折つてくれることになつてゐた。

藤村は自分自身の處女出版でありでもするやうに持ちごたへのする本を飽かずに打ち眺め、ぱらぱらとペエジをめくる紙の音にも心にとほる淸しさがあるのを覺えた。透谷の遺した先驅的な仕事の上に思ひを馳せる時にだけ、體のどこかに燈火がともるのだ――歷史もなく、藝術もなく、花もない慘めな人間のほそぼそとした燈火が。

三

差押へられた財產は、いつまでも貼紙のままではゐなかつた。民助の主人筋にあたる人たちの援助を見越して根氣づよく待つてゐた高利貸がたうとうしびれを切らして競賣に廻し、民助は一物も餘さず破產の運命に陷つた。その上、彼は今も鍛冶橋から歸ることが出來なかつた。

一家は本鄕の湯島に見つけた新しい住居に移ることになつた。引越しの日には藤村がわづかに競賣を免れた勝手道具や柳行李や風呂敷包を積みあげた荷車のあとに跟いて行つた。彼は俥に乘つてゐた。蹴込みに足を踏んばつてゐると、ふと母の乳房が眼に浮んで來た。それは片方しか垂れてゐなかつた。片方は、あの嵐のただ中で乳癌を患ひ、袋ごと拔き取つたのである。

俥はそろそろと上野に出、切通しの坂にかかつた。孤蝶に小突き廻されてから丁度一年の時を隔てた同じ季節の日光が一面にあふれ、地べたには深綠に物の影が張りついてゐた。先に行く荷車を避けて右に左にすれちがふ人々の顏は、遂に傲岸な淸國をねぢ伏せた自分たちの力に感動して踊りあがり

たいのをやつと怺へてゐるやうな表情で彩られてゐた。潮に乘つて日本の國力はこれからどんどん脹れあがるであらう。それだのになぜ自分の家だけは暗闇なのだと思ひ、彼は激して人目も憚らず男泣きに泣いた。

「旦那、支那の俘虜も嬉しさうでしたねえ。」車夫が兩肘を突ッ張つたまま顏を向けないで言つた。ついこの間、街の中を幾臺となく續いて驛へ急いだがたくり馬車の窓から、隣國の兵士が手を振つて歸國の喜びを示した。それを車夫は言つたのである。藤村は涙に濡れた眼をぱちぱちさせて、相槌を打つた。

今度の家ももちろん借家で、茶の間に据ゑた銅壺つきの長火鉢がをかしいほど大きく見えた。この界隈は俗に大根畠と呼ばれてゐた。麹の香のする街で、「上麹」とか「白米」とか書いた表障子が一日中埃をかぶつてゐた。軒下に白木の桶を乾し並べてゐる家もあつた。

倖で學校通ひをするほど大事にされてゐた幼い姪も今は前掛の下に笊をかくして豆腐買ひにやらされた。嫂も沈んでばかりゐた。ただ、快活な性格の母だけが些細な事にも笑ひ興じた。それが、やつとみんなの心を支へた。かういふ家庭では、意味もなく、締めくくりもない饒舌さへ、時には、消えかかつた火をかきたてた。

二階に一部屋あり、南向きの窓のすぐ下は、フロックコオトの男が通り、樂隊が通り、そこらのおかみさんの賑かな話し聲のする往來だつた。そこを藤村は自分の居場所にきめた。

今もまだ歸ることの出來ない兄は、夏の暑いさかりに有罪の宣告を受けて、訟訴中なのである。惡くすると、訟訴審でも敗れる懼れがあつた。だが、それでも弟は兄を信じてゐた。兄のために哭き、兄のために辯疏したいと思つてゐた。死んだ父ほども行動性のない、袋小路ばかりうろうろしてゐるやうな彼ではあるが、かうした感情にだけは行動以上のものが含まれてゐた。もし兄が一緒に死んでくれと迫れば、それをも彼は辭さないであらう。

內部的な激動は、しかし、これぱかりではなかつた。もつと身に近い打擊が襲ひ、それが今も大きく尾を引いてゐるのである。

丁度夏休みも終る頃、彼は深編笠をかむつた兄に會つて來たついでに麹町の學校へ立ち寄つた。教員室は埃で白かつた。誰が置き忘れたか、前の月の、「氣焰何處にある」と題した秋骨の文章の載つてゐる『文學界』が一方の卓の上にあり、それも白く埃をかぶつてゐた。

彼は再び廊下へ出た。

「ひどい埃でせう?」

ふと向うで艶のある聲がした。彼は振り向いた。少し意地惡な企(たくら)みをひそめた顏で、皓い齒列を光らせながら近づいて來たのは、三十過ぎの、ふつくらと前髪を立てた寄宿舍の舍監である。

「暑いわ。」と彼女はゆつくり襟足の汗を拭いて、「あの、佐藤さんね。」

「お輔さんですか?」

「あの方が、亡くなりなすつたさうですよ。」

藤村は驚いた。心から驚いてしまひ、ごうんと耳の中で鳴るものに引きずられて上のそらになつた。しかし、やつと一つの氣持だけ捉へて、

「擔いぢやいけませんよ。」

「擔ぐだけで濟むんでしたら、あたしも、こんなに……」少しからかつてあげよう、といふ最初の企みも忘れ、彼女は急に涙聲になつた。

いつ死んだか、どうして死んだかと次々に眞劍な疑問が湧きあがつて來たが、氣がさして言葉に出せなかつた。

やがて彼は校門を出た。丸髷の女や、紙の旗をかざした飴賣りを載せたまま地面がゆれあがり、胸にのしかかつた。彼は覺えず呻き聲をあげ、ぐつと足を踏みしめた。その途端、今度は谷が出來、谷の底から人魂のやうなものがふわふわと飛びあがつて來た。よく見ると、それはしかし向うからゆつくり歩いて來る輕裝の紳士が口に啣へた、純白な泥で造つたパイプの火だつたのである。罰だ、罰だと彼は口走つた。が、自分に加へられた罰か、女への罰か、彼自身にもわからなかつた。

家に歸ると、彼はがつくりと机にもたれて、考へ込んだ。

「叔父ちやん、御飯。」

姪が來て肩にもたれかかりたさうにし、だが途端にはつと息を呑み、眼玉をぎろぎろさせながら後

退りに逃げて行つた。叔父ちやんつたら、とても變よ、と彼女は報告するにちがひない。それならよけい擬態が必要なのだが、みんなですぐ顏色の奥のものへ突きあたつて來さうな氣がして、どうしても立ちあがれなかつた。廂から夕燒の色が洩れてゐた。それに刺戟され、死んだつて他人の細君ぢやないか、平氣だと彼は力み返つてみた。が、ぢきにがくがくと崩折れ、ぺしやんこになるのである。

秋の學報が來た。疑問のままになつてゐた事柄を彼は餘さず知ることが出來た。

「此上はとても人力の及ぶところに無之、神の攝理に任せ候より外なしと心ひそかに祈り候。其日はただ小兒の如く種々餘念なき物語して、夜も靜かに寢ね候由。翌十日朝參り候ところ、よく眠り居り候ゆゑ、兄と私とにて輔子の兩手を持ち添へ居りたるに、目を覺まし、兩人の手を強く握り、嬉しいわ、といたく泣き候ゆゑ、互になぐさめて眠りに就け申し候。俄かに目ざめては、コレラにつかれましたからあちらへ行つてください、神樣と一緒だから寂しくないわ、看病うけても死ぬ時は死ぬわ、など申し候。」麴町の姉が札幌へ急行し、現場を見て來ての報告がこれである。

「十三日午前四時頃、スウプならびに牛乳等を食し、心地よく寢ね候故、脈を調べたるに、前日とは大違ひにて、よく調子揃ひ居り候。素人の悲しさ、病輕く相成り候ことと、兄と共に喜び、兄は一旦歸宅。それより十分ばかりも經ちし時、すやすやと眠る顏のいつもと違ひしやうに思はれ、お輔、お輔と呼び候ところ、大きく圓き目を開き、にこりと笑ひ、何か物言ひたげに口動かしながら呼吸一時に止り、私の顏を見つつ七時半頃永眠致し候。」かうもあつた。

「輔子永眠後、鹿内の悲嘆失望極に達し、實に哀れにて候。毎日々々の墓參、世を味氣なく思ひ、病氣など惹起し申さずばよきと心痛いたし居り候。」報告はここで結ばれてゐた。

直接の死因は惡阻で、それへ心臟病を併發したのである。だが、と藤村は考へた。この生理的な苦痛に堪へられなかつたものが別にありはしなかつたか？　眼前の事實に引きずられていつとなくおぼろげな安住の境地に辿り着く結婚生活の習性にも遂に屈服しなかつた精神の强さが、よけい募らせる祕密な戀の惱み――。

末期の眼

一

根岸の料亭伊香保の一間。汽車が通る度に不氣味な震動の傳はる長方形に敷きつめた疊の上に、六七十人の者が賑かに居流れてゐた。戰後最初の正月を迎へ、これから第四期に入らうとする『文學界』の、同人が主催する懇親會だつた。

同人はみんな寄つてゐた。藤村はもう二十五、孤蝶は二十八、秋骨は二十七、禿木は二十三、柳村も二十三だつた。天知はとくに三十を越してゐた。

二年前、日清戰爭が勃發した當時、通信員として從軍したいと言つてゐた秋骨の希望はあひにく達せられなかつた。新聞社との話がまとまる頃には、もう平和の世になつてゐたからである。彼は今でもそれを言ひ出しては口惜しがつた。月明の夜に白く砲烟の炸裂する山野を思ひ、自分も行つてみたいと血をわかせたのは、しかし、彼ばかりではなかつた。透谷が死んだとき、

世の中はたのしきものをあはれ君なにをいとひてひとりゆきけん

といふ稚拙だが感情のこもつた弔歌を寄せ、それが緣となつて『文學界』と結びついた田山花袋もその一人だつた。

今日はその花袋も來てゐた。「野燈」「林の少女」「蕎麥の花」と最近續けざまに抒情的な作風の小說を『文學界』に發表して來た彼も（それらの作品は投書として扱はれた、その證據に、同じ寄稿家でも一葉や殘花へは書く都度稿料が支拂はれたのに、彼一人はさういふ名義の金を鐚一文も受け取つた憶えがないのである）、同人と顏を合せるのは今が初めてだつた。

「鷗外さんなんか誤譯ばかりしてる。今に誤譯調べをしてやる。」

國文調でオシップ・シュビンの「埋れ木」やアンデルセンの「卽興詩人」を譯出し、貴族的な匂ひはするが、淸麗な情趣に充ちてゐると評判の高い壯年氣銳の人を、金釦の柳村がしきりにこきおろしてゐた。三ツ紋のキャラコの羽織を着てその近くに陣取つた花袋は、あんな紅顏の少年がと驚き、好きな湯豆腐にもしばらく箸が行かなかつた。彼は二十六歲だつた。

「上田君はやはりルネサンスの研究ですか？」さつきから食ひ氣の方に廻つてゐた藤村が、ふと宙に箸をとめて訊いた。
「そんなところはもう通り越してゐらあね。」秋骨が代つて答へた。
「へえ。」と藤村は驚いたやうに言ふ。「そんなら何の研究ですか？」
「ずつとギリシャさ。」
秋骨がまた言つた。ギリシャ風の典雅沈靜を唱へ、ロセッチやヱルレエヌを語り、外國文學の研究者として既に鷗外に次ぐ高さまで來てゐる柳村は、何とも言はずにただ微笑してゐた。
藤村は急に友人たちから置いてきぼりを食ひさうな氣がし出し、寂しかつた。みんな彼のやうにぐづぐづしてはゐなかつた。秋骨の如きは『文學界』だけでは滿足できないで、『讀賣新聞』にも乘り出してゐた。柳村は赤門派の機關雜誌『帝國文學』の創刊の議にあづかり、禿木などもこの雜誌に自分の研究を寄せはじめてゐた。
「みんなここへ集まつてゐたのか。」
床の前に陣取つた少し年輩の人々と話し込んでゐた孤蝶が、狹いところへ割り込んで言つた。「今日は僕たちが主人役なのだから、少しお客の斡旋でもしなきやいけないぢやないか。」
「そいつは星野君に任して置きたまへ。」誰かが言つた。
「田山君、」食ふものも食つて、除けものみたいにぽつねんとしてゐた花袋に、孤蝶は氣さくに呼びか

けた。「君は紅葉を訪ねたことがあるんだつてね。いつ頃の事かね？」
花袋はちよつと指を折つてみて、
「もう五年になるね。」と言ひ、その時の模樣を詳しく語り出した。「二階へと言ふもんだから、梯子段の方へ行かうとすると、新夫人の菊子さんに顏を見られてね、僕はあわててお辭儀したよ。向うの方の部屋の長火鉢の前に細君はゐたんだけれど、白粉をまつ白につけて、花のやうにきれいなもんだから、こつちも面喰つたらしいんだね。」
みんなは話をやめて、この訥朴な、顏色のよくない瘦せぎすな男の方へ眸をあつめた。
「紅葉は自分で座蒲團をすすめたり、茶をいれたりしてくれてね、最初の印象はとてもよかつたよ。文學青年を別に侮りもしないでね。——座蒲團か。噂に聞いた菊と紅葉の模樣のは見なかつたね。——紅葉は西鶴や近松の話をしたが、外國文學の話になると、僕も遠慮しないで、ユウゴオや、ディッケンスや、サッカレエを說いたものさ。お終ひには『しがらみ草紙』で少し知りかけたドイツ文學の話まで持ち出したんだから、さすがの紅葉も、生意氣な書生が飛び込んで來たものだと思つたらしいよ。それでも顏色には出さないで、棚の上から一冊の書物を取りおろして……僕はそれを手に取つてみて驚いたね。何かと思つたら、ゾラの“Abbe Mouret's Transgression”ぢやないか。紅葉は側にあつた扇を取つて開いてみせて、『この影と日向とがうまく書きわけてあるね。話の筋はごく單純で、一人の僧侶が病後で色氣のない娘を戀する道行きを書いたものだが、その娘がだんだん戀の中に入つて行く

心理が實に細かく書いてある。』讀む方も實によく讀んだものだと、僕は感に打たれたね。しかしこっちも負けぬ氣になつて、同じゾラの"Conquest of Plassana"を持ち出して張合つたものさ。今から思ふと冷汗が流れるよ。」

三馬や西鶴の寫實を學んでゐた尾崎紅葉にも、外國の新しい作品からの刺戟は必要だつたのだ。こんないきさつから、花袋は一旦硯友社のグルウプの中に入つて行つたのだが、現實の一角を切り取つたやうな生々しい題材を抒情的な手法で表現した彼の作品は、藝術のための藝術を奉じ、それを寫實で行かうとしてゐる彼等からとかく繼子扱ひにされる。紅葉の如きは『文藝倶樂部』の編輯者大橋乙羽をつかまへて、田山の原稿なんか買ふのはよせ、くらゐの事は言つたかも知れないといふ邪推も起る。それで彼はだんだん硯友社から離れて、『文學界』の人たちと手をつなぐ氣になつたのである。

紅葉に逢つた經驗は、孤蝶を初め、秋骨や禿木にもあつた。この正月の、まだ松がとれない頃、これも『文學界』の寄稿家の一人で、本來硯友社に屬しながら、人生的にひたむきなものを持つた主情的傾向の強い川上眉山の小石川上富坂町の家へ、孤蝶が禮裝で訪ねて行くと、

「來た、來た。」

と目ざとくこちらの姿を認めたらしい調子の聲が目隱しの內側から聞えて來る。つづいて起る賑かな笑ひ聲にも一々聞き覺えがあるのだ。

二

孤蝶はすぐ庭に面した明るい瀟洒な座敷に通された。見ると、背が高く、聲のやさしい、色白の秀麗な顔にどこか憂鬱さうな影を滲ませた主人役の眉山と、年始廻りに立ち寄つたらしい折り目のついた羽織袴の紅葉とが相對し、これに禿木と秋骨が加はり、陽氣に話がはずんでゐたのである。

「君たちが高くかかげてゐる情熱にはいつも動かされる。新しい文學は、さういふ情熱を底に湛へて、そこから生れて來るのではないかといふ氣がするね。」

孤蝶や禿木が訪ねて行くたびに、眉山は藝術至上主義への反噬をきつく匂はさせて言ふのだつた。

「少し古い話ですが、松濤園では何かあつたさうですね。」孤蝶は三十歳の若さでもう大家らしく悠然とかまへた紅葉を大膽に見上げて言つた。

「いや、あの時は大しくじりさ。」紅葉は輕く笑ひ、心を開いたのびやかな顔で詳しくその話をしだした。

松濤園といふのは、相州酒匂の、海に臨んだ旅館だつた。孤蝶は或る親戚の病人の附添ひに行き、そこの離れの二階で暮してゐた。明治二十四年の夏のことである。

或る日、庭の松の根方に腰かけてゾラの『ナナ』の英譯を讀んでゐると、一間ばかり離れた所にも一人の青年が蹲んでゐる。物は羽二重らしい濃い納戸色の豆絞りの兵兒帯をうしろに垂らして、青年は

砂をすくつては指の間からこぼしてゐる。

「ゾラをお讀みですか？」蹲んだままで、青年の方からふと聲をかけた。

その青年は饒舌な方だつたが、同じ饒舌でも聲のひびきに底から磨きあげた感覺の美しさがあり、孤蝶は急に親しみを覺えはじめた。知りたいのはその名前だが、相手は質問の隙を與へないほどすずしく舌を動かすのだ。と云つて、こちらから名乘つて出るのは、不遜な氣がし、今となつてはばつも惡かつた。

「西鶴の文中には、さうと明さないで師匠の西山宗因の俳句がだいぶ使つてあります。僕が或る本屋から頼まれて『男色大鑑』の校訂をやつた時も、方々に宗因の句が使ひ込まれてゐたのに氣づいたので、註でも入れて置かうと思つたんですが、間違ひがあつてはいけないと思つてやめました。」

「あなたは尾崎さんですね。」孤蝶はかちりと鶴嘴に當つたものがある感じで言つた。

「ええ、さうです。」

紅葉は少し大袈裟な頷き方をして笑ひだし、孤蝶もそれに和してほがらかに笑つたのである。

翌朝、紅葉は宿を發たうとして、派手な縞の財布がいつの間にか盗み去られてゐることに氣づいた。隣の部屋に、頭髪の短い、つくり聲のうまさうな男がゐたのだが、女中に訊くと、もう疾くに發つてしまつたあとだと言ふ。宿賃は東京へ歸つてすぐ送ると約束し、そのかたに時計を置いて紅葉はやつと主人を納得させた。

「しかし、宿を出るときなど、かたりの面をよく見てやれと言はないばかりに、家ぢゆう帳場まで出て來てね。あまり癪にさはつたので、紀行でも書いてあの宿屋をこつぴどく苛めてやらうと思つたんだが、あとで息子が菓子折を持つてあやまりに來ました。」

紅葉はここで話を結び、揮毫を頼んでゐたらしい秋骨の方へ向き直つた。

「僕に書けといふのは何ですか？」

秋骨は『マアメエド叢書』の一冊『マアロオ詩集』を差し出して、これへ、と言つた。紅葉はいつも持つて歩く焦茶色のズックの鞄の中から簾巻きの筆と銅の墨池とを取り出して、おめでたいものを書きますぜ、と言ひ、詩集の見返しを開いた。そしてすらすらと一氣に筆を運び、秋骨の膝先へ輕く詩集を突き戻し、

狼の人食ひし野も若菜かな

と節をつけて讀んで聞かせた。剛勁と優美を兼ね具へたクリストファア・マアロオに似つかはしい句だと秋骨はひどく喜んだ。

やがて懇親會は果てた。藤村、孤蝶、花袋の三人は連れ立つて夕暮近い池の端を歩いた。花袋は今日の會に來てよかつたと思ひ、硯友社を離れて『文學界』へ乘り移つた自分自身の姿が、まつたく方向を異にした二つの流れの、一方から一方へ飛躍した感じでまぶしいほど大寫しになつて來るのを覺えた。これから新しく交際をつづける上でも、藤村の沈靜と孤蝶の快活とが、見事な對照を示して、心

の刺戟になるであらう。ただ、彼が少し不滿に思つたのは、彼等が自分たちの雜誌にものを書くことに今は興奮を感じなくなり、やや疲勞してさへゐるやうに見えることだつた。

藤村は步きながら、言葉數の少ない、靜かだが銳い調子で、花袋が『文學界』に載せた作品の批評をした。それらの作品を一つに貫いた、現實的背景のある新鮮な抒情性を彼は身に近いものに感じてゐた。それを告白することが、この場合にはどんな言葉よりも强く相手の胸にせまつた。

池は見わたすかぎり錆びた暗い色に澱んでゐた。三人の影に驚かされたやうに、岸のすぐ下から、黃色い嘴をした數羽の水禽が不意に一聲鳴いて飛び立ち、低く低く水面をかけり、枯れた蓮の中へ姿をかき消した。

「東京も變つたね。」

花袋はふと、どこか感傷的な顏色になつて、こんな方へ話を持つて行つた。「煤烟で公園の樹がだんだん枯れてゆくね。僕は子供のとき上州の田舍から出て來て、京橋の或る本屋の小僧をしたことがあるんだが——そしてよく年上の朋輩に連れられて、背に山ほど本を負つてここらまで來たことがあるので知つてるがね——あの時分から見ると、小鳥なんかも減つたね。眼白や山雀は殊に少ない。」

「かう市區改正をやられては、今に古いものはなくなるね。須田町あたりには、もう昔の面影はないね。」と孤蝶。

「言葉などもだんだん變つてゆくね。新しい言葉が出來る。するともう古い言葉は壞れてる。そこの

ところが面白いぢやないか。」と藤村。

切通しを越えて新花町の角まで來ると、藤村はこれからどこか裏街のうすぎたない下宿に歸つて行く花袋に別れを告げ、孤蝶に對しては、明日は送つて行かないかも知れないから、と斷つた。

「なに、かまはん。川上君が見送るとか言つてたから。」

孤蝶は前の年の九月彥根中學校の英語教師になつたのだが、東京を離れてみるとやはり寂しいので、冬休みになると同時に舞ひ戾り、明日の夜また切ない旅情に身を託さうとしてゐるのである。

大根畠の家では、今夜もランプの灯に黃色く濁つた環が出來てゐた。藤村は自分の部屋にひつこんで煙草に火をつけた。しかし、その時ふと一つの危懼が湧いて來た――透谷の遺した仕事を完成すべき位置にある自分の道と、禿木、柳村の道との間に由々しい食ひ違ひが出來さうな危懼が。彼は外國のものを讀んでもそれ一つに身を預ける氣になれなかつた。この點では、彼はむしろ今日知り合つたばかりの花袋と手がつなげさうな氣がした。

或る日、彼は母をつかまへて言ひ出した。

「お母さん、僕は麴町の學校をやめようと思ひます。」

「へえ、學校を？」彼女は息子の顏に跳ねあがつてゐるきびしい表情に押されてたじたじとなつた。

「そのかはり、筆で稼ぎます。」

「そんな事が出來るかい？」彼女は不思議さうに言つた。

「今までは學校があつたから、却つて書けなかつたんです。學校をやめて、どうしても書かなければならないとなつたら、きつと書けます。」

制作、制作！

彼の內部には、無理無體に自分を押し出して、何物かと取ッ組まうとするやうな意慾が盛りあがつて來た。

三

天才は金のやうなものである。烈火でもそれを燒くことは出來ない。東と西から藝術の華をあつめ、性格と生ひ立ちの違ふ幾多の巨匠が遺した作品を一つの坩堝の中に押し込んで熔和させることが出來るものであらうか？　假に出來たとしても、それを日本的なものと外國的なものとの調和と稱して安閑としてゐていいものだらうか？

この頃ジャアナリズムの表面で勇ましく踊つてゐる折衷論者の意見に對して、彼は疑惑を投げかけ、たとへ細くても自分自身の內部に芽ぐんだ純粹なものを育てあげるのが一番大切な事だと思つた。この考へには本能的な强さがあつた。柳村たちの絢爛なエキゾチシズムは、彼の眼からだんだん褪色して行つた。

柳の花が散りはじめる頃、天知はたうとう松井萬子と結婚して鎌倉の草堂にこもつた。雜誌の編輯

はおもに夕影がやることになつた。その夕影は學校の方は東大の工科に進み、柳村も同じ東大の英文科に進んだ。秋骨も再び學徒の生涯に入る決心をして柳村のあとを追つた。例の規律や形式になじめない性格のためか、禿木は高等中學校も中途でよしてしまつた。彼は別の方角から柳村や秋骨と歩調を合せようとしてゐた。

田山花袋が敏感に見て取つたやうに、彼等は共同の仕事にはもう疲れてゐた。第一、大將が大將らしくない、ああ哄笑ばかりされては何も出來ない、と天知をこきおろす者があるかと思ふと、いや、もう仕事は終つたのだ、僕は退社する、といきり立つ者もある。こんな空氣が自然雜誌の上にも倦怠の色を漂はせた。

無理もない、と藤村は思つた。しかし、さういふ空氣くらゐ今の彼にとつて危險なものはなかつた。人はどうであらうと、自分だけは今度の新しい決心に果のある花を咲かせようと必死になり、彼は毎日机の前から離れなかつた。

彼が『文學界』に書くものに對しては、彼の境遇を考へ合せてときどき稿料が支拂はれてゐたが、何分營利を離れた同人雜誌のことであり、書く都度さうしてもらふといふわけにはいかなかつた。毎月相當の收入を得るには、どうしても他の雜誌や新聞に原稿を賣りに行かなければならなかつた。しかし、氣位の高い彼にはそんな節を屈した商業的な行爲が出來なかつた。それに、紅葉のやうな技巧に長じた寫實家がなほ全文壇を支配してゐる現在では、主情的な匂ひのする文章がさう容易に買ひ取つ

てもらへるとも思はれなかつた。
結局、學校はやめてもやはり仕事は出來ないのである。
彼の胸には、陰慘な家庭の現實から吹きあげて來る漠然とした不安と恐怖が、しよつちうむかむかとたたみかけてゐる。惡くすると、香の高い希求や情緒的なものは脆くも打ちひしがれてしまふであらう。體には生傷がいつぱいだ。それでも、彼は生きなければならないのだ。彼は寡默になり、ときどき體をふるはせ、これといふ理由もないのに泪を流した。
四月の初め、彼はひとりで上野公園へ出かけた。誰も來ない場所を求めてのこれは外出だつたが、丁度時が惡く、綻びかけた花のかをりを趁ふ人々でどこも雜沓してゐた。
「ちえツ！」
人を罵るのか、自分のぼけた頭をわらふのかわからぬ氣持で舌打ちして、彼は谷中へ出、そこから更に道灌山までのして行つた。彼の懷には、李白の詩集が忍ばせてあつた。だが、別に讀まうともせず、彼はぐつたりと樹蔭のベンチに身を投げかけた。
沈默のあひだに偉大な仕事をしてのけるのが山だ。第一、空氣が新鮮で濃く、それをたらふく吸うてずんずん伸びてゆく樹々の芽も、眞紅に色立つてゐる。
彼は急に激し、肩をふるはせてしやくりあげた。この世の、明るい日光にあたためられてゐる部分とさうでない部分との對照があまり際立ちすぎるのである。彼は思ふさま泣かうと思ひ、顏も手もび

ちやびちやと泪でよごした。瞼はふやけて、醜い斑が出來た。强引な闇の觸手にへしつぶされた夢と花花の廢墟が、そこにあつた。

泣くと少し氣持が樂になつた。

彼はふと、多少幻想的な感じで、棟や窓からふきあげる眞紅な焰を心に描いた。そして、巖本さんも氣の毒だなと呟き、もしこの世に心から哀惜されていい人があるとすればあの人だと思つた。

丁度二月末の事だつた。彼はその日も鍛冶橋へ行き(この勤めももう三年越しだ)、手摺の前にある小さい四角な窓の向う側に、髯だらけの蒼白い顏を出した兄から、この頃のやうに差入れが絕えては體が疲れる、中で食べ物を買ふから金で入れてくれ、と言はれた。彼は面會室を出て、兄さんには家の方の事情が少しもわからないと嘆息した。そして硬張つた足を曳きずるやうにして歸つて來たのだが、しばらくすると、近くの火の見櫓で氣味惡く半鐘が鳴り出した。彼はあわてて窓から顏を出した。まつ暗な空から、氷雨が降りしきつてゐた。それに肩先を打たせながら、彼はいつまでも麴町の方角へ眸をこらしてゐた。

巖本善治が多年の間苦心經營した女學校は、かうして一夜のうちに灰になつた。男の敎師らの舍宅にあてがはれてゐた建物の階下がパン屋に貸してあり、火はそこから出たのである。巖本の住宅も見る間に燒け落ち、夫人の若松賤子は四度目のお產で宿痾の肺結核を昂進させ病床に橫たはつてゐたが、その夜のうちに容態が惡化し、避難先のわびしい一室で夫の看病も空しく絕命した。『小公子』一冊を

あとから來る若い人たちへの得がたい形見として遺して。
　若松賤子の傷ましい最期は、同時に、明治女學校の校長及び經營者としての巖本善治の沒落を暗示したものではないかと思はれた。經濟的理由も手傳つて、彼はもう二度と起ち上れさうにもないのである。そしてここにも先驅者の悲劇があつた。

四

　梅雨があがらうとする頃、藤村は兄の民助に少しでも現金を差入れたいと考へ、築地の或る陶器畫専門の職場に入つた。繪畫を愛するのは彼の天性に近かつた。そこから來る、暗い壁を彩るやうな空想があつた。男は片肌ぬいで竈に入れる前の花瓶にインキのやうな藥で餘念もなく唐草模様を書き込み、女は戸口のところに立つてそれを見惚れてゐる、といふ構成の、いつか西洋の美術雜誌で見た繪がこの空想をよけい刺戟したのである。
　彼はまづ見習ひとして一枚の皿をあてがはれた。それにどろどろした紫の藥をぬたくつてゐるうちに、彼はしかし、そこらぢゆう花瓶や皿や珈琲茶碗を置きならべて機械的に手を動かしてゐる、教養のない、顏色の惡い男女が、平氣で醸し出す卑猥な空氣にぢきにあてられてしまつた。彼はたつた一日でこの仕事をやめた。
　さて、これからどうしよう。收入は一厘もないのである。未決監にゐる兄のためにはあれほどみん

なが大騷ぎをしても、その兄に代つて場合によれば家の支柱になるべき自分が、かうして絶えず苦慘を嘗めてゐることは覗いてくれる者さへない。不眠の夜を明して眼の底に生々しく血を滲ませてゐても、また遲くまで本を讀んで、と言つてくれるくらゐが闘の山だ。體が頑健に出來てゐるのが却つていけないのである。呻き聲をあげてそこに倒れるまでは、誰も氣づかない。

彼は樋口一葉のやうに次々に作品の書けるひとが羨ましかつた。彼女が前の年の一月からしばらく『文學界』に連載した「たけくらべ」は、客觀的な、リアルな手法で、思春期にある少年少女の、純情な、夢にまみれた心理を描き出したものである。讀んで彼は打たれた。この春から、彼女は肺を病んで寢ついてゐるといふ。彼は彼女の、額の廣い、愛嬌は少ないが冴え冴えと引緊つた顏を思ひ浮べた。あれから彼も孤蝶に連れられて彼女の家を一度訪ねたことがあるのである。

その時分、一葉はもう商賣をやめて本郷の丸山福山町へ引越してゐた。入口の戸は上半が赤、綠、紫の色硝子で張られてゐた。六疊の間が二つ並び、その南面に手摺のついた緣があり、緣のすぐ下は池だつた。以前、鰻屋の離れ座敷でここはあつたのである。

「もう少し、からツとした事はありませんかねえ。」

一葉はこんな事を言つた。物質的に彼女も苦しみつづけてゐるのである。藤村はしかし、自分の身に近い言葉でありながら、かたく口をつぐんだままぱつを合せようともしなかつた。科白のやりとりはみな孤蝶がしてくれた。

一葉の家を出ると、藤村は結局彼女の顏を見、その肉聲に觸れて來ただけであることに氣づいた。彼女の口を衝いて出る言葉には、機智があり、自嘲があり、つつしみを忘れない身振りの隙間から冷熱が同時に殺到して、孤蝶のやうな人でも時には應答に窮した。彼女にはまた、多少物を誇張する癖があつた。

肺が悪いといへば、再起はむづかしいかも知れない。彼は哀れを感じ、ああいふひとでも日本の女に特有な麗質は具へてゐるのにと思つた。

一葉の生活は、しかし、彼女以上に暗いものを背負はされてゐる今の彼から見れば、まだ幸福な方だつた。彼は、死を人生の贅澤な補色だと感じだしてゐた。彼にはもう死ぬことさへ許されないのである。

逼迫した家庭の事情に强ひられるままに、彼は方々へ金を無心する手紙を書いて出した。日本橋の天知をもぢかに訪ねて、十圓借りて來た。しかし、そのくらゐの金では一ケ月の生活も支へられなかつた。

たうとう、彼は階下の座敷に寢床をとつてもらつて、倒れるやうに身を横たへた。

現實の社會に根を張つた平俗なもの、功利的なものに抗して新しい文學を發展させなければならない當爲は決して苦惱の全部ではなかつた。そのやうな創造的な仕事をも逼迫した生活の部分として押し進めなければならないのである。これは二重の苦しみである。ひきつるやうに骨々が痛み、表格子

のすぐ外を行き來する人々のぎらぎら光る白い浴衣の光にも眩暈がした。
「春樹さん、お醫者を呼んで來ませうか？」
もう若いといふ年齡ではないが、まだ幾分成熟した肉體の匂ひと光彩をもてあましてゐる嫂が、汗を拭き拭き枕元へ來て言つた。彼はしかし、むつちりと默り込んだまま返事もしなかつた。そんな餘裕があれば鍛冶橋へ持つて行くと思ひ、顔に着せた衣の下できりきりした。
「そつと寢かしてお置き。その病人は疲れが出たんだらうよ。」
母が格子の近くに縫物をひろげながら言つた。彼女も今は全く眸の明るさを失ひ、瞼にはづづ黑い隈をこしらへてゐた。「無理もないね。から落ち目になつては、あたしだつて早く世から消えたくなるよ。今から見ると、お父さんなんか、あれでまだ仕合せな方だつたと思ふよ。」
藤村も、ほんとにさうだと思つた。傲岸な彼は、しかし、それでもまだ自分の敗北を認めようとしなかつた。一筋に白線をきつて飛んで來た敵彈を受けてどつと草の中に倒れ、倒れてもまだ必死に抵抗しようと踠いてゐる兵士が彼だ。透谷がはげしく挑戰し、遂にその前に斃れた同じ現實のただ中に今彼はゐる。現實の生活は刻々と危機を孕み、地ひびきをあげて陷沒しさうである。しかも、この生活圈から逃亡することは絕對に不可能なのだ。
氣がつくと、けたたましい音をさせて驟雨が來てゐた。もつとでずぶ濡れになるところをきはどく免れて、紹の羽織を着込んだ男が戸口に駈け込んだ。それは戸川秋骨だつた。彼はしばらく逢はない

友人の顔を見に來たのである。

藤村は寢床の上に起きあがりながら、素速く、懷に隱し持つてゐたものを尻の下に隱しかへた。額には誰へともない暗い憤怒の影が滲み出てゐたが、間もなくそれも消えた。あとはただ悄然とした表情一つだつた。こんな時には、色の白さがよけい際立ち、輪郭の纎れた顏のにほひが何となく氣高かつた。

「またラヴでも始めたのぢやないか？」秋骨はからかつた。

ふん、と藤村は苦笑して、「しかし、君にもずゐぶん世話をやかせたね。」

「なあに、そんな事はお互さ。」

「…………」

「敗將だな、二人とも。」

「…………」

「平田君の戀も、どうやら終りへ來たらしいぜ。ああいふ人たちでも、容易に添ひ遂げられないんだね。」

「…………」

尻の下のものが突ツ張つて、藤村はどうかするとその方へ注意を奪はれた。それは黑塗りの鞘に納まつた例の懷劍だつた。いつか、秋骨に預けてあつたのを返してもらつたのである。

友人と話しながらも、青く冴えた刃の色が眼の底にあつた。その上に突ツ伏して悶死することも出來ない、と云つて、苛烈な現實のいぶきに遮られて前へ進むことも出來ない、ぎりぎりの瀬戸際に立つた自分自身の凄慘な姿を見屆け、彼はひそかに身をふるはせた。

若菜集

一

やがて夏も終らうとするころ、藤村は或る人の口添へで仙臺の東北學院の英語教師になることになり、そろそろ旅仕度を始めた。着物は母の丹精で見苦しくない程度に洗ひ張りしたもので間に合せ、袴は古着屋から買つた來た。荷物といつたら、古い柳行李がただ一つ、それも中味は大部分書物だつた。

嵐のただ中から夜明けの薄明りを慕ひ、過剰な哀苦の跡をそぞろに振り返つて見るやうな旅である。多少母の手許へ仕送りも出來る。彼はそこまで考へた。

そこへ、支那で何かしてゐる二番目の兄から思ひがけない手紙がとどいた。留守宅の生活費は月々そちらからも、助けてくれるといふのである。鍛冶橋の兄は、大審院に上告中だつたが、それも聞か

れた。

出發の日は明けがたからひどい雨だつた。その中を、彼は誰にも見送りさせず、幌の隙間から散り込むしぶきに濡れながら停車場へ急いだ。一番汽車をはづしたくなく、そんな事にも吉凶の岐れ目を見ようとする、脆い、はらはらするやうな氣持だつた。あとには何の思ひ殘す事もなかつた。ゆうべ食べたとろろ汁の味が舌の上に甦り、つづいて女たちの顔が見えて來た。彼は笑ひたくなつた。幌を打つ雨の音も、自分の心に和唱する、饒舌ゆゑに愉しい言葉のやうな氣がした。

彼はしかし、これは少し幸福すぎはしないかと思つた。不幸と暗鬱な悲哀に慣れ染んだ彼にとつては、幸福すぎるといふことは狸の仕業である。闇の跫音が絶えず耳にあつてこそ、幸福は身につくのだ。

雨は少し小降りになつた。彼は三等客車の堅いクッションの上に腰を落ちつけた。

白河を通り過ぎる頃、初めて旅情がひしひしと胸に來た。周圍の人々は雨中の旅に倦んで見苦しく寢ほうけてゐたが、彼は眠れなかつた。空想がしきりに湧くのである。その空想の源は、不思議と、あの凄愴な戰場で負うた、今も癒えないで血を滲ませてゐる傷口のやうであつた。

ほんとに、今までよく死なかつたものである。自分のやうなものでもどうかして生きたい、と彼は深い深い溜息を吐いて考へた。彼は夢を見てゐるのであらうか？　敗北の自覺にだけ自己の姿を見ることは、決して人間生活の全部の眞實ではない。勝利にこそ夢はあるのである。

藤村はここで自分に課せられてゐる仕事について考へてみた。彼の仕事の基礎を据ゑてくれた人は北村透谷である。透谷の書き遺したものは、未完成で、斷片の寄せ集めではあるが、その數々の斷片の中に、新しい詩の精神が波立つてゐる。それが藤村を刺戟し、驅り立てるのだ。透谷がどつしりと腰を据ゑて立つてゐた地盤は人間の理想性であり、藤村も最初はそこにゐた。しかし、苦い生活の經驗が否應なしに彼の地盤を人間の現實性へ移してしまつた。新しい詩の精神は、その新しい地盤の中で果を結ばなければならない。それが、遺された仕事の本當の完成なのだ。

「これは詩をずば抜けて新しくすることだつた。そして詩を新しくすることは、言葉を新しくすることであり、それを創造的に生かすことであり、內容的にも現實の蕊をかたちづくる一番純粹なものと抱き合ふことなのである。」

夕方、汽車は仙臺驛に着いた。彼は名掛町の、旅人宿と下宿を兼ねた三浦屋といふ家に身を落ちつけた。彼にあてがはれた部屋は、裏二階の靜かなところだつた。隣は石屋で、朝早くから石を切る音が聞えた。風向きの具合で、ここへは遠く荒濱の方から海の鳴る音も聞えて來た。一歩外へ出れば、葡萄畑があり、梨畑があつた。市街のはづれには彎曲の多い廣瀨川が流れ、その流れのはてはみちのくの海だつた。裏二階から毎日その音を聞いて親しんでゐる海である。そんな海の側に生れて、母の乳房にすがる頃から潮の音が聞けたらと思ひ、彼は今更のやうに山の氣を吸うて大きくなつた自分を振り返つた。

秋は日に日に深んだ。大洋に近くて晴雨の交替がはげしいために、雲は變化に富んでゐた。華やかに陽がさす時、黄色な雲が風に吹かれて見る見る空の深みに消えてゆく面白さは、とても東京などでは味はれなかつた。彼は東北の秋色を滿喫することの出來る今の自分が得意だつた。

この地に着いた日から、彼はもう別人だつたのである。すべてのものが活きて見え、空氣は手につかめさうである。戀と女からまつたく離れることの出來た心の靜かさといつたらなかつた。自然書く氣も起つた。

「東北の神樣」と言はれる押川方義を上に戴いた學院は、徒歩で通ふのに丁度いい距離にあつた。そこには澤山アメリカ人の教師がゐて、みんな瀟洒な服裝をして出かけて來る。藤村も初めてありついた恥しくない程度の月給の中から黑の背廣を新調し、毎日それを着て出かけた。

學校から歸つて來ると、すぐ机にかぢりついた。朝も隣の石屋と早起きの競爭をするやうにして、ぎりぎりの時間が來るまで仕事をした。彼の心の表面には、まだ過去のペシミズムの冷さ、暗さが漂つてゐたが、その內部に、激流してやまぬ情熱の波立ちがあつた。それをそのまま彼は言葉にあらはした。

身を朝雲にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨にたとふれば

あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄(ひるがへ)り
朝の黄雲(きぐも)にともなはれ
夜(よる)白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ亂れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ
亂れて熱き吾身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聽き
悲しみ深き吾目には
色なき石も花と見き

ああ孤獨（ひとりみ）の悲痛（かなしさ）を
味ひ知れる人ならで
誰にかたらん冬の日の
かくもわびしき野のけしき

二

あけぼの

彼はこの詩を「草枕」と題した。それは三十聯から成つてゐた。ここには、もはや青春の調べを遮る何物もなく、冷やかな悲哀の色は、宮城野の自然に託して歌つた追憶の過去にほかならないのである。

かうしてあとからあとから詩作が成り、その中から彼は適當なものを選んでは東京の星野夕影の許

へ送つた。透谷亡きあとの『文學界』にそれは異彩を放つた。

春はきぬ
　春はきぬ
春をよせくる朝汐よ
蘆の枯葉を洗ひ去れ
霞に醉へる雛鶴よ
若きあしたの空に飛べ

春はきぬ
　春はきぬ
うれひの芹の根を絶えて
氷れるなみだ今いづこ
つもれる雪の消えうせて
けふの若菜と萠えよかし

彼の希ひは、ただただ眼の前の太陽を追ひかけることではなくて、自分の内部に高く太陽をかかげることだつた。彼はそれが出來たと思つた。

彼が今までどうやら生きて來たのは、青春を否定することによつてであつた。それはしかし、擬装の否定だつたのだ。彼の道は否定の惱みではなくて、眞實の肯定に巣立つための惱みだつたのだ。

彼は自分がこれまで愛讀した芭蕉や李白が自分の頭腦をあまり老人くさいものにつくりかへてゐたことに氣づいた。自分はまだ若い。昔の大家たちのあの沈鬱で悲壯な老成を味ふのはまだ早い。彼はさう考へ、同じセエクスピアのものでも、晩年に書いた『テムペスト』は後廻しにして、まづ、初期の作で詩と芳醇な色彩に充ちた『ヴィナスとアドニス』を讀みなほす氣になつた。ギョエテが一生かかつて書いた宇宙的な大きさと深さのある『フアウスト』はもつと先へ行つてからでもいい。それよりあのロセッチのみづみづしい嫩葉の香を湛へたやうな『生命の家』を讀みたいと彼は思つた。

詩作は續く。「おくめ」と題して――

しりたまはずやわがこひは
花鳥の綺にあらじかし
空鏡(かゞみ)の印象砂(かたち)の文字
梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは
雄々しき君の手に觸れて

島崎藤村

嗚呼口紅（くちべに）をその口に
君にうつさでやむべきや
さうかと思ふと、今度は「おきく」と題して——
くろかみながく
　やはらかき
をんなごころを
　たれかしる

をとこのかたる
　ことのはを
まことゝおもふ
　ことなかれ

をとめごころの
　あさくのみ
いひもつたふる

をかしさや
みだれてながき
　鬢の毛を
黄楊の小櫛に
　かきあげよ
ああ月ぐさの
　きえぬべき
こひもするとは
　たがことば
こひて死なんと
　よみいでし
あつきなさけは
　誰がうたぞ

みちのためには
　　　ちをながし
くにには死ぬる
　　　をとこあり

磨きあげた知性の鶴嘴で掘り返し、俗惡なものや功利的なものは悉く取り去つたこの世の現實の深みに、眞實の肯定にいよいよ色を增す青春の主情性が湛へてゐたのである。それは滾々と湧きあふれて盡きることのない泉のやうなものである。泉の上にある、窓の多い白堊の高樓。枝の末まで花をつけた、がつちりした薔薇の樹。

燃えうづくやうな詩作の興奮の中で、明治三十年が來た。そしてその年の八月に、彼は『文學界』に發表した數々の詩篇に更に未發表のものを加へて一冊にまとめ、東京の春陽堂から刊行した。その標題は、倦知翁の句に、

　天地みなつみいれし籠の若菜かな

とある包合の象徵をそのまま取つて『若菜集』とした。自分の詩はまだ萠え出したばかりの若菜である、といふ意だ。これまで世に問はれた詩集の體裁は大抵小型であつたが、その自分から卑下して小さくなつてゐるやうな習慣を破るつもりで四六版型とし、表紙には透谷の遺した詩業に通はせて、草

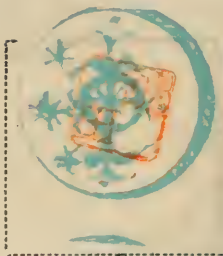
の上を飛ぶ一匹の蝶の姿を大きく浮き出させた。挿繪も入れた。それを描いてくれたのは、新進畫家中村不折だつた。

多年の苦惱と困憊を裏打ちにして生れ出たこの處女詩集を初めて手にしたとき、彼の胸はどんなにわなないたことであらう。彼はうまさうに卷煙草をふかしながら、この相當厚みもある本を手から離さないで、口をきき、微笑みかける生きもののやうに愛撫し、おしまひには、どうか受けてくれればいいがと考へるのだつた。

中央の詩壇からまつ先に彼の耳を打つて來たのは、しかし、單獨で詩集を出すのは少し出すぎた仕打ちだ、生意氣だといふ聲だつた。譯詩集『於母影』や『新體詩抄』を初め、この年の四月に民友社から刊行された創作詩集『抒情詩』さへ數人の合著であり、詩が何の役に立つ、今の世は詩人などの出る幕ではない、といふ古陋な考へ方が、形を變へて當の詩人たちの頭にさへ深く巣食つてゐるのだ。『抒情詩』は、田山花袋、國木田獨歩、宮崎湖處子などの新作をあつめたもので、小兒的と言はれ、詩ではなくて韻文に對する意見だと酷評された。それより四ケ月後れて世に出た『若菜集』は、すべてではないが個々の詩篇が發表されたのは言ふまでもなくもつと以前の事であり、花袋や獨歩の詩に何の誇飾もなく露骨に表白されてゐる感情の眞摯さが認められ出した頃には、全詩壇に驚異の眼を瞠らせてゐた。彼等は、この詩集の隅々に横溢してゐる、潑剌とした希望と空想に醉ひ、昔の豫言者のそれのやうな力強い叫びに打たれた。

詩の上にかうして遂に新しい言葉は完成されたのである――青春の言葉、傳說と民俗の言葉、自然の言葉は。

それは『若菜集』の作者一人の曙ではなく、戰後まつたく歐化主義を淸算して、純粹な步みを踏み出した新興國日本の、高らかに鳴る心臟のひびきと匂ひをそのまま傳へようとする詩壇の曙でもあつた。

―了―

昭和十三年六月十八日印刷
昭和十三年六月廿二日發行

定價壹圓八拾錢
郵送料拾四錢

島崎藤村

著作者　鐺田研一

東京市牛込區矢來町七十一番地
發行者　佐藤義亮

東京市小石川區西江戸川町
印刷所　富士印刷株式會社

東京市牛込區矢來町
發行所　新潮社

電話牛込（長）八〇五番
八〇六番
八〇七番
八〇八番
八〇九番
振替東京八〇八番

新選純文學叢書

風立ちぬ
堀辰雄著　鈴木信太郎装幀

「風立ちぬ」こそ、日本の「狭き門」として古典の位置を占めるものであらうと云ふも、決して過褒のそしりはうけないであらう。若き頬に死の暗い翳を宿してゐる美しき女の百合の花の匂ひをたたへた愛の生涯を、作者が纖細な感情にぬれながら典雅な筆で描き出した絶唱すべき逸品である。

國木田獨歩
福田清人著　佐伯米子装幀

つねに獨自の境地をその作品の上に構築しながら、また一面に於いて明治文學に深き造詣をもつ福田氏が、長年月を費して資料を探り獨自の批判を加へたものである。この作現はれるや世評囂々、新しき傳記小説の道をも確立したものとして喧傳された名篇。

地中海・法廷
富澤有爲男著　著者自装

明るい太陽の輝く南佛蘭西を舞臺として、日本外交官夫人と熱情たぎる青年畫學生との愛慾の世界を絢爛的な多彩な筆で描破した作品である。この惡魔と神との爭ひの果てに見たものは何か。林中深き處、愛慾に燃える決闘の拳銃の音であつた。他に「法廷」「ひと妻」の二篇を添へた。

馬喰の果
伊藤整著　島崎雞二装幀

伊藤氏は最近日本文壇に最も強烈な影響を與へたジョイス、ロオレンス等の代表的作品を移植した功績をもつ。これら海外新文學の精髓を消化し盡して、人間心理を追求し、新しく人間の肉體と性格とを描出する手腕をふるつて、書かれた「馬喰の果」その他を收めた一卷こそ敢へて大方の愛讀を得たいものである

虚構の彷徨
太宰治著　向井潤吉装幀

青春の熱情の奔出するところ、神をも恐れぬ驕慢の徒が、きびしき贖罪の鞭の下にひれ伏した。これはまた二十世紀のデカダンの子がのたうち廻り、烈しく身もだえする悲歌でもある。即ち收めるところ「虚構の春」「道化の華」「狂言の神」の三部作の外中篇「ダス・ゲマイネ」あり、近代文學の高峯に位する作。

◎新潮文庫（既刊三百冊より）

著者	書名	定價
島崎藤村著	ある女の生涯	三十錢
島崎藤村著	嵐・伸び支度	四十錢
森鷗外著	阿部一族	二十五錢
夏目漱石著	坊っちゃん	二十錢
夏目漱石著	草枕	二十錢
二葉亭四迷著	平凡	十五錢
廣津柳浪著	今戸心中・變目傳・河内屋	三十五錢
小杉天外著	魔風戀風	七十錢
泉鏡花著	婦系圖	四十五錢
徳田秋聲著	黴	三十五錢
徳田秋聲著	足迹	三十五錢
小栗風葉著	戀ざめ・戀慕ながし	四十錢
岩野泡鳴著	耽溺	二十五錢
高濱虚子著	俳諧師	二十五錢
志賀直哉著	夜の光	三十五錢
芥川龍之介著	羅生門	二十錢
芥川龍之介著	傀儡師	三十錢
芥川龍之介著	夜來の花	三十錢
芥川龍之介著	黄雀風	二十五錢
菊池寛著	忠直卿行狀記	三十五錢
山本有三著	風	五十五錢
佐藤春夫著	田園の憂鬱	二十五錢
久保田万太郎著	末枯・大寺學校（戯曲）	三十錢
久米正雄著	學生時代	四十五錢
室生犀星著	性に眼覺める頃	四十錢
室生犀星著	あにいもうと	四十錢
吉田絃二郎著	無限	六十五錢
吉田絃二郎著	島の秋	三十五錢
島田清次郎著	地上（第一部・第二部）	1 四十五錢 2 四十五錢
生田春月著	相ひ寄る魂	1 六十錢 2 五十錢 3 七十錢
小林多喜二著	蟹工船・不在地主	三十錢
徳永直著	太陽のない街	四十錢

新潮文庫目錄進呈